デジモンアドベンチャー　ΩテイマーZERO　～オメガモンとなった青年の物語～

LAST ALLIANCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンとなった青年の物語～

【Ｎコード】
Ｎ７３０４Ｗ

【作者名】
ＬＡＳＴ　ＡＬＬＩＡＮＣＥ

【あらすじ】
デジモンペンデュラム　ｖｅｒ．ＺＥＲＯでオメガモンを育てている藤本秀人は、ある日デジモンの襲撃に遭い、瀕死の重傷を負った。しかし、オメガモンと融合することで復活した。その時に彼は様々なデジタルワールドで戦う運命を背負うことになってしまった。これは、聖騎士と融合した一人の人間が様々なデジタルワールドと現実世界を旅しながら、時には問題を解決するために、時には敵と戦うためにその力を振るう物語である。

第1話　誕生の章　選ばれしテイマー（前書き）

この小説は前に書いた作品のリメイク版みたいな作品です。
一人でも多くの人に楽しんでもらえれば、嬉しいです。

第1話　誕生の章　選ばれしテイマー

雲が一つも無い青空の下で、１体の生物と、１人の人間が対峙している。
１体の生物は、背中に羽を生やし、頭部には角のようなものを二本備えて、顔の部分は単眼の形をしていて、体が灰色の三本爪の両の掌にも目玉がついている魔王型デジモン―デスモンだった。
対する１人の人間は、黒髪に黒い瞳をした長身な１９歳の青年、藤本秀人だった。

自分の目の前にいるデスモンの単眼から物凄い量のエネルギーと殺気を浴びながら、秀人はデスモンと対峙していた。

「行くぞ……オーグ、メルーガ」

『ジョグレス進化だね、秀人』

『いつでもいいよ』

秀人は、両腕につけているデジヴァイスの中にいる自分のパートナーデジモンであるオーグことウォーグレイモンとメルーガことメタルガルルモンに声をかけた。
秀人と一体化しているウォーグレイモンとメタルガルルモンは秀人に了承の声を上げると、右腕のデジヴァイス０１が青色に、左腕のデジヴァイス０１がオレンジ色に輝き始めた。それを確認した秀人は、デジヴァイスを頭の上で交差させた。

＞＞ＵＬＴＩＭＡＴＥ－ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

『ウォーグレイモン！！！！』

『メタルガルルモン！！！！』

「ジョグレス進化！！」

両腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人の体から青色とオレンジ色の光が発生して、秀人の体を包み込み、光の繭を形成していく。

「オメガモン！！」

そして光の繭が消えた後の秀人が立っていた場所には、中央の頭から足にかけては、白銀を基調とした兜と鎧に身を包み、左肩には勇気の紋章が刻まれた盾が装備して、左手には竜の頭のような篭手が装着され、反対の右肩には青を基調としたアーマーが装備され、狼の頭を模した篭手が装着して、背中には外側が白色、内側が赤色のマントを羽織った聖騎士型デジモン―オメガモンが姿を現した。

自分を睨みつけてくるデスモンを負けじと睨みつけながら、オメガモンはその場で腰を落としつつ構えながら、両手を握りしめる。そして、お互いに息が詰まるほどの睨み合いを行い始めた瞬間に……

「うおおおおおおっ！！！！！」

「ハアアアアアアアッ！！！！！」

オメガモンとデスモンは、お互いに人間の目では到底不可視のスピードで相手に突撃を開始した。

「デスアローーー！！」

先制攻撃を仕掛けてきたのは、デスモンだった。

デスモンは、両手に存在している邪眼から、両手の邪眼から放たれる死の矢―デスアローを自分に向かって接近してくるオメガモンに向かって撃ち出した。

「フッ！！　ガルルキャノン！！」

オメガモンは、デスアローを右に避けると、右腕を軽く振って、右手のメタルガルルモンを模した篭手の口部分から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開した。そして、デスモンの背後へと回り込むと、デスモンに照準を合わせてガルルキャノンから圧縮エネルギー弾を撃ち込む。

「ムッ！！　エクスプロージョンアイ！！」

自分の背後に回り込んだオメガモンがガルルキャノンを自分に向かって撃ち出したことに気がついたデスモンは振り返り、頭部の単眼を深紅に輝かせると、破壊光線―エクスプロージョンアイをガルルキャノンから撃ち出された圧縮エネルギー弾に向かって発射した。

ガルルキャノンとエクスプロージョンアイは激突して、そのまま巨大な大爆発が起きて凄まじい爆音が辺りに響いた。

「ウオォォォォォォォォォッ！！！！！」

ガルルキャノンとエクスプロージョンアイの激突で発生した煙の中から、左手のウォーグレイモンを模した篭手の口部分からデジモン文字で『オールデリート』を刻まれた大剣―グレイソードを射出したオメガモンが煙を切り裂きながら飛び出して来る。

「グレイソーード！！！」

オメガモンは、グレイソードに凄まじい紅蓮の炎を纏わせると、デスモンに向かって振り下ろした。

「クッ！！　デスアローーーー！！」

自分に向かって降り下ろされるグレイソードに気がついたデスモンは、左に回避すると同時に両手の邪眼からデスアローを撃ち出した。

「グレイソーーード！！」

しかし、それを避けたオメガモンは今度はグレイソードを装備している左腕を身体ごと大きく振りかぶり、デスアローの着弾の瞬間に、グレイソードを思いきり横に薙ぎ払った。

すると、グレイソードから巨大な三日月状の光刃が放たれ、デスアローを吸収することで強力になりながら、デスモンに向かって迫る。

「グッ！ギャアアアアアアアアアーーーー！！！」

デスモンは、オメガモンが放った巨大な三日月状の光刃を喰らって自身の体のデータを消失させながら断末魔の叫びを上げて、消滅していった。

「ふぅ……　お疲れ様、オーグ、メルーガ」

『秀人、お疲れ様』

『次も頑張ろうね』

デスモンの最後を見たオメガモンはゆっくりと地面に着地した。
秀人がウォーグレイモンとメタルガルルモンに労いの言葉をかけると、彼らも同様に秀人に労いの言葉を返す。オメガモンは両腕を頭の上で交差させると、再び眩い光に包まれて、元の姿である秀人に戻った。
そして、目の前の光景にガラスにヒビが入る様な現象と共に世界に亀裂が入り始めて、秀人は夢から覚めた。

「あれは……夢か……　僕は練習のしすぎで疲れているのか……？
でも、凄い妙にリアルな夢だったな……」

朝になって、ベッドから起き上がった秀人は額の大粒の汗をタオルで拭き取った。
その後、自分の学習机に置いてある２つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ（ウィルスバスターズ）を手に取って、秀人はそれらを見ながら夢の内容について考え始める。

秀人が持っているデジモンペンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ（ウィルスバスターズ）はデジモンペンペンデュラム最終作でウィルス種のデジモンが一切登場せずに、ワクチン種とデータ種のデジモンのみで構成されていることが特長である。
初めて超究極体が育成可能になったデジモンペンペンデュラムであり、何気にウォーグレイモンとメタルガルルモンのジョグレス進化でオメガモンが誕生する唯一の携帯デジモンシリーズなのだ。

（確かに僕のペンデュラムで育てているオーグとメルーガはジョグレス進化すればオメガモンになる……　もしかして、デジタルワー

ルドに危機が迫っているのか？　それとも何かの予兆なのか……？
でも、一体化している意味がわからないよ……）

秀人はデジモンペンデュラムを見ながら考えるが、当然のことながら答えは出るはずも無かった。途方に暮れた秀人は、思わず俯いてしまった。

「おっと。いけないいけない。今日の大学、午前中から授業で、その後サッカー部の練習だったな」

顔を上げた秀人は、急に現実に立ち返ると、すぐに行動を起こした。鞄の中に入れたデジモンペンデュラムが輝いていることを知らずに。

「ふぅ〜　サッカー部の練習も最近大変になってきたな……　インカレが近いのもあるし、うちの大学は今年こそは優勝を狙っているからな……」

大学に行くための最寄駅から降りて、自宅までの帰り道を歩きながら自宅へと向かっている秀人の趣味はサッカーであり、得意なスポーツでもあるのだ。
彼は、本来ならばスポーツ推薦で有名難関私立大学へ進学出来たのだが、それを蹴って大学受験に臨み、志望校である国立大学に合格したのだ。本人曰く、俺はスポーツをやるために大学に行くんじゃなく、勉強をしに大学に行くんだ、と。

「そうだ。久しぶりに寄ろっかな……」

秀人は、少し寄り道とばかりに公園に立ち寄った。
時間帯のせいもあって、公園は人が誰もいなく静かだった。その公園からは、海を眺めることが出来るので秀人のお気に入りの場所の一つなのだ。
秀人は、しばらく公園の手すりにつかまって海を眺めていた。

「ん！？」

突然、秀人は後方に目をやったが、何も無かったので顔を海の方に戻した。

「おかしいなぁ～　さっき、何かがあったんだけどな～」

「お前が藤本秀人か？」

突然、海を眺めながら、自分が見たものについて考えていた秀人に黒色のローブを身に纏った男性が声をかけた。

「そうだ。そういうお前は？」

秀人は、男性の服装に疑問を感じたが、それを表情に出すことなく男性に聞き返した。

「ククク……。　久しぶりだな、秀人……」

フードを外した男性の顔に見覚えがある秀人は、忌々しげにその男性の名前を口にした。

「桐原将生……」

「覚えてくれていたんだね。嬉しいよ。以前、俺に対戦で負けて抹消（デリート）を勧められたのにも関わらず、大切に育てていたんだって？　全く、反吐が出る話だぜ。それでその後の対戦に俺に勝利してこの俺に泥を付けたな！！！」

激しい怒りを表情に出しながら、黒髪に黒い瞳をした青年―桐原将生は秀人に向かって声を上げた。

「もう一度対戦しよう、ってわけか。ちょうど今、ペンデュラムを持っているから相手になるぞ」

「ふん。誰がお前の相手になるものか。お前の相手はこいつだ」

かばんからデジモンペンデュラムを出して手に握りながら言った秀人の言葉を完全に無視した将生は、指を鳴らした。

「サアァァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

将生が指を鳴らした瞬間、公園の雑木林の中からオレンジ色の髪をしていて、胸に砲塔と思われる箇所を備えて、間接が存在しない長い腕を持った悪魔のようなデジモン―ディアボロモンが姿を現して、秀人を睨みつけた。

「ツッ！！　何でディアボロモンが！？　お前のペンデュラムにはいないはずだ！！　というか、それよりも、どうしてデジモンが現実世界（アルワールド）にいるんだ？」

「その通りだ。ディアボロモンはデジモンペンデュラムにはいないデジモンだからな。だが、俺は一か月前にデジヴァイスとクラモンを得た。そして、ようやく究極体になるまで育てたんだ。ここまで

来るのに相当時間が掛かったからな～」

「何でお前が闇の力を手に入れたんだ！？　そのことに少しも疑問を持たないのか！！」

「それはお前のペンデュラムがウィルスバスターズだからだろう。俺のペンデュラムはナイトメアソルジャーズだ。お前とは正反対だ。お前が世界を守ろうとしているデジモン側なのに対して、俺は世界を破壊することを考えているデジモン側だ。俺は気付いたんだ。ディアボロモンとデジヴァイスがあれば世界を変えることが出来るということに」

そう言うと、将生は服のポケットに入れているデジヴァイスを見せた。

将生のデジヴァイスは、邪悪な黒色に染まっている。如何にも、暗黒のデジヴァイスという表現がお似合いの印象を与えてくれる。

（僕が見ている夢で使っているデジヴァイスとは違うタイプだ……しかも、色が違う……　正樹のデジヴァイスは黒色……暗黒のデジヴァイスだ……一体誰が何のために正樹が渡したんだ？）

秀人は、正樹が手にしている暗黒のデジヴァイスを見ながら黒幕の存在を考えたが、候補のデジモンがたくさんいすぎてなかなか一つに絞ることが出来なかった。

考えれば考えるほど泥沼に落ちてしまうような気がしたから、秀人は思考を一旦停止させた。

「俺は昔から力を欲しがっていた。所詮、この世は力が無ければ何も出来ない。俺にはその力が無かった……　しかも、一度勝った相手の弱いデジモンにも負ける弱いデジモンしか育てられなかった。

その時、俺に力を与えようと言って来た存在が現れた。それだけの事だ」

「そんな闇の力を使ってお前は一体何をするつもりなんだ？」

あまりいい答えが返ってこないことを予想しつつも、秀人は将生に質問をした。

しかし、将生の口からは秀人が予想していた内容とは違った答えが返ってきた。

「実に簡単な答えだよ、秀人。俺はディアボロモンと共にこの世界に平和をもたらすんだよ」

「はい！？　世界に……平和をもたらす……だと！？」

意外な答えに秀人は思わず戸惑ったが、将生はそのまま話を続けた。

「そうだ。俺はディアボロモンと共に世界を覆っている全ての危機を取り除く。テレビやインターネット、新聞等の情報手段を通じてわかったんだ……人間の限界を。政治家はいつまで経ってもすぐにでも解決できるような問題の一つや二つを解決出来ない。国際連合が介入しても解決できない紛争や問題はたくさんある。確かに、この力は確かに闇の力であることは俺でもわかる。でも、闇の力を人を守るために使ってはいけないというルールはないだろう？　『ウルトラマンネクサス』に登場した溝呂木眞也や『デジモンフロンティア』でレーベモン、カイザーレオモンの正義の闇のスピリットを使って戦った木村輝一のように、正義のために闇の力を使ってもいいはずだ！！　俺がディアボロモンと共に動いて闇の力を使えば、今、この世界を覆っている危機の大半を解決することになるだろう

……」

「話を区切らせてすまない。将生、確かに闇だからといって善になったら駄目だ、といルールはない。だが、お前はさっき何者かから力を与えられたと言ったよな。そいつこそ闇の力を使ってこの世界を支配しようとしている張本人だろう。そんな奴が世界を救いたいというお前の願いに力を貸すなんてとても考えられないよ……　今ならまだ間に合う……闇の力を捨てるんだ！！」

秀人の最もらしい反論を聞いた将生だが、動じる事無く秀人に切り替えした。

「それはお前が闇の力の使う奴はほどんどが悪者だという間違った先入観があるからに過ぎない。そんな個人的事情は切り捨てて、もっと世界を見据えるんだ……この力があれば世界そのものを変える事も出来るのに……」

「世界そのものを変える！？　お前、やっぱり新世界の創造を目論んでいたのか！！」

将生の性格を少しだけだがわかっていた秀人は、思わず溜息をついた。

桐原将生は、実は全然友達がいないのだ。何故なら、せっかく育てたデジモンを平気で抹消（デリート）したり、興味を感じない他人には横柄な態度をとったりする人間だからだ。唯一いた友達（将生本人が勝手にそう思い込んでいるだけなのだが）は将生のクラモンの存在を知ったために将生と絶交したのだ。将生は彼のことを『友達甲斐のない奴』と言ったが、どうやら普段からあまり信頼もされてなかったみたいだ。それを将生は自分が悪いのにも関わらず、全てを他人のせいにしているのだ。

「その通りだよ。まず、俺はディアボロモンの力を後ろ盾にして全世界の国家に宣言する。今すぐその国が保有している全ての武器を廃棄しなければ、ディアボロモンの力でその国家を滅ぼすと……」

「デ、デジモンの力を使って国を滅ぼすというのか！？　お前、何故そのようなことをする必要があるんだ？」

将生の答えに秀人は唖然となりながらも、それでも将生に尋ねるが、将生は当然だと言わんばかりに話を続ける。

「そうだ。何故なら、いつの世の中でも、どの世界でも最も多くの人間を殺しているのは俺たち人間だ。その中でも、武器を持った人間が同じ人間を殺していることが一番多いのが現実……　つまり、人間にとって一番の脅威は同じ武器を持った人間ということになる。しかし、その事を多くの人間が分かっていながらも、武器を捨てる事が今まで出来ずにいたんだ。何故なら、それは人間そのものが酷く脆弱な存在だからだ。武器が、力が無ければ常に身の恐怖を、死の恐怖を感じずにはいられない。それが人間の本質だ。だから、俺は宣言する！！　この力と、使役するディアボロモンであらゆる外敵から人間を守ることを。だから、人間自身は武器を持つ必要は無いということをな……」

（武器が無い世界……　確かにその世界は理想郷なのかもしれない……　だが、ディアボロモンで果たして出来るのか？　あいつなら『ターミネーター』に登場したスカイネットみたいに僕たちを攻撃してくる可能性が高いのに……）

秀人は、腕組みをしながら将生の考えを聞いたが、どうしてもディアボロモンという存在が引っかかっていた。

「だが……武器を無くすだけではまだ完成したとは言えない。俺はその後に世界の全ての国家を解体して、人種……宗教……国家……
そして、思想といった人間の全ての隔たりを無くす。つまり、全ての国を排し、全ての宗教を無くせば、人は大規模な争いは出来なくなるんだ。　そうして、世界は平和になるのだ」

「ちょっと待て。それは支配じゃないか！！　それに、やっていることは何であれ、お前のやろうしていることはあの倉田明宏と同じなんだぞ！！　それでもいいのか！！」

将生が続けた言葉を聞いた秀人は、急に戸惑ったような表情をしながら将生に反論した。
『デジモンセイバーズ』に登場した倉田明宏は、自身が造り上げた人造デジモン達と七大魔王の一体で『怠惰』を司る魔王型デジモンーベルフェモンの力を後ろ盾に使って全世界の国家に解体と服従を命令したのだ。結果だけを言えば、倉田の計画は阻止されて、倉田自身も命を落とす結果になった。
秀人にとって、将生のやろうとしていることはどう見ても倉田と同じ、いや、見方によってはそれ以上に悪いものだと見えたのだ。

「そうだ。確かにお前の言う通り、俺はこの世界を支配することになる。だが、秀人。考えてみろ。お前は人種、宗教、国家、思想による戦いが後を絶たない今の世界を果たして平和だと思うか？　俺の考えが押さえつけである事くらい俺でも分かるさ。だがな、空襲や地雷やテロで今日明日の命の保障も無い人達にとっては自分の肌の色や所属する国……そして、信仰する宗教がなんてどうでもいい話なんだよ。この人達にとって今必要なのは、安心して今を生きられる事じゃないのか？自由とか何とかは、まず命の保証をしてから言え！」

「ウグッ……」

秀人は反論することが出来ずに黙り込むと、将生はニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「秀人。お前の存在は本当に気に喰わない。この俺がわざわざ抹消（デリート）をお薦めしたのにも関わらず、大切に育てて後で俺に勝ちやがったテイマーだからな……　そして、この俺に楯突こうとしている。お前の存在は後の世界に混乱を巻き起こす。世界の平和の為に……死んでもらおう。ディアボロモン！！」

「サアァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

「クッ！！」

将生の宣告と同時にディアボロモンは自身の右腕を伸ばして秀人に向かって攻撃を繰り出した。

それを見た秀人は、何とか間一髪で横に避けることでディアボロモンの攻撃から逃れた。小学校の頃から今までずっと、サッカーをやっていた恩恵もあるのかもしれない。

「そうだな。正樹、確かにお前の言う通りだ。僕たちは恵まれすぎている、と言えば恵まれすぎている。僕たちはテレビやインターネットで間接的にしかその人たちのことを見たことがないから、その人たちの本当の気持ちがわかるはずがないかもしれない。だが、これだけは言わせて欲しい。お前はデジモンを生物としてではなく道具として見ている。デジモンは道具なんかじゃない。僕たちと同じ、今を必死で生きている仲間なんだ！！　お前のやろうとしていることは絶対に間違えている！！」

秀人は、将生の意見をしっかりと聞きつつも、将生に反論した。
秀人にとって、ペンデュラムの中にいるデジモンでも立派に生きている仲間なのだ。だから、例え自分が育てたデジモンが弱くても、一度将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められても、大切に彼らを育てて後日、将生へのリベンジに成功したのだ。

「何を言うと思えば、そんな綺麗事か。テイマーにとって必要なものはデジモンの強さだけだ。それ以外は必要ない！！」

「違うな！！お前は間違えている。僕にとってオーグとメルーガは友達だ。僕に命の大切さ、命の重さ、といった大切なことを教えてくれたかけがえのない大切な友達だ。デジモンのことを考えずに、抹消（デリート）ばかりしているお前はテイマーなんかじゃない！！　ただの大量殺人犯だ！！」

「俺がテイマーじゃない、だと！！　ほざきやがって！！　お前、流石に言っていいことと悪いことくらいあることを知らないのか！！」

「ああ、けど僕は事実を言っただけだ。お前はテイマーじゃない！！　それに言わせてもらうが、お前の造る世界など、人間が人間でなくなる世界だ！！　そりゃ、いつの世でもどの世界にも怖い人や悪い人だっているさ……　でも、いい人や凄い人だって沢山いるだろう？　僕は今までそういう人々にたくさん出会えた。その身を投げ出しても誰かを助けるために歯を食いしばっている人もいる！！
例え、一度失敗したり挫折してもそこから立ち上がり、最後には栄光を勝ち取る人もいる！！　僕はそんな人たちと共にこの世界で生きていたいんだ！！　お前の顔には、力があるから、気に入らないから世界を好き勝手に支配したいとしか書かれていない！！　世

界はお前の玩具なんかじゃない！！　周りの世界を変えたければまず自分自身から変われ！！ただ、人よりも少しだけ力があるだけで調子に乗るな！！　この大馬鹿野郎が！！」

「てめぇ……！！　この温厚で優しい俺を怒らせたな……ディアボロモン！！　奴に正義の鉄槌を下してやれ！！」

「サアァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！」

将生の指示を聞いたディアボロモンは自身の腕を秀人に向かって伸ばすと、秀人の心臓を貫いた。

その動作があまりにも一瞬過ぎたがために秀人は一瞬何が起きたかわからないほどだった。

「ガハッ！！」

秀人は、苦痛の声を上げると口から血を吐きながら地面に倒れ伏した。

秀人は、立ち上がろうとしても体に思うように力が入らないためになかなか立ち上がれないでいた。

「ふん。この俺こそがどの世界にいるテイマーよりも一番なんだ。お前は、俺が造る新世界の生贄になったというわけだ。光栄に思え」

将生は、血だらけになりながら倒れている秀人を見下しながら言い放った。

（力が……力が欲しい……　あいつを倒すためだけに使う力じゃなくて、相手がどんな力を持っていても、どんな攻撃をしてこようとも、誰かを、世界を守りきれるような……そんな力が……欲しいよ

……）

自分の無力さに涙を浮かべながら秀人がそう考えているのと同時進行で意識が遠のいていたが、秀人の涙が手に握られている2つのデジモンペンデュラムにこぼれ落ちた瞬間、デジモンペンデュラムが光り輝き、秀人は光に飲み込まれると、そのまま光の中に消えていった。

（ここは何処なんだ……　僕は死んだはずなのに……）

眩い光が目に入ったのか、意識を回復させた秀人は、白い空間にいた。

自分が死んだはずなのにここにいることに秀人は困惑の表情を浮かべながら空間を見渡していると、突然、秀人の目の前に純白の翼を背中から生やし、白を基調として所々に金色の装飾が成された鎧を身に着けた聖騎士ーインペリアルドラモン・パラディンモードが存在していた。

「初めまして、私はインペリアルドラモンだ。君たちの世界では、どうやらロイヤルナイツの始祖であるパラディンモードと呼ばれているみたいだな。いやはや、全く持ってその通りなのだが」

「初めまして、インペリアルドラモン。僕の名前は、藤本秀人です。早速質問がしたいのですが、何故僕をここに呼んだのですか？」

お互いに自己紹介をした後に、早速、秀人は聖騎士ーインペリアルドラモン・パラディンモードに質問をする。

「君は調停者である私たちに選ばれたテイマーであり、2体のパートナーデジモンを持った珍しいテイマーである『ツイン・エッジ』だからだ」

インペリアルドラモン　パラディンモードの言った通り、確かに2体のパートナーデジモンを持っている者ー『ツイン・エッジ』は非情に少ない。

秀人の他にも、『デジモンアドベンチャー02』に登場したウォレスもまた『ツイン・エッジ』と言うことが出来る。何故なら、彼のパートナーデジモンはデリアモンとロップモンだからだ。

「確かに、僕は2体のデジモンを育てています。でも、それが貴方たちのような神に近い者に選ばれる理由にはなりません」

インペリアルドラモン　パラディンモードの答えに秀人は首を振って答えた。それを見たインペリアルドラモン　パラディンモードは、秀人を諭すように優しく話した。

「君が選ばれた理由は他にもあるのだが、何と言っても君のデジモンの育て方にあるだろう。君は彼らを守ってくれる心優しいテイマーで、例え弱くても、対戦に負けて抹消（デリート）を勧められても大切に彼らを育ててくれた。だから、彼らも君に応えて強くなろうと思い、必死で訓練してきた……　それだから君は一度負けた相手に勝てたのだろう？」

「オーグ、メルーガ……　でも、僕は戦えません。僕は死んだんです。せっかく、一緒に戦えるチャンスだったのに……」

「いや、君はまだ死んではいないよ。正確に言うと、ディアボロモンによって致命傷を負って死にかけている状態だ。だから、君は復

活することが出来る。ただし、君とウォーグレイモンとメタルガルルモンのデータを融合させる方法を使えば、の話だが。何しろ、デジモンで言う電脳核（デジコア）に相当する部分をやられてしまったからね。もし、そうすれば、君は自分のパートナーデジモンと一緒にいられる上に、デジモンと戦うことも出来る」

インペリアルドラモン　パラディンモードの話を要約すると、今の秀人は死んではいないが瀕死の状態で、それを解決するには自身のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンとの融合、つまり、人間とデジモンのジョグレス進化をするしかないということだ。

「なるほど。確かにいい話ですけど、大抵こういうものには代償がありますよね？」

「残念だがその通りだ。もし、私が話した方法を使えば、君は人間でなくなり、半分人間、半分デジモンの存在であるエイリアスになる。それはつまり、君のいる世界の理から外れる異端者になることを意味する。それ故に、君は自分の暮らしている世界には居られない。もし、居られるとしても、それは君の世界に悪いデジモンが出現した時だけだ」

「……」

インペリアルドラモン　パラディンモードから人間とデジモンのジョグレス進化がもたらすあまりにも大きすぎる代償を聞いて、秀人は瞳を閉じて腕を組みながら考え始めた。

「もし、君がこの話を断れば、君の世界どころか全世界が存亡の危機に直面するだろう。君がこの話を受け入れれば、君は生き返るが

デジタルワールドを越えた戦いが待っている。選ぶのは君の自由だ。私は何も言わない。最終的に道を歩くのは私ではなくて、君自身だ」

「僕をオーグとメルーガと融合させてください」

「！！　融合を選ぶとは……」

インペリアルドラモン　パラディンモードの話を聞いて意を決したように目を開けた秀人は、人間とデジモンのジョグレス進化への道を選択した。

インペリアルドラモン　パラディンモードは驚愕したが、秀人の瞳を見たことで秀人の気持ちを知った。

「こんな所で悩んでいても仕方がありません。あいつを倒さないと、僕の世界どころか全世界があいつの思うがままになってしまいます。僕は目の前に存在している可能性にかけます。人間じゃなくなっても、世界から嫌われるかもしれないけど、そんなの関係ない！！僕は自分のいる世界を守るだけです！！」

「わかった。詳しいことはディアボロモンを倒した後に話そう。その前に……」

インペリアルドラモン　パラディンモードが秀人に腕時計のようにして装着するタイプのデジヴァイスーデジヴァイス０１を渡すと、デジヴァイス０１は秀人の両腕に自動的に装着された。ちなみに、秀人が付けているデジヴァイス０１の色はオメガモンの胴体部分を模したデザインなのか、白色が中心で所々に青色の装飾が施されている。

「これはデジヴァイス０１。君のような『ツイン・エッジ』や現実（リアルワールド）

世界でデジモンペンデュラムと呼ばれる物でデジモンを育てたテイマー専用のデジヴァイスだ。キーボードの部分があるので、デジモンに指示を出せるようになっているが、どうやら君には不要なようだな」

「これは……夢で見たのと同じデジヴァイスその物だ……」

両腕に付けられたデジヴァイス０１を見ながら秀人は呟いた。
まるで、両腕から聖なる力が秀人に伝わっていくみたいである。

「どうやら、使い方はわかるみたいだから説明の必要は無いな。デジタルワールドへの迎えは必ず送る。ただし、デジモンであるとは限らないがな」

「はい。ありがとうございます！！」

秀人の感謝の言葉を聞いたインペリアルドラモン　パラディンモードが消えると同時に白い空間に罅が入り始めた。
それを見た秀人は、両腕に付けているデジヴァイス０１を見ると、顔を前に向けた。

「それでは……世界を救いに行きますか！！　オーグ、メルーガ！！」

『行こう、秀人！！』

『ＯＫ！！　秀人！！』

秀人が気合を込めて叫ぶと、自身と融合しているウォーグレイモンとメタルガルルモンもそれに応じて声を上げた。

その瞬間、白い空間は完全に砕け散って、秀人は元々いた公園に戻った。

「何！？　おい、秀人。お前、どういうトリックで復活したんだ？」

「さぁな。気がついたらこんなことになっていたんでね。驚いたよ」

ディアボロモンが確実に殺したはずの秀人が生きていることに驚愕した将生は秀人に尋ねたが、秀人は両腕にデジヴァイス０１がついていることを確認した。

そして、秀人は体の状態が万全であることを確認すると、準備体操を始めた。

「嘘付け。お前、何かの力で復活しただろう。その証拠にデジヴァイスが両腕にあるだろう。しかも、何だそのデジヴァイスは？　見たことがないタイプのデジヴァイスだぞ？」

「ああ。これはね。僕のためのデジヴァイスだってさ。特注品でおしゃれでいいよね」

先ほどとは違って落ち着いた口調で自分と話している秀人を見て、将生は少しづつではあるものの、怒りが蓄積されていく。

秀人は、そんな将生を見ても関係ないと言わんばかりに準備体操を終えた。

「とにかく、お前は俺を倒しに来たってわけか。でも、肝心のお前のパートナーデジモンは何処にいるんだ？　全然姿が見えないんだけど？」

「ああ。心配しなくても大丈夫さ。オーグとメルーガならここにいるよ」

そう言うと、秀人は自分自身を指で指した。

「はぁ！？　フフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！　お前、復活して頭が狂ったのか！？　こいつは傑作だ！！」

「クククククッ、ハハハハハハハッ！　僕は狂ってはいないよ。事実を話しただけだ。僕のオーグとメルーガを笑ったことを後悔しても、僕は知らないよ」

秀人は、狂ったように笑っている将生に向かって凄みのある笑みを向けると、左腕に付けているデジヴァイス０１を見つめた。

「おいおい、まさかディアボロモン相手に単体で挑もうってわけじゃないよな？　お前、ウォーグレイモンとメタルガルルモンの２体が同時に掛かっても倒せなかった相手だぜ？　ディアボロモンは」

「ああ。その通りだ。お前には悪いが、オメガモンに進化しなくてもディアボロモンを倒す力を持っているんでね、僕たちには。　行くぞ！！　オーグ！！」

『ＯＫ！！　秀人！！』

秀人とウォーグレイモンの思いが共鳴した瞬間、秀人の体をオレンジ色の光が包み込み、左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響いた。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

秀人が叫んだ瞬間、オレンジ色の光は光の繭を形成した。

光の繭が消滅すると、秀人が立っていた場所には銀色の頭部に胸当てを付けて、背中の外郭には翼のような物を装備して、体に黄金色に輝く鎧を身に付けて、赤い髪をなびかせた黄金の竜人－ウォーグレイモンが立っていた。

「ウォーグレイモン！！！　ウオォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！」

『ツッ！！』

ウォーグレイモンが咆哮を上げると共に地面は爆裂したように吹き飛び、それを見た将生とディアボロモンは、思わず恐怖によって震えていた。ただ咆哮を上げただけで地面が爆裂してしまうほど衝撃波が発生したのだ。

その点だけでも秀人のウォーグレイモンの力がどれほどのものなのかは、直接戦うディアボロモンだけではなく、そのディアボロモンのテイマーである将生にも充分過ぎるほどに理解した。

「ああ、御免ね。勝手に吠えて。でも、この世界の空気、本当に美味しいんだ。デジタルワールドの空気も美味しいけど、この世界にはデジタルワールドの空気のない美味しさがあるからつい……」

『……』

申し訳なさそうな表情をしながらウォーグレイモンは、親しそうに将生とディアボロモンに話しかけたが、将生とディアボロモンは恐怖で体が凍りついているのか声が出せなかった。

「君たちはこの世界を好き勝手にしようとしているみたいだけど、そうはさせない。僕たちが君たちを止めてみせる！！」

ウォーグレイモンは言葉と共に人間の目では追うことのできないスピードで両手に装備されているドラモンキラーを構えながらディアボロモンに向かって突撃を開始した。

「クソォォォォォォォォォーーッ！！　いけぇーーーー！！！　ディアボロモン！！！」

「サアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

将生は恐怖を振り払うようにディアボロモンに指示を出した。

それを聞いたディアボロモンも両拳を構えながらウォーグレイモンに向かって突撃を開始した。

「ウオォォォォォーーーーーー！！！！！」

「シャァァァァーーーー！！」

お互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進すると、ウォーグレイモンとディアボロモンは激しいドラモンキラーと両拳の応酬を繰り返すのだった。

第1話　誕生の章　選ばれしテイマー（後書き）

用語説明

ツイン・エッジ……2体のパートナーデジモンを持つテイマー。
　　数多くのテイマーの中でも数が少ない希少なテイマーとして知られている。
彼らのパートナーデジモンはオメガモンのようにジョグレス進化するデジモンがほとんどである。

デジモン紹介

デスモン
世代／究極体　属性／データ種、ウィルス種　種族／魔王型、
必殺技／デスアロー、エクスプロージョンアイ
デーモンと同じく元々は高位天使型デジモンだったが、ダークエリアに堕とされ魔王型デジモンになってしまった。しかし堕天使型や悪魔型デジモンと違い、中立の立場を常に守り世界を静観している。通常は体の色が灰色でデータ種だが、天使型のデジモンとの来るべき決戦時になると体が闇色に染まり、ウィルス種の破壊神へと変貌する。変貌した後は、無駄な戦闘を避けて蓄えていたパワーを開放し、破壊の限りを尽くすと言われている。必殺技は、両手の邪眼から死の矢を放ち、敵を貫く『デスアロー』に、頭部の単眼が深紅に輝いた時に発射される、破壊光線『エクスプロージョンアイ』だ。

ディアボロモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／分類不可
必殺技／カタストロフィーカノン、パラダイムロスト、闇の力、システムフェイル

クラモンの最終形態デジモン。ネットワーク上のあらゆるデータを吸収し、進化と巨大化を繰り返し、電脳世界（デジタルワールド）で破壊の限りを尽くしている。ディアボロモンの手足は柔らかく素早く伸び、手や足の爪は鋭く格闘戦を得意としている。またクラモンの時にあった自分自身で自分のコピーを作る能力も復活し、自身を無数に分裂させると言う恐ろしき能力を持っている究極体デジモン。多くのデータと知識を吸収したディアボロモンは自らを全知全能の存在と思い込み、破壊と殺戮を楽しんでいる。しかし、数多く居るデジモンの中でも、その存在目的がはっきりしており、その最終目的は、軍事用コンピューターを乗っ取り、核攻撃によって現実世界（リアルワールド）をも破壊しようとしている、恐ろしいデジモンでもある。必殺技は、胸の発射口から破壊エネルギー砲を相手に向かって発射する『カタストロフィーカノン』に、自身の全ての力を解放して相手と共に自爆する『パラダイムロスト』。周囲のデータを吸収し体を巨大化、無数の腕で相手を殴り続ける『闇の力』。そして自分の周りに居るデジモンのエネルギーを吸い取り、強制的に一段階退化させる『システムフェイル』だ。その他にも数多くの技を所持しているぞ。

第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化（前書き）

今回は私が考えたオリジナルデジモンが登場しますが、私のネーミングセンスの無さで名前が安直になってしまいました。
もし、代案がある人がいたらどうぞお願いします。

第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化

「ウオォォォォーーーーー！！！！」

「シャアァァァァァァァァーーーーー！！！！」

海を眺めることの出来る公園内で、2体のデジモンが辺りに凄まじい衝撃波を撒き散らしながら壮絶な殴り合いをしている。
1体のデジモンは、藤本秀人のパートナーデジモンの1体であり、尚且つ彼が究極進化したウォーグレイモンで、もう1体のデジモンは、桐原将生のパートナーデジモンであるディアボロモンである。

「フンッ！！」

「シャァ！！」

ウォーグレイモンが渾身の力を込めて繰り出した右拳を、ディアボロモンは何とか避けると、今度は、反撃とばかりにディアボロモンは右腕を素早くウォーグレイモンの顔面に向かって伸ばすと、研ぎ澄まされた右爪で斬り付けた。

「シャァァァァーーーー！！」

「クッ！！」

ウォーグレイモンは、ディアボロモンの攻撃を右腕に装備しているドラモンキラーで防御した。

「ウオォォォーーーー！！！ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンは空いている左腕のドラモンキラーをディアボロモンの右足に向かって突き出した。

「シャァ！？」

ディアボロモンはウォーグレイモンの行動を見て顔色を変えると、すぐに後ろに跳ぶことでウォーグレイモンとの距離を取った。

「よし！！　思った通りだ！！」

ディアボロモンとの距離を空けることが成功して、声を上げたウォーグレイモンは両手の間にエネルギー弾を発生させると、ディアボロモンに向かって投擲した。

「シャァ！！」

ディアボロモンはエネルギー弾が着弾する前にエネルギー弾が着弾する位置から逃れたが、それがウォーグレイモンの策略だった。

「ツッ！！」

「ハアアッ！！」

「ガハッ！！」

ウォーグレイモンは、エネルギー弾の結果を待たないで素早くディアボロモンの目の前に高速移動をすると、驚愕しているディアボロモンになど一切構わずにディアボロモンの左脇腹に向かって高速移動の勢いによって威力を高めた右回し蹴りを叩き込んだ。

苦痛の声を上げながら後退りをするディアボロモンに向かってウォーグレイモンは、更に右脇腹に向かって、今度は左回し蹴りを叩き込む。

「フン！！」

「グガァッ！！」

ウォーグレイモンの左右回し蹴りを急所である脇腹に連続で叩き込まれたディアボロモンは、一瞬息が詰まるような声を上げて動きが止まってしまった。
しかし、ウォーグレイモンはそんなディアボロモンの様子になど構わずに両手の間にエネルギー球を作り上げると、未だに動けずにいるディアボロモンに向かって投擲する。

「ガイアフォーーース！！」

「ギャガアァァァァァァーーーーー！！！！」

「なっ！？　そんな馬鹿な！？」

ウォーグレイモンの放ったガイアフォースを至近距離で受けたディアボロモンは苦痛に満ちた雄叫びを上げながら、データ粒子に変わりながら消滅した。
その事実にウォーグレイモンとディアボロモンの戦いを見ていた将生は驚愕のあまり極限にまで目を見開いた。
選ばれし子供たちのウォーグレイモンとメタルガルルモンの2体が同時に掛かっても倒すことのできなかったディアボロモンをウォーグレイモン1体だけで倒したのだ。
それは、ウォーグレイモンことオーグが秀人の思いに応えて強くな

るべくして行なった訓練で会得した戦闘経験から来る強さだった。
その結果、オーグとメルーガはウォーグレイモンとメタルガルルモンの中でも強豪の部類に確実に入るほどの強さを手に入れたのだ。

「ほぉ、ウォーグレイモンにしてはなかなかやるね。でも、二の次三の次の策を用意しておくのが真のテイマーなんだぜ？」

自身のパートナーデジモンであるディアボロモンを倒されたのにも関わらず、余裕を崩そうとしない将生はそう言うと、指を鳴らした。

『カタストロフィーカノン！！』

すると、何とウォーグレイモンが今ほど倒したはずのディアボロモンが、しかも2体のディアボロモンがウォーグレイモンの背後に姿を現した。
2体のディアボロモンは、胸元の発射口をウォーグレイモンに向けて構えると、連続でエネルギー弾を撃ち込む。

「クッ！！　そういうことか！！　ブレイブシールド！！！」

自分に向かって迫り来るカタストロフィーカノンを避けることが出来ないことを悟ったウォーグレイモンは背中に装備しているブレイブシールドを両手に持つと、前方に向かって盾の様に合わせながら、カタストロフィーカノンを防いだ。
何故、ウォーグレイモンが倒したはずのディアボロモンがいるかと言うと、ディアボロモンはデジモンが本来持つ筈の無い力―増殖能力を保有しているからだ。
恐らく、ディアボロモンはウォーグレイモンが投擲したエネルギー弾から逃れたときに密かに増殖していたのだろう。

只でさえ、一体だけでも強力無比な究極体が大群で現れるなど恐怖以外の何ものでもない。　ディアボロモンはそれを可能にする力を秘めている。
何しろ、自身と同じ考えと強さを持つディアボロモン達を無限に増殖させ続ける事が可能なのだ。
ディアボロモンは、敵にすると恐ろしく、味方にすれば頼もしいデジモンの1体だろう。

ウォーグレイモンはカタストロフィーカノンが止むと同時に、素早く背中にブレイブシールドを戻してディアボロモン達に向かって構えを取るが、その行動よりも前に、ディアボロモン達はウォーグレイモンに向かって飛び掛かると同時に、右腕を長く伸ばしてウォーグレイモンに向かって殴り掛かる。

『シャァァァァァァァーーー！！！』

「ムッ！！」

ディアボロモン達が伸ばして来た右腕をウォーグレイモンは左腕のドラモンキラーを使いながら防御した。
それを目撃したディアボロモン達は僅かに悔しげに顔を歪めるが、すぐさま冷静に立ち返り、トリッキーな動きをしてウォーグレイモンを撹乱するように動き回りながら拳を放ち出す。
ウォーグレイモンはそれを両腕のドラモンキラーを使いながら防御して、隙を見つけてディアボロモンに攻撃しようとするが、ディアボロモン達のトリッキーな動きによってなかなか攻撃できない状態に陥っていた。

「そこだ！！」

『シャァ！！』

それでも、ディアボロモン達のトリッキーな動きをある程度見切れるようになったウォーグレイモンは、ディアボロモン達に向かって渾身の力を込めた左腕のドラモンキラーを振り抜く。
ウォーグレイモンのドラモンキラーを避けようとディアボロモン達は大きく飛び去った。

「もらった！！　ウォーブラスターーー！！！」

その好機を逃さないと言わんばかりにウォーグレイモンは両手をディアボロモン達に向かって突き出すと、両手の間から連続でエネルギー弾を撃ち出す。

『シャァァァァァァァァーーーー！！！』

ディアボロモン達は、ウォーグレイモンが放ったウォーブラスターをトリッキーな動きで避けると、一体のディアボロモンがウォーグレイモンに急接近し、腕を長く伸ばして鋭い爪をウォーグレイモンの左腕に向かって突き出した。

「クラエ！！」

「クッ！！」

ディアボロモンの行動を見たウォーグレイモンは表情に焦りを浮かべた。

何故なら、ディアボロモンの能力の一つにウィルスを送り込む能力が在ることを思い出したからだ。

ディアボロモンの今の行動は明らかにウォーグレイモンにウィルスを送り込もうとしていることがわかる。
戦いに集中していた為に、ウォーグレイモンはディアボロモンの能力を忘れていたのだ。
そのウィルスは徐々にウォーグレイモンの体を侵食するだろう。
もし、思い出さなければ、戦いの間自身の体の異常に気が付かなかった。
そして、ウィルスはウォーグレイモンの体全体を侵食して、完全に動けない状態に追い込むだろう。

「君の考えはわかったぞ！！　悪いが君の思う通りにはさせない！！」

「ッ！！」

ウォーグレイモンは叫ぶと同時に自身の左腕に爪を刺そうとしているディアボロモンの腕を右腕で掴み取った。
それから何とか逃れようとディアボロモンはもがくが、ウォーグレイモンは逃さないと言うように力を込めて、ディアボロモンを地面に向かって投げつけた。

「フン！！」

「シャッ！？」

「まずは一体目だ！！ドラモンキラーー！！」

地面に叩きつけられた衝撃から立ち直れないディアボロモンに向かって、ウォーグレイモンは右腕のドラモンキラーに紅蓮の炎を纏わせると、鋭く振り下ろし、ディアボロモンの体を両断した。

しかし、それを見ても将生は落ち着き、ウォーグレイモンは安心しなかった。
彼らは十分に知っているのだ。
ディアボロモンが簡単に倒されるようなデジモンでは無い事を。

その考えを肯定するかのように体を両断されてもなおも、ディアボロモンは両腕を通り過ぎた後のウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーに取り付かせると、最後の力を解放する。

「パ・ラ・ダ・イ・ス・ロ・ス・ト」

「ツッ！！　しまった！！」

ディアボロモンが全身の力を解放すると同時に、ウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーで零距離からの巨大な大爆発が発生して、ウォーグレイモンの左腕のドラモンキラーは破壊されてしまった。
自身の武器の一つが失われた事実にウォーグレイモンは焦りの声を上げるが、その隙を逃さないと言うように二体目のディアボロモンが飛び掛かると、ウォーグレイモンの顔面に右拳を振り抜く。

「シャッ！！」

「ウオッ！！」

ディアボロモンの攻撃を右腕のドラモンキラーで防御したウォーグレイモンは声を上げるが、ディアボロモンはその様子に一切構わずに今度は右足蹴りを繰り出した。

「シャッ！！」

「セイッ！！」

「ガハァ！！」

右足蹴りを左手で受け止めたウォーグレイモンはディアボロモンの顔面目掛けて右ハイキックを繰り出した。
直撃を喰らったディアボロモンは将生のいる方向へと吹き飛ばされた。

「ディアボロモン！！　大丈夫か！！」

「ダイジョウブ……　マサキ……　アイツハツヨイ……　アノウォーグレイモンハ、マエニタタカッタウォーグレイモンヨリツヨイ……」

「！！　まさか、そのディアボロモンは……」

将生がディアボロモンの元に駆け寄ると、ディアボロモンは片言ながらもきちんとした日本語を話した。
ディアボロモンの言葉を聞いたウォーグレイモンはある事実に気がついた。

「どうやら気がついたようだな、秀人。このディアボロモンはかつて選ばれし子供たちがいる世界に出現したディアボロモンと同一個体なんだよ。確かに、アーマゲモンからクラモンに初期化されて根絶された。でも、その内の1体のクラモンがどういうわけか全ての元となったデジタルワールドに流れ着いたんだ」

「そこまで分かっているはずなのにどうしてクラモンを育てたんだ！？　君は凄腕のテイマーだったんじゃないのか？」

「俺はな……世界を支配することで、ディアボロモンが安心して生きれる世界が作りたいだけだ！！！」

「何だと！？」

「……」

将生の話を聞いてウォーグレイモンが驚愕しながらも将生に質問をすると、将生は自分の本当の思いを話し始めた。

「クラモンを育てている時からずっと、俺はディアボロモンの行いについて考えていた。確かに、ディアボロモンの行いは決して許されることの無い事だ。でもよ、秀人。お前もオメガモンを育てられる程のテイマー何だろう？　お前はデジモンの気持ちがわかる凄い奴なんだろう？　なら、ディアボロモンの気持ちを考えてみろよ！！」

「……」

「ディアボロモンはな、ずっと最初から最後までちゃんとコミュニケーションをとろうと話しかけていたんだよ、メールという手段を使って！！！　でも、結局誰もディアボロモンに返事を返さなかった！！！　無視されていたんだよ！！！　それで、初めてあった相手はアグモンとテントモン。あいつらは『攻撃』という手段を使って話しかけてきた。生まれたばかりの子供だったら、これをどのようにして学ぶと思う？　これを『遊び』だと思うだろう！！！　それで教えてもらった通りに遊び続けた結果、初めて送られた言葉の意味が『オメガモン、あの化け物を倒してくれ！！』、つまり、『お前、邪魔だから死ね』ということになる……ふざけるなよ！！！

確かにディアボロモンの行いは悪いけど、その時のディアボロモンは、まだ生まれて間もない子供なんだぞ！！！」

「確かに……　でも、その後のディアボロモンは何だかストーカー地味ていた気がするよ……」

将生のディアボロモンを思う怒りの声を聞いたウォーグレイモンは思わず俯いてしまった。

「それは俺も否定しない。それで、全ての元となったデジタルワールドに流れ着いたクラモンを待っていたのは、地獄の日々だった。誰にも相手にされず、何処に行っても迫害されて、虐められた地獄の日々だったんだよ。でも、ここからは俺の想像だけど、あるデジモンに拾われて暗黒のデジヴァイスを持たせて現実世界（リアルワールド）に送り込まれて俺のところにいる、ってわけだ」

「それが……君のディアボロモンを救いたいと考えている理由か？」

「そうだ！！！　俺はディアボロモンのために世界を変える！！もうこれ以上ディアボロモンが苦しまないで済むように！！」

「……」

将生の世界支配の話は、実は建前なのだ。
本当は、自分のパートナーデジモンであるディアボロモンが安心して暮らせる世界を造ることにあったのだ。
ところが、本来ならば喜ぶべきことであるはずなのにディアボロモンは無言で俯いているではないか。

「（何で、ディアボロモンは何も言わないんだ……？）確かにパー

トナーデジモンのために世界を変えたいという気持ちはわかる。でも、そのために多くの人々を苦しめていいという訳ではないだろう？」

「秀人……　お前は、デジモンよりも人間を選ぶのか？」

「誰が人間を選ぶと言った？　僕達は人間もデジモンも両方を救いたいだけだ。救えるものなら全てを救う。１０の内、９は救えるけど、１は救えないのならその１を可能な限り減らすだけだ！！」

「……！！」

ディアボロモンの様子が何だかおかしいことに疑問を抱いたウォーグレイモンだったが、将生を説得しようと疑問を問いかける。しかし、自分の邪魔をする秀人を煩わしく思っている将生の問いに、ウォーグレイモンは自分たちの思いを告げた。ウォーグレイモンの言葉を聞いたディアボロモンは、思わず顔を上げた。

「綺麗事ばっかり言いやがって……　お前たちを抹消（デリート）する！！！」

秀人の思いを綺麗事と片付けた将生は自分のデジヴァイスを握り締めた。将生のデジヴァイスからは黒い光を放ち始めた。

「行くぞ！！　ディアボロモン！！」

「……」

将生は自分のデジヴァイスを胸に当てて、自身の体をデータ化し

ながら叫ぶ。
パートナーデジモンであるディアボロモンは無言を貫き通している。
《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》
「マトリックスエボリューション！！！」
「ディアボロモン進化！！！」
「オメガディアボロモン！！！」
　将生が叫ぶと同時にデジヴァイスから音声が響くと、将生とディアボロモンの体が一つに成り巨大な漆黒の光が出現すると、その中から、全身をディアボロモンを模した漆黒の鎧に身を包み、胸には砲塔を備え、両腰には一本づつの大剣を装備して、背中に黒色のマントを羽織り、ディアボロモンのような悪魔の顔をした暗黒騎士型デジモンーオメガディアボロモンが姿を現した。
「グギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーー！！！！！！」
「なっ……　初めて見た……　でも、様子が変だ……　まさか……暗黒進化！？」
　自身と同じ融合進化をしたはずなのに、凶暴な咆哮と理性を全く宿していない瞳を持ったオメガディアボロモンの姿を見たウォーグレイモンは、その余りにも変わり果てたディアボロモンと将生の姿に恐怖と悲しみしか感じる事しか出来なかった。
そしてそれを表すようにオメガディアボロモンは両腰にから大剣―ルシファーブレードを引き抜きながら瞬時に胸の砲塔にエネルギー

を集めると、ウォーグレイモンに向かって胸の砲塔から砲撃―カタストロフィーバスターを発射する。

「カタストロフィーバスターーー！！！」

「くっ！！　ブレイブシールド！！」

オメガディアボロモンが撃ち出したカタストロフィーバスターをウォーグレイモンは背中に装備しているブレイブシールドを前面で合わせて盾のように構えて防御したが、一撃を防いだだけでブレイブシールドは粉々に砕け散ってしまい、その衝撃によって後退してしまった。

「何だと！？」

ウォーグレイモンは、自身の唯一の防御手段が使用不能に成った事よりもたった一度の攻撃でブレイブシールドが粉砕された事実に驚愕した。

「グギャアアアアアアアッ！！」

オメガディアボロモンは、両手に持っているルシファーブレードを握り締めて構えながら、ウォーグレイモンに向かって突撃を開始した。

「クッ！！　ドラモンキラーーー！！！」

それを見たウォーグレイモンは、右腕のドラモンキラーを構えながらオメガディアボロモンに向かって突撃すると、ドラモンキラーを繰り出した。

「グギャアアアアアアアアアアッ！！」

「何！？　グアアッ！！」

オメガディアボロモンは左手に持っているルシファーブレードでウォーグレイモンのドラモンキラーの攻撃を防御すると、右手に持っているルシファーブレードを振り下ろすことでドラモンキラーを破壊した。
驚愕しているウォーグレイモンをよそにオメガディアボロモンは、更にルシファーブレードからの斬撃をウォーグレイモンの胸当てに向かって繰り出した。
斬撃によって、胸当ての一部を破壊されたウォーグレイモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。

（ウォーグレイモンじゃ太刀打ちできない……オメガモンで行かないとまずいな……）

（でも……どうやってするんだ？　今のままじゃ進化出来ないよ……）

ウォーグレイモンと秀人は、内心でオメガモンのジョグレス進化を考えるがオメガディアボロモンの激しい攻撃によってそれが出来ないでいた。
ウォーグレイモンはルシファーブレードの斬撃とカタストロフィーバスターを何とか回避しながら、この状況の打開策を考えていた。

（オーグ、秀人……　ここは僕に任せて！！　オメガモンに進化するための時間を作るから！！）

（わかった！！　メルーガ……君に任せよう！！）

その時、秀人と融合しているメルーガことメタルガルルモンが自分が時間稼ぎをすることを言い出したため、ウォーグレイモンと秀人はメタルガルルモンに任せることにした。
ウォーグレイモンはオメガディアボロモンが撃ち出したカタストロフィーバスターを避けながら両手の間にオレンジ色のエネルギー球を作り上げると、オメガディアボロモンの足元に向かって投擲した。エネルギー球の着弾で生ずる爆煙でオメガディアボロモンの意識を一時的にこちらから反らす作戦だ。

「ガアアッ！！」

ウォーグレイモンの予想通り、自分の足元に向かって投擲されたオレンジ色のエネルギー球によって発生した爆煙でオメガディアボロモンは思わず顔を横に背けてしまった。

「ウォーグレイモン！！！　スライドエヴォリューーーション！！」

その隙にウォーグレイモンが叫ぶと同時にウォーグレイモンの体を青色の光が覆うと、その内部から機械的な青い鎧で身を包み、両肩にミサイルランチャーを装備し、背中に機械的なウイングを備えた蒼い狼―メタルガルルモンが姿を現す。

「メタルガルルモン！！！」

ウォーグレイモンがメタルガルルモンへとスライド進化を終えると、メタルガルルモンの姿を見たオメガディアボロモンはカタストロフィーバスターを撃ち出す。

「カタストロフィーバスター！！！」

「フッ！！」

しかし、メタルガルルモンは慌てる事無く超高速のスピードでカタストロフィーバスターを避ける。
ウォーグレイモンと比べて、メタルガルルモンはパワーは落ちて、近、中距離戦が苦手になるものの、スピードと遠距離戦が得意になるのだ。
ちなみに、ウォーグレイモンの場合は、パワーと近、中距離戦用になる。
つまり、使い分けが重要になってくるのだ。

「ギシャッ！？」

「ガルルトマホーク！！」

カタストロフィーバスターを避けると同時に消えたメタルガルルモンの姿に、オメガディアボロモンは慌ててメタルガルルモンを探そうと辺りを見回そうとする。
そして、オメガディアボロモンが辺りを見回している隙にメタルガルルモンはオメガディアボロモンの上空に移動すると、腹部のハッチを展開して、そこから巨大ミサイルを発射した。

「グギャアアアアアアアアッ！！」

ガルルトマホークの直撃を喰らったオメガディアボロモンは苦痛の声を上げた。

「今だ！！　ジョグレス進化、行くぞ！！」

『行くぞ！！　メルーガ！！！』

『ＯＫ！！　オーグ！！！』

『僕たちをここまで育ててくれた秀人に今こそ応えよう！！！』

その隙を狙っていた秀人の叫びに応じるように秀人のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが同時に叫ぶと、その瞬間に眩い光の柱がメタルガルルモンの体を包むように立ち上った。

『ウォーグレイモン！！！』

『メタルガルルモン！！！』

「ジョグレス進化！！！」

そして、オメガディアボロモンがジッと眩い光の柱を見つめていると、その中から、流麗な白銀の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が白色のマントを羽織って、右肩には蒼色のアーマーをつけ、右手が蒼色の機械狼―メタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には内側が黄金で外側が赤色の盾―ブレイブシールドΩをつけ、左手が黄金の竜人―ウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンが姿を現した。

「オメガモン！！！」

その聖騎士型デジモンの名前は、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが人々の平和を願う思いから融合した究極体を越えた合体究極

体であり、最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねる聖騎士型デジモンーオメガモンだった。
オメガモンは着地すると、オメガディアボロモンを睨みつけた。

「フッ！！」

オメガディアボロモンを睨みつけながら、オメガモンは左腕を軽く振るうと同時にウォーグレイモンの頭部を模していた篭手からデジモン文字で『オールデリート』と刻まれた大剣ーグレイソードが飛び出し、オメガディアボロモンにグレイソードの剣先を向ける。

「グギャアアアアアアアアアアッ！！」

オメガディアボロモンは、それを見るとオメガモンに向かって突撃すると、ルジファーブレードを振るった。

「グオッ！！（……とんでもない力だ……　ディアボロモンの比じゃない……　これが融合進化の力なのか……）」

オメガディアボロモンが振り下ろして来たルシファーブレードをギリギリの所でグレイソードで防いだオメガモンは、次々と攻撃を放ち続けるナイトディアボロモン　の姿に、冷や汗を流していた。
オメガディアボロモンは、ディアボロモンよりもパワー、スピード、攻撃力、そして、ディアボロモンの最大の弱点であった防御力等の全ての面が向上しているのだ。

「（これが闇の力……　将生、ディアボロモン……こんな事を望んでいたのか？　明らかに暴走しているではないか！！！）ガルルキャノン！！」

オメガモンとなった秀人は、悲しみを振り払うと右腕を軽く振ってメタルガルルモンの頭部を模した篭手から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開させた。
更にそこから、集束砲撃をオメガディアボロモンに向けて発射した。

「ガアアアアアアアアアッ！！」

「何だと！？」

自身に向かって来るガルルキャノンを見たオメガディアボロモンは、何と回避行動を取らずに自身に向かって来るガルルキャノンに突進を行い始めた。
その姿を見たオメガモンは驚愕に目を見開くが、構わずにオメガディアボロモンを倒せる最大のチャンスだと思い、更にエネルギーをガルルキャノンの砲身に送り込み、ガルルキャノンの砲撃の威力を上げ始めるが、その考えは黒い光に包まれ始めたオメガディアボロモンの姿を見た瞬間に吹き飛んだ。

「まさか……必殺技か！？　まずい！！」

オメガディアボロモンの行おうとしていることに気が付いたオメガモンは驚愕に目を見開きながらも、その場から全速力で離れ始めるが、その前に、オメガディアボロモンは完全に黒い光に包まれると、暗黒のエネルギーを集中させたルシファーブレードを前方に向けながらオメガモンに向かって突撃する。

「ガアアアアアアアアアッ！！　リボルバーーーファントム！！！」

「グワアアアアアアアアアアアッ！！！！」

オメガディアボロモンの繰り出したリボルバーファントムを避けることが出来なかったオメガモンは、辺りに苦痛の声を響かせながら吹き飛ばされた。

「グゥ……　フフフ……　今の技はどうやら私でも出来そうだな……」

「ガアァァァァァァァァッ！！」

地面に叩きつけられながらも攻撃を喰らった胸元を押さえながら立ち上がったオメガモンは不敵に微笑んだが、すぐに真剣な表情に変わりながらその場から急いで離れ始めた瞬間、上空からオメガディアボロモンがルシファーブレードを振り下ろしてきた。

「ガアァァァァァッ！！」

「フッ！！　ガルルキャノン！！」

自分に向かって来るオメガディアボロモンのルシファーブレードを見たオメガモンは素早く跳躍することでルシファーブレードの攻撃を避けると、オメガディアボロモンに向かってガルルキャノンの照準を合わせると、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガアアッ！！！」

「流石に防御力まで向上しているとは……　どうやら、相手はロイヤルナイツ級……いや、七大魔王級と言ってもいいぐらいだな！！」

「ガアァァァァァァァァァッ！！！」

オメガディアボロモンの実力に感嘆したオメガモンの言葉に応じるようにオメガディアボロモンは砲撃を喰らいながらも力を振り絞りながら立ち上がり、自身の宿敵であるオメガモンに顔を向ける。

「グギャアァァァァァァァッ！！」

「そう言えば、別個体だとは言え、私と君はお互いに一勝一敗……ここで決着を付けよう！！」

「ガアアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

オメガモンがオメガディアボロモンに向かって突進すると、オメガディアボロモンも背中に羽織っているマントをはためかせながらオメガモンと同様に突進し、グレイソードとルシファーブレードの斬撃を開始しようとする。

「フッ！！」

「グギャァ！？」

ところが、突然オメガモンがマントを翻すと、オメガディアボロモンの視界から消えた。
オメガディアボロモンはそのことを疑問に思い、両手に持っているルシファーブレードを一旦下げると、辺りをキョロキョロと見渡す。

「そこだ！！」

「ガアァァァァァァァァッ！！」

突然、オメガモンはオメガディアボロモンの腹部に向かって左回し蹴りを繰り出し、攻撃を喰らったオメガディアボロモンは後方に吹き飛ばされて、地面に叩きつけられた。

「お互いマントを持っている者同士、マントには気を付けた方がいいみたいだな」

「ガアアアアアアアアッ！！」

オメガモンの言葉を聞いて怒りの声を上げたオメガディアボロモンは、ルシファーブレードを構えてオメガモンに斬りかかった。

（クッ……　暗黒進化だと言うのに何故異常が見られない？　これが本当の進化とは思えない……　暴走している点から考えても……）

既に充分なダメージを受けているにも関わらず、進化を解く事無く自分に立ち向かって来るオメガディアボロモンの姿に、オメガモンは辛そうな表情をして考えながらルシファーブレードをグレイソードで防御する。

「グギャアアアアアアアアッ！！ルシファーブレーード！！！」

「フン！！　ガルルキャノン！！」

オメガディアボロモンは、暗黒のエネルギーを纏わせたルシファーブレードをオメガモンに向かって振り下ろすが、オメガモンはグレイソードで防ぐと、空いている右手のガルルキャノンをオメガディアボロモンに向けると、エネルギーを一点集中させた砲撃を放った。

「グギャアァァァァァァァァッ！！」

オメガディアボロモンは苦痛の声を上げるが、尚も立ち上がり、オメガモンに戦いを挑み続ける。
まるで、内部にいるテイマーを生きながらえさせるために。

「もういいだろう！！　君は既に限界を超えているんだ！！　それ以上戦うと君もテイマーも死んでしまうぞ！！　ガルルキャノン！！」

悲しそうな声を上げたオメガモンは、オメガディアボロモンに向かって再度エネルギーを一点集中させたガルルキャノンを撃ち出した。

「ガアァァァァァァァァッ！！」

ガルルキャノンを喰らったオメガディアボロモンは、苦痛の叫び声を辺りに響かせながら、後方に吹き飛ばされた。

「これで終わりにしよう……　グレイソード！！！」

ガルルキャノンを撃ち出した直後、何とか立ち上がったオメガディアボロモンの背後に回り込んでいたオメガモンは左手のグレイソードに凄まじい紅蓮の炎を纏わせると、オメガディアボロモンに向かって振り下ろした。
オメガディアボロモンは、防御することもで出来ずに驚愕の表情をオメガモンに向けた。

「ガアハッ！！……マ……サ……キ……」

「グハッ！！」

オメガモンのグレイソードを喰らったナイトディアボロモンは苦痛の声を上げて地面に倒れ伏すと、黒い光に包まれて、ディアボロモンと将生が現れた。

「……」

地面に倒れ伏しているディアボロモンと将生を見てもオメガモンは何も思わず、両腕を胸の前で交差させて、眩い光を発生させると秀人の姿に戻った。

秀人の姿を見た将生は、ディアボロモンに命令を下した。

「まだ……終わっていない……ディアボロモン……秀人をやれ……そうすれば俺たちの勝利だ……」

「……マサキ……モウ……ヤメヨウ……ボクラノマケダ……」

将生の命令を聞いたディアボロモンは、俯きながら将生の命令に拒否を突きつけた。

「何を言っているんだ！？　まだ戦いは終わっていない！！　テイマーの命令に逆らうつもりか？」

将生の言葉に答えるようにディアボロモンは、将生を睨みつける。まるで、将生の命令に反逆するかのように。

「な……何だ？　その眼は……？」

「もう、君はディアボロモンのテイマーじゃないってことだよ」

「何だと！？」

ディアボロモンの瞳に隠された思いに気がついた秀人は、ディアボロモンのテイマーである将生がディアボロモンの思いがわからないことに怒りを覚えたのか、将生の胸ぐらを掴んだ。

「デジモンの気持ちをわからないお前はテイマーじゃないって僕は言ったんだ！！！」

「！！！」

「君は、融合進化した時に気付かなかったのか！？　暗黒進化をしていたんだぞ！！　一歩間違うとディアボロモンは死んでいたんだ！！！」

「！？　どういう事だ！？」

秀人は掴んでいた将生の胸ぐらを離すと、秀人は話し始める。

「確かにオーグじゃ全然歯が立たない程強かった。でも、実際には暴走していたんだ。君はディアボロモンのための理想郷を作りたい、と言ったよな。でも、ディアボロモンは全然嬉しそうな感じじゃなかったぞ！！！」

「馬鹿な！！！　俺はディアボロモンのために世界を変えようとしているんだ！！！　その何処が悪いんだ！？」

「マサキ……ボクハセカイヲカエテホシクナイ……タダマサキトイッショニイラレルダケデイイ……」

「え！？」

秀人の言葉を聞いても未だにディアボロモンの本当の思いがわからない将生を見て、ディアボロモンは自分の本当の思いを話し始めた。

それを聞いた将生は驚愕で目を見開いている。

「ムカシノマサキハボクヲマモッテクレルヤサシイテイマーダッタ……マサキノリョシンヤトモダチガボクヲワルクイオウトボクヲマモッテクレタ……」

ディアボロモンはクラモンで将生に初めて会った時のことを思い出したかのように話している。

クラモンは、将生のパソコンから出現して、将生にデジヴァイスを渡して将生のパートナーデジモンになった。。

クラモンのことをよく知っている将生は、最初こそは悩んだもののデジヴァイスを見たり、クラモンのことを調べた結果、クラモンを育てることにしたのだ。

しかし、クラモンが成長していくうちに連れて、クラモンの存在を知った両親には嫌われ、友人にも見放されるようになった結果、将生はディアボロモンが悪いんじゃなくて周りが、ディアボロモンを悪と考えている世界を破壊しようと考えるようになったのだ。

将生は、本来、誰にでも優しく、困った人を見捨てられない正義感の強い性格だったのだが、周りの環境の変化で変わってしまったのだ。

「ボクハ……ジブンノオコナイヲミテ、ハンセイシタ……　ナンデアレ、ボクハマサキノヨウナヤサシイヒトニメイワクヲカケタンダ……デモ、イマノマサキハタクサンノヤサシイヒトニメイワクヲカ

ケヨウトシテイル……　ボクガイルカラマサキハワルイヒトニナッタ……　ボクガイレバマサキハトマラナイ……ダカラ……キエレバイイ……ソウオモッタンダ……」

「そ……そんな……」

「マサキ……ゴメンネ……ボクガマサキノトコロニキテ……」

「う……うう……だからこそ、俺はお前のための世界を造りたかったんだ！！　青臭い理想だとわかっていても、自分の相棒が苦しんだり悲しんだりするところを見たくなかったんだ……　どうして……ディアボロモンだけがどの世界でも悪者扱いされるんだ！？」

将生の嘆きに秀人は無言を貫いていたが、ようやく言葉をまとめた秀人は将生に話しかけた。

「多分ディアボロモンが本当に必要としているのは、自分のための世界なんかじゃなくて……あの頃の優しかった将生なんじゃないのかな？」

「！！！　あ……あの頃の……俺……？」

「ソウ……アノコロノマサキダヨ」

「ディアボロモン……」

ディアボロモンが本当の思いを知った将生は瞳から涙を零しながら地面に膝をついた。

「……ごめんよ。ディアボロモン……俺はテイマー失格だよ……

ディアボロモンのことを考えていたら、こうするしかないと思い込んで……君を苦しめてしまった……　心のどこかで間違いに気づいてもディアボロモンにすがって自分を正当化させていたんだ……許してくれ……」

　涙を零しながらもディアボロモンに頭を下げる将生を見て、ディアボロモンは優しく声を掛けた。

「ワカッテイルヨ。マサキモボクトオナジヨウニクルシンデイタコトヲ。ダッテマサキハホントウハヤサシイテイマーダカラ……」

「え？」

「ダイジョウブ。マサキ、モウイチドヤリナオソウ！！」

「そうだな！！」

　こうして、ディアボロモンと将生による世界支配は無くなった。

　戦いが終わって秀人とデジヴァイスにディアボロモンを戻した将生は海を見ながら話をしていた。

「俺はディアボロモンのためという大義名分を掲げて、とんでもないことをやろうとしていた。もしかして、クラモンを拾ったデジモンもそれを目論んでいてディアボロモンをその尖兵にして現実世界（リアルワールド）に送り込んできたんだろう……」

「そうだな。僕はあの時にインペリアルドラモン　パラディンモードに命を助けられたんだけど、デジタルワールドを越えた戦いが待

っていると言われた。僕は……半デジモン、半人間のエイリアスになってしまったから異端者になったんだよ……　何というか……ブラックウォーグレイモンみたいというか……」

「そうなんだ……人をそんな状態にするなんて俺は大馬鹿だよ。ディアボロモンのため、って言っておきながら結局は自分のことしかかんがえていなかったんだよ……」

俯きながら話す将生を見て、秀人は自分の両腕に付けているデジヴァイス０１に視線を移しながら話し始める。

「そんなに自分を責めるなよ。僕はロイヤルナイツの始祖であるインペリアルドラモン　パラディンモードに選ばれたテイマーだから、遅かれ早かれ戦いに巻き込まれる運命にあったんだ。それに……僕は嬉しかったんだ」

「……？」

「いや……決して戦うことじゃないんだよ。デジモンと一緒に戦えるのが嬉しいんだ。何かね……デジモンだけに戦わせて後ろで何もしないっていうのが気に食わなくてさ……　何か……デジモンだけに罪を背負わせるのは如何なものかな……って思えて。でも、やっぱり戦うのは怖いさ。初めてだったもの。でも、背中を任せられる仲間がいて怖くはなかった」

「仲間か……　俺もディアボロモンのために今度こそ正しい力を引き出せるように頑張んないとだな……」

秀人の考えを聞いた将生は気合に満ちていた。

どうやら、将生とディアボロモンは今度こそ正しい融合進化が出来

そうな予感がしそうだ。

「これからどうする？」

「俺は……デジタルワールドに行くよ」

「えっ？」

「多分さ、クラモンを拾ったデジモンはデジタルワールドと現実世界（リアルワールド）の支配を目論んでいるんだろう。もし、俺がここにいれば、確かに抑止力にはなるけど……ここにいたらまた、たくさんの人に迷惑をかけることになるし、ディアボロモンにも辛い思いをさせることになる。俺は、デジタルワールドに行って自分自身を見つめ直すことにするよ。　ディアボロモンという仲間もいるし、今度こそ正しい進化が出来るようにしなくては」

将生は穏やかな表情をしながら、秀人に話した。

「そうだな。僕も戦う運命にあるからデジタルワールドに行かなければならない。お互い、頑張ろうぜ！！」

「おう！！」

秀人と将生は、そう言うと、別れて自宅へと帰っていった。
ちなみに、２人とも自宅に帰ったら両親に散々怒られたそうだ。

デジタルワールドでも人間界でも無い不思議な世界。
その世界の中で現実世界（リアルワールド）の様子を見ていたデジモンは、自身の思い

通りに事態が進まなかった事に怒りを覚えていた。
そのデジモンは、背中に2門の巨大なキャノン砲を装備し、同じく背中に亡霊のような物がいて、腕を4本生やした合成型デジモンだった。

（くそっ！！　あと一歩の所で！！　インペリアルドラモンめ！！　ディアボロモンが正義に目覚めてしまったではないか！！　あの藤本秀人は厄介な人物だな……）

現実世界（リアルワールド）の様子を見ていたそのデジモンは、ディアボロモンが正義に目覚めたことにますます怒りを覚えたが、フッと思い止まった。

（そう焦ることは無いか……　焦りは敗北を招くのだからな……　だが、見ていろ！！　人間共！！　デジモンを実験という理由で好き勝手に扱い、私という邪悪な存在を生み出した！！　私は許さない！！　人間を！！　身勝手で傲慢な下等生物を絶対に許さないぞ！！！）

そのデジモンは内心でそう叫ぶと共に、空間を抜け出して何処かへと消え去った。
ディアボロモンを現実世界に送り込んだそのデジモンは、己の目的の為に動き始めたのだった。

第2話　誕生の章　デジモンの思いと究極進化（後書き）

オリジナルデジモン紹介

オメガディアボロモン（イーヴィル）
世代／究極体　種族／暗黒騎士型　属性／ウィルス種
必殺技／カタストロフィーバスター、リボルバーファントム
ディアボロモンと桐原正樹が暗黒の融合進化を行なった結果、誕生した暗黒騎士型デジモン。全身に身を包んでいる鎧には所々に進化前のディアボロモンの意匠がある。両腰には魔剣『ルシファーブレード』を装備している。ディアボロモンの能力を継承しており、正にディアボロモンの最終形態と言えるだろう。ディアボロモンの時よりも、総合力、特にディアボロモンの最大の弱点であった防御力が大きく向上している。必殺技は、胸の砲塔から破壊エネルギーの砲撃を放つ『カタストロフィーバスター』と自身を暗黒の光に包ませながら相手に向かって『ルシファーブレード』を突き出しながら突撃して、相手を粉々に破壊する『リボルバーファントム』だ。この他にも数多くの様々な技を所持している。

次回予告

ディアボロモンとの激戦を終えた秀人はある場所である物を見つけて、それをきっかけに再びインペリアルドラモン　パラディンモードに出会う。
秀人は、彼からデジタルワールドで起きていること、その黒幕と思われるデジモンを知る。
そして、秀人はデジタルワールドを超える戦いに参戦を決意する！！
次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

誕生の章　新しい日常の幕開け

秀人は決意する、自分に出来ることをすることを……

第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでした。

第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け

―秀人の自宅―

「何で怒られているのかわかっているよね、秀人？」

「はい……」

ディアボロモンとの激闘の次の朝、秀人は普通に家族と朝食を取った。
しかし、その後自分の母親である藤本優衣に正座しろと言われたので正座をしている。

（たかだか帰りが遅いぐらいでここまで言われるなんて……）

昨日散々怒られたのに、まだ何か言うことがあるのかと秀人は内心で思っている。
しかも、３０分以上も正座させられているので、足の方もいい加減限界だ。

（どうして、秀人は折角の休日の朝から優衣を怒らせているんだ……？）

秀人の父親である藤本修二は休日なので家でゆっくりとする予定だろう。
ちなみに、修二はつまようじで秀人の足をつつくという何とも地味な嫌がらせをしている。

「いい？　昨日も言ったけど私は遅くなるならなるでいいけど、そ

の時はきちんと連絡しなさいと言ったよね？　いつもなら、ちゃんと連絡するいい子の秀人だけど、今日はどうしたのかな？」

表情は笑顔だが、目が全然笑っていない優衣を見て、秀人は今にも逃げ出したい衝動に襲われていた。
修二は秀人の嫌がらせを止めてリビングの隅っこでガタガタと震えている。

『秀人のお母さん、怖い……』

『あのデーモンでも逃げ出しそうな勢いを感じるよ……』

秀人と融合しているオーグとメルーガも優衣を正面から見ることが出来ずに、ただただ震えることしか出来ないでいる。
歴戦の勇士であるオーグとメルーガでも目の前にいる優衣には敵わないようだ。
秀人は自身の帰りが遅くなった理由を正直に話し始めた。

「今日はサッカー部の練習があって、その帰りに公園に寄りました……」

「あの公園、私もよく行くのよね～　でも、公園だけでこんなに遅くはならないはずだけど？」

「公園から海を眺めていたら、悪魔のような生物に襲撃されて瀕死の重傷を負って……」

「そうなの……　えっ！？　何だか話が凄いことになっているんだけど……　そう言えば、秀人……　腕につけているのは何かしら？　腕時計にしては少し違うような気が……」

『そこから先は僕たちに説明させてください』

「えっ！？　なっ、何！？」

「だっ、誰だ！？」

秀人の両腕に付いているデジヴァイス０１を見て疑問に感じていた優衣と修二は、突然聞こえてきたオーグの声に驚いた。

『すみません。驚かして……　僕は秀人に育てられたデジモンのオーグと言います。　本名はウォーグレイモンと言います』

『オーグと同じく、僕も秀人に育てられたデジモンのメルーガと言います。本名はメタルガルルモンです』

オーグとメルーガは秀人の両親に順番に自己紹介をすると、秀人にあった出来事を説明し始めた。

『秀人は、僕たちと同じデジモンであるディアボロモンに襲われました。ディアボロモンは強いデジモンで、尚且つ危険なデジモンです。奴は、以前この世界とは別に存在している世界のネット世界に出現して世界中を恐怖に陥れました。　奴は、ペンタゴンに侵入して核ミサイルを発射したのです』

「かっ、核ミサイルを……　デジモンってそんなに凄い生物なの……？」

メルーガの説明に、優衣は圧倒されながらも質問をした。

『まっ、まぁ……　デジモンは、幼年期?、幼年期?、成長期、成熟期、完全体、究極体の６段階の進化がありまして、ディアボロモンはその究極体なんですよ。他にも色々な段階がありますが、ほとんどのデジモンがこの６段階の進化です。一応、僕たちも究極体ですけど』

『その究極体ですけど、ほとんどが世界を１０個や２０個は滅ぼせる力を持っている者が多いです。でも、中には完全体でも倒せる究極体もいますが、それでも強力であることには変わりません。しかし、中には歴史改竄能力を持つ者や、時間を操作出来る者といった特殊能力を持つ強豪の究極体もいて、僕たちでも敵わない究極体も多数います』

『……』

メルーガからタッチ交代して話したオーグの話の内容に優衣と修二は、口をポカーンと開けながら聞いていた。
無理もないだろう。
何しろ、自分の息子がそのような生物を育てていたとは全く考えてもいなかったからだ。

『話が脱線したので元に戻しましょう。秀人は、ディアボロモンに襲われて、心臓をやられて死にかけましたが、僕たちの心臓である電脳核（デジコア）を移植されて半デジモン、半人間のエイリアスになりました。それで、ディアボロモンを倒しました』

『しかし、その代償に世界の理から外れる異端者になりました。すみません、僕たちのせいで……』

オーグとメルーガが話し終えると、修二が秀人に尋ねる。

「秀人、お前は何がしたいんだ？」

「僕は……この世界にはいられないと言われたのですぐにでもデジモンのいる世界に行きたいです。そこで、戦わなければならない宿命があるので……」

秀人は修二に正直に自分の思いを告げた。

秀人は、今すぐにもデジタルワールドに行きたい思いがある。

「そうか。結局、お前も俺と同じ道を歩くんだな」

修二はそう言うと、秀人の両肩に手を置いた。

修二の職業は消防士なので、常に死と隣り合わせで、誰かを助けるために歯を食いしばって戦っているのだ。

「いいか、秀人。強い男になれ。弱い者を助けて、強い者と戦う人間になるんだ。人間ってのは護るものさえはっきりしていれば、限界なんてあっという間に超えてしまえるほど強くなれるんだ。そして、他人にはいつも優しくあれ。そうすれば、たくさんの友達と仲間が出来て、一緒に戦えるんだ」

修二は、秀人の両肩に手を置いたまま、秀人の目をしっかりと見ながら話を再開した。

「そう言えば、この前、お前と一緒にラーメン食べに行ったときに読んだ漫画にいいセリフがあったな。何だったかな……？　あっ、思い出した！！『信頼できる頭ってのは、その人と一緒ならば、たとえ相手が１００人いよーがちっともビビられーもんなんだよ』、だ。お前の中にはオーグとメルーガがいるんだろう？　彼らが心か

らついていくような男になれ」

「……ああ！！　必ず、強い男になってみせる！！　そして、絶対に無様な戦いはしない……　現状では絶対に満足しないで、『ウォーグレイモン』や『メタルガルルモン』、そして『オメガモン』の名前を侮辱するような戦いは絶対にしない……　そして、皆を本当に護る為にもっと強くなってみせる！！！」

秀人は、修二の言葉を聞くと決意を固めたように拳を握りながら宣言をした。

「よし、目標に向かって頑張れよ！！」

「はい！！」

元気な声を出しては見たものの、長時間の正座でかなり痺れた足を引きずりながら、秀人は洗面所に向かうと歯磨きを開始した。

「昨日、怒りすぎたかしら……」

「そんなことはないよ。ただ……」

「ただ？」

「長い間正座させることはないでしょ～」

「隅っこで震えていたくせに……」

足が痺れて歩くだけで大変な秀人を見ながら、優衣と修二夫妻はすっかり温くなったコーヒーを飲みながら会話をしていた。

「取り敢えず、何とか部屋までたどり着けた～」

歯磨きを終えたもの、未だに足のしびれが取れない秀人は部屋に入ると、ベッドに向かってダイブした。

『ところで、秀人』

『デジタルワールドへどうやっていくの？』

「インペリアルドラモンが迎えを寄越すって言ったけど、詳しいことは聞いていないな……　公園に行けばわかるのかも？」

そう言うと、秀人はリュックサックに着替えやノートと筆記用具、歯磨きセットとまるで修学旅行にでも行くような物を入れ始めた。

「何か、修学旅行みたいだな……　でも、健康管理とか必要だもんな……」

秀人は苦笑いすると、学習机に大切に置いてあるお守りを手に取ると、それを首から下げた。

そのお守りに興味を持ったオーグが質問をした。

『秀人、そのお守りは？』

「僕の友達がくれたんだ。僕の使っているのとは違うタイプのペンデュラムで何回も対戦して、一緒にサッカーやって……でも、半年くらい前に行方不明になってしまって……」

『きっと彼も何処かで戦っているよ』

『そうそう。もしかして、僕達のように戦っているよ、絶対に』

「そうだね」

オーグとメルーガの励ましの言葉を聞いて、秀人は笑顔を浮かべた。

「さて……それじゃ、行きますか！！」

『おう！！』

『ああ！！』

荷物の整理整頓が完了した秀人は、部屋を出るとそのまま玄関に向かった。

「ん？」

靴を履いた秀人が出発しようと考えていると、優衣と修二が出迎えに来た。

「行くのね」

「はい。ここに帰ってこられるかわからないけど、定期的に手紙とか送れたらな～って考えているよ」

寂しそうに笑う秀人を見ると、優衣は思わず秀人を抱きしめた。

「寂しくなったら会いに来ていいからね。辛くなったら相談しても

いいんだからね」

「ありがとう」

優衣にとって秀人は大切で、掛け替えのない宝物なのである。
藤本夫妻は長らく子供が出来ず、ようやく出来た一人息子である秀人は難産だったのだ。

「秀人、楽しんで来い」

「ああ。思う存分楽しんでいただくよ」

秀人と修二は右拳を合わせると、お互いに満面の笑みを浮かべた。

「行ってきます」

『行ってらっしゃい』

両親との挨拶を済ませると、秀人は玄関を出て、駅までの道を歩き始めた。

（フジモトヒデト……）

「誰だ？　僕を呼ぶのは？」

駅までの道を歩いている秀人は、突然、自分の頭に声が響いてきたので、声の主を探すべく辺りを見渡すが、当然のことながら、答えの声は出るはずがなかった。

（ヨウヤクミツケタ……　ワタシノチカラヲツグモノガ……）

「誰だ？　敵ではないんだな？」

（テキデハナイ。ミカタダ。ケンガコウエンデキミヲマッテイル……）

そう言うと、声はもう二度と秀人の頭に響かなくなった。

「剣が公園で待っているって言ったな……　公園に行きますか……」

秀人はそう言うと、昨日ディアボロモンとの激戦を繰り広げた公園に立ち寄り、公園の中に何かを発見した。

「なぁ、オーグ、メルーガ……」

『どうしたの、秀人？』

「何で、公園にオメガブレードが突き刺さっているんだろう？」

『あっ、本当だ。何でだろうね？』

公園の真ん中には、白い刀身の部分にデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と書かれた長剣―『オメガブレード』が突き刺さっていた。

そのデザインはオメガモンの胴体部分を模している。

と言うよりも、オメガモン自体、オメガブレードから生まれたデジモンでもあるのだが。

「何でだろうね？って、そんな呑気なこと言ってられないよ……
とにかく、オメガブレードは、ロイヤルナイツの始祖であるインペリアルドラモン　パラディンモードの物。確かに、能力は魅力的だけど、勝手に奪っては駄目でしょうが……　だから、この世界に流れ着いたみたいだから抜いてインペリアルドラモン　パラディンモードに返してあげないと」

『そうでした……』

反省しているオーグとメルーガを尻目に、秀人は自然と惹かれる様にオメガブレードへ向かって手を伸ばすと、オメガブレードの柄の部分を掴んだ。

「えっ……！？うわぁぁぁぁぁぁ！！！！」

秀人の両手がオメガブレードの柄を掴んだ瞬間、オメガブレードから膨大な光が秀人に向かって流れ込むと、秀人の体は光になってオメガブレードの中に吸い込まれると、そのまま消えてしまった。
すると、オメガブレードも何処かへと消え去った。

「ここは……」

光になってその場所に現れた秀人は、辺りを見渡しながらここは何処なのかと考えた。
秀人が今いる場所は、まるで海の中にいる様な一面青の世界だった。

「なかなか気持ちいいな。　まるで、海を自由に泳いでいるような……」

秀人は光の海の中を泳ぐように漂っていた。

「藤本秀人。また会ったな」

光の海の中を漂う秀人の目の前に、いつの間にかインペリアルドラモン　パラディンモードが存在していた。

「あのオメガブレード……　貴方のですよね？　何故あのような所に？」

「あれは君の迎えだ。私は言ったはずだ。デジモンだとは限らないと」

「成程。なかなか粋な迎えでしたね」

秀人は、納得したように頷きながら、次の質問をインペリアルドラモン　パラディンモードにぶつけた。

「一つ気になっていたのですが、どうしてエイリアスになることが世界の異端者になることに繋がるのですか？」

「いやいや。別に、エイリアスになることが世界の異端者になることではないのだ。人間は本来、我々が考えている以上に物凄い力を持っている。ただ、生まれた世界と育った環境によって、大きく左右される。君の場合、自分でデジモンを育てていた。その場合、通常のエイリアスよりも物凄い力を発揮できるのだ。そして、力を簡単に思うように使うことが出来た。それは元々君が持っていた力だからだ」

「あっ、道理で思ったようにするするとオメガモンに進化出来たと思ったら……　確かに、ペンデュラムでオメガモンに進化出来てい

たからな……　その代償が世界の理から外れることなのか……」

インペリアルドラモン　パラディンモードの説明を聞いた秀人は、納得したように頷いた。
秀人が将生の対戦に負けた後のリターンマッチで将生に勝てたのも、オーグとメルーガがオメガモンにジョグレス進化出来るようになったのが大きな要因である。

「しかし、それは他の世界にいるテイマーに頼むことも出来たはずでは？　どうして世界の異端者にさせてまで僕にさせたのですか？
もしかして、その世界の問題はその世界の住人が解決しなければならないという決まり事があるから？」

「そのことを話す前にデジタルワールドの現状を話そう」

インペリアルドラモン　パラディンモードが言葉を言い終えた瞬間に、突如として周りの光景が変化し、黒い空間の中に青い星が無数浮かび上がった。
その星の正体に気が付いた秀人は、浮かんでいる無数の星を指差す。

「これは……地球……でしょうか？」

「その通りだ。もう少し正確に言うならば、君が住んでいる地球と同じ文明が存在する世界だ」

「……そうですか。やっぱり、平行世界とかパラレルワールドは実際に存在していたのですか。世界は本当に広いですね」

秀人は、小説や漫画、アニメ等で平行世界やパラレルワールドの存在を聞いたり見たりすることで、その存在を知ったのだが、まさ

か現実に存在するとは思ってもいなかったようだ。
その証拠に、秀人は感激している。

「そうだな。ちなみに、君のいる地球は全ての元となったデジタルワールドと平行している。さて、ここで本題に入ろう。本来ならば、地球と平行して存在しているデジタルワールドは、お互いに関わらずに独立して存在しているのだが、そうも言っていられない事態が発生したのだ」

「どういうことですか？」

インペリアルドラモン　パラディンモードの言葉に秀人は疑問の表情を浮かべながら、疑問の声を上げると、インペリアルドラモン　パラディンモードは顔を俯けながら話を再開する。

「その無数にあるデジタルワールドの一つで、古のデジタルワールドを暴虐の元に支配したと伝えられている邪神が蘇ったのだ……」

「邪神……？」

「ミレニアモンだ」

「ミレニアモン……確かそいつは……」

インペリアルドラモン　パラディンモードが告げた黒幕のデジモンの名前に聞き覚えがある秀人は少し考えると、言葉を繋げた。

「ムゲンドラモンとキメラモンのジョグレス進化で誕生するデジモン……　秋山遼に倒されたはずじゃ……」

「それは別個体のミレニアモンだ。今回のミレニアモンは、人間によって造られたムゲンドラモンとキメラモンがお互いに生き残るために融合して誕生したミレニアモンだ」

「人間によって造られた……？」

秀人が疑問の声を上げると、オーグとメルーガが秀人に助け舟を出した。

『キメラモンは、頭がグレイモンとカブテリモン、胴体がグレイモン、脚がガルルモン、尻尾がモノクロモン、翼がエンジェモンとエアドラモン、腕がデビモンとクワガーモンとスカルグレイモン、髪がメタルグレイモンで構成されている合成型デジモンで、』

『ムゲンドラモンは、胸と左腕をメタルグレイモン、メタルマメモンの武器であるサイコブラスターをムゲンキャノン、頭をアンドロモン、頭パーツとメガハンドをメガドラモン、下顎のパーツと腹部をメタルティラノモンから転用されたマシーン型デジモンだよね』

「（随分と詳しい解説だなぁ……）あっ！！　そういうことか！！」

オーグとメルーガの説明を聞いて、秀人はようやく理解した。

「そうだ。彼らは、人間たちの手によって誕生したデジモンなのだ。しかし、人間の度重なる実験と戦闘に耐えられなくなり、疲弊した彼らは融合して、人間たちを抹殺しただけでなく、その世界を滅ぼした。そして、デジタルワールドに渡って古のデジタルワールドを暴虐の元に支配したのだ」

「……何てことを……　でも、倒されたか封印されたんですよね？」

ミレニアモンを造り上げた人間たちへの怒りが込み上げる秀人だったが、ミレニアモンのその後を聞くことを忘れなかった。

「そうだ。ミレニアモンを倒すことは出来なかった。倒すことが不可能なデジモンだからだ。だから、我々はミレニアモンをデジタル空間に封印した。そこなら、脱出不可能で暴れたとしても影響は無いと判断したからだ。しかし、そのミレニアモンの封印を解いたデジモンがいた……」

「そのデジモンとは……？」

インペリアルドラモン　パラディンモードは悔しそうに話を続ける。

秀人は、最後の部分に興味を持ってインペリアルドラモン　パラディンモードに尋ねた。

「君と同じオメガモンだ」

「なっ！？」

『嘘！？』

『そんな……』

その答えに、秀人達は唖然とした。

自分たちと同じオメガモンがそのようなことをするとは考えられなかったのだ。

「いや……君ではない。黒いオメガモンなんだ」

「黒い……オメガモン？」

秀人は、安心して胸をなでおろすが、疑問が浮かび上がった。何故、黒いオメガモンが存在しているのかが秀人には解せなかったからだ。

「黒いオメガモンと言っても、勇気の紋章はあったぞ。どういうわけか歪んでいたがな。それに、グレイソードの文字が英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれてあった」

「そうですか……　それなら、どうして後を追いかけなかったのですか？　ロイヤルナイツと貴方の力があれば、幾ら色違いのオメガモンと言えども、すぐに片付くはずなのに……」

「奴の他にもデジモンがいたのだ。四大竜の一体であるメギドラモンが変化したカオスデュークモンやミレニアモン、そして、蘇った七大魔王が。そして、我々は戦いを挑んだが、黒いオメガモンの実力は我々の想像を遥かに超えていた……　奴とカオスデュークモン、ミレニアモン、蘇った七大魔王によって、ロイヤルナイツの過半数、ロードナイトモン、デュナスモン、スレイプモン、アルフォースブイドラモン、ドゥフトモン、エグザモン……そして、オメガモンが倒されたのだ……」

「何と……オメガモンまで……　それはまずい……」

更にインペリアルドラモン　パラディンモードの口から聞かされた事実に秀人は思わず頭を抱えた。

何しろ、ロイヤルナイツの過半数に加えて、自身と同じオメガモンをやられたのだ。

敵の強大さと恐ろしさをその体に叩き込まれたような錯覚を感じたのだ。

「更には、無数のデジタルワールドでは様々な事件が起きている。本来ならば、我々がやらなければならないのだが……」

「ロイヤルナイツの過半数がやられたから、人員不足というわけですね……わかります」

インペリアルドラモン　パラディンモードの気持ちが伝わったようにウンウンと頷きながら、秀人は言葉を繋げた。

「済まない。本題がだいぶ反れたな。何故、君に任せたのかと言うと……」

申し訳なさそうな表情をしながら、インペリアルドラモン　パラディンモードは黒いオメガモンの正体を話した。
その人物の名前は秀人がよく知り過ぎている人物だった。

「成程。それは僕が適任になるわけですね」

「そういうことになる……　済まないが、様々なデジタルワールドを越えて事件や戦争、問題を解決してもらえないだろうか？」

「了解しました」

「ありがとう」

秀人が了承の声を上げると、インペリアルドラモン　パラディンモードは感謝の言葉を述べる。

「さて、話すことも話したし、そろそろ、デジタルワールドに行ってもらおう」

「はい。そんじゃあ……、行きましょうか！」

秀人が気合を込めて叫ぶと、光に包まれた。
その瞬間、世界に罅が入り始めて、世界が切り替わった。

「ここが……デジタルワールド？　あっ……　御丁寧にオメガモンになっている……」

世界が切り替わった時の光の眩しさから気がついた秀人が辺りを見渡すと、そこはデジタルワールドの山のふもとだった。
しかも、自分はオメガモンになっていることにも気がついた。

「僕が住んでいる世界とかなり違うな……」

秀人は初めて生で見たデジタルワールドを目に焼きつけるように見ながらも、歩き始めた。
最初に訪れたデジタルワールドで彼がやらなければならないことはデジヴァイス０１に映し出されていた。

「機械化旅団『Ｄ－ブリガード』にいる『ダブル・エッジ』と合流して、行方不明になっているダークドラモンの行方を追え……か。ここだな」

オメガモンは目の前に存在している軍隊の養成学校と思われる建

物を見ると、両腕を胸の前で交差させると、秀人の姿に戻った。

「まずは事情を伺いますか……」

そう言うと、秀人は養成学校にもあるであろう受付に向かって足を進めた。

「奴が動き始めたか……」

光が照らしている一室で、あるデジモンがあらゆるデジタルワールドの映像を見ながら呟いた。

そのデジモンは、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンだった。

「あのオメガモン、大した脅威にならなそうだけどどうする?」

そのデジモンに、十二枚の純白の翼を生やし、四つの『ホーリーリング』を身に付けた天使―ルーチェモンが話しかけた。

「少し様子を見よう（ルーチェモンも存外、頭が悪いな……　それだから、以前スサノオモンに、いや、人間に敗北したんだよ……相手は、以前倒したとはいえ、オメガモン。しかも、それが〇〇〇とは……）」

そのデジモンは、ルーチェモンに内心では苛立ちを感じたが、それを抑えて話した。

（適当な時期に、ルーチェモンを潰す。力を隠して、こいつに従っていたがもう我慢の限界だ。ルーチェモン如き、上級攻撃など必要ない。中級攻撃、いや、初級の上程度の攻撃で十分だ）

そのデジモンは邪悪な笑みを浮かべると、再びデジタルワールドの映像を見始めた。

第3話　誕生の章　新しい日常の幕開け（後書き）

七大魔王が噛ませ犬になる可能性大ですが、よろしくお願いします。
あと、敵の正体がわかったかもしれませんが、自重して下さい。

デジモン紹介

インペリアルドラモン・パラディンモード
世代／究極体、属性／ワクチン種、データ種、フリー
種族／古代竜人型、古代聖騎士型
必殺技／オメガブレード、ハイパープロミネンス
古代より伝わるインペリアルドラモンの最終形態であり、古代竜戦士型デジモンのインペリアルドラモン（ファイターモード）が、聖騎士オメガモンのパワーを得て、パワーアップし伝説の聖騎士（パラディンモード）へと形態を変化させた姿でもある。これが古より伝わるインペリアルドラモンの最終最強形態で、古代デジタルワールドの大破壊の時に降臨し古代デジタルワールドの崩壊の危機を救ったとされる。しかし、その頃の詳細なことは一切謎であり、いずれデジモンやデジタルワールドの研究が進めば解明されるであろう。その手に持つ大剣『オメガブレード』にはデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と刻まれている。このインペリアルドラモン・パラディンモードこそ“ロイヤルナイツ”の始祖に当たる。必殺技は、巨大な剣の一振りで敵の構成データを問答無用で初期化してしまう『オメガブレード』に、全身の全砲門より一斉放射する『ハイパープロミネンス』だ。

ルーチェモン
世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／天使型、必殺技／グランドクロス

遥か古代のデジタルワールドに降臨した天使型デジモン。デジタルワールドに秩序と平和をもたらしたデジモンだが、そのすぐ後にデジタルワールドで反乱を行い、永き暗黒の時代を作り上げた。成長期でありながら完全体クラス所か究極体さえも凌駕する力を持っている。必殺技は、惑星直列“グランドクロス”のように、１０個の超光熱球を十字に放つ『グランドクロス』。その威力は三大天使の一体であるセラフィモンの必殺技『セブンヘブンズ』を凌駕し、またあらゆる災害が起きるとされている。

次回予告

機械化旅団『Ｄ－ブリガード』でコマンドラモン軍曹の元で訓練を行うことになった秀人だが、その訓練の厳しさに言葉を失う。
そして、自身と同じ『ダブル・エッジ』のテイマーに抱える問題を一緒に考え始める。
果たして、彼の抱える問題とは？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

Ｄ－ブリガードの章　やりすぎな訓練（ウォークライ）と深刻な悩み

こんな訓練で大丈夫か？　大丈夫に決まっている。

主人公&デジモン紹介（前書き）

無いよりはあったほうがいいので作りました。
参考までにどうぞ。

主人公&デジモン紹介

名前／藤本秀人

読み／ふじもとひでと

容姿／黒髪に黒い瞳をした長身の美形な青年

性別／男性

年齢／１９歳

性格／一人称は『僕』。真面目で礼儀正しい性格で、前向きで誰にも負けない熱く真っ直ぐな心を持っている。
また、優しい心を持っていて、仲間思いな一面がある。
その証拠に、オーグとメルーガをオメガモンにジョグレス進化出来るレベルにまで、一度負けた相手に勝てるようになるまでに育てた。
例え、悪人だろうと世界に悪影響を与える者だろうときちんと人の話を聞く性質で、他人の意志や考えを尊重する。

詳細／デジモンとサッカーが好きで、その中でオメガモンにこだわりを持っている青年で、父親の背中を見て、人々を救うことに強い信念と誇りを持っている。
デジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ（ウィルスバスターズ）でオメガモンを育成したテイマー。ディアボロモンに襲撃されて瀕死の重傷を負ったが、インペリアルドラモン　パラディンモードによって、オーグとメルーガと融合して半デジモン、半人間の『エイリアス』として復活した。
デジモンのいない現実世界（リアルワールド）には、世界の理から外れる異端者であるためにいることが出来ない。

インペリアルドラモン　パラディンモードに頼まれて、デジタルワールドを越える戦いに参戦している。
ウォーグレイモンとメタルガルルモン、オメガモンの3体のデジモンに進化が可能で、その時の相手と状況によって使い分けながら戦う。

名前／オーグ（種族名：ウォーグレイモン）

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／究極体

種族／竜人型

必殺技／ガイアフォース

性格／一人称は『僕』。
普段は物静かで穏やかな性格で、テイマーである秀人に忠実である。
しかし、戦いになれば熱くなるが、その上で相手のことをよく観察する冷静な一面がある。そのため、秀人からは、精神面や肉体面での師匠として信頼されている。
戦うことにこだわりを持っていて、特に一対一の決闘にこだわりが強い。
そのため、戦いの邪魔をされると、その理由によっては怒る時がある。

説明／超金属『クロンデジゾイド』の鎧を身にまとった最強の竜戦士であり、グレイモン系デジモンの究極形態である。グレイモン系デジモンに見られた巨大な姿とは違い、人型の形態をしているが、スピード、パワーとも飛躍的に向上しており、完全体デジモンの攻撃程度では倒すことは不可能である。両腕に装備している『ドラモンキラー』はドラモン系デジモンには絶大な威力を発揮するが、同時に自らを危険にさらしてしまう諸刃の剣でもある。また、『勇気の紋章』が書かれた背中に装備している外殻を１つに合わせると、最強硬度の盾『ブレイブシールド』になる。歴戦の強者の中でも真の勇者が自らの使命に目覚めたときウォーグレイモンに進化すると言われている。必殺技は、大気中に存在しているエネルギーを一点に集中させて凝縮させた後、巨大な球状に変えて相手に向かって投げ付ける超高密度の高熱エネルギー弾『ガイアフォース』だ。

詳細／現実世界（リアルワールド）にいた頃に、ディアボロモンのテイマーである桐原将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められたが、それでも秀人が大切に育てたため、それに応えようと強くなったテイマー想いなデジモンである。
秀人が大切に育てて鍛えたため、ウォーグレイモンの中でも強く、単体でディアボロモンを倒した程のずば抜けた強さを誇る。
ちなみに、オーグは目標として必殺技『ガイアフォース』で相手を倒せたことは一度もないというジンクスを破ることを掲げている。

名前／メルーガ（メタルガルルモン）

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／データ種

世代／究極体

種族／サイボーグ型

必殺技／コキュートスブレス

性格／一人称は『僕』。
オーグとは正反対のクールな性格で、テイマーである秀人に忠実である。
一歩退いた立場で相手を分析したり、デジモンのことをよく研究していることから、秀人からは軍師・参謀的なポジションとして信頼が置かれている。

説明／ほぼ全身をメタル化することでパワーアップした、ガルルモンの最終形態である。メタル化をしても持ち前の俊敏さは失っておらず、全身に隠されている無数の武器で敵を粉砕する。鼻先にある４つのレーザーサイトからは不可視のレーザーを照射しており、赤外線、Ｘ線などあらゆるセンサーを使って前方の対象物を分析することができるため、視界の届かない暗闇のなかでもメタルガルルモンから逃げることは不可能である。また、背部から伸びたアームからビーム状のウィングを放出して超高速でネット空間を飛び回ることができる。必殺技は口から全ての物を氷結させてしまう絶対零度の冷気を放つ『コキュートスブレス』だ。この攻撃を受けたものは瞬時に生命活動を停止してしまう。

詳細／オーグと同じく、現実世界（リアルワールド）にいた頃に、ディアボロモンのテイマーである桐原将生との対戦に負けて抹消（デリート）を勧められたが、それでも秀人が大切に育てたため、それに応えようと強くなったテイマー想いなデジモンである。

秀人が大切に育てて鍛えたため、同じメタルガルルモンの中でも強く、ずば抜けた強さを誇る。

名前／オメガモン

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／超究極体

種族／聖騎士型

必殺技／グレイソード、ガルルキャノン、ソード・オブ・ルイン

性格／一人称は『私』で、聖騎士型デジモンらしく口調も厳格である。

しかし、ロイヤルナイツのオメガモンのように国や主君に縛られる聖騎士ではなく、国や主君を二の次に考えており、己の護るもの（＝人々）の為に戦う聖騎士になりたいと願っている。

また、己の聖騎士道（ルール）を指針に掲げ、自分の信念を貫きながら、弱い者達の為にその力を振るうデジモンになりたいと願っている。

説明／遥か昔の『古代デジタルワールド期』に発生した極度の“デジタルクライシス”時に、2体の究極体デジモンでウィルスバスターであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが平和を願う人々の強い意志によって融合したことで誕生した聖騎士型デジモンである。そのため、究極体を越えた合体究極体とも呼ばれている。また、『

ロイヤルナイツ』の一員としても高い地名度を誇っている。右腕はメタルガルルモンの特徴を色濃く残しており、大砲やミサイルなどが装備され、左肩には『ブレイブシールド』、左腕には『グレイソード』と呼ばれる無敵の大剣を装備して、こちらはウォーグレイモンの特徴が強く現れている。剣と大砲による攻撃、『ブレイブシールド』による防御、そして回避時や飛行時に自動的に出現する背中のマントなど、2体のデジモンの特性を併せ持ち、如何なる状況下の戦いにおいても対応する事が出来て、その能力をいかんなく発揮することのできる優れたトータルバランスを持っているマルチタイプの最強の聖騎士型デジモンの一体だ。必殺技は、メタルガルルモンを模した右腕の篭手から大砲を出現させて、相手に向かって氷の砲弾を撃ち出す『ガルルキャノン』に、ウォーグレイモンを模した左腕の篭手から出現させたデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードに炎を纏わせて、相手を斬りつける『グレイソード』である。そして、グレイソードから放たれる究極乱舞『ソード・オブ・ルイン』だ。

詳細／デジタルワールドで最強の一角と謳われるデジモンである。秀人とオーグとメルーガの究極融合進化によって現れるデジモンで、オーグとメルーガの力が同種でもずば抜けているため、ロイヤルナイツに所属しているオメガモンよりも、攻撃力・防御力・パワー・スピード等の総合面で勝っているため、能力がずば抜けて高く、並みの攻撃では傷1つつけることが出来ない。
次元を越える能力を持ち、様々な世界を行き来することが出来る。他にも、秀人とオーグとメルーガの絆によって極限にまで高められた光の力等の様々な能力を有している。

道具紹介

デジヴァイス０１……秀人といった『ダブル・エッジ』やデジモンペンデュラム等で現実世界（リアルワールド）でデジモンを育成しているテイマー専用のデジヴァイス。
機能はデジモンやアイテムのデータスキャンやデータ転送だ。
キーボードによる文字入力も出来るので、作戦を声に出さずにデジモンにアップリンク（送信）する事ができる。
他のデジヴァイスとは違って腕時計のようにして装着するタイプである。
秀人等のエイリアスは、自分のデジモンの意匠が施されたデジヴァイス０１を使用している。

主人公&デジモン紹介（後書き）

次回の投稿は第４話です。
敵である黒いオメガモン等の設定は本格的に登場した後に載せようと考えています。

第４話　Ｄーブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み（前書き）

タイトルを一部変更しました。
ウォークライの意味がラグビーの試合開始前にやる踊りで、主にニュージーランド代表のラグビーチームがやっていると知ったときは思わず驚きました。
そして、今回は他作品のネタをどうしても入れたかった回なのでぼかしがかなり多いです。
他作品ネタを入れないとやっていけない自分の至らなさを許してください。

第４話　Ｄ―ブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み

「すみません、『ダブル・エッジ』の藤本秀人ですが……」

秀人は受付に行くと、両腕に付けているデジヴァイス０１を見せながら受付係にいるコマンドラモンに声を掛けた。

「あっ、『ダブル・エッジ』の方ですね。暫く、お待ちください」

コマンドラモンはそう言うと、電話の受話器を取ると、誰かに連絡を入れ始めた。

どうやら、担当のデジモンを呼び出しているみたいである。

「すみません。少し待っていてもらえませんか？」

「わかりました」

秀人は近くの椅子に腰掛けると、新聞を取りに行って、おじさんみたいに広げながら読み始めた。

「どれどれ……　『Ｄ―ブリガードの最終兵器であるダークドラモン、突然の失踪！！　黒いオメガモンと何かの関係が？』、それでこっちは……『漢の漢バンチョーレオモン、突然の失踪！！　手掛かりは一切なし！！』……これって、カオスモンフラグか？」

適当に記事を読んでいた秀人だが、有名な究極体であるダークドラモンとバンチョーレオモンの２体の失踪にあるデジモンの存在を想像してしまった。

「大変お待たせしました。私は機械化旅団『D―ブリガード』所属のコマンドラモンであります。階級は軍曹です。こんな私ですが、どうぞよろしくお願いします」

秀人はそのまま新聞を読んでいると、軍使用のアーミージャケットにヘルメット装備な黒い小柄な竜のようなデジモン―コマンドラモンが声を掛けてきた。
しかも、堂々と敬礼しながらの話しぶりだ。

「初めまして、コマンドラモン軍曹殿。私は藤本秀人。ウォーグレイモンのオーグとメタルガルルモンのメルーガのテイマーです。こちらで問題が起きていると聞き、駆けつけました。こちらこそ、お願いします」

コマンドラモンの行動を見て感化されたのか、秀人も敬礼をしながら堂々と答えた。

「それでは、秀人殿。早速ですが、我らが『D―ブリガード』の最終決戦兵器、ダークドラモンを確保するために基礎訓練に参加して下さい」

「そうですね。自分も小学生の時からサッカーをやっていましたから、基礎訓練の重要性は身に染みています（良かった～　高校のサッカー部で使っていた用具一式や好きなサッカー選手のユニフォームを持ってきていて……）」

秀人はコマンドラモンの言葉に頷きながら、自身の用意周到さに感謝していた。
ちなみに、秀人の今の服装は黒の長袖のTシャツにジーパンと運動には向かない服装である。

「それでは、グランドへ案内します。先にメニューを言いますが、グランドを３０周ランニング、その後昼食。その後、筋トレに座学です」

「了解しました」

そう言うと、秀人はグランドの近くにある体育館を借りて着替えたが、その時に不便を感じた。
何故なら、コマンドラモンの身長が１m程しかないために、更衣室があまり大きく作られていなかったのだ。
秀人は何とか着替えることは出来たが、その時に文化というか、世界の違いを感じた。
その後、秀人はグランドを３０周ランニングしたが、流石はインターハイベスト４で、スポーツ推薦が来たほどの実力を持っていたのか、もう一人いる『ダブル・エッジ』と同様にすんなりと終わった。
だが、秀人は知らなかった。
これはまだ序の口であることを。

「はい、焼肉カレーライス大盛りね」

「ありがとうございます」

ランニングを終えた秀人は、食堂で好物である焼肉カレーライス大盛りセット（焼肉カレーライス・味噌汁・サラダ）を美味しそうに食べていた。

「お前も『ダブル・エッジ』か」

秀人の隣に、銀髪に美形の青年―美藤龍之がカツ丼セット大盛り（カツ丼・味噌汁・サラダ）の乗ったトレーをテーブルに置きながら秀人に話しかけてきた。

「ああ、はい。僕は藤本秀人。ウォーグレイモンとメタルガルルモンのテイマーです。どうぞ、よろしく」

「俺は美藤龍之。スレイヤードラモンとブレイクドラモンのテイマーだ。所で、年いくつ？」

「僕は１９です」

「そうか。俺は２２だ」

秀人と龍之はお互いに自己紹介をして、握手を交わすと食事をしながら談笑を始めた。

「僕はデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯで育てて、ジョグレス進化でオメガモンに進化可能ですが、そちらは？」

「ほぉ、ペンデュラムで育てたんだ。いいな～　俺もペンデュラム買いたかったけど、その時、金なかったんだよな……　俺はデジタルワールドに来たときにインペリアルドラモンからドラコモン２体授かって大切に育てたら、一か月前に究極体に進化したんだ」

「おめでとうございます。僕は少し理由ありで……」

「知っているよ。エイリアスだろう？」

「えっ！？」

自分がエイリアスであることを出会ってまだ少ししか経っていない他人にあっさりと知られた秀人は焦りの表情を浮かべた。
しかし、龍之は両腕のライトブルーのデジヴァイス０１を見せながら話をする。

「デジヴァイス０１の色が違うから何かあるなぁ～と思ったらそういうことか。別に大丈夫だよ。でも、ジョグレスでオメガモンか……　いいな……そろそろ進化してもいい頃なのに未だに出来ないんだ、エグザモンに……」

「ジョグレス進化するにもペンデュラムでもいろいろと条件が有りましたからね……」

「そうなんだけどね。俺のデジモンなんだけどさ、いつも喧嘩しているんだ。そのせいで、ここにいる皆に迷惑をかけているんだ。エグザモンに進化するためには、仲良くさせないといけないし……
俺のやり方が悪いんだけど、どうすればいいのかわからなくて……」

「だったら、一緒に考えましょう。彼らがやる気を出す方法を」

「……ありがとう」

こうして、秀人は龍之の悩みを一緒に考えることにした。
昼休みが終わるまでずっと、彼らはスレイヤードラモンとブレイクドラモンの絆を結ぶ方法について考えていた。

昼休みが終わったあと、秀人は筋トレ、龍之は模擬戦に取り組んだ。

秀人はメニューを終えると、更に自主トレに励み、龍之はスレイヤードラモンとブレイクドラモンを仲良くさせようとするが、この日も失敗した。
後で、秀人と模擬戦をしてもらおうと龍之は考えた。

その後は二人揃って座学を受けた。
座学とは、演習や訓練などの実技に対して、講義形式の学科のことである。
秀人にとって、座学は面白い内容だったが、如何せん話が難し過ぎて何回も教官に質問をしてしまったが、逆に教官を喜ばせてしまった。
無理もないだろう。
全くの予備知識なしで物凄く専門的な事を教えてくるから、秀人が受けてきた学校の授業よりも遥かに難しかったからだ。
それでも、自分のために熱くなってくれる教官の話を聞き漏らすまいと奮闘する秀人だった。

その後、秀人と龍之は夕食を食べて、シャワーを浴びると、外にある模擬戦場に行った。
あらかじめ、上官からの許可は貰っているので問題はない。

「スレイヤードラモン、ブレイクドラモン、実体化（リアライズ）」

龍之がそう言うと、デジヴァイス01が光ると、龍之の目の前に2体のデジモン一全身を白い鎧で覆い、背中には緑色のマントを羽織った竜人型デジモンースレイヤードラモンと、背中にドリルを装備し、ドリルやショベルアームを腕のように生やしている機竜型デジモンーブレイクドラモンが姿を現した。

「なるほど……　数値は高いな……　オーグとメルーガのそれを凌

駕している……　でも、仲が悪いってどういうことだろう？」

秀人は両腕のデジヴァイス０１を使って、スレイヤードラモンとブレイクドラモンの数値を測定しながら、不仲の原因を考え始めた。

「ブレイクドラモン、今日こそ決着を付けよう。俺とお前、どっちが強いのかを」

「望むところだ。さっきも龍之に止められたからな」

「二人とも、やめろ！！」

実体化（リアライズ）されてすぐにお互いに睨み合うスレイヤードラモンとブレイクドラモンとそれを止める龍之を見て、秀人はすぐに事情を理解した。

どうやら、二人とも自分は強いと思い込んでいて、お互いを牽制しているから未だにジョグレス進化が出来ないのだ。

ジョグレス進化で一番重要なのはテイマーとデジモンの関係もそうなのだが、デジモン同士の絆なのだ。

『秀人、ここは僕とオーグに任せてくれるかな？』

「わかった。どうやら、こういう問題は僕よりもデジモン達の方が適任だからな」

メルーガの言葉を聞いた秀人は、オーグとメルーガに任せることにした。

『お～い、二人とも、一つ質問があるんだけどいいかな？』

『何だ？』

『君たちは本当に強いデジモンなのかな？』

メルーガはスレイヤードラモンとブレイクドラモンの神経を逆なでするような質問をした。
その証拠にスレイヤードラモンとブレイクドラモンは既に苛立っているのが手に取るようにわかる。

「お前、そりゃ決まっているだろ！！」

「俺たちは強い。でも、どっちが強いのかを決めているからな！！」

『ふ～ん、面倒だね、テイマーにとって君たちは』

スレイヤードラモンとブレイクドラモンの答えを聞いたメルーガは言葉を続けた。

『考えてみなよ。君たちがどちらが強いかというしょうもない争いを繰り広げてどれだけの人に迷惑をかけているのかを。君のテイマーだって、君たちの仲直りを望んでいるんだよ。それなのに、どちらが強いかというしょうもないことでいがみ合うなんて馬鹿みたいだよ。いや君たちは正真正銘の馬鹿だよ』

『お前、ふざけんなよ！！』

メルーガの言葉にスレイヤードラモンとブレイクドラモンは額に青筋を立てながら怒りの声を上げた。
メルーガは普段このようなことを言うようなデジモンではないが、龍之のために、スレイヤードラモンとブレイクドラモンのために敢

えて挑発しているのだ。

『メルーガ、そこまでにしよう。ここから先は僕にやらせてくれ。本当に強いデジモンは数値だけではないということを教えてやろう！！』

「秀人君、すまないがこいつらの頭を一度冷やしてやってくれ……」

「承知しました。行くぞ、オーグ！！」

『いつでもいいよ！！』

龍之の願いを聞いた秀人の左腕に付けているデジヴァイス０１がオレンジ色に光り輝くと、秀人はそれを胸に当てて、自身の体をデータ化しながら叫ぶ。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人はオレンジ色の光に包まれた。

オレンジ色の光が収まると、秀人はウォーグレイモンに究極進化していた。

「ウォーグレイモン！！！」

「ほぉ、エイリアスとは……ここは私がやろう。ブレイクドラモン、お前との戦いは後だ」

そう言うと、スレイヤードラモンは自身の武器である伸縮自在の剣ー『フラガラッハ』を何処からとも無く取り出しながら、ウォーグレイモンに向かって剣を向けると、エネルギーを刀身に集め始めた。

「ふん。無様な戦いだけはするなよ」

「お前には言われたくはないわ」

スレイヤードラモンとブレイクドラモンが口喧嘩をしているのを見たウォーグレイモンは顔色を一切変えることもなく、両腕に装備しているドラモンキラーを構える。

「行くぞ」

「来い」

そう言うと、先にウォーグレイモンが仕掛けてきた。
瞬時にフラガラッハにエネルギーを集めているスレイヤードラモンの目の前に移動すると、右手のドラモンキラーでスレイヤードラモンを殴り付ける。

「ドラモンキラーー！！」

「グアッ！！クッ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を受けたスレイヤードラモンは苦痛の声を上げるが、瞬時に表情を戻すと、フラガラッハをウォーグレイモンに向けて構える。
ウォーグレイモンも両腕に装備しているドラモンキラーをスレイヤ

ードラモンに向けて構える。

「今度は私の番だ！！」

今度はスレイヤードラモンの方から仕掛けてきた。
スレイヤードラモンはフラガラッハを構えながら、ウォーグレイモンに向かって突進すると、回転体術を使用しながら、それによって生まれた加速を使いウォーグレイモンの頭部に向かって右手に持っているフラガラッハを振り下ろした。

「喰らえ！！　壱の型！天竜斬波！！！！」

「フン！！」

スレイヤードラモンの天竜斬波をウォーグレイモンは難なく右に避けると、スレイヤードラモンの顔面に向かって鋭い右ハイキックを繰り出す。

「クッ！！」

「惜しいな……」

スレイヤードラモンは左手に持っているフラガラッハでウォーグレイモンの右ハイキックを何とか防御した。
それを見たウォーグレイモンは少し悔しそうな声を漏らした。

「其処だ！！」

「そう来ると思ったよ！！」

その隙にスレイヤードラモンは空いている右手に持っているフラガラッハをウォーグレイモンの左脇腹に向かって突き出すが、ウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーを振り上げると、スレイヤードラモンの持っていたフラガラッハを弾き飛ばした。フラガラッハはスレイヤードラモンとウォーグレイモンのいる場所よりも遠くの地面に突き刺さった。

「其処までだ。秀人殿、スレイヤードラモン、お疲れ様」

「むむむ……　見事な戦いぶりだった」

「いえいえ。長引けば、僕も危なかったよ」

いつの間にか、模擬戦を見ていたコマンドラモン軍曹がそう告げると、ウォーグレイモンは一息ついて、スレイヤードラモンはフラガラッハを取りに行って、回収した。
その後で、ウォーグレイモンとスレイヤードラモンは仲良く会話を始めた。
どうやら、拳と拳を交わしあった友情が出来たみたいだ。

「すげぇ……　俺、いつも引き分けがやっとなんだよな……」

「これで分かっただろう。つまらない争いを止めよう」

ウォーグレイモンの実力を見て驚いているブレイクドラモンに龍之は言葉を掛けた。

「ふっ、ふん!!　俺なら勝てるもんね!!」

「どうだか……」

しかし、虚勢を張るブレイクドラモンを見て、龍之は呆れ果ててしまった。
それを聞いたスレイヤードラモンの表情が自然と厳しい物になった。
『今度は僕が相手になるけど？』
「ウォーグレイモン！？」
ブレイクドラモンの言葉を聞いたメルーガがブレイクドラモンと模擬戦をするみたいだ。
秀人の事情を知らないスレイヤードラモンは隣で驚いている。
「上等だ。さっさと来い！！」
「あっ、あの……　軍曹殿……　止めなくていいのですか？」
「問題ない。むしろ、好都合だ」
龍之は止めようとコマンドラモン軍曹に声を掛けるが、コマンドラモン軍曹は全く気にしなかった。
何か考えがあるのだろう。
「メルーガ、いいのか？　君らしくないよ」
『悪いね、秀人。オーグが頑張っているのに僕が怠けるなんて出来る訳がないじゃないか』
『秀人、こうなったメルーガはディアボロモンでも止められないよ』

どうやら、メルーガはオーグの戦いを見て、ハートに炎がついたみたいだ。
恐らく、彼のクールな瞳には紅蓮の炎が燃え滾っていることだろう。
「ウォーグレイモン！！！　スライドエヴォリューーーション！！」
ウォーグレイモンが叫ぶと同時にウォーグレイモンの体を青色の光が覆うと、ウォーグレイモンはメタルガルルモンへと姿を変えた。
「メタルガルルモン！！」
メタルガルルモンとブレイクドラモンはお互いに睨み合い、作戦を立てながら相手の隙を伺っている。
先に仕掛けてきたのはブレイクドラモンだった。
「デストロイドラッシュ！！！」
「そんな単調な攻撃！！」
ブレイクドラモンは左右のショベルアームをメタルガルルモンに向かって超高速で繰り返し叩きつけようとするが、メタルガルルモンは避けると、ブレイクドラモンの背後に回り込むと、三連装のミサイルランチャーから次々とミサイルを放った。
「クッ！！」
ブレイクドラモンは、防御をすることが出来ずに次々とミサイルを喰らった。
「やってくれるじゃねぇか……　インフィニティーボーリング！！

！」

後ろを向いてメタルガルルモンを睨みつけたブレイクドラモンは、体中のドリルを全稼動させると、メタルガルルモンに向けて放った。

「ガルルバースト！！」

メタルガルルモンは、空中に浮かび上がることで回避すると、全身に装備しているミサイルの照準をブレイクドラモンの武器のみに向けて、ミサイルを一斉に発射した。

「ぐあっ！！」

「おい！！　技名がメタルガルルモンＸの技とがぶっているんだけど！？」

武器が破壊されて戦闘不能になるブレイクドラモンを見ながら、龍之はメタな突っ込みをした。

「仕方ないだろう。だいだい原理は一緒だから……　そうすると、オーグもガイアフォースＺＥＲＯやポセイドンフォースが出来ておかしくないことになるぞ？」

「そういう問題じゃないだろう！！！　それじゃＸバージョンが涙目になるだろう！！！」

面倒くさそうな表情で話すメタルガルルモンに龍之は再度メタな突っ込みをする。

「悔しいよ……　心の底から悔しいよ……」

「同じ『ダブル・エッジ』に負けるなんて……　しかも、エイリアスで同じロイヤルナイツの一員に……」

　メタルガルルモンと龍之が言い争いをしている時にスレイヤードラモンとブレイクドラモンはすすり泣いていた。
今まで幾多の戦いをくぐり抜けて来てここまで来たのに、つまらないことでいがみあって強くなることを見失っていたのだ。

「強くなりたいか？」

　すすり泣いているスレイヤードラモンとブレイクドラモンの目の前にコマンドラモン軍曹が立つと、コマンドラモン軍曹が言った。

「勿論です！！　エグザモンにジョグレス進化出来るように強くなりたいです！！　私たちにもプライドがあるんです！！」

「本気で強くなりたいんだな？　ジョグレス進化出来るようになりたいんだな？」

「はい。このまま負けっぱなしじゃ終われません！！　エグザモンにジョグレス進化出来るようになりたいです！！　彼らを見返してやりたいです！！！」

　すすり泣きながらもスレイヤードラモンとブレイクドラモンは決意の声を上げた。
それを聞いたコマンドラモン軍曹はスレイヤードラモンとブレイクドラモンの肩に手を置いた。

「それなら、私が鍛えてやろう」

『ありがとうございます！！！』

「どうやら、君のおかげで少しは変われそうだね」

「いやいや。そんなことは……」

龍之はメルーガに感謝すると、頭を下げたが、メルーガは謙遜している。

しかし、彼は龍之達が後の戦いに強力な味方になることにこの時は気がつかなかった。

「秀人殿、先ほどはありがとう。私でも出来なかったことを成し遂げるとは……」

「いえいえ。自分は出来ることを精一杯やっただけであります！！！」

コマンドラモン軍曹の教官室で、コマンドラモン軍曹と秀人は話をしていた。

「二日後、君はあるデジモンと戦ってもらう」

「はい！？」

「実は私を以前助けてくれた恩人のデジモンに君のことを伝えたら、ぜひ戦ってみたいと喜んでいた。なので、彼と模擬戦だ。場所はここから近くにある草原だ」

「ところでそのデジモンは一体誰なんですか……？」

コマンドラモン軍曹は秀人に明日の予定を告げると、秀人はそのデジモンが一体誰なのか首を傾げた。

「ああ。彼は君と同じ究極体だ。君の経験と実力を上げるには最適だろう」

そう言いながら、コマンドラモン軍曹はそのデジモンの写真を見せた。

「あははは……　オーグ、明日は君の日だよ……」

『フフフ……　彼とは一度戦ってみたかったんだよね……』

『オーグ、良かったね。また一人、友達が出来るね』

秀人とオーグとメルーガは、口々にそのデジモンの写真を見て、頷いた。

二日後、コマンドラモン軍曹は龍之とスレイヤードラモンのために特別訓練の教導をしていた。

ちなみに、秀人はコマンドラモン軍曹の命の恩人であるデジモンと戦うために近くにある草原に向かって、今頃は笑いながら戦っているだろう。

「……トロトロ走るんじゃない！　このクズ共っ！！全く何たる様

だ！！　貴様等は最低のウジ虫だ！！　ダニだ！！　この世界で、最も下劣な生き物だ！！　」

野戦服姿で丸太を担いでいる龍之とスレイヤードラモンにコマンドラモン軍曹は次々と罵倒の言葉を浴びせる。
しかも、時おり、メモ帳に目を落としながら『教育上不適切な表現』かつ『放送規制に確実に引っかかる言葉』を機関銃のように連発する。

「いいか！！　よく聞けウジ虫共！！　私の楽しみは貴様等が苦しむところを見る事だ！！　爺の●●●●みたいにひいひい言いおって、みっともないと思わんのか！！！　文句があるならこの場で●●●●をこいて●●●●してみせろっ！！　●●●●持ちの●●●●の腐った物を！！　●●垂れ流すんじゃないッ！！糞共ッ！！」

コマンドラモン軍曹も龍之が着ている野戦服を着て、『アメリカ海兵隊式ののしり手帳』と書かれたメモ帳を片手に龍之とスレイヤードラモンと一緒に併走している。
本当はこの場にブレイクドラモンもいるはずなのだが、体の構造上、この訓練が出来ないので別メニューをしているが、今頃本人は龍之とスレイヤードラモンと同じ思いをしているだろう。

「ぐはぁ！！　もう駄目だ……」

その時、コマンドラモン軍曹の目の前で龍之が石につまずいたのか派手に転倒して、丸太を放り出して地面に身を投げ出す。
コマンドラモン軍曹は龍之に向かって歩み寄ると、右足で顔面を思いっきり踏みつけた。

「どうした龍之殿。もうギブアップか？　もう走れないのか？　秀

人殿と違って、貴方は本当にクズだな。秀人殿はジョグレス進化出来るのに貴方は出来ない。恥ずかしくないのか？」

「ぜぇ……ぜぇ……」

「しょせん貴方の根性などそんなものだ。だから、貴方のスレイヤードラモンとブレイクドラモンは昨日敗北したのだ」

「おい……流石に言っていいことと悪いことくらいあるだろう！！！」

涙目で殴りかかってきた龍之を見たコマンドラモン軍曹は素早く対処した。

どこからともなくＭ１６を取り出すと、トリガーを押した。

すると、そこからゴム製の砲弾が飛び出して、龍之の胴体に直撃した。

「ふん。何度でも言ってやろう。貴方のスレイヤードラモンとブレイクドラモンは弱い。分かったらとっとと走れっ！　貴方には私に楯突いた褒美として丸太を担いでまたプラス１０周だっ！！」

「ちくしょお……ちくしょおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

龍之はまた丸太を担ぐと、必死の形相で坂道を駆け上がっていった。

コマンドラモン軍曹は厳しい目つきで龍之とスレイヤードラモンを一瞥すると、医務官であるコマンドラモンの所へ歩いてきた。

「あっ、あの……軍曹殿？」

「何でありましょうか？　医務官殿？」

「いっ、医学的に見ても貴方の訓練が、正しいとは思えないので止めたいのですが……」

「確かに医学的に見るとそうなのかもしれません。しかし、現実世界（ルド）（リアルワー）の人間の軍人はこのようなことをしているのを知りました。私もこの訓練は未知数な部分が多いと思いますが、彼らの問題は技術・能力以前です。もし、彼らがこの訓練を乗り越えると、自信と気迫、それに一緒に乗り越えたという連帯感は身につくはずです」

胸を張って言うコマンドラモン軍曹を見て、諦めの境地に達したコマンドラモン医務官はコマンドラモン軍曹に念を押した。
ちなみに、コマンドラモンは自室にあるパソコンのインターネットの某動画サイトのとあるアニメを見て、この訓練をやることを決めたらしい。
そして、その時に、とある登場人物の声と自分の声が何だか同じに聞こえることに違和感を感じたらしい。

「そうですか……しかし、いざとなればドクターストップを出しますからわかりましたね？」

「了解しました」

敬礼をして答えるコマンドラモン軍曹の元に全身を戦闘スーツで身を包み、ゴーグルのような物で目を覆い、両肩には刃物のような物を装備しているサイボーグ型デジモンーシールズドラモン食堂長が来た。

「コマンドラモン軍曹、食堂の皆様で龍之殿とスレイヤードラモンのためにおにぎりと豚汁を作りました。そろそろお腹もすいた頃ですし、どうでしょうか？」

「そうですか。ん～どうしようか……」

「どうしましたか？　お昼ご飯はもう既に済ませましたか？」

「いや、そうではありません。今、上等な食事を与えて良いのだろうかと、考えていて……」

「わざわざ早起きして作ったのにいらないなんて言わないでください……」

「そうですね。失礼しました」

シールズドラモン食堂長に頭を下げたコマンドラモン軍曹は走っている龍之とスレイヤードラモンの方に顔を向けると、声を上げた。

「喜べ！！！　糞共！！！　食堂長が食事を持ってきた！！三十三時間ぶりの食事だぞ！！終わった者から食べてよし！！」

コマンドラモン軍曹の言葉を聞いた龍之とスレイヤードラモンは一度立ち止まると、目をギラリと輝かせて、いきなり猛獣のような猛スパートをかけた。

『さっ、三十三時間！？』

同じくコマンドラモン軍曹の言葉を聞いたコマンドラモン医務官とシールズドラモン食堂長は呆然となった。

「いいか！　今のお前たちは人間以下だ！　名も無き●●●●だ！　私の訓練に生き残れたその時にお前たちは初めて人間となる！　それまで貴様らは、●●●●同然の存在だ！」

食事を終えて休憩を挟んだ後に、訓練は再開された。
次は６０センチ程度の棒を両手で持ちながら背面ほふく前進をする訓練だ。
ただし、頭上にはマス目のように張り巡らされた有刺鉄線があるので、頭上に気を付けなければならない。
ここからは、龍之とスレイヤードラモンの体の大きさがあるので別々になっている。

「私はお前たちを憎み、軽蔑している。私の仕事はお前たちの中から、●●●野郎を見つけ出して、切り捨てることだ！　勝利の足を引っ張る●●●野郎は容赦しないから覚えておけ！」

その後は、コマンドラモン軍曹特製の龍之は１０メートルの、スレイヤードラモンは２０メートルの（この作品のスレイヤードラモンはだいだいウォーグレイモンと同じくらいの大きさ）塀を乗り越える訓練だ。
塀と言っても足をかける場所も手で掴む場所もあるので、普通に頑張れば出来るレベルなので、これはするすると出来た。

「笑うことも泣くことも許されない！　お前は人間ではない！　殺戮のためのマシーンだ！！殺せなければ存在する価値は無い！　隠れて●●●てるのがお似合いの●●●野郎に過ぎない！」

次は龍之とスレイヤードラモンにコマンドラモン軍曹達が普通に使っている銃剣を持たせて、藁人形に突き刺す訓練が待っていた。ちなみに、藁人形の顔写真は何故かミレニアモンだった。

「わざと負けて目立ちたいのか！　痛い振りして同情を引きたいのか！　この負け犬根性のゴミ溜め野郎どもが！　父親の●●●たシーツのシミになって、母親の●●●に残ったのがお前たちだ！」

ミレニアモンがいい感じで穴だらけになったところで、次は棍棒でどつき合いの訓練だ。

なお、棍棒の先にはクッションを入れてあるので致命傷にはならない。

でも、これが結構痛いのだ。

龍之もスレイヤードラモンも、普段のことを忘れたかのようにただ生き残るために目をぎらつかせながら相手を叩きのめそうとする。

しかし、スレイヤードラモンが自身の必殺技の原理を利用した攻撃を繰り出そうとしたので、コマンドラモン軍曹のＭ１６の餌食になってしまい、一時中断のハプニングもあった。

鈍い音が響き渡る中、それでも誰一人それをやめようとはしない。

「とろとろ走るなこの●●●が！　泣き言を言うのならば、この場で●●●流し込むぞ！！　本当に与えられた職務も課題もロクにクリア出来ない人間以下の●●●だ！！」

最後はフルマラソン、もちろん４２，１９５ｋｍだ。

ちなみに、完走しないと今日はご飯が出ない事になっているのか、龍之とスレイヤードラモンはかなり必死に走っている。

「お前たちの彼女はそのデジヴァイスと武器と仲間だけだ！　ケツ

がデカいだけの●●●は、お前たちには必要ない！！　そのボールを熟れた●●●だと思って、精一杯●●●してやれ！」

フルマラソンはコマンドラモン軍曹の予想よりも早い夕方くらいに終わった。
なので、次は龍之とスレイヤードラモンにあらかじめ泥だらけにしてもらったデジヴァイス０１とフラガラッハを磨かせる。

「フフフ……とっても綺麗だよ、イヤード、ピカピカにしてあげるよ、クドラ……」

龍之は両腕に付けていたデジヴァイス０１を愛情を込めながら磨いている。
ちなみに、龍之の右腕のデジヴァイス０１からスレイヤードラモン、左腕のデジヴァイス０１からブレイクドラモンを召喚している。
ちなみに、秀人のオーグとメルーガに対抗したのか、龍之はスレイヤードラモンのことをイヤード、ブレイクドラモンのことをクドラを呼ぶことを決めたみたいだ。

「フフフ……最高だよ、龍之……」

一方のスレイヤードラモンも自身の武器であるフラガラッハを愛情を込めながら磨いている。
しかも、フラガラッハに自身のテイマーの名前を付けている状況だ。

「軍曹殿、ただ今戻りました」

「おお、戻ったか。お疲れ様、秀人殿」

龍之とスレイヤードラモン、ブレイクドラモンの訓練終了を宣言してから十分後、秀人が究極融合進化したオメガモンが戻ってきた。オメガモンはコマンドラモン軍曹の目の前にゆっくりと降り立つと、頭を垂れて今日の出来事を報告した。

「軍曹殿、報告します。私、藤本秀人は●●●●●●●—●●●●●と戦いましたが、その途中で黒いオメガモンが放った刺客であろう、2体のデジモン、ムルムクスモンとオニスモンが乱入したため、彼と協力してそのデジモン達を撃破しました」

「うむ、報告を受理した。何か言いたいことがあれば何でも聞くぞ」

「はい。今日は合計で3体の究極体デジモンと連戦で戦いましたが、体力の重要性と自分の経験不足をその身を持って痛感しました。次の戦いに向けて、これらの問題を少しでも解決できるように精進します」

オメガモンが宣言すると、コマンドラモン軍曹は満足そうな表情をしながら、秀人に話を始めた。

「そうだ。聞くのも嫌かもしれないが、軍隊、ましてや戦争において、体力は最も重要だ。とある現実世界（リアルワールド）では、君と互角に渡り合える可能性を持った女性が基礎鍛錬を怠って一度潰れたという間抜けな話もあるからな。しかし、彼女はリハビリを経て復活したが、私には彼女が馬鹿としか見えない。ちなみに、今日、龍之殿とスレイヤードラモン殿がやった訓練を後日君もやってもらおう」

「承知しました。しかし、軍曹殿がおっしゃられた女性とは一度会って戦ってみたいです。最も、負けるつもりはさらさらございませ

んが」

「ははは……　君はなかなかのビッグマウスを持っているようだな」

「ビッグマウスではございません。私はただ、出来ることは出来る、出来ないことは出来ないと胸を張って言えるような聖騎士を目指しているだけです。では、これにて失礼します」

「そうか。しっかり休むんだぞ」

言い終えたオメガモンは、一礼してマントを翻すと、自分の自室に戻っていった。

その日の夜空は、まるで秀人と龍之の頑張りを褒め称えているような星空だった。

ちなみに、後日秀人も龍之達が受けた訓練を受けたが、本人曰く、“凄い疲れたが、何だか自信がついたような気がする。”とのことだったらしい。

第４話　Ｄ－ブリガードの章　やりすぎな訓練とテイマーの悩み（後書き）

登場デジモン紹介

コマンドラモン
世代／成長期　属性／ウィルス種　種族／サイボーグ型
必殺技／Ｍ１６アサシン、ＤＣＤボム
機械化旅団「Ｄ－ブリガード」の歩兵デジモン。「Ｄ－ブリガード」は竜型サイボーグデジモンで構成された機械化旅団であり、決して表沙汰になることのないミッションに投入される特殊部隊である。コマンドラモンの体表は特殊テクスチャー加工が施してあり、周囲の色をリアルタイムに判断し、あらゆる迷彩パターンを表示することが可能となっている。そのため、ほとんどの「目標」はコマンドラモンの存在に気が付くことなく葬られることが多いという。必殺技は携帯したアサルトライフルから放つ『Ｍ１６アサシン』と小型爆弾『ＤＣＤボム』。

シールズドラモン
世代／成熟期　属性／ウィルス種　種族／サイボーグ型
コマンドラモン１００体をふるいに掛ける特殊選抜試験「セレクション－Ｄ」を合格した１体のみシールズドラモンへ進化することが出来るといわれている。目視で捕らえることが不可能に近い速度での移動が可能であり、迷彩機能や銃などは装備せず、体術のみで「目標」をしとめる能力を持つ。主に暗殺を任務としている。必殺技は、極限まで研いだナイフの一撃『デスビハインド』と、一瞬のうちに相手の急所を計測する『スカウターモノアイ』。

テイマーとパートナーデジモンの紹介は溜まったらしようと思います。

次回予告

龍之達が訓練を行なっている頃、秀人はあるデジモンと戦っていた。
そして、戦いの最中に思わぬデジモンの乱入が入る。
漢と漢の真剣勝負を邪魔をされたことに２大究極体デジモンの怒りが爆発する！！

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！

皆さんも漢と漢の真剣勝負の邪魔だけはしないように気を付けましょう。

第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！（前書き）

何だか小説の話数を重ねるごとに文字数が減っていくのと文章の書き方が単調になってしまう気が……
細かく書きすぎなのか……
それでも頑張ります。

第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！

美藤龍之と彼のパートナーデジモンであるスレイヤードラモンとブレイクドラモンがコマンドラモン軍曹の訓練を受けている頃、秀人は左腕のデジヴァイス０１を頼りにコマンドラモン軍曹からあらかじめ言われた草原に向かって歩いていた。

『秀人、本当にこの道で合っているの？　草原は見えないけど……』

「ああ。確か、この辺りのはずなんだけどな……」

『でも、草原がこんな山奥にあるのかな？』

「そうだよな～　一体どこにあるのか……　あった。でも、まだ彼は来ていないな」

秀人とオーグとメルーガが会話をしていると、目的地である草原にたどり着いた。
秀人は足を踏み入れると、軽く伸びをして大きく息を吸って吐いた。

「よし、まだ彼も来ていないことだし、戦いの前に、まずは準備体操をしますか」

秀人は左腕に付けているデジヴァイス０１のキーボードを叩いて某動画サイトにアクセスすると、ラジオ体操の項目を検索した。
そして、目的の動画を見つけて再生を開始すると、音楽に合わせながら体操を始めた。

『そう言えば、僕たちもペンデュラムの中でラジオ体操していたよ』

「えっ、そうなの！？」

『うん。デジモンには元々そういうの無いからね。秀人が小学生の夏休みでペンデュラムを一緒に持っていくから僕たちもやっていたんだ。デジモンはよく凄いと言われるけど、人間も凄いんじゃないかな？』

「まぁね……　所詮は、人間もデジモンも根本は一緒だからね……」

秀人は、オーグとメルーガと会話をしながら音楽に合わせて体を動かす。

四足歩行であるメルーガがどのようにラジオ体操をするのかは読者のご想像にお任せしよう。

秀人がラジオ体操を終えて、ジョギングをしようかと思っていた時、黒の体に黒い頭部に胸当てを装備し、両手に黒い手甲を装備し、そして、金色の髪を備えた竜人型デジモンーブラックウォーグレイモンが草原に足を踏み入れた。

「遅れてすまない。俺はブラックウォーグレイモン。話はコマンドラモンから聞いている。今日は思う存分、俺の相手になってもらおう」

ブラックウォーグレイモンは、秀人に挨拶をした。

ブラックウォーグレイモンの目が笑っていることから、よほど強い相手と戦いたかったのだろう。

「初めまして、ブラックウォーグレイモン。僕は藤本秀人です。ウォーグレイモンとメタルガルルモンと融合したエイリアスです。今日はご迷惑をおかけしますが、何卒よろしくお願いします」

秀人もブラックウォーグレイモンに丁寧に挨拶をした。
何故、丁寧に挨拶をしているのかと言うと、例え相手が誰であっても礼を欠く事はあってはならないと秀人は考えているからだ。

「まず最初に言っておこう。俺は“あのブラックウォーグレイモン”ではない。ブラックアグモンから進化したブラックウォーグレイモンだ。あと、名前が長いからブラックと呼んでくれ」

「それじゃ、始めますか！！　オーグ、行くぞ！！」

『おう！！』

秀人は左腕に付けているデジヴァイス０１を胸に当てて、自身の体をデータ化しながら叫ぶ。
ブラックウォーグレイモンは初めて見る現象なのか、秀人をまじまじと見つめている。

＞＞ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「マトリックスエボリューション！！」

左腕のデジヴァイス０１から電子音声が響くと同時に、秀人はオレンジ色の光に包まれると、ウォーグレイモンに究極進化した。

「ウォーグレイモン！！！」

「コマンドラモンから聞いて半信半疑だったが、俺と同じウォーグレイモンに進化出来るとは……」

「嫌なら変えるよ。メタルガルルモンでも君とは十分に渡り合えるけど」

「問題ない。自分で育てたんだろう？　胸張って進化してもいいのでは？」

ウォーグレイモンの姿を見たブラックウォーグレイモンは、面白そうにウォーグレイモンを見つめながら、感想を述べた。彼は、今まで自分と同じウォーグレイモンを見たことがなかったのだ。

「兎に角、始めよう。俺の闘争本能が強いデジモンとの戦いを欲しているんだ」

「ははは……そうか。　お手柔らかに」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンはお互いに相手を睨みつけながら、両腕に装備しているドラモンキラーを構える。

「ウオォォォォーーーー！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンは同時に突撃を開始すると、同時に相手に向かって右手に装備しているドラモンキラーを突き出した。

『ドラモンキラーーー！！！！』

二つのドラモンキラーが激突しあった瞬間に、凄まじい衝撃波が

爆裂した。
それを見た秀人はウォーグレイモンの内心で驚愕していたのは言うまでもないだろう。
究極体デジモンが規格外だとよく言われる理由をその身を持って経験したからである。

「うぉ！？（なっ、何て威力なんだ！！）」

「もらった！！」

その衝撃波の威力に耐え切れなかったウォーグレイモンは僅かに体のバランスを崩してしまい、一方で衝撃波の威力を耐え切ったブラックウォーグレイモンはその隙を逃さずにウォーグレイモンの胴体に向かって右回し蹴りを撃ち込む。

「フンッ！！」

「クッ！！」

ウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンの放った右回し蹴りを何とか左腕に装備しているドラモンキラーで防いだ。

「ムン！！」

「クッ！！」

右足を戻したブラックウォーグレイモンが今度は渾身の力を込めて突き出した右腕に装備しているドラモンキラーをウォーグレイモンが何とか避けると、今度はウォーグレイモンが右ハイキックを放とうとする。

しかし、それを見たブラックウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーで防ぐことで、ウォーグレイモンの右ハイキックを防御した

（やはり、パワーと経験の面で考えると不利だな……　それなら、正々堂々とぶつかりあって、精一杯やってみよう！！）

一連の行動を見て、自身が不利だということを認識して決意を固めた秀人ことウォーグレイモンは両足に力を込めて跳躍すると、ブラックウォーグレイモンの真上を飛びこしてブラックウォーグレイモンの背後へと着地する。
余談だが、進化しても秀人とオーグ、メルーガの人格はきちんと存在しているので、彼らの絆は時として強大な力を生むこともある。

「何？」

自身の背後に着地したウォーグレイモンに気がついて背後を振り返ったブラックウォーグレイモンの顔の左側に向かってウォーグレイモンは右ハイキックを食らわした。

「ハァ！！」

「グォッ！？」

ウォーグレイモンの右ハイキックを喰らったブラックウォーグレイモンはその威力に思わず後ずさった。

「ダァ！！」

「グゥ！！」

続けてウォーグレイモンはブラックウォーグレイモンの顔の右側に向かって先程の右ハイキックよりも鋭い左ハイキックを繰り出した。
ブラックウォーグレイモンは、その攻撃に耐え切れずに吹き飛ばされて地面に叩きつけられた。
その衝撃はウォーグレイモンにも届く程凄い衝撃だった。

「ウオオオオーーーー！！！　ブラックトルネーーーーード！！！」

立ち上がったブラックウォーグレイモンは両腕のドラモンキラーを頭上で合わせて高速回転しながら、自身の体を漆黒の竜巻に変えると、ウォーグレイモンに向かって突撃する。

「クッ！！　ブレイブトルネーーード！！！」

それを見たウォーグレイモンも両腕のドラモンキラーを頭上で合わせて高速回転しながら、自身の体を黄金の竜巻に変えると、ブラックウォーグレイモンに向かって突撃する。

「ウオォォォォーーーー！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！」

二つの竜巻は空中で凄まじい速度で回転しながら真正面から激突すると、お互いを貫こうと更に力を込めた。
すると、竜巻の速度は上がり、大きさも自然と大きくなっていく。

「グワァ！！」

「グォ！！」

ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンの力は拮抗しているのか、二つの竜巻は消滅すると、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンは地面に向かって真っ逆さまに墜落した。

「クッ！！」

「ガハァ！！」

ブラックウォーグレイモンは落ちていく途中で姿勢を変えたおかげで着地に成功したが、一方のウォーグレイモンは衝撃が大きかったのかそのような行動を取ることが出来ず、地面に真っ逆さまに墜落して物凄い衝撃を体全体に感じた。

「もらった！！」

「グワァァァァァァッ！！」

ブラックウォーグレイモンは衝撃のダメージで体が痛むことを気にせずに何とか立ち上がろうとしているウォーグレイモンの目の前に移動した。
それと同時に、左手でウォーグレイモンの首を掴むと、力を込めて絞め上げる。
ウォーグレイモンはそれによって苦痛の声を辺りに響かせる。

「喰らえ！！」

「なっ！？」

ブラックウォーグレイモンに首を絞められていることで両腕をだらんと下げていたウォーグレイモンは、両腕を上に揚げると両手の間にバスケットボールくらいの大きさの黄金のエネルギー球を作り出した。
そして、ウォーグレイモンはそのままエネルギー球をブラックウォーグレイモンの顔面に向けて振り下ろした。
今の行動は完全に予測できなかったブラックウォーグレイモンはウォーグレイモンを掴んでいた左手をすぐに離すと、エネルギー球を何とか避けた。

「ムッ！！」

「ウオォォォーーーー！！！ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンの次の行動を見極めていたブラックウォーグレイモンに向かって、ウォーグレイモンは右腕のドラモンギラーを突き出した。

「クッ！！」

その攻撃に対してブラックウォーグレイモンは瞬時にかわせないと判断すると、左腕のドラモンキラーでウォーグレイモンのドラモンキラーを受け止める。

「そこだ！！！」

「グウッ！！」

ウォーグレイモンの胴体をブラックウォーグレイモンは左回し蹴

りで蹴り飛ばすと、ウォーグレイモンは僅かに後方に下がってしまった。
ブラックウォーグレイモンは両手の間にエネルギー弾を作り上げると、連続でウォーグレイモンに向かって撃ち出した。

「ウォーブラスターー！！！」

「ムムッ！！　ブレイブシールド！！！」

迫り来るウォーブラスターに対して、ウォーグレイモンは背に在るブレイブシールドを両手に装着し、前方に向かって合わせることでウォーブラスターを防いだ。
そして、ウォーグレイモンはエネルギー弾が止むと同時に、ブレイブシールドを再び二つに分けて背中に戻した瞬間に、ブラックウォーグレイモンがウォーグレイモンの目の前に姿を現す。

「なっ！？」

「ドラモンキラーー！！」

ウォーグレイモンの胴体に向かって、ブラックウォーグレイモンは右腕のドラモンキラーを突き出した。

「ガハッ！！」

それによってウォーグレイモンの胸当てを傷つけられたが、ウォーグレイモンはダメージを気にせず、右腕のドラモンキラーを突き出した。

「ドラモンキラーーー！！！」

「グアアッ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を食らったブラックウォーグレイモンは、先ほどのウォーグレイモンと同様に後方へと吹き飛んだ。しかし、瞬時に空中で体勢を整えると、上手に地面に着地した。それと同時に傷ついた胸当てを見るとすぐに、ウォーグレイモンの方に顔を移した。

「やるものだな。流石はコマンドラモンが言っていただけある」

「そっちこそ、冗談抜きに強いよ。でも、こんなもんじゃないだろう？　こっちはまだまだ行けるぞ！！」

「それなら、もっと楽しませてもらうぞ！！！」

そう言うと、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンはドラモンキラーを構えながら同時に突撃を開始した。

『ドラモンキラーーー！！！！！』

2体のウォーグレイモンのドラモンキラーが突き出され、二つのドラモンキラーが激突しあった瞬間に、凄まじい衝撃波が発生した。今度は衝撃波に耐えきったウォーグレイモンを見て、目を細めたブラックウォーグレイモンは、ウォーグレイモンの胴体に向かって左回し蹴りを放った。

「さっきと同じ手は効かないぞ！！」

「お前、頭悪いな。最後まで何が起こるのかわからないのが人生だ

ろう？」

ウォーグレイモンは右腕に装備しているドラモンキラーで防いだが、ブラックウォーグレイモンはいつの間にか両手の間に作り上げていたエネルギー弾をウォーグレイモンの頭部に向かって、両腕を振り下ろすことで食らわせた。

「ガハッ！！　まだまだ！！」

「チィッ！！」

ウォーグレイモンは頭に走った苦痛によって苦しげな声を上げたが、ブラックウォーグレイモンの胸当てに向かって右ミドルキックを撃ち込み、ブラックウォーグレイモンとの距離を開くことに成功した。

「そろそろ決着をつけるとするか」

「望むところだ！！」

そう言うとブラックウォーグレイモンは、負の力を両手の間に集中させ始める。
それと同時にウォーグレイモンも大気中に存在しているエネルギーを両手の間に集中させ始めると、ブラックウォーグレイモンは赤く光る巨大なエネルギー球を、ウォーグレイモンはオレンジ色に輝く巨大なエネルギー球を作り出し、同時に相手に向かって投げ付ける。

『ガイア！！　フォーーーーースッ！！！』

負の力を凝縮したガイアフォースと、大気中のエネルギーを凝縮

したガイアフォースは真正面から激突し合い、互いを撃ち破ろうとぶつかり合うが、同時に爆発を起こし、投げ付けたブラックウォーグレイモンとウォーグレイモンに同等に衝撃波が襲ってくる。
しかし、二体は向かって来る衝撃波などには一切構わずに飛び出し、爆煙を吹き散らしながら、黄金と漆黒の竜巻になってぶつかり合う。

「ブラックトルネーーードッ！！」

「ブレイブトルネーーードッ！！」

黄金と漆黒の竜巻はお互いにぶつかり合うと、元の姿であるウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンに戻ると、地面に着地した。
必殺技のぶつかり合いでは決着がつかなかったみたいだ。

『ドラモンキラーーーーー！！！！！！』

ウォーグレイモンは紅蓮の炎を纏わせたドラモンキラーを、ブラックウォーグレイモンは暗黒の炎を纏わせたドラモンキラーをそれぞれ同時に突き出そうとしたその時だった。

「フハハハ！！！　見つけたぞ！！！」

「何！？」

「誰だ！！！」

突然、上空から高笑いが聞こえてきたので、ウォーグレイモンとブラックウォーグレイモンが上空に目をやると、薄い青肌をして、頭に緑色の頭巾のような物を巻いて、巨大な赤く禍々しい翼を生や

して、獣を模した禍々しい鎧を身に纏った魔王型デジモンームルムクスモンだった。
しかも、巨大としか言えないほどの巨大な鳥―オニスモンに乗っての登場だ。

「私はムルムクスモン。オメガモンズワルト様の命令で、エイリアス、藤本秀人の抹殺に来た。さぁ、何処にいるのか教えてもらおう」

「（敵にはもう知られているというわけか……）……ブラック？」

「……おい、ムルムクスモン」

ムルムクスモンの話した内容を聞いて焦りを感じたウォーグレイモンだが、ブラックウォーグレイモンの様子がおかしいことに気がついた。
ブラックウォーグレイモンは非常に不機嫌そうな顔をしながら、辺りに怒りのオーラを撒き散らしている。
しかも、隣にいたウォーグレイモンが思わず後退りをしているほどだ。

「何だ、ブラックウォーグレイモン？」

「フフフフ……　お前はこの状況を全く理解していないわけだな、ムルムクスモン？」

「この状況？」

ブラックウォーグレイモンの様子を見たムルムクスモンは何となく嫌な状況にいることを悟りながらも、ブラックウォーグレイモンの話に耳を傾ける。

その証拠に、ブラックウォーグレイモンの声は低くなっている。

「今、俺たちは真剣勝負をしていた。それも重要な真剣勝負だ。友人に紹介されたデジモンと俺は今戦っていた」

「はぁ……」

「彼は、“あのブラックウォーグレイモン”みたいな状態なんだが、誰かを救おうと、誰かを守ろうと歯を食いしばって戦っている凄いデジモンだ。お前は、その人の努力を踏みにじろうとしているわけだな？」

「そ……そうなります……」

ブラックウォーグレイモンの勢いに逆らえず、気が付けばムルムクスモンは気を付けをして、額に大汗を掻いている。
彼の本能はこの場から逃げるべきだと伝えているが、体が反応しないのだ。

「うむうむ。俺は今わかったよ。謝罪も何もない。お前にある物は悪意だけということがな」

「ブッ……　ブラックウォーグレイモン？」

「悪いが、お前は真剣勝負の邪魔をした。気の毒だが、死んでもらおう。ムルムクスモン、オニスモン。グオォォォォォォォッ！！ガアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！！！」

『ッ！！』

突如として上がったブラックウォーグレイモンの咆哮と共に爆発した大地を目撃したムルムクスモンとウォーグレイモンは目を見開くが、ブラックウォーグレイモンは構わずに咆哮を上げ続けながら、全身から圧倒的な力を放ち続ける。

（こ……これがブラックウォーグレイモンの真の力……？）

（オーグ、彼に勝てる確率は？）

（５０％も無いね、いや……僕一人だとそもそも勝率があるのかどうかすらわからないよ……　オメガモンなら勝てる可能性は高いけどね）

ブラックウォーグレイモンの真の力を見たウォーグレイモンの内部に存在している秀人、オーグとメルーガは恐る恐る会話をする。今のブラックウォーグレイモンを倒すにはオメガモンに究極融合進化するしかないと彼らは判断した。
それだけ、ブラックウォーグレイモンの怒りが激しいものだと彼らは理解した。

「ウォーグレイモン、お前はオニスモンをやれ！！！　お前には切り札がある！！　俺はムルムクスモン……いや、俺を苛立たせるだけの“敵”をやる！！」

「分かった！！　何かあれば援護に回るぞ！！」

「気遣いはありがたいが、今回は要らないな。　ムルムクスモン如き、俺一人で十分だ」

「ふっ、無理するなよ」

「お前もな」

ブラックウォーグレイモンは殺意に満ちた瞳をムルムクスモンに向けると、両手の間に巨大な赤いエネルギー球を作り出しながら、その場から浮かび上がると、上空にいるムルムクスモンに向かってエネルギー弾を全力で投擲する。

「ガイアフォーーーーースッ！！！」

「グウッ！！！」

ムルムクスモンはオニスモンから離れることでガイアフォースを避けたが、自分に向かって迫るブラックウォーグレイモンを見ながら直ぐ様構えを取ると、二人は互いに睨み合い空中で殴り合いを始めた。

「オォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

「ヌオォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

一方のウォーグレイモンは言うと、ブラックウォーグレイモンがガイアフォースを投擲したのを見ると、オニスモンと戦うためにオメガモンへと究極融合進化した。

「ウォーグレイモン！！！　究極融合進化！！！」

ウォーグレイモンを中心に巨大な光の柱が発生すると、中からオメガモンが姿を現した。

「行くぞ！！」

オメガモンは大きく息を吸って吐くと一言気合を込めたと同時にオニスモンに向かって超音速で飛び立った。

「それにしても随分と大きなデジモンだな……　リヴァイアモンや四聖獣はオニスモンよりは大きいとは思うけど……」

オニスモンの姿を近くで見たオメガモンは、オニスモンの巨大さに感嘆を交えたような声を上げた。
オニスモンの大きさは軽く見ても、ＳＦ映画に登場する空中戦艦に匹敵するほどの大きさなのだ。
オニスモンは自分に向かって来るオメガモンを見ると、自身の巨大な翼を羽ばたかせて嵐を巻き起こした。

「テンペスト！！」

「ウオオォォォォォォーーー！！！！！」

オメガモンは左手に装備しているグレイソードを横なぎに振ることでオニスモンの起こした嵐を相殺した。
オメガモンは続けて右手に装備しているガルルキャノンの照準をオニスモンの右翼に向けると、ガルルキャノンから圧縮エネルギー弾を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「ギエアッ！！」

オメガモンがガルルキャノンから撃ち出した砲撃はオニスモンの右翼に当たり、オニスモンは苦痛の声を上げた。
そしてオニスモンの動きが止まったことを確認したオメガモンは、瞬時にオニスモンの顔の前に現れると、次々とグレイソードで斬り付けながら、オニスモンの顔を傷つける。

「ハアァァァァァァーーー！！！　ソード・オブ・ルイン！！！」

「ギエェェェェェーーーー！！」

オメガモンの怒涛の攻撃によってオニスモンは苦痛の叫びを上げながら、オメガモンから逃げようとするが、オメガモンは瞬時にガルルキャノンの照準をオニスモンの左翼に向かって放った。

「ガルルキャノン！！」

「ギエェェェェェーーーー！！」

オメガモンの放ったガルルキャノンを受けたオニスモンは苦痛の声を上げながら、地面に向かって墜落を始めると、オメガモンは右手のガルルキャノンの砲口にエネルギーを集束させると、そのまま集束砲撃を撃ち出した。

「オメガブラスト！！！」

「ギエアァァァァァーーーーー！！！」

オメガモンが放ったオメガブラストを受けると、オニスモンは苦痛の声を上げながら消滅した。
その後、オニスモンのデータ粒子が現れると、オメガモンはそれを

吸収した。

（成程……　このデジタルワールドの世界観は『デジモンテイマーズ』のデジタルワールドに近いな……　そう言えば、そもそもデジモンは戦闘種族的な生物だからな……）

戦いを終えたオメガモンは、ムルムクスモンとブラックウォーグレイモンの方を見ながら考え事をしていた。
どちらが勝利するのかは彼にはわかっていた。

一方のブラックウォーグレイモンとムルムクスモンの戦いは終わりに近づいていた。

「おっ……おのれ……　この私がお前如きに……」

「ふん。オーグの方がいい戦い方をしていたぞ」

ムルムクスモンが全身の鎧のいたる所に傷を付けて息を乱しているのに対して、ブラックウォーグレイモンも同様に全身の鎧のいたる所に傷を付けてはいるが、息を乱してはいなかった。

「ガイアフォーース！！！」

「ゲヘナ・フレイム！！！」

ブラックウォーグレイモンが作り出した負の力を凝縮した巨大な赤いエネルギー球とムルムクスモンが放った地獄の業火は正面から激突し合い、物凄い爆煙が発生した。

「くっ！！」

ムルムクスモンは衝撃に耐えながらも、爆煙で姿が見えないブラックウォーグレイモンの次の攻撃を待ち構えた。
ムルムクスモンは、ブラックトルネードが来ることを予想していたのだが、外れることとなった。

「ブラックストームトルネーーード！！！」

「何！？　ヌオッ！！」

ブラックウォーグレイモンは自身の周りに発生させた炎の竜巻を発生させてムルムクスモンに向かって放ったからだ。
当然、ムルムクスモンは自身の予想が外れたことに驚愕するだろう。
その事実に気が付いたムルムクスモンは慌てて防御の体勢を取り、炎の竜巻が収まるまで耐え抜く。

「ガイアフォーース！！！」

炎の竜巻を振り払っているムルムクスモンに向かって、ブラックウォーグレイモンはもう一度負の力を凝縮した巨大な赤いエネルギー球を作り上げると直ぐ様投擲する。

「さっきのは囮か！！　グアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンの行動に隠された意図をようやく理解したムルムクスモンは、データ粒子に変わりながら消滅した。
ブラックウォーグレイモンはそのデータ粒子を吸収した。

「どうやら、そちらの方も終わったようだな」
「ああ。どうする？　このまま戦うか？」
戦いを終えたオメガモンとブラックウォーグレイモンは地上に一旦降りると、今後のことについて話し合う。
「いや、時間も時間だ。一旦、帰るよ。今日はありがとう」
「ああ。久しぶりにいい戦いが出来た」
オメガモンとブラックウォーグレイモンはお互いに右手を差し出して握手をした。
どうやら、秀人はデジタルワールドに来て初めてデジモンの友達が出来たようだ。
「今度はオメガモンの姿で俺に挑みに来い。いつでも相手になってやる」
「ははは……　任務が無い時か戦いが終わった時でないと無理な相談だな」
「ふっ……　例え何十年かかっても俺は待っているぞ」
「ありがとう。また会おう、ブラックウォーグレイモン」
「ああ、オメガモン」
オメガモンは夕日に向かって飛び立つと、そのままコマンドラモ

ン軍曹達が帰りを待っている『Ｄ－ブリガード』に帰っていった。
それをブラックウォーグレイモンはオメガモンが見えなくなるまで見送っていた。

第5話　Ｄ－ブリガードの章　激突！！　漆黒と黄金の竜戦士！！（後書き）

デジモン紹介

ブラックウォーグレイモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／竜人型
必殺技／ガイアフォース、ブラックストームトルネード、ブラックトルネード
“漆黒の竜戦士”として恐れられる、ウィルス種のウォーグレイモン。ウィルスバスターズのウォーグレイモンとは信条も主義も全て正反対であるが、彼なりの“正義”のために存在している。卑怯や卑劣なことを嫌い、同じウィルス種でも低俗なデジモンは仲間だとは思っていない。ウィルス種のアグモンから順当に進化を遂げたため、背中に装備している“ブレイブシールド”には勇気の紋章が刻まれていない。必殺技はウォーグレイモンと呼ばれるデジモンと同じ『ガイアフォース』だが、此方の場合は大気中の全ての負のエネルギーを一点に集中させて、発射する暗黒の『ガイアフォース』だ。その他にも、自分の周辺広範囲に巨大な炎の竜巻を発生させる『ブラックストームトルネード』と、自ら回転し黒い竜巻と化し敵に突撃する『ブラックトルネード』や、ウォーグレイモンには無い技を数多く所有しているぞ。

ムルムクスモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／魔王型
必殺技／ゲヘナ・フレイム
元々は上級天使型デジモンだったが、堕天して魔王型デジモンになった。ナイトメアソルジャーズの幹部クラスであり「伯爵」の名で呼ばれており、３０の魔軍団をまとめている。また、幻獣デジモンのグリフォモンを従えており、自らの手足として使役している。必

殺技は業火を吐き出し、死してなお永遠に苦しむと言われる『ゲヘナ・フレイム』。

オニスモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／古代鳥型
必殺技／コズミックレイ、テンペスト
　遥か古代に絶滅したとされる古代鳥型デジモン。想像を絶する大きさを誇り別名『天空の覇者』と称された獰猛なデジモンだ。大型のデジモンでもオニスモンに襲われることが多かったと言われている。必殺技は、眩い光とともに口から破壊光線を放つ『コズミックレイ』に、羽ばたきで嵐を巻き起こす『テンペスト』だ。

次回予告

2体の究極体デジモンを使ってあるデジモンを生み出している黒いオメガモン。
ついに、彼は従っていた最強の七大魔王に戦いを挑む。
黒いオメガモンの実力とは？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力

七大魔王の一体が消滅するとき、漆黒の聖帝が誕生する。

第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力（前書き）

お待たせしました。
オリジナルデジモン（の要素あり）であるオメガモンズワルトやその仲間たちの紹介は後日にします。

第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力

―何処かの世界に存在している建物の一室―

（そろそろ七大魔王に反逆してもいい頃だな……　力を隠して従っていたがもうその必要も無くなったからな。ヒデ……貴様は今の私を見てどう思う？　聖騎士でありながら同じ聖騎士を葬ったこの私を……）

そこでは、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンーオメガモンズワルトはその部屋にある椅子に座っている。

彼は好物である紅茶を飲みながら、考え事をしていた。

オメガモンズワルトの左肩に装備しているブラックシールドΩには勇気の紋章が刻まれているが、どういうわけだかわからないが歪んでいるのが特徴的だ。

それは聖騎士型デジモンで、かつワクチン種で在りながら悪の道を邁進するオメガモンズワルトの決意の表れのように見えた。

（そろそろ七大魔王と手を切ってもいい頃だ……　私もカオスデュークモンもミレニアモンも全員七大魔王と匹敵、もしくはそれ以上の実力を持っている。それよりも問題なのは、七大魔王の仲が悪いことだ。私達は絆を大事にするファミリーみたいな集団を目指していたが、やはり無理だったようだ。やはり、ここはミレニアモンの

言った計画通りに、七大魔王を全員抹殺するべきか）

オメガモンズワルトは元々七大魔王を利用するだけ利用して、使えなくなったと判断したら切り捨てるつもりだった。
元々、オメガモンズワルトは同志であるカオスデュークモンとミレニアモンとは、世界から否定された・嫌われた者同士馬が合うのか、家族のような絆で結ばれている。

ちなみに、七大魔王とは、デジタルワールドに封印されている七つのデジタマから生まれる悪魔・暗黒系デジモンの頂点に君臨する七体の魔王型デジモンを指していて、それぞれが七つの大罪を司っているのだ。
七大魔王に名を連ねているデジモンは、『憤怒』を司るデーモン、『暴食』を司るベルゼブモン、『色欲』を司るリリスモン、『強欲』を司るバルバモン、『嫉妬』を司るリヴァイアモン、『怠惰』を司るベルフェモン、そして、『傲慢』を司るルーチェモン・フォールダウンモードである。
そのデジモン達はそれぞれが邪悪な意思と力を持った強大なデジモンであり、その力は一体だけでもデジタルワールドだけではなく、他の世界さえも滅ぼせる力を持っている最強のデジモン達なのだ。

しかし、困ったことに彼らは少なくとも仲間意識では動いていない。
そのため、オメガモンズワルトは、彼らは近いうちに足でまといになると考えるのと聖騎士型デジモンのプライドの理由で七大魔王を粛清するつもりなのだ。

「ズワルト、ムルムクスモンとオニスモンがブラックウォーグレイモンとオメガモンにやられた。しかも、そのオメガモンはウォーグレイモンから進化したそうだ」

「カオスデュークモンか。　まぁ、まずはゆっくりとお茶でも飲もうではないか」

「うむ。これは失礼した。では、頂こう」

オメガモンズワルトが紅茶を飲んでいると、背中に漆黒のマントを棚引かせて、鈍い輝きを放つ鎧で全身を覆い包んだ暗黒騎士―カオスデュークモンがオメガモンズワルトのいる部屋に入ってきた。オメガモンズワルトはカオスデュークモンにティーカップとディーポットを渡すと、カオスデュークモンも椅子に座ると、ティーカップに紅茶を注いで飲み始めた。
一口飲んだ後、カオスデュークモンはオメガモンズワルトに事の詳細を話し始める。

（間違いない……　オメガモンの進化元であるはずのウォーグレイモンからオメガモンから進化出来るのはエイリアスだけだ……　本当にヒデはエイリアスになったんだ……）

オメガモンズワルトはカオスデュークモンの話を聞きながら紅茶を飲み続ける。
そして、心中でかつて自分が人間だった時の一番の親友だった秀人のことを考えていた。

「ズワルト、今のうちに奴を潰すか？　私の考えだと奴は将来大きな脅威になるぞ」

カオスデュークモンの言葉にオメガモンズワルトは少し考え込む。
ちなみに、オメガモンズワルトは仲間からはズワルトと呼ばれている。

「……そうなのだが、その……私とヒデは以前親友だったから、正直の話、ヒデを我が陣営に勧誘したいのだ……　例え無理だと分かっていても……」

「そうか。そう言えば、ズワルト。昨日、言われたとおりベルフェモンを倒したぞ。正直手こずったがな」

「そうか。お疲れ様。ところで、ベルフェモンと聞いて大門大を思い出したよ。あいつも随分と弱いものだよ。あいつのことを興味半分で調べてみたら興ざめしたからな。“人間と融合したせいで本来の力を半分も出すことの出来なかったベルフェモン”相手に命を賭けるとは……　その後クレニアムモンに勝った？　あまつさえ、イグドラシルを倒した？　馬鹿みたいに拳だけで戦えばいいというわけではないよ」

オメガモンズワルトは大門大が気に入らないのか、怒りの声を上げた。
オメガモンズワルトはベルフェモンの本来の実力を十分に知っているのだ。
ベルフェモンの実力はオメガモンズワルトも認めているが、自分には及ばないと考えている。

「それに冷静に考えてみれば、七大魔王はかつてデジタルワールドを滅ぼす寸前にまで追い込んだのだろう？その力を持つ者が、たかだか究極体の力を一時的に超えた程度の力で敗れる筈はあるまいよ。その世界のデジタルワールドの管理者だったイグドラシルでさえ、封印と言う随分と消極的な方法で七大魔王を抑えるしかなかったのだのだから……」

「いや、全く持ってその通りだが随分と酷いことを言うものだな……　そいつにやられても私は知らないぞ……」

オメガモンズワルトの言葉にカオスデュークモンは呆れ果ててしまった。
他人に厳しい一面があるオメガモンズワルトだが、自分にはもっと厳しいのだ。
そのため、カオスデュークモンも初めて会ったときには唖然としていた。

「そうか？　私は客観的に見ているだけだが……　それに、私があんな低レベルな実力しかない奴らに負けると思うか？」

「どう考えても負ける確率は低いが、気を抜くとやられるかもしれないぞ」

「そうだな。ミレニアモンの依頼であのバンチョーレオモンと戦ったが、奴は骨があった。あいつに鍛えられれば、それは強くなるに決まっているよ」

「その通りだな。ミレニアモンも奴を欲しがっていたからな……」

オメガモンズワルトは秀人と同じくエイリアスになるはずだったのだが、彼のパートナーデジモンであるウォーグレイモンとメタルガルルモンとの融合の最中に近年発見された分泌物”ブラックデジトロン”が混入したことで一体のデジモンとして誕生したのだ。
しかも、聖騎士型デジモンでワクチン種というおまけ付きで。
それによる闘争を求め続ける高い凶暴性に苦しめられながらも、彼はオメガモンとしての仕事を果たそうとしたが、ロイヤルナイツや四聖獣に存在を否定されてしまい、人助けをしたとしても誰も寄り

付かなくなったのだ。
次第にオメガモンズワルトは孤独になり、ブラックウォーグレイモンのように自分を受け入れてくれる人物や世界を求めたが、悲しいことに見つからなかった。

　そこで、オメガモンズワルトは決起したのだ。
突然変異や属性や特性等の理由で嫌われて虐げられているデジモン達のための理想郷を作るために。
最初、オメガモンズワルトの元に集ったのはカオスデュークモンのみだった。
しかしそこから、オメガモンズワルトの進撃が始まったのだ。
彼はデジタルワールドの一つに封印されていたミレニアモンのことを知ると、封印を解除して、ミレニアモンと同盟を結んだ。
そして、水面下で活動していた七大魔王と同盟を結び、自身が最も憎んでいた敵であるロイヤルナイツと対戦して、見事勝利を納めたのだ。

「それで、七大魔王を潰す計画だが、次は誰を潰す？」

「そうだな……　ルーチェモンは行方を暗ましているそうで無闇に追いかけられないから駄目だ。　バルバモンは何処かのデジタルワールドで何かをしているみたいだから論外。　ベルゼブモンはヘビーモスでデジタルワールドを放浪中だからこれもまた論外。　リヴァイアモンはミレニアモンからの情報によるとデジモン達と交戦中だから潰してもいいが、そうすると状況が混乱するから駄目だ。
リリスモンはここから近いデジタルワールドにいるが、私の相手ではないから駄目だ。デーモン……　そうだな。　デーモンにしよう。
　あいつ、以前ダゴモンの海に送られてそこで力を蓄えたと言って調子に乗っているから尚更だ。よし、決定だ」

「わかった。リリスモンは私がやろう。　その後は相談しよう」
「ああ。気をつけろよ。　相手は七大魔王だ。気を抜くと我々がやられるからな」
カオスデュークモンとオメガモンズワルトはお互いにやるべきことを確認し合うと、直ぐ様行動を開始した。
三日後、オメガモンズワルトと全身を赤いローブで覆い、背中に悪魔のような翼と頭部に巨大な角を生やした魔王型デジモンーデーモンが岩だらけの無人世界で向かい合っていた。
「一つ聞きたいことがあるが、いいだろうか？　ズワルト」
「私が答えることの出来る範囲内の質問ならば、何でも答える事が出来るが？」
「私をここに呼んだ理由を聞きたい」
デーモンは自分がオメガモンズワルトに呼ばれた理由がわからないようだった。
「七大魔王、『憤怒』を司るデーモンをこの私、聖騎士オメガモンズワルトが粛清するためだ」
「粛清？　クククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハッ！！貴様、頭が狂っているのか？　仲間である我々を粛清するとは」
「仲間？　勘違いするな。お前たちは私の道具として働いてもらったのだ。　お前たちのような我儘な子供に付き合う馬鹿はここには

いない。私は藤本秀人という英雄となら付き合うがな」

「あいつとか？　ふん、甘いものだな。ズワルト、お前は仲間や盟友のことになると途端に甘くなったり、性格が変わる。そんなお前に私は倒せまいよ」

デーモンはオメガモンズワルトの抱える矛盾を指摘したが、当の本人であるオメガモンズワルトは自分のことは自分が一番わかっているのか気にしないでデーモンに言葉をかける。

「わかっているさ。だが、それが私自身だ。そういう貴様はどうなんだ？」

「私は選ばれし人間たちのおかげで“ダゴモンの海”に行く事が出来て、力を得られ、何れはデジタルワールドを支配出来るようになった。その時に、ズワルト。貴様と手を組んだのだ」

このデーモンは『デジモンアドベンチャー０２』に登場したデーモンと同一個体である。

「そうだったな。でも、それも今日で終わる。今の貴様相手に本気は必要ない。半分くらいの力でも正直お釣りが来る程だ」

「ほう、私に勝てると思っているのか？完全に力を取り戻した私を？」

「だったら試してみるか？　ロイヤルナイツを何体も抹殺した私と究極体１体と完全体２体を倒せずにダゴモンの海に送られた貴様とどちらが強いか、この場で決めるぞ！！！」

そのようにオメガモンズワルトは余裕そうにしているデーモンに声を掛けると、自分が立っている辺りから物凄い量のエネルギーを放出させた。

「行くぞ」

（なっ、何というエネルギーだ！！）

デーモンがその光景を見て驚愕しているのに構わず、オメガモンズワルトは縮地法を使うことで一瞬でデーモンとの間合いを詰めた。縮地法とは、瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きのことを指す。

（ぐっ！！　ズワルトの動きから逃れられない！！）

縮地法を使ってデーモンとの距離を詰めながら風のように流れる動作でオメガモンズワルトは右腕を軽く振るうと、ブラックメタルガルルモンを模した篭手の口部分から巨大な大砲―ガルルキャノンを展開して、オメガモンズワルトの動きに対応する事の出来ないデーモンに照準を合わせた。
それと同時に、オメガモンズワルトはデーモンに向けてガルルキャノンの砲口から砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン」

「ガアアァァァァァァァーー！！！！」

オメガモンズワルトが至近距離で撃ち出した砲撃を喰らったデーモンは、その威力によって空中に吹き飛ばされる。

「クッ！！　フレイムインフェルノ！！」

空中で体勢を立て直したデーモンは両手から炎を生み出しながら両手をオメガモンズワルトに向けると、復讐心に満ち溢れた邪悪な超高熱の地獄の火炎―フレイムインフェルノを放った。

「ガルルキャノン」

自分に向かって迫るフレイムインフェルノを見ても顔色を全く変えようとしないオメガモンズワルトは右手のガルルキャノンの照準をフレイムインフェルノに定めると、ガルルキャノンの砲口から通常の砲撃に比べて貫通力に特化した砲撃を撃ち出した。

（そんな馬鹿な！？　私の必殺技がいとも簡単に破られるなんて！？）

（デーモン……　貴様、頭が悪いな……　私はまだ砲撃を撃ち続けているのに……）

まだ自分の攻撃が終わってもいないのに驚愕の表情をしているデーモンを見たオメガモンズワルトは心中で呆れた。
今、自分が撃ち出している砲撃は貫通力に特化しているので、フレイムインフェルノを突き破り、デーモンに砲撃が当たることがオメガモンズワルトには手に取るようにわかっているからだ。

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！」

フレイムインフェルノを完全に突き破ったガルルキャノンを喰らったデーモンは、苦痛の叫び声を上げながら更に空中に吹き飛ばされる。

「フン！！」

オメガモンズワルトは空中に吹き飛ばされているデーモンの真上に移動した。
そして、デーモンの後頭部にガルルキャノンの砲口を押し付けると、そのまま砲撃を放ちながら地面に叩きつけた。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

デーモンは砲撃の威力による苦痛と地面に叩きつけられた衝撃によって、苦しそうな声を辺りに響かせる。

「どうした？　弱い技合計3回だけでもうグロッキーか？　ロイヤルナイツはこんなものじゃなかったぞ？」

オメガモンズワルトはデーモンの頭に押し付けていたガルルキャノンの砲口を離すと、デーモンから距離を取って着地した。
オメガモンズワルトは着地すると、デーモンを嘲笑うような凶暴さを垣間見るような表情をしながら地面に倒れ伏せているデーモンに声をかける。

「グゥッ……　何て強さだ……　恐らく、ルーチェモンでも勝てないだろう……」

「おいおい。あのような低レベルなデジモンと一緒にしないでもらえるかな？　最も、七大魔王と言っても貴様は、以前選ばれし子供たちによってダゴモンの海に送られたそうだからな。あのまま行けば、勝てた戦いだったのにずいぶんともったいないことをしたものだな」

「ヌゥゥゥゥッ！！　ケイオスフレアッ！！」

「フッ！！」

デーモンは唸り声を上げながらオメガモンズワルトに口を向けると、口から混沌の業火―ケイオスフレアを吐いた。
しかし、オメガモンズワルトはケイオスフレアをいとも簡単に避けると、デーモンに向かって突撃を開始した。

「グゥッ！！馬鹿が！　フレイムインフェルノッ！！」

デーモンは自分に向かって迫り来るオメガモンズワルトに向けて嘲りの笑みを見せると、両手からフレイムインフェルノを放とうとした。

「馬鹿は貴様だ」

オメガモンズワルトは、デーモンが両手からフレイムインフェルノを放とうとしているのを見ると、必殺技を撃たせないと言うようにオメガモンズワルトは渾身の力を込めた右回し蹴りをデーモンの腹部に向けて繰り出した。

「ガハッ！！」

右回し蹴りの直撃を食らったデーモンは後方に吹き飛ばされると、地面に叩きつけられた。

「お、おのれ……　貴様みたいな暗黒騎士にいつまでも一方的にやられると思うな！！！　何！？」

立ち上がったデーモンは、目の前にいるオメガモンズワルトに向けて怒りの声を上げるが、次の瞬間オメガモンズワルトの姿が自身の視界から消えていることに驚愕した。

「暗黒騎士？　違うな。私は聖騎士だ。ガルルキャノン」

いつの間にかデーモンの頭上に移動していたオメガモンズワルトは、ガルルキャノンの砲口をデーモンに向けると、砲撃を撃ち出す。

「ガアアアアアアアアーー！！！」

デーモンは苦痛に満ちた声を辺りに響かせながら体の至るところから煙を噴かせると、ゆっくりと体を前に傾かせて地面に激突する。デーモンの着ているローブは至るところがボロボロになっている。

「少しは必死になれ、というよりもそろそろ本気を出せ。貴様の力はこの程度ではないはずだ」

「赦さん！！貴様は絶対に赦さんぞ！！グガァァァァァァァァーーー！！！！」

憤怒のオーラを全身に纏いながらデーモンは立ち上がると、一気に自身が纏っていたローブを破り捨てることで、悪魔ごとき真の姿を現した。

デーモンは咆哮を上げると共に自身の体を巨大化させて、全長二十メートルほどの大きさに変わった。

「ほぉ……　私は相手に合わせて戦うという少し困ったこだわりを持っていてな、相手が剣で来るなら剣で、銃で来るなら銃で戦うよ

うにしている。だから、私も巨大化させてもらうぞ！！　ウオオォォォォォォォーーーーー！！！！」

巨大化して本来の姿になったデーモンに合わせてオメガモンズワルトも三メートル程の大きさから二十メートルほどの大きさに巨大化する。

デーモンは両拳を、オメガモンズワルトも両拳を構えながらお互いに睨み合う。

「ハアァァァァァァーーーー！！！！！」

デーモンは右拳をオメガモンズワルトに向けて突き出した。

「ハァッ！！」

オメガモンズワルトは、デーモンが繰り出した右ストレートを避けると、デーモンの顔面に目掛けて右回し蹴りを繰り出す。

「ガハッ！！」

デーモンは蹴りの直撃を食らうと、仰け反るように体を傾かせながらそのまま倒れた。

「フン……　やはりこの程度か……　それならば上級攻撃は要らないな。せいぜい使ったとしても、中級攻撃一発でお釣りが来るほどだ！！」

立ち上がったデーモンに向けてオメガモンズワルトは今度は左回し蹴りを繰り出す。

「グゥッ！！」

デーモンに反撃の時間を与えないと言わんばかりにオメガモンズワルトは素早くガルルキャノンを戻すと、渾身の力を込めた右ストレートを叩き込む。

「ウグッ！！」

続けてオメガモンズワルトはデーモンの顔面に向けて左ストレートを叩き込む。

「いつまでも調子に乗るな！！　スラッシュネイル！！」

デーモンは自分に向かって次々と攻撃を繰り出して来るオメガモンズワルトに向かって、渾身の力を込めた左腕を振り抜くことで自身の巨大な左手の爪で相手を切り裂く技であるスラッシュネイルを繰り出した。

「これを待っていた！！　グレイソード！！」

オメガモンズワルトはデーモンがスラッシュネイルを繰り出したのを見て嬉しそうな声を上げながら左腕を身体ごと大きく振りかぶると、左手のブラックウォーグレイモンを模した篭手の口の部分から、英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれた大剣―グレイソードを射出した。

そして、オメガモンズワルトはデーモンの左手に生えている巨大な爪に向けて居合斬りの要領でグレイソードを振り抜いた。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

オメガモンズワルトがデーモンの左手に生えている巨大な爪に向けてグレイソードを振り抜いたと同時に、デーモンの左腕の爪は全て綺麗に斬り落とされた。

全てはオメガモンズワルトの思い通りだった。
オメガモンズワルトはグレイソードとガルルキャノンの２つの武器があることによって、近中遠全てに対応できるオールラウンダーでいられるのだ。
更に、オメガモンズワルトはオールラウンダーであることから全てに対応出来ることで苦手がない分、ある一部分に特化しているわけでもないことも知っている。
そこで、戦って相手の苦手な部分が分かれば、そこをつけばいいのと得意な部分を敢えて潰して相手の全力を出させないという戦術を考えたのだ。
その証拠に、デーモンの左腕の爪は全てグレイソードによって綺麗に斬り落とされたからデーモンにとって接近戦は不利になる。
なので、オメガモンズワルトはフレイムインフェルノとケイオスフレアを回避してグレイソードで仕留めるという戦術が使用可能になったのだ。

左手の爪を斬り落とされた激痛にデーモンは苦しむように右腕で左腕を押さえるが、その隙を逃さないと言うようにオメガモンズワルトはデーモンの顔面に向かってグレイソードを振り抜く。

「グレイソード！！」

「ガハッ！！」

顔面に攻撃を受けたデーモンは苦痛の叫びを上げるが、オメガモンズワルトはそんなデーモンの様子など構わずに今度は右回し蹴り

を振り抜く。

「グハッ！！」

右回し蹴りの直撃を食らったデーモンは仰け反るように体を傾かせる。

それを目撃したオメガモンズワルトは直ぐ様デーモンから離れた。

「さて……　遊びは終わりだ……　ラストダンスだぞ！！　踊って行け！！」

オメガモンズワルトはデーモンに対して宣言をすると、グレイソードに激しい紅蓮の炎を纏わせながら、グレイソードから放たれる究極剣舞―ソード・オブ・ルインをデーモンに向けて繰り出した。

「グアァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

次々と繰り出されるソード・オブ・ルインをその身に受けるデーモンは苦痛の声を辺りに響かせる。

その様子はオメガモンズワルトという指揮者によって踊らされている観客みたいだった。

「約束通りの中級攻撃だ。オメガブラスト！！」

オメガモンズワルトはデーモンにガルルキャノンの砲口を向けると、エネルギーを集束させた砲撃―オメガブラストを放った。

「グアァァァァァァァァァァァーーーーー！！！ば、馬鹿な！！」

オメガブラストを食らったデーモンは、苦痛に満ちた叫びを響か

せた。

「ギギャアアアアアアアアアアアアーーーー！！！私は負けん！！貴様のような奴に私は絶対に負けんぞ！！」

「……　どうやら、私は貴様を馬鹿にしすぎたようだな。最後まで諦めないその闘志に私は敬意を払おう」

苦痛に満ちた叫びを上げながらも生き残っているデーモンを見て、オメガモンズワルトは感嘆の声を上げた。
何しろ、並みの究極体でも消滅してしまう威力が篭った砲撃を食らってもなおも、デーモンは生きている。
更にはまだ諦めずに戦いを挑もうとしているのだから、化物としかデーモンは評せ無いだろう。

「シネェェェェェェェーーーー！！！　フレイムインフェルノ！！！」

デーモンはオメガモンズワルトに両手を向けながら咆哮を上げると、最大限のフレイムインフェルノを放つ。

「これで最後だ！！　ソードレイ・シュトローーーム！！！」

オメガモンズワルトはグレイソードの剣先を天に掲げると、力の限りグレイソードを振り下ろした。
グレイソードから巨大な三日月状の光刃が放たれると、フレイムインフェルノを突き破りながら一直線にデーモンに超高速で向かう。

「ギギャアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！」

オメガモンズワルトの放ったソードレイ・シュトロームを受けたデーモンはデータ粒子に変わりながら、完全に消滅した。

「……」

オメガモンズワルトは瞑らな紅の瞳をデーモンの体を構成していたデータ粒子に向けるが、デーモンのデータを吸収しなかった。デーモンのデータを吸収したアルカディモンが後日デーモンに乗っ取られたという先例を以前聞いたことがあるからである。

「ズワルト！！　リリスモンを倒したぞ！！　……ズワルト？」

そこにリリスモンを倒したカオスデュークモンが戻ってきた。カオスデュークモンは悲しそうに俯いているオメガモンズワルトを心配して声をかける。

「いや、大丈夫だ。どうした？　何か話すことがあるのか？」

「ああ。ミレニアモンから連絡があってカオスモンのエイリアスが完成したそうだ。ズワルトのデータを入れたから力も強くなった上に長生き出来るそうだ」

「それは良かったな。他には？」

「それと……　ああ、そうだ。バイオ・オメガモンというのを造りたいと言っているがどうする？」

「ミレニアモンのマッドぶりにはいつもいつも驚かされるよ。好きにしろ、でも程々にな、って伝えておこう」

オメガモンズワルトとカオスデュークモンは今後について早速話し合う。
ミレニアモンはマッドだが、命を重んじるので寿命が長くないカオスモンに工夫を凝らすことで寿命を通常のデジモンにしたりすることも決して珍しいことではない。

「ところで、ズワルト。　紅茶の在庫が残り少なっているのだが……」

「そうだったな……　よし、まずは紅茶を買いに行こう！！！」

「行動の順序がおかしいだろう！？」

オメガモンズワルトとカオスデュークモンはまずは好物である紅茶を補充すべく現実世界（リアルワールド）に向かっていった。
そこで羽を伸ばしたいのもきっとあるだろう。
しばらくして、四聖獣やロイヤルナイツ、三大天使、七大魔王の間ではオメガモンズワルトは『漆黒の聖帝』と呼ばれるようになり、それと同時に畏怖の存在として伝えられるようになった。

第6話　漆黒の聖帝の章　黒いオメガモン、ズワルトの実力（後書き）

デーモン
世代／究極体　種族／魔王型　属性／ウィルス種
必殺技／フレイムインフェルノ、ケイオスフレア、スラッシュネイル
全ての悪魔型、堕天使型デジモンを統一する魔王型デジモンで在ると共に“憤怒”の称号を得ている七大魔王の一体。元々は天使型デジモンの最高位に位置する『セラフィモン』であったが、デジタルワールドの”善の存在（おそらくは構築した人間といわれている）”に反逆し、ダークエリアに堕とされたことで、魔王となってしまった反逆戦争のリーダー格。その強大過ぎる力を抑える為に、普段は全身をローブで覆い力を抑えている。しかし、一度ローブを脱ぎ捨て、真の姿である悪魔そのものの姿を現した時には、止められる存在は皆無に近い力を発揮する恐ろしきデジモン。必殺技は、復讐心に満ち溢れた邪悪な超高熱の地獄の火炎で対象を焼き尽くす『フレイムインフェルノ』に、混沌の業火を口から吐き、相手を焼き尽くす『ケイオスフレア』。そして巨大な左手の爪で相手を切り裂く『スラッシュネイル』だ。

次回予告
Ｄ－ブリガードの元にいる秀人はコマンドラモンと共に究極体の反応があったため調査に出ていた。
そこで襲撃を受けた秀人とコマンドラモン。
そのデジモンに秀人は驚愕し、戦いを強いられる。
次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ
混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！

望まれし者と望まれない者の戦いが始まる。

第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！（前書き）

カオスモンの存在について独自解釈の部分がありますが、「こういう意見もあるのか」程度で流してもらえれば、と思います。

第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！

秀人がＤ－ブリガードにいる頃、とあるデジタルワールドにあるミレニアモン専用の研究室では、とある人物が目覚めようとしていた。
灯りが灯されている研究室の中に存在している一人の男性が入ったカプセルの前で、背中に2門の巨大なキャノン砲を装備し、同じく背中に亡霊のような物がいて、腕を4本生やした合成型デジモンーミレニアモンは4つの手を器用に使いながらコンソールを打っていた。
その人間を創り出した本人であるミレニアモンは歓喜の表情を浮かべていた。

「よし、完成だ！！　バンチョーレオモンとダークドラモンの融合したカオスモンのエイリアスだ！！　さぁ、目覚めろ！！」

ミレニアモンがコンソールに付いているスイッチを指で押した瞬間に、カプセルの中に入っていた全ての水は消失していき、カオスモンのエイリアスーカオスが目を開ける。
そしてカプセルの扉が自動的に開くと、それと共にカプセルの中からカオスがゆっくりと出て来ると、近くに畳んで置いてあった服を着ながらミレニアモンに声を掛ける。

「お前が私を造ったのか？」

「そうだ。吾はミレニアモンだ。まぁ、自分で言うのも変な話だが有名人だ。良くも悪くもだが」

「そうか。私のすべきことは何だ？　何のために私は存在する？」

「こちらのモニターを見てもらおう」

カオスの質問にミレニアモンは答えるべく、近くにあったリモコンでモニターにある映像を映し出した。
その映像には藤本秀人とオーグとメルーガ、そして、オメガモンが映し出されていた。

「これはオメガモンだが、よく見てみると人間から進化しているのがわかるかな？」

「ああ。彼は何者だ？」

「藤本秀人。吾の仲間であるオメガモンズワルトの友人だった人間だ。だが、けしからんことに今の彼はオメガモンのエイリアスであると共に我々の敵である」

カオスは秀人の映像をまじまじと見ながら、自分のやるべきことに気がついた。

「つまり、私は彼を抹殺すればいいわけか。なかなかやりがいのある任務だな」

「そういうことだ。これから君をその人物がいる世界に送る。いい知らせを待っているよ」

「オメガモン如き、一捻りだ」

カオスの言葉を聞いたミレニアモンは苦笑いを浮かべながら、とある一つの部屋に案内する。

その様子を見たカオスも同じ部屋に入って部屋の中を見回すと一つの機械を見つける。

「この機械は一体何だ？」

「転送装置だ。自分の行きたい世界に自由に行くことが出来る。そのためには一つだけ条件がある」

「それは？」

カオスの質問に、ミレニアモンは答えながら何処からともなくオレンジ色と青色のデジヴァイス０１を取り出した。
それと共に、ミレニアモンはオレンジ色のデジヴァイス０１をカオスの右腕に、青色のデジヴァイス０１を左腕に付けながら、デジヴァイス０１に付いて説明を始める。

「これらはデジヴァイス０１だ。君がデジモンに進化するために必要な道具だ。右腕はバンチョーレオモン、左腕がダークドラモン、両腕を合わせるとカオスモンに進化可能だ。それに吾との通信装置もついているので吾とも通信可能である上に、転送装置もついているからいつでもここに戻ってくることが出来る」

「成程。便利な道具だな。それでは、行ってくる」

「無理だけはするなよ」

カオスの言葉に、ミレニアモンは応じる。
そしてもうミレニアモンには用は無いと判断したカオスは転送装置の上へと移動すると、別世界へと転送されて行くのだった。

『D―ブリガード』の建物の訓練室で、秀人が究極進化したウォーグレイモンと美藤龍之のパートナーデジモンの1体であるスレイヤードラモンが模擬戦をしている。

「スレイヤードラモン！！」

「龍之！！　コマンドを頼む！！」

龍之の叫びを聞いたスレイヤードラモンは答える様に叫ぶと、自身の武器である自身の武器である伸縮自在の剣―フラガラッハを握り締めながら、フラガラッハを下段から上方に向かって降り抜くことで、発生した剣圧―昇竜斬波を放つ。

「弐の型！！　昇竜斬波！！」

スレイヤードラモンが放った昇竜斬波は超高速でウォーグレイモンに迫る。

「フン！！」

それに対して、ウォーグレイモンは両手の間にエネルギー球を作り出すと、それを昇竜斬波に投げつけることで昇竜斬波を相殺した。しかし、その間にスレイヤードラモンはウォーグレイモンの背後へと回り込みながら右手に持っているフラガラッハから天竜斬破を繰り出す。

「壱の型！！　天竜斬破！！」

「その攻撃はもう見切っているぞ！！　ドラモンキラーーー！！」

スレイヤードラモンの天竜斬破を見たウォーグレイモンは左腕に装備しているドラモンキラーで防御しながら、右腕に装備しているドラモンキラーをスレイヤードラモンに向かって突き出した。

「そう来るとは！！　弐の型！！　昇竜斬波！！」

スレイヤードラモンは自分に向かって繰り出されたドラモンキラーをフラガラッハで弾くと、直ぐ様至近距離からウォーグレイモンに向かって昇竜斬波を繰り出した。

「くっ！ブレイブシールド！！」

スレイヤードラモンの放った昇竜斬波を見たウォーグレイモンは背中に装備されている翼の様な物を、両腕に装備して前面で盾の様に構えることで、スレイヤードラモンの放った昇竜斬波を防御すると、爆発が訓練室内部で起きた。

そして、スレイヤードラモンの昇竜斬波が収まると、突如としてウォーグレイモンの後ろにコマンドラモン軍曹が姿を現し、ウォーグレイモンに笑みを浮かべながら言葉をかける。

「今回の模擬戦はスレイヤードラモン殿の勝利だ」

「まさか必殺技のコンボで来るとは……」

「そうでもしないと勝てないよ……」

ウォーグレイモンとスレイヤードラモンはクールダウンをしながら会話をする。

『Ｄ－ブリガード』に来てから、二体とも強くなったことを確実に実感出来るようになっていた。

「お疲れ様、スレイヤードラモン」

「ああ、ありがとう。この調子で行けば、エグザモンにもジョグレス進化出来るな」

「そうだね。ブレイクドラモンも強くなっているし、負けてられないよ」

クールダウンを終えたスレイヤードラモンと龍之が仲良く話しているのを見たウォーグレイモンが元の姿である秀人の姿に戻ろうとしたその時、コマンドラモン軍曹がウォーグレイモンに言葉をかける。

「秀人殿、至急司令室に来てくれ」

「……僕は何かしたっけな？」

『さぁ……？』

コマンドラモン軍曹の言葉を聞いたウォーグレイモンは困ったような表情を浮かべながら、龍之とスレイヤードラモンに質問をしたが、彼らからは答えが得られなかった。
ウォーグレイモンは首をかしげながら司令室へと足を向けると、龍之とスレイヤードラモンも首を傾げながらもウォーグレイモンの後を追い、司令室へと向かい出すのだった。

『究極体デジモンの反応が消えた！？』

司令室でコマンドラモン軍曹の話を聞いたウォーグレイモンと龍之とスレイヤードラモンは驚愕した。
ブレイクドラモンはコマンドラモン軍曹のお手伝いをしていた。
これがなかなか有能だったりする。

「肯定だ。これはつい先程のデータだ」

コマンドラモン軍曹はコンソールを叩くと、ウォーグレイモン達にデータを見せた。
モニターには急に反応が現れると、十秒もしないうちに消失したのがわかる。
ブレイクドラモンは既に見たデータなので、彼らを気にすることなく事務仕事をしている。

「確かに消失していますね……」

「自殺した？いやいや、そんなことないな。なら一体……？」

龍之とスレイヤードラモンが口々に考えている時に、ウォーグレイモンの脳裏に自分に向かって不気味な笑みを浮かべる黒いオメガモンの姿が浮かんだ。

（黒いオメガモンの刺客……　確かに、僕に対抗するには究極体かアルカディモンといった特殊なデジモンでないと駄目だ……　でも、すぐに消えるというのが何か引っかかるな……）

ウォーグレイモンは心中でその反応について考えたが、すぐに消

えたという事実が彼を答えへの壁になっていた。
「私はダークドラモンとの関係があると考えた。よって調査の必要があると考えたが、何か意見はあるか？」
「軍曹殿。自分もそう考えました。私に行かせてください」
「自分もこのような仕事には向いているはずです。ご一緒させてください」
コマンドラモン軍曹の話を聞いて、ウォーグレイモンとブレイクドラモンが参加の意を表した。
「了解した。準備が出来次第、出発しよう」
コマンドラモン軍曹の後に続いて、ウォーグレイモンとブレイクドラモンは司令室から退出すると、準備を始めた。

それから三十分後、ウォーグレイモンがスライド進化したメタルガルルモンとコマンドラモン軍曹とブレイクドラモンは『Ｄ－ブリガード』から少し離れた荒野で調査活動をしていた。
なぜウォーグレイモンがメタルガルルモンへとスライド進化したのかと言うと、メタルガルルモンの鼻先にある４つのレーザーサイトからは不可視のレーザーを照射しており、赤外線、Ｘ線などといったあらゆるセンサーを使うことで対象物を分析することが出来るからである。
ブレイクドラモンの体の構造と同じようにこのような調査活動にはもってこいの能力を持っているのだ。

「そちらは何か見つかったか？」

「いえ、何も見つかっていません（匂うな……　人間の臭いが……
でも、デジモンの匂いもまた……　テイマーか？　それとも……
エイリアスか？）」

「こっちも何も見つかりません。恐らく、遠くに行ったのかもしれ
ません」

メタルガルルモンは目には見えないが、鼻先でかいだ臭いで誰か
がここにいた、もしかしてここにいることを既に理解していた。
メタルガルルモンの予測通り、メタルガルルモンとコマンドラモン
軍曹とブレイクドラモンを遠くから注意深く観察している者が存在
していた。

（メタルガルルモンとコマンドラモンとブレイクドラモンか。ミレ
ニアモンの言っていた通り、藤本秀人のいる世界に転送できるとは
……）

遠くから戦いの様子を観察していた存在ーカオスは、メタルガル
ルモンとコマンドラモン軍曹の姿を見ながら、ミレニアモンの頭脳
と技術に驚嘆していた。

（コマンドラモンは成長期なのに随分と高い数値だな。成熟期なら
一対一だと倒すことが出来る。それに、メタルガルルモンも数値が
高い。ブレイクドラモンもだ。これがエイリアスの特権なのか？）

カオスは、デジヴァイス０１でコマンドラモン軍曹とメタルガル
ルモンとブレイクドラモンの数値を測定すると、その数値の高さに

驚いていた。
実際には、コマンドラモン軍曹の場合は様々な戦場をくぐり抜け、様々な訓練を乗り越えたためで、メタルガルルモンは秀人が大切に育てたため同種でもずば抜けた力を持っているため、ブレイクドラモンは龍之の育て方と今までの経験が主な理由だった。

「さて……　様子見は程々にしてそろそろ任務を始めますか……」

そう言いながらカオスがコマンドラモン軍曹とメタルガルルモンとブレイクドラモンの方に歩み寄ろうとした時、カオスの目の前に一発のミサイルが着弾したため、カオスはその衝撃を耐えながら爆煙を防ぐべく両腕で顔を防ぐ。
爆煙が止んで両腕を下ろすと、そこには蒼色の機械狼―メタルガルルモンが立っていてカオスのことを睨んでいた。
メタルガルルモンは先にブレイクドラモンにコマンドラモン軍曹と共に戻るように伝えておいたのだ。

「おい、そこにいる人間。僕は既に君のことをわかっていた。名前を名乗ってもらおう」

「全くもって手荒い挨拶だな。私の名前はカオス。光も闇も超越した混沌の名を持つ者だ」

メタルガルルモンの言葉にカオスは答える。
カオスの言葉にメタルガルルモンは少し疑問に感じたが、それを表情に出すことなく淡々とカオスに声をかける。

「どういうことなのか説明してもらおう」

「お前は私のことを悪だと思っているが、私から見れば、お前は悪

だ。いつでも何処でも正義や悪、光と闇は存在しないのだ。自分は正義だと思っていても、他人から見れば悪の場合など腐るほど存在している」

「確かにその通りだ。僕達は自分たちのしていることは必ずしもいいことではないということぐらいは自覚しているさ。でも、そんな僕達でも何かやれることがあるから、こうして今戦っているんだ」

「フン。大口を叩いても無駄だ。何故なら、私は、お前の影なのだから……　光と影……お前が光ならば、私は影だ……」

メタルガルルモンのことを嘲笑ったカオスは意味深な言葉を口にした。

（影だと……？　一体どういうことだ？）

カオスの言葉を聞いた秀人は、疑問に感じた。
それに気がついたメルーガは秀人にカオスモンについて説明する。

（秀人、オメガモンとカオスモンの決定的な違いは“望まれて生まれたデジモンか望まれずに生まれたデジモンか”なんだよ）

（“望まれて生まれたデジモンか望まれずに生まれたデジモンか”……？　オメガモンは前者でカオスモンは後者だよな……普通に考えると……）

（その通りだよ。カオスモンは本来、デジモンの中でも珍しく有り得ない存在なんだ。まぁ、融合元であるバンチョーレオモンとダークドラモンの存在理由もあるんだけどね）

バンチョーレオモンは己の正義を貫く漢の中の漢、正に番長と呼ぶべきデジモンだ。
彼は少なくとも、悪のデジモンではない。
しかし、ダークドラモンはそのバンチョーレオモンを倒す為だけに『Ｄ－ブリガード』で生み出された生物兵器であるデジモンだ。
よって、彼らが融合することでカオスモンのその精神にズレが生じるのは目に見えている。
つまり、「正義」と「悪」、そして、お互いに敵対しあう物同士の融合、本来融合することの無かったデジモンの融合によって誕生したデジモン、それがカオスモンなのだ。
なので、カオスモンのその存在自体が世界を歪めてしまうのかもしれない。
それで、イグドラシルやロイヤルナイツによって排除される運命にあるのだろう。
故にカオスモンは寿命が短いという悲しさを持っている。
もしくは、不安定な融合のせいで体を長いこと維持できないこともカオスモンの寿命が短い要因の一つに挙げる事が出来るのかもしれない。

（成程……　だから、カオスは僕のことを光と呼んで、自分のことを影と呼んだのか……）

（そういう事だろうね）

秀人はメルーガの言いたかったことを理解すると、カオスの方に意識を向けた。
メタルガルルモンの視線はカオスに集中されている。

「恐怖……死……悲しみ……怒り……憎しみ……　それらが影だ……」

「確かに僕達の心にも影が存在している。だが……それは決して君を造った奴らなんかじゃない！！！！　メタルガルルモン！！！！　究極融合進化！！！！　ウオオオォォォォォォォォォォォォォーーー！！」

メタルガルルモンは叫びながら自身の体からオレンジ色と青色の光を発生させると、オレンジ色と青色の光の繭に包まれる。
そして、光の繭が消失した後には、後に“白銀の聖帝”と呼ばれることになる聖騎士オメガモンが立っていた。
オメガモンの姿を見たカオスは楽しそうな笑みを浮かべた。

「さて、こちらも進化するとしよう……」

カオスは右腕のデジヴァイス０１がオレンジ色に、左腕のデジヴァイス０１が青色に輝き始めたのを確認すると、デジヴァイスを頭の上で交差させた。

＞＞ＵＬＴＩＭＡＴＥ－ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「アルティメットジョグレスエボリューション！！！」

カオスは自身の体をデータ化させると、蒼色のデジコードの繭に包まれる。
そして、デジコードが消失した後には中から一つ目で全身がオメガモンに似ていて、右手がバンチョーレオモンを模していて、左手がダークドラモンを模している篭手を装備した、細身の騎士のような姿をした特異型デジモンーカオスモンが姿を現した。
お互いに見れば見るほど自分にそっくりなのでまじまじと見つめている。

「フッ！！」

オメガモンが左腕を振るうと同時にウォーグレイモンの頭を模していた篭手からグレイソードを射出させると、カオスモンを睨みながらグレイソードを構える。
カオスモンもそれに応じるように右腕のバンチョーアームからデジモン文字が刻まれた大剣―ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを射出させると、オメガモンを睨みながらＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構える。

「うぉおおおおおっ！！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとカオスモンは、お互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進すると、オメガモンはグレイソードを、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをぶつけ合い、凄まじい火花を散らしながらグレイソードとＢＡＮ－ＴＹＯブレイドの応酬を始めた。
何合か撃ち合うと、オメガモンは突然右ハイキックを繰り出して、カオスモンの顔面を狙う。

「食らえ！！」

「何！？」

突如として自身に迫って来るオメガモンの右足に気が付いたカオスモンは、寸前の所でオメガモンの放った右ハイキックをかわした。
それと同時に、カオスモンはグレイソードを構えているオメガモンを睨み付けたが、当のオメガモンはカオスモンの様子には一切構わずにグレイソードの剣先を突き出しながらカオスモンに向かって突

撃する。
カオスモンは何とか避けたが、オメガモンは横に避けたカオスモンに向かって突き出したグレイソードから横薙ぎの斬撃を繰り出す。
「ハアァァァーーー！！」
「くっ！？」
カオスモンは右手のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで何とか防御すると、右足蹴りをオメガモンの胸部に向かって繰り出した。
「フンッ！！」
「グゥッ！！」
オメガモンは後方に吹き飛ばされるが、両足を地面につけることでブレーキ代わりにしながら吹き飛ばされるのを辛うじて抑えた。
オメガモンは右腕を、カオスモンは左腕であるダークドラアームを軽く振るうと、同時にガルルキャノンとギガスティックキャノンを射出させた。
２体は同時に巨大な大砲を相手に向けながら照準を合わせると、同時に必殺技を撃ち込む。
「ダークプロミネンス！！」
「ガルルキャノン！！！」
二体が放った必殺技は二体の中心でぶつかり合い、大爆発を起こした。
爆発の衝撃はお互いに平等に流れて来て、お互いにその場から移動

することで爆発の衝撃を回避した。
二体は一旦両手に装備している武器を戻すと、オメガモンは右手の篭手に凄まじい冷気を、左手の篭手に激しい炎を発生させた。
一方のカオスモンは右手の篭手に眩い光を、左手の篭手に深い闇を発生させた。
二体は両手を同時に大地に叩きつけることで氷と炎と、光と闇の二連撃を繰り出した。

「ダブルトレントッ！！」

「カオストレントッ！！」

氷と炎と、光と闇の二連撃は再度二体の中心でぶつかり合い、大爆発を起こした。
それによって発生した爆発の衝撃波を受けながらも、オメガモンとカオスモンは同時に煙を切り裂きながら、グレイソードとＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら再度相手に向かって突撃する。

「ウオォォォォォォォォォッ！！！！！」

「ハァアアアアアアアアッ！！」

オメガモンはグレイソードに紅蓮の炎を纏わせながらカオスモンに向かって振り抜く。
カオスモンもＢＡＮ－ＴＹＯブレイドに極限まで高めた気合を集中させながらオメガモンに向かって振り抜く。

「グレイソーードッッ！！！」

「覇王両断剣！！」

お互いの武器がお互いの胸部を斬り付けたため、オメガモンとカオスモンはお互いに距離を取った。

「ダークプロミネンス！！」

ガルルキャノンから砲撃を発射しようとしているオメガモンに向かってカオスモンはギガスティックキャノンから暗黒のエネルギー弾を撃ち出した。

カオスモンの公式設定では、ダークプロミネンスは左腕のダークドラアームに装備されたギガスティックキャノンから自身のデジタル細胞を打ち出す技だが、カオスが進化したカオスモンのダークプロミネンスは融合元であるダークドラモンの必殺技であるダークマターをエネルギー弾として打ち放つ禁断の大技―ダークロアーの上位互換の技になっている。

「ムッ！！　オメガシールド！！」

自身に向かって迫って来るダークプロミネンスを見たオメガモンは回避出来ないことをすぐに悟ると、左手に光エネルギーを集中させながら突き出すことで光のバリアを形成してダークプロミネンスを防いだ。

「ウオォォォォ……！！　エボルレイ・ジェネレード！！」

オメガモンは左手に力を込めながら光のバリアを光のエネルギー弾に変換すると、カオスモンに向かって撃ち返した。

「グォッ！？」

まさか自分の技を防いだだけでなく撃ち返すとは微塵も考えていなかったカオスモンはエボルレイ・ジェネレードを食らうと、苦痛と驚愕がおり混ざったような声を上げながら後方へと吹き飛ばされた。

「おのれ……　喰らえ！！　ダークテンペスト！！」

カオスモンは苛立った声を上げながらギガスティックキャノンの砲口を真上に向けると、そこから先程のダークプロミネンスよりも巨大なエネルギー弾を発射した。
すると、巨大なエネルギー弾は無数のエネルギー弾に分裂して、オメガモンの真上から次々と襲いかかる。

「クソッ！！」

「させるか！！　ダークプロミネンス！！」

オメガモンは無数のエネルギー弾を見て避けようとするが、カオスモンはオメガモンの足元に照準を合わせると、ダークプロミネンスを撃ち出した。

「ハッ！！」

カオスモンのダークプロミネンスが自分の足元に着弾したことによって、オメガモンは動きを無理やり止めさせた。
それによって、オメガモンに向かって降り注ぐダークテンペストは次々とオメガモンに直撃して、大爆発を起こす。

「グワァァァァァァァァーーーー！！！」

オメガモンは爆発で発生した煙の中に姿を消して行きながら、苦痛の叫びを上げた。
ちなみに、ダークテンペストの一発一発はダークプロミネンスと同等の威力を持っているため、オメガモンからしてみればダークプロミネンスを何十発も喰らった気分なのだ。

「ウッ……ウゥ……」

ダークテンペストを喰らいながらもオメガモンは何とか立ち上がろうとしたが、ダメージによって体が思うように動かずガックリと顔を下に向けたまま倒れている。
それを見たカオスモンはオメガモンの首根っこを掴むと、持ち上げた。

「私が考えていたよりも随分と脆いものだな……　正直期待外れだ……」

「グゥゥ……」

物凄い力で首を絞められているためオメガモンは苦しそうな声を上げるが、カオスモンはそれに構わずにオメガモンのことを嘲笑う。

「私によって息絶え、この世界から消え去るがいい！！」

「私は……まだ……消えるわけには行かない！！」

カオスモンの言葉を聞いてオメガモンは声を上げながら光エネルギーを右拳に込めると、右ストレートをカオスモンの顔面に向かって繰り出した。

「ガフッ！？　くそっ！！」

「ハアッ！！」

微塵も考えていなかったオメガモンの反撃を喰らって光カオスモンは後ろに吹き飛ばされたが、立ち上がるとオメガモンに向かって構えを取る。
オメガモンも同様に気合を入れながら構えを取る。

「ハァアアアアアアアアアアーー！！！」

「ウオオオオオオオオオーーー！！」

オメガモンとカオスモンは武器を構えながら同時に突撃すると、再び剣戟を開始した。

「フン！！」

「クッ！！」

十合ほどお互いの武器を交えると、カオスモンはオメガモンの胸部に向かって右回し蹴りを繰り出すが、オメガモンはそれを受け止める。
カオスモンは今度はジャンプして右回し蹴りを繰り出すが、オメガモンは屈むことでそれを避けた。

「デェイ！！」

「ウォッ！！」

カオスモンはなかなか攻撃が当たらないことに苛立ちながらも左足蹴りをオメガモンの胸部に向かって繰り出した。
オメガモンはカオスモンの左足蹴りを喰らい、後退したが体勢を立て直してすぐにグレイソードを構える。
カオスモンもＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら、オメガモンに意識を向ける。

「ハァッ！！」

「フン！！」

カオスモンはオメガモンに向かってＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを突き出しながら突撃するが、オメガモンはそれを避けると、カオスモンの胸部に向かってグレイソードを振り抜く。

「クッ！！」

オメガモンへの攻撃を放った後だったため、カオスモンはオメガモンの斬撃を防御することが出来ずに胸部を斬り付けられてしまった。

「タァッ！！」

「クッ！！」

更に、オメガモンは先ほど斬り付けた箇所とは違う部分に向かってグレイソードを振り抜いた。
カオスモンはグレイソードを辛うじて防御したが、その隙をついてオメガモンは右ハイキックをカオスモンの頭部に向かって繰り出した。

「フン！！」

「グァッ！！」

オメガモンの右ハイキックを喰らったカオスモンは、頭に走った衝撃でヨロヨロと後ろに下がる。
それを見逃すはずのないオメガモンは右ハイキックを喰らったことで動きが止まってしまっているカオスモンの頭部に向かって左ハイキックを素早く繰り出す事で弾き飛ばした。

「ムン！！」

「グゥッ！！」

カオスモンはその事に声を漏らすが、弾き飛ばされた反動を利用して再び距離を取ろうとする。
だが、オメガモンはグレイソードに光エネルギーを集中させると、カオスモンの胸部に向かって強烈な突きを繰り出した。

「オメガセイバーーー！！！」

「グアッ！！」

オメガセイバーを喰らったカオスモンは胸を押さえながら後退する。
更にオメガモンは再度グレイソードに光エネルギーを集中させると、カオスモンに向かって鋭く振り抜いた。

「ロイヤルスラッシュ！！」

「グフッ！！」

オメガモンの斬撃を喰らったカオスモンは吹き飛ばさせると、地面に叩きつけられる。
何とか立ち上がったカオスモンだが、息を乱している。

「オメガレイ・シュトローーーム！！！」

「グアアアアーーー！！！」

そろそろ止めをさす頃合だと判断したオメガモンはガルルキャノンの砲口をカオスモンに向けながら、光エネルギーを集束させた砲撃を撃ち出した。
カオスモンは防御することが出来ずに吹き飛ばされるが、何とか立ち上がった。
本来のオメガレイ・シュトロームは究極体デジモンを確実に倒すことの出来る威力を持っているのだが、チャージの時間が足りないのと激しい戦闘でエネルギーを消費した理由から、カオスモンにダメージを与えることしか出来なかった。

「ハハハハハハ……　大したものだ……　最後まで諦めずに挽回したその勇気と実力……　それでこそ戦う意味がある……　また楽しませてもらおう……」

「ツッ！！　待て！！」

突如として消えたカオスモンに近寄ったオメガモンだったが、戦いの疲労とダメージで思わず片膝を付いた。
気がついたら、空には綺麗な夕日が存在している。

「ハァ……ハァ……ハァ……　カオス……　私と同等かそれ以上の強さか……　厄介な敵が出てきたものだな……」

オメガモンは息を整えると、『Ｄ－ブリガード』の方角に向かって飛び立った。

飛んでいる最中に、オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードとの念話をしていた。

（オメガモン……　カオスモンと交戦したそうだな……）

「はい……　強かったです……　今回は何とか勝てましたが次はどうなるのか……」

（そのカオスモンだが……　君に確保するように言っていたダークドラモンが融合元として使われた）

「やはり……そうでしたか。抹殺するしかありませんね」

オメガモンが来る一か月前にダークドラモンはミレニアモンによって回収されて、同じ世界で捕獲したバンチョーレオモンを使って人造エイリアスを作り出す実験に使用したのだ。

その結果、カオスモンが誕生したがそれはミレニアモンの計画通りだったのだ。

「次の任務は一体？」

「カオス三将軍とカオスロードを倒すことだ」

「カオス三将軍？　それは一体？」

「カオスロードと呼ばれているカオスドラモンの部下であるカオスグレイモン、カオスシードラモン、カオスピエモンの3体のデジモンを指す」

オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードの説明を聞いて納得したように頷いた。
彼の心中は初めての任務を達成することのできなかった悔しさで満ち溢れていた。

「わかりました」

（世界に着いた時に詳細を説明する。それでは）

オメガモンはインペリアルドラモン・パラディンモードとの念話を終えると、そのまま真っ直ぐに『D－ブリガード』に帰っていった。

三日後、オメガモンは『D－ブリガード』から旅立つことになった。
インペリアルドラモン・パラディンモードから連絡があったからである。

「また何かあったらここに立ち寄ってくれ」

コマンドラモン軍曹は敬礼をしながら、オメガモンに言った。

「はい。ブラックとも約束しましたから」

オメガモンも敬礼をしながら答える。

「秀人君。また会おう」

『またな』

龍之とスレイヤードラモン、ブレイクドラモンは手を振りながらオメガモンに言葉をかける。

「皆さん、ありがとうございました。また会える日を楽しみにしています」

オメガモンは飛び立つと、次元を歪ませてデジタルワールドからその姿を消失させた。

そして、オメガモンが消えた場所を、少し間、誰もが言葉を発する事無く見つめ続けるのだった。

ちなみに、後にオメガモンと龍之、スレイヤードラモンとブレイクドラモンがジョグレス進化したエグザモンが共闘してあるデジモンと戦うことになるとは、この時の彼らは微塵も思わなかった。

第7話　混沌の章　混沌の騎士、カオスモン襲来！！（後書き）

オリジナル人物とデジモン紹介

名前：カオス

容姿：『銀魂』に登場する伊藤鴨太郎に似ているが、メガネはかけていない。

性別／男性

年齢／不明

性格／一人称は『私』。自信家で相手を見下すことがある。
混沌の名前を持っているからか善と悪について独自の考えを持っている。

詳細：ミレニアモンが作り出したカオスモンの人工エイリアス。オメガモンこと藤本秀人を抹殺することが存在理由。実力はオメガモンと互角かそれ以上と思われる。バンチョーレオモンとダークドラモン、カオスモンに進化することが出来る。

名前：カオスモン

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／超究極体

種族／特異型

必殺技／覇王両断剣、ダークプロミネンス

性格／カオスの時とほぼ一緒。

説明／通常、ジョグレス時には、２体のデジモン同士のデジコアが完全に融合し、新たなデジモンに生まれ変わるが、カオスモンは、ジョグレス前のデジモンのデジコアをそれぞれ保持し、非常に不完全な状態でその姿を維持している。カオスモンとは、「存在し得ない」デジモンのコードネームであり、デジタルワールドの“　セントラルドグマ”（中心原理）では絶対にありえない特異（バグ）である。極めて不安定な存在のため、寿命が非常に短く、デジタルワールドの管理システムが放つバグを排除するプログラムが走るために寿命が短くなってしまうと推測される。このカオスモンはバンチョーレオモンとダークドラモンがジョグレスして生まれたものと見られており、両腕にそれぞれのデジモンの面影を見ることができる。必殺技は、「バンチョーアーム」に装備された「ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド」から繰り出される無敵の一刀両断『覇王両断剣』と「ダークドラアーム」に装備された「ギガスティックキャノン」から自身のデジタル細胞を打ち出す『ダークプロミネンス』だ。

詳細／カオスとバンチョーレオモンとダークドラモンの究極融合進化によって現れるデジモンで、本来ならば不安定で寿命が短いが、ミレニアモンによってそれらの欠点は解消されているため、オメガモンと同等かそれ以上の実力を発揮することが出来る。光と闇の力や、様々な技を持つ技巧派な一面がある。

オリジナル技の説明は次回以降にします。

次回予告

とある現実世界（リアルワールド）に降り立ったオメガモンは、デジモン達の存在を掴み、その背後の黒幕の存在に気づく。
そして、カオス三将軍の一体、カオスシードラモンとリベンジに燃えるカオスモンと死闘を繰り広げる。

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

混沌の章　究極デジモン海上決戦！！

蒼く広がる海上で、究極の戦いが繰り広げられる。

第8話　混沌の章　究極デジモン海上決戦！！（前書き）

執筆中にデータが吹っ飛んでしまい、投稿が遅れてしまいました。
申し訳ございませんでした。

第８話　混沌の章　究極デジモン海上決戦！！

―とある現実世界（リアルワールド）にあるリゾート地の海辺付近―

「歌じゃないけど、海は本当に広いし大きいね……　戦いが終わったら一度自由に泳ぎたいな……」

『そうだね……　僕も一度でいいから海を自由に泳いでみたいな……　ブレイブトルネードで』

『何を考えているんだよ、オーグ……　そんなことをしたら海で泳ぐどころか海が割れちゃうだろう……　僕なんか君と秀人と違って四足歩行だから犬掻きだから自由に泳げないよ……　はぁ……不便だ……』

砂浜に座りながら海を見ている秀人が呟いた言葉に反応したオーグが何やら物騒な事を言ったため、メルーガはそれを注意したが、自分の体の構造を思い出して海を自由に泳げないことを嘆いた。確かに、メルーガが泳いでいる場面を想像すると、物凄い違和感しか感じられないのかもしれない。

オメガモンは、つい先ほどリゾート地の近くにある森林に到着して、そこで秀人の姿になると、小川の水を飲んだり、それで顔を洗ったりした後にこの場所に来たのだ。

「そう言えば、この世界の任務がまだ言われていないな……　ん？」

秀人は自分がこの現実世界（リアルワールド）で戦うべきデジモンが一体誰なのかを大海原を見ながら考えていると、デジヴァイス０１から電子音が響いたので秀人はデジヴァイス０１の電子画面を注視する。

デジヴァイス01の電子画面に次々と映し出されていく文字を見た秀人はこの現実世界(リアルワールド)で自分が戦うべきデジモンを理解した。

『リゾート地の海で、以前選ばれし子供達のウォーグレイモンによって倒されたダークマスターズの一員のメタルシードラモンのデータを使ってミレニアモンによって造り出されたカオスシードラモン率いるディープセイバーズがこの海を荒らして人々に迷惑をかけている。彼らを倒して、この世界の海の平和を取り戻せ』

「う〜ん……　今回の戦いはかなり辛い物になるな……メルキューレモンやネプチューンモンが居ないだけ、まだましという訳だけど……」

秀人は腕組みをしながら、今回の戦いが厳しい戦いになることを推測する。何しろ、今回の戦いは一対大多数だからだ。何しろ、初めての経験なので、どのようになるのかはわからないのだ。

『そう言えば、秀人。以前選ばれし子供達のウォーグレイモンによって倒されたダークマスターズの一員のメタルシードラモンの実力はどれくらいなの？』

「う〜ん、確かドラモンキラーを持っているウォーグレイモンでも、ホエーモンの助けが無ければ、負けていたからな……　それに、カオスモンの存在もあるから今回もオメガモンで行こう」

『その方がいいね。大多数相手だとオメガモンのガルルキャノンが重要になってくるよ』

オーグの質問に秀人は考えながら、答えると今回の戦い方を提案した。

その言葉にメルーガが同意の声を上げると、秀人はデジモンの気配を探るために海の方へと足を進め始める。

「それにしても、相手が『ディープセイバーズ』とは……　僕はホエーモンやダゴモン辺りを考えていたんだけどな……　どちらにしても、海の中にデジモンがいるとなると、厄介だよ。海系のデジモンはどれもこれも厄介なデジモンが多いし、一歩間違うとこのリゾート地は一瞬で崩壊して多くの人に被害が出てしまうよ」

『それに、いつカオスモンの襲撃が来るかわからないから周囲に気を配らないといけないね』

『今回は相手の武器や技を潰しながら戦おう。僕たちはあまり楽観視をしてはいけないよ。常に最悪の場合を考えながら行動するべきだ』

秀人とオーグの言葉にメルーガは厳しい言葉をかけると、秀人とオーグは険しい表情をして頷きながらデジモンの気配を探る。
秀人はしばらく歩いていると、人の居ない岬につき、大海原を見渡しながらデジモンの気配を探ると、険しい表情をした。

「たくさんいるなぁ……　完全体デジモンがメインだけど」

『相手の攻撃をうまく使いながら戦おう。体力の温存のためにも』

『その戦い方で行くのも今回はありだね。だって、海の中に居ると
なると攻撃も思うように出来ないし、攻撃のパターンも限られるか
らね』

秀人の言葉を聞きながらオーグとメルーガは話し合う。

海は水棲系デジモンに取って最高と呼ぶべきフィールドである。デジモンはフィールドに寄って力が左右される存在であり、そのフィールドで戦うとなると、オメガモンでも苦戦は免れないだろう。しかし、秀人は海に向かって大きく息を吸って吐くと一言気合を込めた。

「よっしゃ！　行きますか！！」

秀人が一言気合を込めると同時に秀人の両腕のデジヴァイス０１から電子音声が響きながら光り輝き、秀人の体から青色の光とオレンジ色の光が同時に発生すると、青色とオレンジ色の光の繭に包まれる。

＞＞ＵＬＴＩＭＡＴＥ－ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「アルティメットジョグレスエボリューション！！！　オメガモン！！！」

秀人が叫んだ瞬間に青色とオレンジ色の光の繭が自然消滅を開始した。そして、繭の中からオメガモンが両腕を交差させた状態で姿を現して、両腕を力強く振り下ろした瞬間、オメガモンの円らな空色の瞳が出現した。

「行くぞ！！」

オメガモンは再度気合を入れると、飛び立った。

その途中で空に向かって一直線に伸びる飛行機雲を見たのは余談である。

「この辺りからデジモンの気配を感じるな……」

オメガモンはデジモンの気配を頼りに超音速で飛んでいたが、デジモンの気配を感じると思われる地点に到達すると、大海原を見回す。

『グウオオオォォォォォォォォーーーーーー！！！！！』

オメガモンの存在を探知したかのように、海中から頭部に巨大なツノを生やした海蛇のような姿をしたデジモン―二体のメガシードラモンが咆哮を上げながら姿を現した。

（メガシードラモンか……　必殺技の一つであるサンダージャベリンは大したことはないが、もう一つの必殺技であるメイルシュトロームには要注意だ……）

オメガモンは二体のメガシードラモンの姿を見ながら、分析をする。

オメガモンは、カオスモン戦の反省で相手を素早く分析して、それに基づいた戦い方で相手を倒すことを心がけているのだ。

『メイルシュトローーーム！！』

メガシードラモンが咆哮を上げると同時に穏やかに流れていた海面が荒れ狂い、オメガモンに向かって物凄く冷たい大きな波―メイルシュトロームが繰り出された。

（どうする？　あれを凍らせるか？　それとも吹き飛ばすか？）

オメガモンは自分に向かって迫り来るメイルシュトロームを見て、素早く考える。

もし、ここでオメガモンがメイルシュトロームを避ければ、メイルシュトロームの勢いは止まらずにこのまま真っ直ぐに進み続ける。その結果、確実にその先に存在している陸地に大きな影響を与えて、大きな被害が出るだろう。
ここでオメガモンの取るべき道は二つある。一つは自身の右腕であるメタルガルルモンの能力を使ってメイルシュトロームを凍結させること。もう一つはグレイソードを使ってメイルシュトロームを吹き飛ばすこと。
オメガモンにとって、ここで余計な体力を使うと、カオスシードラモン、そして、自身の影であるカオスモンとの戦いに支障をきたす恐れがある。なので、オメガモンはグレイソードを使ってメイルシュトロームを吹き飛ばすことにした。

オメガモンは、自身に向かって迫り来るメイルシュトロームに目を向けながら左腕を軽く振るうと、グレイソードを射出する。

「オオォォォォォォーーー！！！！」

オメガモンはグレイソードを射出すると同時に全力で縦に振るい、メイルシュトロームを中心辺りから分断して、津波を吹き飛ばした。オメガモンはそれを確認すると直ぐ様メガシードラモンに視線を移すが、そのオメガモンを狙うように二体のメガシードラモンは巨大なツノの先端に電撃を集中させていた。

『サンダー……』

「させるか！！」

オメガモンは右腕を軽く振るうと、ガルルキャノンを展開して、サンダージャベリンを放とうとしている二体のメガシードラモンの

片方に照準を合わせて砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン！！」

「グウオオオォォォォォォーーーー！！！」

オメガモンが撃ち出した砲撃は一体のメガシードラモンに命中して、メガシードラモンは苦痛の声を上げながらデータ粒子に変わりながら消滅した。

もう一体のメガシードラモンは自身の仲間を抹殺したオメガモンに怒りを覚えながら即座にサンダージャベリンを放とうとする。だが、その直前にオメガモンはガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「グオオオオォォォォォォーーーーーー！！！」

ガルルキャノンはもう一体のメガシードラモンに直撃して、メガシードラモンは苦痛の声を上げながらデータ粒子に変わりながら消滅する。

オメガモンは彼らのデータ粒子を吸収すると、油断無く構えを取りながら大海原を見回す。

すると、海から、半漁人を思わせる容姿をしていて、手にモリートレントを握り、ウェットスーツに身を包んだ水棲獣人型デジモン―ハンギョモンが二体、同時に飛び出して来る。

『ウォォォォォォォーーーーー！！！』

「ハァァァァァァァーーーーー！！！」

海から飛び出して来たハンギョモン達を目撃したオメガモンは両拳に力を込めると、ハンギョモン達を殴りつけることでトレントを一度落とさせた。
それを目撃したハンギョモンは、即座にトレントを持ち直して、オメガモンの攻撃が届かない位置からトレントを投げつけようとするが、その直前にハンギョモンの頭上に移動していたオメガモンが砲撃を連射した。

「ガルルキャノン！！」

『ギギャァァァァァァーーーー！！！』

オメガモンが撃ち出した砲撃がハンギョモン達に直撃すると、データ粒子に変わりながら消滅していく。オメガモンがそれを吸収すると、今度は古代の生物であるアノマロカリスに似たような姿をしたデジモンーアノマロカリモンが姿を現した。

「シャァァァァァァァーーーー！！！！　スティンガーサプライズ！！」

アノマロカリモンは姿を現すと同時に左右の前肢をオメガモンに向かってクロスさせると、鋭い刃上の衝撃波―スティンガーサプライズをオメガモンに向かって放つ。

「グレイソード！！」

「ギギャァァァァァァーーーーー！！！！」

オメガモンはグレイソードに光エネルギーを集中させると、自分に向かって迫り来るスティンガーサプライズに向かって横薙ぎに振

るい、三日月状の光刃を繰り出す。それを受けたアノマロカリモンはデータ粒子に変わりながら消滅したので、オメガモンは吸収した。今日だけでも、一回の戦い分のデータ粒子は吸収したような物だ。アノマロカリモンを倒してからデジモンが出てこなくなったことを感じたオメガモンは油断なく構えを取りながら、カオスシードラモンの出現に備える。

「来たか！！」

オメガモンが声を上げながらその場を離れた瞬間、直前までオメガモンが居た地点に向かって、水しぶきを上げながら閃光が通り過ぎる。天に向かって海から立ち昇る閃光を見たオメガモンはここからが本番だと感じて、両手を握りしめる。

（今の技はアルティメットストリーム……　究極体デジモンは本当に規格外な奴らばかりだな……）

オメガモンが閃光の立ち昇った地点を睨みつけていると、海全体を揺るがすほどの振動が響き出すとその場所から巨大な水柱が立ち昇った。それを目にしたオメガモンが水柱に目を向けた瞬間、水柱の中から大きな声が大気を震わせながら聞こえて来る。

「グガアアアアアアアアーーーーーー！！！」

一際大きな叫びが水柱の中から響いた瞬間、水柱は吹き飛び内部からメガシードラモンよりも二周りも巨大で全身を漆黒の金属で覆い、鼻先が砲塔の形をしているデジモンーカオスシードラモンがその姿を現した。

「なかなか楽しめそうだな、オメガモン……　いや、ここは敢えて

藤本秀人と呼ぶべきかな……？」

「どちらでも好きなふうに呼べばいいさ。カオスシードラモン、随分と派手な演出をしてくれたみたいだな」

「ああ。やっぱり、噂に聞いたエイリアスと戦ってみたかったからな。それに、俺はお前の左腕の奴に以前倒されたからそのリベンジも兼ねてな」

（成程、奴にはメタルシードラモンだった記憶が残っているわけか。となると、カオスピエモンはピエモンの、カオスグレイモンはブラックウォーグレイモンの、カオスロードはムゲンドラモンの記憶があるわけか……）

オメガモンは内心で呟くと、これからの方針を考えた。出来たら、カオスグレイモンは殺さずに昔彼が出来なかった自由な生活をさせてあげたいと思い、後は容赦なく倒そうとある意味身勝手な答えを出した。

会話を終えて対峙している2体のデジモンだが、先に動いたのはオメガモンだった。

先制攻撃としてオメガモンは、ガルルキャノンからメタルシードラモンに向かって砲撃を放つ。

「先手必勝！！　ガルルキャノン！！」

「フッ！！」

オメガモンが撃ち出した砲撃は、真っ直ぐにカオスシードラモンに向かって直進する。自身に向かって迫り来る砲撃を見たカオスシ

ードラモンは海中に潜ることで砲撃を回避した。そのままカオスシードラモンは海中を自由自在に動き回ることでオメガモンを混乱させる。

「クソッ！！」

なかなかガルルキャノンの照準が定まらないことにオメガモンは思わず悪態を付く。
グレイソードでも攻撃できないことは無いが、そうなると少し時間を要するのでその間に攻撃される確率があるのだ。

「喰らいな！！　ヘルスクイーズ！！」

カオスシードラモンが咆哮を上げると同時に、その身が光り輝き、氷海を貫きながら巨大な水柱が幾重にも出現した。それを見たオメガモンは迎撃することを一瞬考えたが、そうなると動き回る必要があり、そうすればアルティメットストリームのいい標的になると思い直した。

「そう来るとはな！！　だが、私にもいくつか手駒はある！！　オメガストームトルネード！！」

オメガモンは全身に力を込めると、ヘルスクイーズに勝るとも劣らない炎の竜巻を広範囲に発動させる。オメガモンが叫びながら左腕を力強く振り上げると、炎の竜巻は次々と巨大な水柱に激突する。それによって、辺りに水蒸気が発生する。
オメガモンが水蒸気に包まれたままのカオスシードラモンに目を向けた瞬間、煙の中に一瞬閃光が走り、水蒸気を吹き散らしながら砲撃が飛んで来る。それを見たオメガモンは表情を険しくしながら、回避行動に入った。

「やるじゃねぇかよ！！　アルティメットストリームッ！！」

「クッ！！」

煙を吹き散らしながら放たれた巨大な砲撃―アルティメットストリームは、真っ直ぐにオメガモンに向かって直進する。オメガモンは背中に羽織っているマントで全身を覆い包みながら素早くその場から離れることでアルティメットストリームの範囲外から逃れる。オメガモンがアルティメットストリームが放たれた方向の海を見ると、海がまっぷたつに割れている。

（んな！？　海が割れている！！　モーセじゃあるまいし、凄すぎでしょ……）

（それだけ究極体デジモンは伊達じゃないよ、秀人）

秀人はそれを見て唖然とし、改めて究極体デジモンの凄さを知ると共に、自分もそのような力を持っていることに恐怖感を感じる。

「アルティメットストリーム！！！」

「オメガムーブ！！」

空を自由自在に飛びまわるオメガモンに向かってカオスシードラモンは鼻先に存在している発射口からアルティメットストリームを撃ちだした。
それを目撃したオメガモンは即座に自分の体を光らせると同時に光速移動―オメガムーブを使用して、アルティメットストリームの範囲から逃れると同時にカオスシードラモンの背後に回り込み、ガル

ルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「チィッ！！」

カオスシードラモンはその様子に顔を僅かに険しく歪めながら即座に自身の体を横に動かすと、直前までカオスシードラモンが居た場所を砲撃が着弾して大きな水しぶきが上がる。

「アルティメット……」

「オメガハウリング！！」

カオスシードラモンがアルティメットストリームを撃ちだす直前に、オメガモンが素早くガルルキャノンから通常の砲撃よりも速い速度の圧縮エネルギー弾―オメガハウリングを撃ち出した。

「グウォォォォォォォォーーーーーーー！！！」

オメガハウリングはカオスシードラモンの鼻先の砲口に直撃して、カオスシードラモンはその痛みとアルティメットストリームを撃ちだすエネルギーのダブルパンチを受けて、苦痛の声を辺りに響かせた。そのため、アルティメットストリームは封じられてしまった。

「ガルルキャノン！！」

オメガモンは更に苦しんでいるカオスシードラモンの口の中に向かってガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。圧縮エネルギー弾がカオスシードラモンの口の中に入り込むと同時に、内部で爆炎と衝撃

が発生する。

「ググァァァァァァァッ！！！」

流石に口の中への攻撃はカオスシードラモンでも堪えたのか、口から煙を噴き上げながら苦痛に満ちた叫びを辺りに響かせた。そろそろ止めを指してもいい頃合いだと判断したオメガモンは大気中の水分をガルルキャノンの砲口に集め始める。
そして、オメガモンはチャージが終わると同時にカオスシードラモンに向かって絶対零度の冷気弾を撃ち出す。

「アブソリュート・ゼロ！！」

「なっ！？」

絶対零度の冷気弾を喰らったカオスシードラモンは驚愕に満ちた声を残すと、周りの海面ごと凍結した。
それはさながら巨大な芸術品のようであり、何かのオークションに出せば高値になるだろう。

「砕け散れ！！」

オメガモンは圧縮エネルギー弾をカオスシードラモンが入った巨大な氷塊に向かって撃ち出した。圧縮エネルギー弾が直撃すると、巨大な氷塊は豪快でいい音を鳴らしながら砕け散った。カオスシードラモンのデータ粒子が天に向かって昇っていくのを見たオメガモンは直ぐ様データ粒子を吸収した。

「……」

オメガモンは任務を完了したが、その表情は晴れなかった。その理由は今使用したアブソリュート・ゼロにあったからだ。
オメガモンが考えているアブソリュート・ゼロは、－２７３．１５℃の絶対零度の光弾を発射して、相手を一瞬で凍結して、更には僅かな衝撃で分子レベルまで粉砕する技で極めて強力な技だが、使用するにはエネルギーのほぼ半分を使用するため、多用が出来ないうえに一度しか使えないのだ。どうしたものかとオメガモンは代案を考えていたが、ふと大気中の水分を使用したらどうなるのかを計算したところ、エネルギーの消費も最小限で済む上に、光弾の時よりも広範囲に使用することが出来ることを弾き出した。しかし、その代償に僅かな衝撃で分子レベルまで粉砕することが出来なくなってしまった。そのことを知ったため、オメガモンは自分の力不足を痛感したのだ。

（だが、また新しく技を覚えたのだから、今はこれでいいのかもしれない。だが、私はまだまだ強くなれる。だったら、前に進むしかない）

オメガモンはそう決意を固めると、両手を強く握りしめる。その時、自分の後ろに気配を感じたため、ガルルキャノンをその気配がいると思われる場所に向けると、砲口から圧縮エネルギー弾を撃ち出した。
圧縮エネルギー弾は空中を一直線で進むと、何者かによって四散させた。

「カオスモン……　やはり来たか……　薄々予想はしていたが……」

「フフフ……　また会えて嬉しいよ、オメガモン……　どうやら、カオスシードラモンを倒したようだな……　ご苦労さま……　正義の聖騎士よ」

そこには右手にＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを装備して空中に佇んでいるカオスモンの姿があった。実は、カオスモンはオメガモンがカオスシードラモンと戦っている時からいたのだ。戦いを観戦していた後、オメガモンと戦うためにここまで来たのだ。

「何故そこまでして私との戦いにこだわる！？」

「それが私の存在理由だからだ。オメガモンを抹殺することこそが私の生きる意味だからだ」

オメガモンの質問にカオスモンは当然と言わんばかりに答える。オメガモンはそのカオスモンの態度に眉をひそめるが、異なる質問をぶつける。

「どうして私と戦いたがるんだ？　オメガモンと戦いたいなら、様々な世界を渡り歩けばいいはずだ！！」

「お前の言うことも一理ある。だが……お前でないと意味がないのだ。お前もやがては黒いオメガモン、オメガモンズワルトのようになる」

「どういうことだ？」

カオスモンの言葉に疑問を感じたオメガモンを見たカオスモンは、オメガモンとオメガモンズワルトの関係を思い出しながら言葉を繋いだ。

「何れわかる。さぁ、今宵も私を楽しませてもらおう」

カオスモンはそう言うと、右手のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドの剣先をオメガモンに向けながら、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構える。オメガモンはカオスモンの先程の言葉に疑問を感じて険しい表情をしたが、すぐに表情を改めると、グレイソードを構える。

「うぉおおおおおっ！！！！！」

「ハアァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとカオスモンは睨み合いを行い、お互いに機は熟したと判断した瞬間、お互いに人間の目では視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進して、グレイソードとＢＡＮ－ＴＹＯブレイドの剣戟を始めた。

「フン！！」

「くぅっ！！」

剣戟の途中で、カオスモンがオメガモンに向かって右足蹴りを繰り出したが、オメガモンは右足蹴りを右手の篭手で防御した。オメガモンはお返しと言わんばかりに左ミドルキックをカオスモンに向けて繰り出す。

「ハアッ！！」

「クッ！！」

オメガモンの左ミドルキックを脇腹に受けたカオスモンは痛そうな表情をしながらオメガモンから距離を取った。
オメガモンはカオスモンに照準を定めながらガルルキャノンから砲

撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「ハッ！！　ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド！！」

オメガモンが砲撃を発射して来た事に気がついたカオスモンは素早く右腕のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを砲撃に向かって振り抜くことで砲撃を四散させた。
一歩間違うと砲撃が直撃していたため、カオスモンは冷や汗をかいた。

「ダークプロミネンス！！」

「グゥッ！！」

カオスモンは左手を軽く振ってギガスティックキャノンを展開させると、オメガモンに向けて暗黒のエネルギー弾を撃ち出すが、オメガモンは何とか回避する。

「隙あり！！　ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド！！」

「ガハッ！！」

それを予想していたカオスモンは素早くオメガモンの目の前に高速移動すると、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをオメガモンに向かって振り抜く。その威力にオメガモンは苦痛の声を上げながら後退する。
その時にオメガモンの鎧に傷が出来た。

「カオスブラスト！！」

「ガアッ！！」

カオスモンはギガスティックキャノンから光と闇のエネルギーを集束した砲撃―カオスブラストをオメガモンに向かって撃ち出した。カオスブラストはオメガモンに直撃すると、オメガモンの胸部にダメージの痕を残す。オメガモンはカオスモンが以前戦った時よりも確実に強くなっていることを実感する。

「はぁあああッ！！」

「ガルルキャノン！！」

「フン！！」

カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら突撃を開始したが、オメガモンは苦しそうな表情をしながらもガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

しかし、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜くことで砲撃をてんであさっての方向に弾き飛ばした。

「フン！！」

「クッ！！」

カオスモンはそのままＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをオメガモンに向かって突き出したが、オメガモンはグレイソードで防御した。しかし、オメガモンの表情は先程のダメージの影響もあるのか、険しいままだ。

「ハァッ！！」

「フン！！」

それでも、それを押し隠してオメガモンはカオスモンに向かってグレイソードを振り抜くが、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで防御する。

「ムン！！」

「グアッ！！」

カオスモンが左肘打ちをオメガモンが先ほどカオスブラストが直撃した部分に繰り出すと、オメガモンは歯を食いしばりながらその痛みに耐えながら後退する。

「ダァッ！！」

「フッ！！　デヤァ！！」

「クッ！！」

カオスモンはオメガモンに向かって右ミドルキックを繰り出したが、オメガモンは左手の篭手で防ぐと、お返しとばかりに左ミドルキックを繰り出す。

しかし、カオスモンは予想していたのかバク転することでそれをよけた。オメガモンは余りにも綺麗なバク転だったので、内心で拍手を贈った。

「ティッ！！」

「グッ！！」

空中で体勢を整えたカオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜くが、オメガモンはグレイソードで防御するが、直後の背中に走った衝撃で前に進んだ。カオスモンが背中にキックを繰り出したからである。

更にカオスモンはオメガモンを蹴り飛ばすことで、必殺技が放てる距離を確保した。

「ダークプロミネンス！！」

「クゥッ！！」

カオスモンは左手のギカスティックキャノンから暗黒のエネルギー弾を撃ち出すが、オメガモンは左に動くことで回避すると、反撃とばかりにカオスモンのギカスティックキャノンの砲口に照準を合わせて、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「何ッ！？　しまったーーー！！！」

オメガモンの砲撃がギカスティックキャノンの砲口に直撃したことによって、ギカスティックキャノンを封じられたことに気づいたカオスモンは焦りの声を上げた。

そんなカオスモンを尻目にオメガモンはガルルキャノンの砲口に光エネルギーをチャージすると、オメガレイ・シュトロームを撃ち出した。

先の戦いとは違い、今度はチャージの時間もエネルギーも十分にあ

ったため、確実にカオスモンを倒すことのできる威力を持っている。

「オメガレイ・シュトローム！！」

「カオスシールド！！」

「クッ！！」

カオスモンは左手に光と闇エネルギーが混ざったバリアーカオスシールドを張ることでオメガレイ・シュトロームを防いだ。オメガレイ・シュトロームを撃ち出しながらその様子を見たオメガモンは悔しそうな声を上げるが、最早後の祭りである。

「フフフ……　力を増したようだな……　今日はここまでにしよう……　まだまだ私を楽しませてもらおう……」

カオスモンはオメガレイ・シュトロームをカオスシールドで防ぎながら空間に溶け込むように姿を消した。気がつくと、辺りは既に夜になっていて、空には満月が不気味に輝いている。海面から静かな音が聞こえて、耳を傾けるだけで心が安らぐみたいである。オメガモンはオメガレイ・シュトロームを撃ち出した時の態勢のままでいたが、カオスモンが消えたことを確認すると、構えを解いて、胸の辺りを押さえながら苦しそうに息を乱す。

「また……　仕留められなかったか……　逃げ足は速いが、強いからタチが悪いな……　次も仕留められないとなると、どうなるかわからないよ……」

オメガモンは陸地に戻るために空を超音速で飛びながら再度カオスモンを倒さなかったことを悔やんだ。自分の力とカオスモンの力

が拮抗しているのか、自分とカオスモンは相性が悪いのか、はたまた自分が弱いのか、傷ついた今のオメガモンにはさっぱりわからなかった。

休養のために現実世界（リアルワールド）に一週間ほど止まったオメガモンは去り際にリゾート地の海辺を見た。
デジモン達が現れてから人が来なくなっていたが、デジモンが何者かによって倒されたことを知った報道機関がそれを公表して、人々は再びリゾート地に足を運び、それぞれが楽しんでいる。
それを見ながら、オメガモンは自分のしていることは決して無駄ではないことを実感しながらもカオスモンのことを思い浮かべ、これからの自分について少なからず不安を抱きながらその世界を後にして次の世界へと向かっていった。

第8話　混沌の章　究極デジモン海上決戦！！（後書き）

登場デジモン紹介

メガシードラモン
世代／完全体、属性／データ種、種族／水棲型
必殺技／サンダージャベリン、メイルシュトローム
　シードラモン種が規則的進化して、体も一回り大きくなった形態の水棲型デジモンであり、フォルダ大陸周辺の過酷な環境を生き延びたシードラモン種が、弱肉強食のデジタルワールドを生き抜くためにに進化した形態でもある。頭部を覆う外殻が硬度を増し、頭頂部にイナズマ型のブレードが生えたことで兜の役割を果たし、防御力が増した他、ブレードには発電装置が仕込まれており、電撃を放つことも可能になった。知性や泳ぐスピードも発達し相手を執念深く追い回し仕留めるぞ。必殺技は頭部のツノから放つ強力なイナズマ『サンダージャベンリン』と、物凄い冷たい津波を起こし、敵を凍りつかせる『メイルシュトローム』だ。

ハンギョモン
世代／完全体、属性／データ種、種族／水棲獣人型
必殺技／ストライクフィッシング
　ウェットスーツに身を包み、海を自在に泳ぐ水棲獣人型デジモン。背中には水中高速移動モーターが備わっており、高速で水中を移動する。性格はいたって陽気でほがらかだが、水中での戦闘能力は凄まじく、手に持つ愛用のモリ『トレント』で獲物を倒す。必殺技は、手に持っている『トレント』を敵めがけ投げつける『ストライクフィッシング』だ。

アノマロカリモン

世代／完全体、属性／データ種、種族／古代甲殻類型
必殺技／スティンガーサプライズ
　古代生物の調査や発掘を行っている研究所のデータバンクにコンピュータウィルスが感染し、古代生物のデータを取り込み進化した古代甲殻類型デジモン。コンピュータウィルスが感染し、古代生物のデータを取り込み進化した。古代に食物連鎖の頂点にいた生物同様、旺盛な食欲と、高い補食能力を身につけている。頭部から生えた触手を器用に使って敵を捕まえ、尻尾から生えた鋭いブレードで仕留める。戦況が不利になると海底の土を鋭い触手で巻上げて身を隠す。だが、逃げるのではなく頭部から突き出ているレーダーアイは暗視装置のように敵を捕捉し、逆転の機会を狙う。必殺技は、左右の前肢をクロスさせて、衝撃波を放つ『スティンガーサプライズ』だ。

カオスシードラモン
世代／究極体　種族／サイボーグ型　属性／データ種
必殺技／アルティメットストリーム
カオス3将軍の1体であるサイボーグ型デジモン。カオスロードの手下であることとカオス3将軍の1体であること以外は全くわからない。必殺技は鼻先からエネルギーを発射して敵を薙ぎ払う『アルティメットストリーム』だ。

次回予告

チンロンモンが守護するデジタルワールドに姿を現したオメガモン。そこで、彼は以前戦ったデジモンにそっくりなデジモンと戦うことになる。
そして、再び現れたカオスモンから告げられた事実を聞いたオメガモンは……

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ

混沌の章　混沌の竜人ＶＳ終焉の聖騎士

姿が似ているから必ずしも強いわけではない。

第9話　混沌の章　混沌の竜人ＶＳ終焉の聖騎士（前書き）

私生活やストーリーの変更等で投稿が遅れました。
次もこのようになると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

登場デジモン紹介

カオスグレイモン
世代／究極体　属性／ワクチン種　種族／分類不可
必殺技／ガイアフォース
“カオス三将軍”と呼ばれているデジモンの1体。見た目はブラックウォーグレイモンに似ているが、僅かに装甲に白い部分が存在し、一番異なる点は背中の“ブレイブシールド”に“勇気の紋章”が刻まれている点だ。詳細が全く不明の謎のデジモン。必殺技は、大気中の全てのエネルギーを一点に集中させて相手に向かって発射する『ガイアフォース』だ。

チンロンモン
世代／究極体　属性／データ種　種族／聖竜型　必殺技／蒼雷
デジタルワールドを守護するスーツェーモン、バイフーモンと同じ四聖獣デジモンの1匹であり、東方を守護し強烈な雷撃を放つ。他の四聖獣デジモンと同じく伝説の存在であり、その強さは神にも匹敵すると言われている。またチンロンモンはホーリードラモン、ゴッドドラモン、メギドラモンと共に四大龍デジモンの1匹としても数えられており、もっとも神格化された存在である。しかし、神のような存在とはいえ、簡単に人間や弱者に協力をするようなものではなく、余程の事が無い限り味方にする事は無い。必殺技は、雷雲を呼び寄せ、神の怒りを思わせるような激しい雷を落とす『蒼雷』だ。

第9話　混沌の章　混沌の竜人ＶＳ終焉の聖騎士

オメガモンはカオスシードラモンが出現した現実世界（リアルワールド）を離れて、自分が知っているとあるデジタルワールドに到着すると、広大な草原に着地して深呼吸をした。
デジタルワールドで吸う空気は現実世界（リアルワールド）で吸う空気と違った美味しさがきっとあるのだろう。

「来たようだな、オメガモン」

突然、声が聞こえたのでオメガモンが空を見上げると、巨大で長い半透明な体を持ち、その体の周りに十二個のデジコアを備えて。四つの瞳を持ち、長い鬚のようなものと、蒼く輝く角を供えた巨大なデジモンにして、四聖獣と呼ばれると同時に、“四大竜デジモン”に数えられている最強のデジモンの一角であり、デジタルワールドの東方の守護獣デジモン―チンロンモンの姿が在った。

「貴方が……チンロンモン……（あれがチンロンモン……　大きいと言うよりは長いな……）」

「人間とデジモンの心を持つ、最後の希望よ。改めて名乗ろう。我が名はチンロンモン。この東方の地を見守る役目を持っている四聖獣の一体だ」

チンロンモンの姿をオメガモンはまじまじと見ていた。実力だけでなく、神々しさ、威厳と言った何もかもが自分よりも圧倒的に感じられたからだ。
ちなみに、オメガモンは人間であるので、チンロンモンと同じ四聖獣の一体であるスーツェーモンからはあまりいいようには思われて

いない。

「来てくれてありがたい。既にインペリアルドラモンから聞いているだろう、世界の現状を」

「ああ。黒いオメガモン一派によって、デジタルワールドが混乱していることを聞いた。しかも、黒いオメガモンの正体は私の友人であることも」

そう質問するチンロンモンに対してオメガモンは真剣な表情を浮かべながら答えると、チンロンモンは悲しみの表情を浮かべながら話す。

「“漆黒の聖帝”オメガモンズワルトによって、ロイヤルナイツの過半数が討たれて、世界の守護者がいなくなった世界中で事件が起きている。それだけでなく、オメガモンズワルトは七大魔王を排除し始めているのだ。現在で、リリスモン、ベルフェモン、そして、以前選ばれし子供達のいる現実世界（リアルワールド）に現れたデーモンも、半分の力も出さずに倒された」

「何！？　同盟を結んでいるはずの七大魔王を？　オメガモンズワルトはデジタルワールドを支配しようというのか？」

チンロンモンが告げた初耳の事実にオメガモンは驚愕した。ロイヤルナイツと七大魔王という最強のデジモン達を滅ぼすということは、自分がデジタルワールドを支配すると言うことしか考えられないのだ。そして、その七大魔王相手に本気も出していないオメガモンズワルトの実力にオメガモンに戦慄した。こちらはカオスモン相手に二度も苦戦、向こうはアルカディモンといったイレギュラーなデジモンでしかおそらく倒せない程の実力者なのだ。

「私もそう考えた。何れは我らと戦うつもりであろう。そして、無数のデジタルワールドを一つにまとめて、自分がその世界の守護者になる。そのために、仲間も、邪魔なデジモンも排除した新世界を作るつもりであろう……あくまでこれは我々四聖獣で考えた仮説の範疇なのだが」

「仲間まで殺すとは……　あいつ、結局昔に逆戻りというわけか……　折角、僕と会って明るくなったのに……」

チンロンモンの出した考えに、オメガモンはオメガモンズワルトの性格を考えた上で悲しそうに俯く。オメガモンズワルトは人間だったときは、オメガモンとは異なり、母親は生まれてすぐに死亡し、父親はズワルトが小学生だった時に仕事の同僚に裏切られ、身ぐるみを剥ぎ取られ、自殺した。その時の遺書に『自分以外の存在を一切信用するな』と書かれてあったことが後のオメガモンズワルトの人生に深い影を落としているのだ。

「オメガモン、藤本秀人。お前に辛い思いをさせて本当に申し訳ない」

「私はそれが宿命だと考えているから、今更どうということはない。ところで、任務は？　それに選ばれし子供たちの姿が見えないのだが……」

オメガモンは辺りを見渡しながら疑問の声を上げる。オメガモンがいるデジタルワールドは、選ばれし子供たちがかつて救ったデジタルワールドであり、チンロンモンが守護するデジタルワールドなのだ。

ちなみに、ホメオスタシスとは、デジタルワールドの安定を望む者

である。

「……カオスロード、カオスドラモン一派がこのデジタルワールドに足を踏み入れたのだ。選ばれし子供たちと連絡が取れなかったからお前を呼んだのだ」

「成程な。つまり、このデジタルワールドにいるカオスロードを倒せばいいのだな」

「その通りだ」

「承知した。カオスロード一派は必ずや、このオメガモンが倒してみせましょう。（そして、カオスモン……　そろそろ、我々の戦いに決着をつけよう！！）」

オメガモンの今回の任務は、選ばれし子供達の代わりにカオスロード一派と戦うことだ。カオスロード一派に関してはオメガモンはそこまで悲観的ではない。しかし、問題はカオスモンの方である。そろそろ、『三度目の正直』で倒さないと後が辛くなるのだ。今回で倒すか、再起不能にしないといけないとオメガモンは考えているのだ。

「このデジタルワールドの何処かにカオスロードがいる。　本来ならば、私がやらなければならないのだが、カオス三将軍の中にカオスピエモンがいる。私は一度ダークマスターズによって封印されてしまった。もし、私が封印されれば、デジタルワールドは大変なことになるだろう」

チンロンモンは『デジモンアドベンチャー』の頃よりも少し前にダークマスターズによって封印されていた。その後、選ばれし子供

達の紋章により四聖獣達が封印から解き放たれた際には、チンロンモンは『光』と『希望』の紋章の力によって復活した。
余談だが、バイフーモンは『勇気』と『友情』、シェンウーモンは『誠実』と『知識』、スーツェーモンは『愛情』と『純真』の紋章の力によって復活した。

「確かにその通りだ。四聖獣がいるからこそ、デジタルワールドの安定が保たれているのだからな」

チンロンモンの話を聞いたことで自分の為すべきことを理解したオメガモンはチンロンモンに背を向ける。

「チンロンモン。私はオメガモンズワルトを止めたい。それだけは覚えておいて欲しい」

「そうか。それは友としてか、オメガモンとしてか、どちらだ？」

「両方だ。それが宿命であり、友達として出来ることだからだ」

「それが答えと受け取ろう」

チンロンモンの言葉を背中に受けながらオメガモンは飛び立った。

オメガモンはカオスロードのいる場所に向かっている途中で自身の右手を見ながらカオスモンとの二度にわたる戦闘を思い出していた。

「今度もまたカオスモンは現れる……　今度はどうなるのか……」

オメガモンの脳裏に激しい戦闘で傷つく自分とカオスモン、自身の必殺技であるオメガレイ・シュトロームを使っても倒せずに逃げられるカオスモンがよぎるが、オメガモンは右手を強く握り締めながら弱気を振り払う。

「弱気になってどうする？　そんなことでは前には進めない。ぶつかり合って精一杯やるのが私だろう？」

自分を鼓舞したオメガモンは更にスピードに上げながらチンロンモンから告げられた場所へと向かっていく。

「ここだと言われたな……」

オメガモンはチンロンモンから言われた場所―岩山が並ぶ荒野に到着すると、辺りを見渡した。

「デジモンの反応がしたと思ったら、お前か……」

そこに鈍い黒い装甲に両腕に手甲を装備した竜人が姿を現した。その竜人の姿をオメガモンは知っている。自分とかつて戦った漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンにそっくりな姿をしているからだ。違う点が在るとすれば、僅かに装甲の一部が白く、背中に装備している翼のような盾に勇気の紋章が描かれているだけだ。それ以外は全くブラックウォーグレイモンと変わらない姿である竜人を見つめていると、その竜人はオメガモンを見ると自己紹介を始めた。

「俺の名前はカオスグレイモンだ。　このデジタルワールドを守護するチンロンモンと選ばれし子供たちの抹殺を命じられてここにいる」

「我が名はオメガモン。そのチンロンモンに頼まれて貴様らを抹殺するためにここにいる。戦いを始める前に一つ確認したいことがあるのだが、よろしいか？」

「何だ！？」

良いだろうか？　と言わんばかりに自分に視線を向けてくるオメガモンにカオスグレイモンはどうぞ、と視線で促す。

「君は百本のダークタワーから生まれたブラックウォーグレイモンのデータから生まれたのか？」

カオスグレイモンはオメガモンの質問を聞いて、少し考える。実はカオスグレイモンはブラックウォーグレイモンのデータから生まれてはいないのだ。その場合、ダークタワーの影響が残ってしまい、世界に悪影響を与えてしまうからである。そこで、ミレニアモンはカオスグレイモンを一から造り上げたのだ。

「いや……違うな。確かにそいつの名前は聞いたことはある。だが、俺は完全なるデジモンとして造られたし、何よりその記憶が無い」

「そうか。付かぬことを聞いてすまなかった。では、始めよう」

オメガモンは左腕を軽く振るって左手からグレイソードを射出させると、グレイソードを構えながらカオスグレイモンに言い放つ。

「来い。お前の全てを打ち砕いてやる」
「上等だ。やれるものならやってみろ」
カオスグレイモンもオメガモンの行動に合わせながら、両腕に装備しているドラモンキラーを構える。
「うぉおおおおおっ！！！！」
「ハアァァァァァァァッ！！！！！」
オメガモンとカオスグレイモンは同時に人間の目では追うことの不可能なスピードで武器を構えながら突撃を開始した。
「ウオォォォォォォッ！！ドラモンキラーー！！！」
「ハァァッ！！」
カオスグレイモンは右腕のドラモンキラーをオメガモンに向かって突き出そうとしたが、オメガモンはドラモンキラーの刃が自分に当たる直前で大きく跳躍することでカオスグレイモンの背後に着地する。それと同時に右手からガルルキャノンを展開して、カオスグレイモンに向けて砲撃を撃ち出す。
「ガルルキャノン！！」
「クッ！！」
オメガモンが撃ち出した砲撃を何とか避けたカオスグレイモンはオメガモンの目の前に高速移動をすると同時に左腕のドラモンキラ

ーを振り抜く。

「ドラモンキラーー！！！」

「ブレイブシールド！！」

オメガモンはカオスグレイモンのドラモンキラーの攻撃を左肩に装備しているブレイブシールドで防御した。流石は最強硬度を誇る盾なのか、究極体の攻撃にもびくともしない。

「ショルダータックル！！」

「グッ！！」

オメガモンはブレイブシールドをカオスグレイモンにぶつけることで、カオスグレイモンを突き飛ばすことでカオスグレイモンとの距離を空ける。

「喰らえ！！」

「フッ！！」

カオスグレイモンは両手の間にエネルギー弾を作り上げると、オメガモンに向かって投擲する。オメガモンはそれを避けながらカオスグレイモンの背後に回り込んだ。

「ちょこまかと！！」

「フン！！」

自分の背後にいるオメガモンに向かってカオスグレイモンは右腕のドラモンキラーを突き出したが、オメガモンはグレイソードで防いだ。
オメガモンが右足を蹴り上げることでカオスグレイモンの顎を蹴り飛ばすと、カオスグレイモンは頭に走った鋭い衝撃に苦痛の声を上げながら動きを鈍らせた。

「ティッ！！」

「グッ！！」

オメガモンはその隙を逃さず、今度はカオスグレイモンの胴体に向かってグレイソードを構えると、そのままグレイソードを振り抜いた。

「ハアッ！！」

「グハッ！！」

頭に走った衝撃から立ち直れずに動きが鈍っていたカオスグレイモンは、オメガモンのグレイソードの斬撃を避ける事が出来ずにその身に食らい、後方へと吹き飛ばされる。　オメガモンはそれを目撃しながらも攻撃の手を緩めずに、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

オメガモンが撃ち出したガルルキャノンは寸分違わずにカオスグレイモンに直撃して、辺りに凄まじい土煙を舞い上がらせた。煙の中から身に纏っている鎧の一部が砕け、罅が全体に広がっているカ

オスグレイモンが姿を現した。
カオスグレイモンはオメガモンの目の前に高速移動するとドラモンキラーを突き出した。

「ハァッ！！」

「クッ！！」

先程よりもドラモンキラーの振り抜きが鋭くなっていることにオメガモンは内心で驚愕しながらもグレイソードでカオスグレイモンの攻撃を防いだ。

「がら空きだ！！」

「しまっ！！　グゥッ！！」

カオスグレイモンは残っている片手のドラモンキラーでオメガモンの胸部を攻撃した。
オメガモンは右手のメタルガルルモンを模した篭手で何とかドラモンキラーの攻撃を防ぐと、右手を振り抜くことでカオスグレイモンを突き飛ばした。

「カオストルネード！！」

「オメガブラスト！！」

カオスグレイモンは全身を高速回転させると、漆黒の竜巻となった。そのままオメガモンに向かって突撃を開始した。それを見たオメガモンはガルルキャノンにエネルギーを集束させると、そのまま漆黒の竜巻に向かって集束砲撃を撃ち出した。

「ウオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォッッッ！！！」

カオスグレイモンは更に回転速度を上げることでオメガブラストを突き破ろうとするが、オメガブラストの威力に押されてしまい、後方に吹き飛ばされた。
しかし、カオスグレイモンは瞬時に空中で体勢を整えると、両足を地面につけてブレーキ代わりにしながら吹き飛ばされるのを押さえた。
カオスグレイモンは罅が入っている胸当てを右手で押さえながらオメガモンを睨み付けながら構えを取る。
オメガモンもカオスグレイモンに向かって構えを取りながらカオスグレイモンを睨みつける。

「ウオォォォォーーーー！！！」

カオスグレイモンは叫ぶと同時にオメガモンの目の前に一瞬の内に高速移動すると、そのままドラモンキラーを鋭く突き出す。

「フンッ！！」

カオスグレイモンが突き出して来たドラモンキラーをオメガモンは横に動くことでかわすと、カオスグレイモンは今度はフェイントも混ぜながら次々と並みのデジモンならば蜂の巣になるほどの速さで突きを繰り出す。
しかし、オメガモンはその攻撃を難なくかわす。どうやら、オメガモンの中に存在しているオーグとメルーガのアシストのおかげだろう。

「ハアァァァァァァーーーー！！！」

「フッ！！　確かに君の攻撃は速い！！　でも、攻撃が軽い！！
それだけだ！！　動きが速いだけで一撃一撃に威力がない！！　どこぞの少佐じゃないが、当たらなければどうということはない！！」

オメガモンはカオスグレイモンの攻撃をこのように評すると、一気に反撃に出た。
オメガモンはカオスグレイモンの目の前に高速移動をすると、グレイソードを振りかぶる。

「ハアァァァァァァッ！！　グレイソード！！」

「グゥッ！！」

カオスグレイモンはドラモンキラーでグレイソードの斬撃を防ごうとするが、その直前にオメガモンはグレイソードではなくて、右足蹴りをカオスグレイモンの胴体に向かって叩き込む。

「フッ！！」

「グッ！！何だと！？」

自身が予測していなかったオメガモンの攻撃をその身に食らったカオスグレイモンは苦痛に満ち溢れながら驚愕の声を上げるが、オメガモンは構わずに今度こそグレイソードをカオスグレイモンに向かって振り抜く。

「ハッ！！」

「クッ！！」

カオスグレイモンがオメガモンが振り下ろして来たグレイソードを右手に装備しているドラモンキラーで防ぐと、辺りに甲高い音が鳴り響いた。

「フッ！！」

「クッ！！（あのモーションはガルルキャノンだろう……　砲撃を撃ち出した後は隙が出来る……　一撃一撃が軽いのなら、手数で勝負だ！！）」

すると、オメガモンは距離を取るために後ろに飛んで、着地するとガルルキャノンを構える。
オメガモンのその行動を見たカオスグレイモンはこのままガルルキャノンから砲撃を撃ち出すことを予測すると、左手に装備しているドラモンキラーを構えようとする。だが、再びカオスグレイモンの予測に反してオメガモンはガルルキャノンを使った攻撃は行わず、グレイソードとガルルキャノンを一旦戻すと、両手に凄まじい冷気と激しい炎気を纏わせると、ダブルトレントを繰り出した。

「ダブルトレント！！」

「何だと！？　クッ！！　ブラックシールド！！」

自分に向かって迫り来る冷気と炎気の二連撃を防ぐべく、カオスグレイモンは背に在るブラックシールドを両手に装着しながら前方に向かって盾の様に合わせることで、ダブルトレントを防いだ。
しかし、紅炎の輝きと蒼氷の煌きによって、ブラックシールドは一撃で使い物にならなくなった。

「グレイソード！！」

「クッ！！」

オメガモンが自分に向かってグレイソードを振り抜くのを目撃したカオスグレイモンは慌てて上空に浮かび上がる事でグレイソードの斬撃を避けた。
それを目撃したオメガモンは、空中に逃げたカオスグレイモンに即座に近づくと、グレイソードから究極剣舞―ソード・オブ・ルインを繰り出した。

「ソード・オブ・ルイン！！」

「グアァァァァァーーーーー！！！！」

次々と放たれるグレイソードの斬撃をその身に喰らい続けるカオスグレイモンは、鎧のあちこちに大きな傷を残しながら、地上に向かって墜落した。
オメガモンも地上に降り立つと、地面に叩きつけられた衝撃から立ち直って空に浮かぶカオスグレイモンを見る。
カオスグレイモンは息を乱しながらオメガモンに質問をする。

「……何なんだ？　何故、お前は強い？　それとも、俺が弱いのか？」

「君は弱くないさ。かといって、私も強いわけではない。でも、私の場合は、同じ相手に2回も戦って逃げられているから戦い方を工夫しないと不味いなと思ってね」

落胆したような声を上げたカオスグレイモンにオメガモンは真面

目に答える。
まだまだ期間は短いものの、オメガモンは究極体デジモン、しかも名のあるデジモンと戦っている。
彼らに勝つにはどのようにすればいいのかを考えるのは当然のことである。

「ふっ……　経験の差か……だが、俺はお前という強敵と戦えて満足できた……　最後は全力で行くぞ！！」

「来い！！」

カオスグレイモンは笑みを浮かべながら両手の間に大気中のエネルギーを集め始めると、巨大な超高密度の高熱エネルギー弾を作り出す。
それを見たオメガモンはガルルキャノンの砲口にエネルギーを集束し始める。その証拠にガルルキャノンの砲口に少しずつではあるもののエネルギー球が出来始めている。

「ガイアフォース！！」

「ブラストレイ・シュトローム！！」

気は熟したと判断したカオスグレイモンはエネルギー弾をオメガモンに向かって全力で投擲すると当時にオメガモンは左手のグレイソードでガルルキャノンを支えながらブラストレイ・シュトロームを撃ち出した。

「グアァァァァァァァーーーーーー！！！！！！」

投げられたガイアフォースと撃ち出されたブラストレイ・シュト

ロームはお互いにぶつかり爆発を起こすが、それでもブラストレイ・シュトロームの威力は衰えず、そのまま直進するとカオスグレイモンの胸を貫いた。
ブラストレイ・シュトロームに胸を貫かれたカオスグレイモンは苦痛の叫びを上げながら体がデータ粒子に変わり始める。
だが、カオスグレイモンは自身の死を感じても笑みを浮かべて、自分を打ち破ったオメガモンに質問をする。

「オメガモン……　お前はこれからの激しい戦いで……何を目指し……何処まで自身の正義を貫くのか……？」

「私は正義の聖騎士として戦い続ける……無論、死ぬまでだ」

言葉を言い終えたカオスグレイモンの体は完全にデータ粒子に変わりながら消滅した。
そのデータ粒子を吸収したオメガモンは真剣な瞳をしながら答えた。

「砕け散れ！！」

「クッ！！」

突然、何者かの声が聞こえたことに驚愕したオメガモンが上空を見ると無数のエネルギー弾が自分に向かって降り注いでいる。
オメガモンは無数のエネルギー弾の着弾地点を全て予測すると、素早く動きながらそれらを回避した。

「ウオォォォォォォォォォッ！！！！」

「クソッ！！」

無数のエネルギー弾を全てよけきって上空に飛んだオメガモンに向かってカオスモンは右手のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えながら突撃してきた。
そして、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドでオメガモンの胸部を斬り付ける。
ちなみに、先程の攻撃はダークテンペストである。

「ハァッ！！」

「グハッ！！」

その衝撃でオメガモンは地面に押し倒される。オメガモンの近くに着地したカオスモンはオメガモンに言い放つ。

「私は混沌の名を持つ者でありながら、お前の影だ。お前が存在する限り、私が消えることは無い！！　つまり、お前と言う存在が何かを照らす限り……私も常にそこに存在している」

言葉を言い終えると、カオスモンは倒れているオメガモンを右足で蹴り飛ばす。
オメガモンは後方に飛ばされて地面に叩きつけられると地面に転がる。

「フン！！」

「ガハッ！！」

蹴り飛ばされた衝撃と威力に顔を歪めるオメガモンを見ても何も思わないカオスモンは、更に立ち上がろうとしているオメガモンを左足で蹴り飛ばす。

「ティッ！！」

「グォッ！！」

再度地面に転がるオメガモンを立たせたカオスモンは、オメガモンの腹部に向かってＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜く。

「ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド！！」

「グハッ！！」

腹部に走った鋭い痛みにオメガモンは耐えながらカオスモンを睨みつける。

そのオメガモンを見ながらカオスモンはある事実を告げる。

「良いことを教えてやろう……　つい先ほど、カオスロードが選ばれし子供たちのいる現実世界（リアルワールド）に姿を現した。カオスロードが選ばれし子供たちを倒す。カオスグレイモンはお前の足止め役。そして、私は弱ったお前を仕留める……　そういう作戦だったのだよ……」

「そうか……　だが……忘れていることがあるぞ……」

「何だろうか？　私の計算に狂いは無いはずだが？」

カオスモンの告げた事実に薄々ではあるものの気づいていたオメガモンは、笑みを浮かべるとカオスモンに言い放った。

「貴様は今日、私によって抹殺される！！　ガルルキャノン！！」

「グゥッ！！」

言葉を言い終えると同時にオメガモンはガルルキャノンから砲撃をカオスモンに向かって撃ち出した。まさかのオメガモンの反撃に反応できなかったカオスモンは砲撃を胸部に食らったことで苦痛の声を上げる。

「かかってこい！！」

「空中決戦か！！　面白い！！」

オメガモンは上空に移動したのを見たカオスモンは、オメガモンを追いかけながら左手のギガスティックキャノンから砲撃を次々と連射する。

「ダークプロミネンス！！」

「フッ！！」

オメガモンはダークプロミネンスを次々とよけきった。
前のオメガモンなら確実に食らっていたはずだと考えていたカオスモンは苦い表情をしながらも今度はダークテンペストを放った。

「ダークテンペスト！！」

「ムッ！！」

カオスモンの放ったダークテンペストの闇の砲撃は無数に破裂すると、四方八方からオメガモンに向かって襲いかかる。オメガモンはそれらを見極めながら避け続けると、今度はカオスモンがＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを突き出しながら襲いかかる。

「ハァアアアアアアアアアアッ！！！」

「ウオォォォォォォォォッ！！！」

オメガモンはグレイソードで迎撃すると、お互いに鋭く相手に向かって武器を振るい続け、凄まじい応酬を繰り広げ始める。二十合ほど撃ち合った途中で隙を見つけたオメガモンはカオスモンの胸部に向かってグレイソードを振り抜いた。

「フン！！」

「グッ！！」

吹き飛ばされるカオスモンの真上に移動したオメガモンはガルルキャノンから圧縮エネルギー弾をカオスモンに向かって撃ち出す。

「ガルルキャノン！！！」

「クゥッ！！」

ガルルキャノンを背中に喰らったカオスモンは地上に向かって真っ逆さまに墜落すると、地面に叩きつけられた。

「ムン！！」

「グゥッ！！」

その衝撃に顔を歪めながらも立ち上がったカオスモンに向かって、オメガモンはグレイソードを振り抜く。

「ダァッ！！」

「フン！！」

グレイソードの斬撃を喰らったカオスモンは右足を鋭く蹴り上げるが、オメガモンは右ひじで防御した。
オメガモンとカオスモンはお互いに離れると、オメガモンは右手に凄まじい冷気を、カオスモンは左手に深い闇を発生させると同時に相手の顔面に向かってストレートパンチを叩き込む。

「ハァッ！！」

「ヌン！！」

お互いに放った攻撃はクロスカウンターを起こして、お互いの頬に当たった。その時に、辺りに火花が散った。
その衝撃でオメガモンとカオスモンはお互いに地面に片膝を付いた。

「ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド！！」

「チィッ！！」

先に立ち上がったカオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをオメガモンに向かって振り抜くと、オメガモンは上空に吹き飛ばされる。

「ウオオオォォォォォォォォーーーーー！！！」

「何！？　クッ！！」

上空に吹き飛ばされたオメガモンは体勢を立て直すと、カオスモンに向かってグレイソードを突き出しながら突撃した。
カオスモンは何とかそれをかわしたが、オメガモンのパワーアップの速さに疑問を抱いた。

「ガルルキャノン！！」

「まだやれるのか！！」

オメガモンはカオスモンに向かってガルルキャノンから砲撃を連射する。カオスモンは横に動きながらオメガモンの撃ち出している砲撃を避け続ける。
カオスモンはオメガモンのメンタルの強さに思わず悪態を付いた。

「ダークプロミネンス！！」

「グァッ！？」

カオスモンはオメガモンの足元に向けてダークプロミネンスを撃ち出した。それによって、オメガモンの視界は一時的ではあるものの閉ざされてしまった。

「そろそろ楽にしてやる！！　ダークレイ・シュトローム！！」

「ガァァァァァッ！！」

カオスモンは直ぐ様闇のエネルギーを集束した砲撃―ダークレイ・シュトロームを撃ち出した。オメガモンは胸部に砲撃を受けて苦痛の声を上げながら爆炎の中に姿を消していく。
それを見たカオスモンはようやくオメガモンを倒したことを実感し

た。

「フン……　他愛もない……」

オメガモンを倒したことを確認してその場から去っていくカオスモンだったが、爆炎が次第に消滅していくのを見ると、表情を変えた。

何故なら、そこには全身が光り輝いているオメガモンの姿があるからである。

「何！？　一体どういうことだ！？」

「闇のエネルギーを光のエネルギーに変換して私の一部にさせてもらった。そのおかげで私はまたパワーアップ出来たよ。お礼を言うよ。ありがとう」

「うっ、嘘だーーーーー！！」

オメガモンの言葉を聞いて、カオスモンは現実を受け入れることができずに絶叫する。

やっと悲願を達成したはずなのにそれを裏切られたからだ。

そんなカオスモンの様子を無視しながらオメガモンはガルルキャノンの砲口にエネルギーを集束し始める。

「現実だ！！　ブラストレイ・シュトローム！！」

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！」

オメガモンがブラストレイ・シュトロームを撃ち出すと、カオスモンの胸部に直撃して、カオスモンは苦痛の叫び声を辺りに響かせ

た。ブラストレイ・シュトロームが直撃した箇所からはカオスモンの電脳核(デジコア)が少しではあるものの、露出している。

「ウッ……ウゥ……　どうやら、私の想像を超えた成長を遂げているみたいだな……　また、楽しませてもらおう……」

カオスモンは電脳核(デジコア)が露出している部分を押さえながら何とか声を出すと、そのまま姿を消した。

「また……逃げられたか……　でも、前よりは成長出来ているみたいだな……」

三度目の正直にならなかったことに落胆しながらも後一歩の所まで迫ったことに成長を感じたオメガモンの表情は少しだけではあるものの、明るかった。

しかし、戦いのダメージによってオメガモンは片膝を付いた。

すると、空高くに存在していた雲の一部が吹き飛び、其処からチンロンモンが姿を現すと、オメガモンの方に向かって来た。

それに気が付いたオメガモンは何とか立ち上がりながら表情を作る。

チンロンモンはその事に気が付くと、険しい顔をしながらオメガモンの姿を見つめる。

「大丈夫か？　かなり激しい戦いだったみたいだが？」

「カオスモンとの戦いがあったからな……　はは……また、逃げられるとは……」

オメガモンはチンロンモンに体のことを心配されることは微塵も考えていなかったみたいで、自分を嘲笑った。

「選ばれし子供達のいる世界にカオスロードが出現した。選ばれし子供たちだけでは手が足りない。済まないが行ってもらえないか？」

「もちろん」

チンロンモンの願いを聞いて飛び立とうとするオメガモンにチンロンモンは忠告した。

「忠告する。今のお前には、ダメージの蓄積がある。エイリアスは通常のデジモンよりも力が強いが、傷の治りが遅い。オメガモンだからと言って自分を苦しめない方がいい。選ばれし子供達だって戦えるのだぞ」

「だが……私はオメガモンになった……　オメガモンは正義のためにしか戦わない高潔な聖騎士……　そして、オメガモンは何なのか、何故自分はオメガモンが好きなのかを探しているだけだ……」

「そうか。それほどまでにオメガモンに愛着を持っているとはな。行くがいい。行って自分の正義を貫いてこい」

「また会えたらデジモンの話を聞かせてもらおう。全世界のデジモンを心から愛している者達と共に」

そう言うとオメガモンは次元を歪ませながら選ばれし子供たちのいる現実世界（リアルワールド）に向かって行った。チンロンモンはそれをいつまでも見送っていた。

第9話　混沌の章　混沌の竜人ＶＳ終焉の聖騎士（後書き）

オリジナル技紹介

カオストレント……ダブルトレントのカオスモン版。カオスモンの両手から放たれる光と闇の二連撃。

オメガシールド……オメガモンが張る光のバリア。

エボルレイ・ジェネレード……相手の攻撃を受け止め、それを光エネルギー弾に変換して撃ち返す技。

ダークテンペスト……ギカスティックキャノンから巨大なエネルギー弾を撃ち出す。闇の球は敵の頭上で小さな小弾に分裂し、雨のように降り注ぐ。一発一発が必殺技と同等な厄介な技。

オメガセイバー……デュークモンのロイヤルセイバーの二番煎じ。

ロイヤルスラッシュ……グレイソードに光エネルギーを纏わせて相手を斬り付ける。

オメガレイ・シュトローム……光エネルギーを使って放つ集束砲撃。

オメガストームトルネード……ブラックウォーグレイモンのブラックストームトルネードの二番煎じ。

オメガムーブ……体を光らせて行う高速移動。

アブソリュート・ゼロ……大気中の水分を集束して放つ絶対零度の

冷気弾。凍結すれば僅かな衝撃で分子崩壊する。

カオスシールド……カオスモンが張る光と闇のバリア。

ブラストレイ・シュトローム……エネルギーを極限までチャージして放つ集束砲撃。オメガレイ・シュトロームの上位互換技。わかりやすく言えば、ＺＯ●ＤＳの荷電粒子砲。集束と拡散、集光の３タイプが使える。

ダークレイ・シュトローム……ギカスティックキャノンから放たれる闇のエネルギーの集束砲撃。

次回予告

カオスロードとカオスピエモンとの戦いに挑む選ばれし子供たち。
しかし、その力に苦戦を強いられてしまう。
その時、駆けつけるオメガモン。
オメガモンと選ばれし子供達は共に戦う。

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

オメガモン連合軍！？　カオスロードとの全面対決！！

オメガモンは戦う。自分が憧れていた者達と憧れていたデジモンと共に。

第１０話　混沌の章　オメガモン連合軍！？　カオスロードとの全面対決！！

今回、初めて原作とコラボ（？）した回です。
何処かおかしな点があれば報告お願いします。

今回、登場したデジモンの紹介が多いので次回と前後編形式で紹介させてください。

第１０話　混沌の章　オメガモン連合軍！？　カオスロードとの全面対決！！

―とあるデジタルワールドにあるミレニアモン専用の研究室―

「随分と派手にやられた物だな……　電脳核（デジコア）の部分が特に不味い……」

治療カプセルの中で治療しているカオスモンの状態を見ながら、ミレニアモンは腕組みをしながらどうしたものかと考える。確かにミレニアモンなら治せないことは無いが、次戦えば、オメガモンに今度こそ抹殺されてしまう可能性が高い。今回、何とか逃げることが出来ただけマシというものだろう。

それに備えた切り札もあるが、一歩間違えばそれはカオスモンの死に繋がる諸刃の剣なのだ。そのため、ミレニアモンはどうするかを真剣に悩んでいた。

「カオスモン、お前はどうしてもオメガモンを倒したいか？」

「ああ。例え、明日が無くても」

「もし、今よりも強大な力を手に入れることが出来るとしたらどうする？」

「本当か！？」

カオスモンの決意を聞いて覚悟を決めたミレニアモンは、治療用のカプセルに入っているカオスモンに見えるようにモニターを回すと操作をしながら説明を始めた。

「お前にスレイプモンとヴァロドゥルモンを融合させる。そうすれば、お前は強大な力を得ることは出来るが、力の制御が非常に難しくなる。私でも、こればかりは不可能だ。それでも、お前は受け入れるのか？」

「……頼む」

ミレニアモンの最終警告とも取れる言葉を聞いたカオスモンは少し考えると、真剣な表情で言った。それを聞いたミレニアモンは準備に入った。

（既にカオスモン自体も限界に近い。ダメージの蓄積は私の想像以上に激しかった。次、戦えば勝敗は関係なくカオスモンは死ぬ。恐らく、それがカオスモンの最後の戦いになる。それなら、せめて悔いのないように戦わせるべきだ）

ミレニアモンはカオスモンの未来に少しだけ悲しみを見せたが、すぐに表情を切り替えると作業に入った。

エイリアスは人間とデジモンの融合で誕生する半人間・半デジモンのことを指す。

彼らは通常のデジモンよりも物凄い力を秘めていて、そのデジモンには本来使用できない力や有り得ない現象を使えるのだ。

人工エイリアスもその例に漏れないのだが、一つだけ問題があるのだ。

人間とデジモンの融合を再現しようとしたところ、科学的には再現可能なのだが、ダメージの蓄積によって、余り長くは戦えない問題が浮上した。その理由はデジモンと人間の関係や、電脳核（デジコア）の問題……等々ある。よって、人工エイリアス量産は不可能になったのだ。

「ギギギ……」

そんなミレニアモンを、超究極体と呼ばれて恐れられているデジモンが入っているカプセルと7体のデジモンが表示されているモニターだけが見ていた。

―選ばれし子供達が住んでいる現実世界（リアルワールド）―

「これで全部だな……」

「だいぶ買ったね……」

『ディアボロモンの逆襲』から数ヶ月後のとある冬の休日に、八神太一と八神ヒカリの兄妹は買い物を終えて、お台場海浜公園の近くの道を歩いていた。
もちろん、彼らのパートナーデジモンも一緒である。

「今日の夕ご飯何だろうね？」

「アグモン、食べ過ぎるなよ。この前、食べ過ぎてお腹壊したんだろう？」

「だって、ご飯が余りにも美味しすぎて……」

太一は自分のパートナーデジモンである黄色いトカゲの様なデジモンーアグモンを嗜める。アグモンは何処ぞのサーヴァントみたいに食いしん坊なのだ。

「ッッ！！　あれ見て！！」

突然、お台場海浜公園の上空から不気味な唸り声が鳴り響いたため、太一達はお台場海浜公園に向かった。そこに着くと、ヒカリのパートナーデジモンである白いネズミの様なデジモンーテイルモンが空を指さした。
太一とヒカリ、アグモンが視線を上げると、青空に真っ黒な闇が現れた。

「なっ、何だ、あの闇は？」

「わからない。でも、嫌な予感がする……」

太一の疑問にテイルモンは冷静に答える。
その瞬間、漆黒の闇の中から2体のデジモンが現れると、海面に向かって落下したが、危なげなく海面に足を着地させた。
1体のデジモンは、赤色の装甲に全身を包み、背中に2門のキャノン砲を装備しているマシーン型デジモンーカオスロードことカオスドラモンだった。

「初めまして、と言うべきだな。選ばれし子供たち。我が名はカオスドラモン。貴様らには特別に本名であるカオスロードと呼ぶことを許可しよう。ありがたく思うがいい」

『……』

カオスロードの第一声を聞いた太一達は言葉を失い、呆然としていたが、もう1体のデジモンの姿を見ると、驚いた。
何故ならば、自分たちの視界の先に居るデジモンは既に居ない筈の存在であり、決して忘れる事が出来ない因縁の相手でもあるからだ。
背中のトランプボックスに四本の剣を刺して、ピエロのような容姿

をしている究極体デジモン。しかし、服装が赤色から黒色へと変化している。
嘗てデジタルワールドを再構成して『スパイラルマウンテン』を作り上げたダークマスターズのリーダーでもあるデジモンのデータを使ってミレニアモンが造り上げたデジモンーカオスピエモンだ。

『ピエモン！？』

「ホホホホホッ！久しぶりですね、選ばれし子供たち」

「ピ、ピエモン！？何故お前が此処に居る！？」

太一は自身の視界の先に存在しているカオスピエモンを見て驚愕した。
ピエモンは三年前にホーリーエンジェモンの力によって、決して脱出する事が出来ない亜空間に葬られたはずだった。
如何に究極体で在ろうと脱出する事は不可能に近い空間にピエモンは消え去ったのだ。
しかし、今、そのピエモンが選ばれし子供たちの前に現れた。
決して別個体ではない。別個体ならば、選ばれし子供たちの事を知る筈はないからだ。選ばれし子供たちの事を知っていると言う事は、紛れも無く目の前に居るのはダークマスターズのピエモンに間違いないのだ。
居ない筈の存在に太一達が困惑の表情を浮かべていると、カオスピエモンは可笑しそうに笑い出す。

「ハハハハハハハハッ！私が居るのが、そんなに変ですか？でしょうね……確かに私はホーリーエンジェモンの力によって亜空間に消え去り、消滅した……だが、私はあの方によって復活したのです」

「あの方？　一体誰なんだ！！」

「ミレニアモン様ですよ。私を亜空間から助け出してくれたお方です！そして、私をパワーアップさせてくれた方でもあります」

太一の疑問にカオスピエモンは笑いながら答える。

「太一！！僕があいつ等を抑えるから、その間に大輔達に連絡して！！」

「アグモン！！　幾らお前でも究極体を二体も相手には！！　しかもあいつは！！」

それを横から見ていたアグモンは決意に満ちた表情を浮かべながら太一に声を掛けるが、太一は心配そうな声を上げる。
何せ三年前の時でさえもピエモンは、ウォーグレイモン、メタルガルルモンの二体の究極体だけでは足らず、更に多くのデジモン達を加えた総力戦で挑むことで漸く倒す事が出来た強敵である。
もし三年前の時にホーリーエンジェモンが現れていなければ、ウォーグレイモン達はピエモンに敗北していただろう。
その上、今回はカオスロードも存在している。幾らチンロンモンの力を得たインペリアルドラモンとウォーグレイモンや、他のデジモン達が居ても勝てる確率は低い。
しかし、アグモンの表情は変わらなかった。

「大丈夫！僕にはチンロンモンから貰った力が在る！勝てないまでも時間は稼げるから！その間に大輔達に連絡をお願い！」

「……分かった。だけど、無理はするなよ！」

「ああ！」

太一の言葉にアグモンは頷き、それを確認した太一はポケットに手を入れ、中からデジヴァイスを取り出しアグモンに向けて掲げると、デジヴァイスがオレンジ色に輝き、デジヴァイスから光が飛び出しアグモンに直撃する。

「アグモン！！ワープ進化！！！」

光を浴びたアグモンが叫ぶとアグモンの体はオレンジ色の光に包まれ、二つの姿が影の様に現れ、その姿が消えると共にオレンジ色の光は収まり、アグモンが立っていた場所には、銀色の頭部に胸当てを付けて、背中の外郭には翼のような物を装備して、体に黄金色に輝く鎧を身に付けて、赤い髪をなびかせた黄金の竜人―ウォーグレイモンが立っていた。

「ウォーグレイモン！！！」

「頼んだぞ！！　ウォーグレイモン！！」

太一の言葉に答える様にウォーグレイモンは頷くと、瞬時に海面に浮かんでいるカオスピエモンの目の前に移動し、右腕のドラモンキラーでカオスピエモンを殴り付ける。

「喰らいなさい！！　エンディングスナイプ！！」

ウォーグレイモンの攻撃を紙一重の差でよけたカオスピエモンは、両手に電気の帯を生み出すと、ウォーグレイモンに向かって振り下ろす。

「クッ！！」

エンディングスナイプを受け止めたウォーグレイモンに向かって、カオスロードは背中の2門のキャノン砲―ハイパームゲンキャノンから強力な砲撃を放った。

「ハイパームゲンキャノン！！」

「グッ！！」

ウォーグレイモンは上空に逃げることで砲撃を避けるが、その隙を逃すはずがないカオスピエモンは背中に背負っているトランプボックスから四本の剣の内の二本を引き抜くと、それらをテレポートさせた。

「トランプソード！！」

「グァッ！！」

トランプソードはウォーグレイモンの目の前に迫ってきたが、ウォーグレイモンは何とかそれを両腕のドラモンキラーで弾いた。
その後もウォーグレイモンはカオスロードとカオスピエモンの連携の前に防戦一方に追い込まれて行った。
その様子を見ていた太一達は焦った表情を浮かべながら戦い続けるウォーグレイモンを見つめていた。

「クソッ！！！やっぱり、ウォーグレイモンでも勝てない！　ヤマトや大輔達はまだなのか？」

「私が進化しても駄目みたいね……」

ウォーグレイモンの苦戦を見て、テイルモンは進化して参戦しようと思ったが、断念せざるを得なかった。
もし、ネフェルティモンに進化したとしても、成熟期クラスの力しかないネフェルティモンでは戦いに割って入った瞬間にやられてしまうことが目に見えているのだ。

「ふむ……ミレニアモンからの命令で選ばれし子供たちも抹殺しろと言われていたな……　ちょうどいい……　死んでもらおう……」

カオスロードはミレニアモンからの命令を思い出すと、ハイパームゲンキャノンの照準を太一達へと向ける。

「ッ！！止めろ！！」

「させません！！　トイワンダネス！！！」

カオスロードの狙いに気が付いたウォーグレイモンは焦った表情を浮かべながらカオスロードに向かうが、それを阻む様にカオスピエモンが立ち塞がる。
カオスピエモンは両手をウォーグレイモンに向かって突き出すと、凄まじい威力の衝撃波―トイワンダネスを放った。

「グハァ！！」

「ウォーグレイモン！！」

トイワンダネスを喰らったウォーグレイモンは後方に吹き飛ばされてしまった。
それを確認したカオスロードはハイパームゲンキャノンから砲撃を

太一達に向かって撃ち出した。

「ハイパームゲンキャノン！！」

「太一ぃぃぃぃぃぃぃぃぃーーーーー！！！！！」

「諦めるな！！」

強力な砲撃が太一たちに向かって放たれて、ウォーグレイモンが悲痛の声を上げて叫んだ瞬間、何者かの声が響くと同時に強く、それでいて優しい光が太一達の目の前に降り立った。

『なっ！？』

「あれは……」

「ウォーグレイモンとメタルガルルモンの腕をしているデジモン！？」

そこにいる面々の驚愕を気にせずにデジモンは右手の篭手で砲撃を受け止めると、それを光に浄化してエボルレイ・ジェネレードの進化版、クロスレイ・ジェネレードとして右拳から撃ち返した。

「クロスレイ・ジェネレード！！」

「グアッ！！」

真正面からクロスレイ・ジェネレードを喰らったカオスロードは苦痛の声を辺りに響かせると、苦しそうにクロスレイ・ジェネレードを喰らった箇所を押さえる。

「大丈夫か？」

「あっ……　ああっ……」

そのデジモンはウォーグレイモンの元に駆け寄ると、ウォーグレイモンに手を差し伸べた。
ウォーグレイモンはその者の手を借りて立ち上がると、その者の姿を見て驚愕した。
そのデジモンは、自分とメタルガルルモンがジョグレス進化することで誕生するデジモンであるからだ。

「オメガモン！？」

「初めまして、ウォーグレイモン」

その者―オメガモンは、つい先ほどこの現実世界（リアルワールド）に到着して、ウォーグレイモン達の気配を感じてここに来たのだ。
オメガモンはカオスロードとカオスピエモンの方に顔を向けると、険しい声を上げる。

「随分と好き勝手してくれたものだな、カオスロード、カオスピエモン……いや……ムゲンドラモンとピエモンと呼ぶべきかな？」

「嘘！？」

「カオスロードがムゲンドラモン！？」

「どういうことだよ！？」

オメガモンの言葉を聞いたヒカリとテイルモンと太一は驚愕する。ウォーグレイモンがムゲンドラモンを倒した時に彼らはその場所にいたからだ。

「ほぉ……　なかなか鋭い奴だな。何故わかった？」

「この世界に来る前にカオスシードラモンと戦ったからだ。奴は自分をメタルシードラモンのデータを使って造られたと言っていたから、同じダークマスターズのデータを使ってデジモンを造っても何ら不思議ではない。それに、ミレニアモンには歴史改竄能力があるから仮にデータが取れなくても復活させて強化させる手もある。自分の力を使わずに手駒を増やし、弄ぶ、卑劣で薄汚いやり方だよ。忌々しい」

オメガモンは吐き捨てるように言うと、カオスロードとカオスピエモンを睨みつける。

「随分と言うものだな。どうする？　我と遊ぶか？　それともあいつらに加勢するか？」

「貴様の言う遊びに付き合おう。どうやら、役者が揃ったようだからな。カオスピエモンは私ではなく、選ばれし子供たちが相手になるだろう」

オメガモンが言葉を言い終えると、オメガモンとカオスロードの上空を巨大な体と背に翼を生やした四足歩行の竜ーインペリアルドラモン・ドラゴンモードと、その背に乗った本宮大輔と一乗時賢、泉光子郎、金色の体に金色の翼を持ったペガサスの様なデジモンーペガスモンに乗った高石タケルと火田伊織と彼のパートナーデジモンであるアルマジロの様なデジモンーアルマジモン、赤い翼に頭部

に二本の角を生やした巨大な鳥型デジモン―アクイラモン乗っている紫色の髪に眼鏡を掛けた少女―井ノ上京、械的な青い鎧で身を包み、両肩にミサイルランチャーを装備し、背中に機械的なウイングを備えた蒼い狼―メタルガルルモンに、石田ヤマトがお台場海浜公園に到着した。

「さて……始めようか……　お互いの信念をかけた一騎打ちを！！
ウオオオォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

「ハイパームゲンキャノン！！」

左手からグレイソードを射出すると、全力で突撃を開始したオメガモンに向かってカオスロードは背中のハイパームゲンキャノンから砲撃を撃ち出し、戦いが始まった。

「太一さん！！　あのオメガモンは一体！？」

「わからない。でも、俺たちを守ってくれたんだ。それに、カオスロードとカオスピエモンのことを知っていたんだ」

インペリアルドラモン・ドラゴンモードから降りて、太一の近くに来た大輔が戦いを始めたオメガモンの姿を見て、太一に質問した。太一はオメガモンの姿を見ながら答えるが、実際は何者なのかがわからなかった。

「それより、光子郎……　ピエモンが復活したんだ……　オメガモンの話だとミレニアモンってデジモンが関係していると……」

「ミレニアモンが……」

太一が光子郎に話すと、賢は過去を思い出した。
賢は小さい時に、ミレニアモンと戦ったことがある。何とか倒せたが、ミレニアモンは死ぬ前に暗黒の種をばら蒔き、賢の身体に植え付けた。そのせいで賢はデジモンカイザーになったのだ。
ちなみに、この内容はワンダースワンのゲーム『デジモンアドベンチャー０２　タッグテイマーズ』と『デジモンアドベンチャー０２　ディーワンテイマーズ』で語られている。

「そのようですね。ゲンナイさんから連絡があったんです。それにあのオメガモンは何だかテントモン達と雰囲気が違うんですよ」

「雰囲気が？」

「ええ。何だか僕達に近いようでいて、それでいてデジモンなんですよ」

光子郎はノートパソコンのキーを叩きながら、カオスロードと戦っているオメガモンの姿を見る。

「そのオメガモンの正体も気になりますが、まずはカオスピエモンを倒しましょう」

「ヒカリちゃん！！」

「はい！！」

京とヒカリの心が一つになった瞬間に、二人のＤ－３が強く光り輝き始め、アクイラモンとテイルモンの体が光へと変化し始めた。

「アクイラモン！！」

「テイルモン！！」

『ジョグレス進化ッ！！！！』

アクイラモンとテイルモンが同時に叫びあった瞬間に、光へと変わった二体は一箇所に集まると、光が消えた後には、目の辺りにヘッドスコープの様な機械をつけ、腰にベルトを巻き、両腕に鳥の翼を想わせる様な羽を付けた獣人型デジモン―シルフィーモンが立っていた。

「シルフィーモン！！」

「伊織君！！　ピエモンは僕達が総力戦でようやく勝てた相手。全力で行こう！！」

「はい！！タケルさん！！」

タケルと伊織がそう同意しあった瞬間に、Ｄ―３が強く光り輝き始め、パタモンが進化したエンジェモンとアルマジモンが進化したアンキロモンの体が光へと変化し始めた。

「アンキロモン！！」

「エンジェモン！！」

『ジョグレス進化ッ！！！！』

アンキロモンとエンジェモンが同時に叫びあった瞬間に、光へと変わった二体は一箇所に集まり、光が消えた後には土偶のような顔と体を持ち、背中に天使のような羽を持った突然変異型デジモン―シャッコウモンが立っていた。

「シャッコウモン！！」

進化を終えたシルフィーモンとシャッコウモン、インペリアルドラモン・ドラゴンモードとウォーグレイモン、メタルガルルモンはカオスピエモンと睨み合う。

「フフフ……　知らない顔もいますが関係ありません……　今度こそ倒させていただきますよ……」

カオスピエモンからは物凄い量の殺気が放たれているが、ウォーグレイモン達は動じない。誰も逃げる事は無く、全員が同時に動き出す。

『ウオオォォォォォォォーーーーー！！！』

選ばれし子供達とカオスピエモンの因縁の戦いが始まった。

その頃、オメガモンとカオスロードの戦いはと言うと……

「ウオオォォォォォォォォーーーーー！！！」

「ハイパームゲンキャノン！！」

自分に向かって突撃して来るオメガモンに向かってカオスロードは背中のハイパームゲンキャノンから砲撃を撃ち出す。

「フッ！！」

「何！？」

オメガモンは海面を素早く駆けながらカオスロードの砲撃を避け続け、そして海面を勢いよく蹴りつけると、巻き上がった海水の幕で自身の体を覆い隠す。
カオスロードはその様子に砲撃を止めて、オメガモンの姿を発見にしようとすると同時に、海水の幕からオメガモンが飛び出し、そのままカオスロードを飛び越えながら、体を反転させると同時に右手を振って、ガルルキャノンを展開すると同時に砲撃を連射する。

「ガルルキャノン！！」

「グワァァァァァァァァァーーーーー！！！」

オメガモンの連射砲撃を食らったカオスロードは苦痛の叫びを上げながら、爆発で発生した煙の中に姿を消して行く。
その様子を見てもオメガモンは油断無く構えをカオスロードに向かって取っていると、装甲にダメージの痕があるカオスロードが現れる。

「やるものだな。このレッドデジゾイドが無ければ死んでいたぞ」

「それは良かったな。だが……貴様が私を倒せると思っているのなら……その考えを消去（デリート）するまでだ！！」

「戯言を……　やってみせろ！！　デストロイドハーケン！！」

「ガルルキャノン！！」

カオスロードは右手のカオスクローから致死ウィルスが注入されている有機ミサイルーデストロイドハーケンをオメガモンに向けて発射したが、オメガモンはガルルキャノンの砲撃で相殺した。
オメガモンがカオスロードに向かってグレイソードを構えながら突撃すると、カオスロードは右手のカオスクローをオメガモンに向かって振り下ろした。

「カオスクラッシャー！！」

「グレイソード！！」

オメガモンは自分に向かって振りおろされたカオスクローをグレイソードで防いだ。
辺りに甲高い音が鳴ると共に、火花も散る。
オメガモンは右手のガルルキャノンを一度戻すと、カオスロードの胴体に向けて右拳から光エネルギーを集中させながら繰り出すパンチージェネレードナックルを打ち出した。

「ジェネレードナックル！！」

「グハァッ！！」

ジェネレードナックルが当たった箇所から火花を散らしながらカオスロードは吹き飛ばされる。

「もう終わりか？」

「フッ！ハハハハハハハッ！！　馬鹿め！！　今のは様子見よ！！　今から本番だ！！　カオスロード！！　X進化！！」

カオスロードが叫んだ瞬間、カオスロードの体が蒼色のデジコードの繭に包まれた。

（X進化か……　そう来るとはな……）

オメガモンはそれを見ても全く動じずに蒼色のデジコードの繭を見ながら油断なく構えを取る。
そして、蒼色のデジコードの繭が消失した後には、より機械化した装甲を身に纏い、背中にはより巨大なハイパームゲンキャノンを装備したカオスロードーカオスドラモンXが姿を現した。

「カオスドラモンX！！」

「少しは見た目がまともになったようだな……　来い」

カオスドラモンXとオメガモンは対峙しながらお互いの隙を伺い始める。

「トランプソード！！」

一方で、選ばれし子供たちとカオスピエモンの戦いもオメガモンとカオスロードに負けないくらいの激しさである。
カオスピエモンは背中に背負っているトランプボックスから四本の剣の全てを引き抜くと、ウォーグレイモン達に向けて投擲する。

「ガイアフォース！！」
「コキュートスブレス！！」
自分達に向かって迫る四本のトランプソードを見たウォーグレイモンとメタルガルルモンは、それぞれ必殺技を放ち、四本のトランプソードを迎撃する。
「ポジトロンレーザーーー！！」
「トップガンッ！！」
「アラミタマッ！！」
更にインペリアルドラモン・ドラゴンモードとシルフィーモン、シャッコウモンの必殺技がカオスピエモンに直撃して、辺りに爆煙と水しぶきが発生した。
それを見ても全員の顔は険しいままだった。
彼らはピエモンの圧倒的な強さを知っているからである。
「なかなか出来る物ですね……　だからと言って私を倒せはしませんが。　トイワンダネス！！」
『グッ！！』
カオスピエモンは両手を前に突き出すと、トイワンダネスを繰り出した。
ウォーグレイモン達はその衝撃に耐える。すると、カオスピエモンが背中のトランプボックスから二本の剣を抜き出すと、シルフィー

モンとシャッコウモンに向けて投擲する。

「トランプソード！！」

「ポジトロンレーザーーー！！」

「コキュートスブレス！！」

しかし、インペリアルドラモン・ドラゴンモードとメタルガルルモンが必殺技を放つことで間一髪、トランプソードを打ち破る。その間にウォーグレイモンは両手の間に黄金のエネルギー球を作ると、カオスピエモンに零距離で接近すると、ガイアフォースを繰り出した。

「ガイアフォース！！」

「グァッ！！」

流石のカオスピエモンも零距離攻撃は避けることは出来ずにガイアフォースを食らうと、後方に吹き飛ばされる。

「フフフ……　面白くなって来たものだな……　だが、この程度で倒せると思うなよ……」

「ああ。確かにこのままでは、な。ヤマト！！」

「行くぞ！！　太一！！」

太一とヤマトの2人の思いが一つになった時、二人のデジヴァイスがオレンジ色と蒼色に輝き、彼らはデジヴァイスをウォーグレイ

モンとメタルガルルモンに向ける。
ウォーグレイモンとメタルガルルモンがオレンジ色と蒼色の光に包まれると、光の柱が降り立った。
その光の柱から、ウォーグレイモンの頭の形をした左腕と、メタルガルルモンの頭の形をした右腕を持ち、白き鎧を纏い、赤色と白色のマントをはためかせた、『最後』の名を冠した聖騎士―オメガモンが降臨した。

『インペリアルドラモン！！』

「インペリアルドラモン！！モードチェンジ！！ファイターモード！！」

オメガモンの姿を見た大輔と賢の声を聞いて、インペリアルドラモン・ドラゴンモードは答えると同時に変形を始めた。
両前足の部分からは腕が飛び出し、後ろ足が立ち上がり、背中に装備していたポジトロンレーザーは右腕に装備され、竜の頭部は胸の部分に装着され新たな顔が飛び出したインペリアルドラモン・ファイターモードの姿に変形した。

「行くぞ！！」

オメガモン達はカオスピエモンに向かって構えを取ると、対峙した。

（オーグ、メルーガ……　一つ気づいたことがあるんだけどいいかな？）

（何？　秀人）

秀人はカオスロードの姿を見ながら、オーグとメルーガに話しかける。

（見たところ、あいつは自分で仕掛けることがあまり無いんだ。原作でもそうだった。素早く相手の行動を分析してからそれに基づいた攻撃を仕掛けるパターンだったから。だから、ここは奴が予想出来ない攻撃を繰り出すべきだ）

確かに、カオスロードの武装は中・遠距離用の武装ばかりで自分からはなかなか仕掛けることがないのだ。
そこを秀人は利用しようと考えたのだ。

（ディアボロモンの攻撃を使おう、僕たちのやり方でね）

（そうしよう。いつも、剣戟と砲撃ばかりじゃ芸がないよ）

オーグとメルーガは秀人の提案を聞くと、頷いた。

「ウオォォォォーーーー！！！」

オメガモン（秀）はグレイソードの剣先をカオスロードに向けると光のエネルギーをグレイソードに集中させながら突撃を開始した。

「ハイパームゲンキャノン！！」

カオスロードはハイパームゲンキャノンから強力な砲撃を撃ち出す。
しかし、オメガモン（秀）は砲撃に向かって突撃を続行する。

「馬鹿め！！　自分から死にに来るとは！！」

カオスロードはオメガモン（秀）の行動を嘲笑うと、更に砲撃の威力を上げるが、オメガモンは白銀の光に包まれながら砲撃を切り裂き始める。

「喰らえ！！　リボルバーファントム！！」

オメガモン（秀）は完全に白銀の光に包まれると、光のエネルギーを集中させたグレイソードを前方に向けながらカオスロードに向かって突撃すると、カオスロードの体を貫いた。

「ばっ……馬鹿な……」

カオスロードはデータ粒子に変わりながら消滅した。

オメガモン（秀）はそのデータ粒子を吸収すると、オメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードの方を見る。

「ウオォォォォーーーー！！！」

オメガモンは左手からグレイソードを射出しながらカオスピエモンに向かって突撃すると、グレイソードをカオスピエモンに向かって振り抜く。

「フッ！！　ハァッ！！」

カオスピエモンがそれを避けると、オメガモンは再度カオスピエ

モンに向かってグレイソードを振り抜く。

「クッ！！　トランプ……」

「させるか！！　ポジトロンレーザーーー！！」

「トップガン！！」

「アラミタマ！！」

グレイソードの斬撃によってダメージを受けたカオスピエモンは背中のトランプボックスから４本のトランプソードを引き抜こうとすると、インペリアルドラモン・ファイターモードとシルフィーモン、シャッコウモンの攻撃を喰らう。

「ウワァァァァァーーーー！！！」

攻撃を喰らって後方に吹き飛ばされるカオスピエモンの背後に回り込んでいたオメガモンはグレイソードでカオスピエモンを上空へと突き飛ばした。

「アルティメットアッパーカット！！」

更にオメガモンはガルルキャノンから次々と砲撃を撃ち出し、カオスピエモンに追い撃ちをかける。

「ガァァァァァァァーーーー！！！」

オメガモンが撃ち出した砲撃が全弾直撃したカオスピエモンは苦痛の声を辺りに響かせながら、地上に落下した。

「そろそろ決着を付けよう」

何とか起き上がったカオスピエモンを睨みながらオメガモンがそう言うと同時に、一斉に必殺技が放たれた。

「ガルルキャノン！！」

「ギガデス！！」

「アラミタマ！！」

「トップガン！！」

「あっ！アアァァァァァァァァーーーーーー！！！！！！！！」

オメガモン、インペリアルドラモン・ファイターモード、シルフィーモン、シャッコウモンの必殺技を喰らったピエモンは断末魔の悲鳴を上げながらデータ粒子に変わりながら消滅した。

「やっと倒せた……」

太一は疲れたげに呟くと、オメガモン（秀）の方を見る。

オメガモン（秀）は太一とオメガモン達に顔を見せなかった。

何故なら、オメガモン（秀）は顔を俯けたまま、泣いていたからだ。

（僕はオメガモンじゃない……　所詮はオメガモンの分身（エイリアス）……　どんなに勝利しても、どんなに頑張っても僕はオメガモンにはなれない……）

秀人はこの世界のオメガモンの姿を見た時、自分はオメガモンではないことを理解したのだ。
所詮は自分は人間でも無ければデジモンでも無い存在。
今まで、自分はオメガモンの名前、力といった存在自体を借りて戦っていただけに過ぎない。つまり、自分はオメガモンの成り代わり、悪く言えば、デジモンの贋作なのだ。
それを痛感した秀人は悔し涙を流しながら右拳を握りしめる。

「ッッ！！　危ない！！」

俯いていたオメガモン（秀）はオメガモンに向かって迫る暗黒のエネルギー弾を見ると、すぐにガルルキャノンから光エネルギー弾を撃ち出し、暗黒のエネルギー弾をかき消した。

「あっ……　ありがとう……」

「お礼を言う暇があったら、子供たちを守れ。ここから先は私の戦いだ」

「でも！！　君には戦いのダメージが！！」

「早くしろ！！　今、砲撃を撃ったデジモンは私が倒すべき相手だ！！」

オメガモン（秀）はオメガモンを促した。
オメガモンは少し迷ったが、頷くと太一達の前に行った。

「フフフ……　初めまして、選ばれし子供たち。我が名はカオスモン。光も闇も超越した混沌の名を持つデジモンだ」

すると、カオスモンが現れて、オメガモンと対峙する。
カオスモンの姿を見た選ばれし子供たちはオメガモンに似ているカオスモンの姿を見て驚愕した。

「オメガモンに似ている……」

「奴はバンチョーレオモンとダークドラモンが融合して生まれたデジモンです。でも、本来なら寿命が短いはずなのに……」

「ミレニアモンの技術で寿命の短さを解消したんだ。それによって、カオスモンはかなりのパワーがあるデジモンになったんだ」

ノートパソコンで分析した光子郎にオメガモン（秀）はフォローをする。
カオスモンの知っていることに気がついた光子郎が話すのをオメガモン（秀）は遮った。

「もしかして……」

「私とカオスモンは何度も戦った。でも、いつもカオスモンにいいところで逃げられている。今度こそ、私の手でカオスモンを倒す！！」

オメガモン（秀）は決意の声を上げると同時にグレイソードの剣先をカオスモンに向ける。

「ハァアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオォォォォォーーーーーーーーーーーー！！！！！」

オメガモン（秀）とカオスモンは同時に叫びながら相手に向かって駆け出し、オメガモン（秀）はグレイソードを、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを使って凄まじい衝撃波を撒き散らす剣戟を始めた。

第１０話　混沌の章　オメガモン連合軍！？　カオスロードとの全面対決！！

登場デジモン紹介

アグモン
世代／成長期　属性／ワクチン種　種族／爬虫類型
必殺技／ベビーフレイム
　獰猛でとても勇敢な性格で頼りになる爬虫類型デジモン。怖いもの知らずだが体はまだ成長の途中なので力は弱いが、成長期デジモンの代表的な存在でもあり、個体差も大きく、亜種もいくつか確認されているデジモンである。力ある偉大なデジモンへの進化を予測させる存在でもある。必殺技は、口から高熱の火炎の息を吐き出す『ベビーフレイム』だ。

テイルモン
世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／聖獣型
必殺技／ネコパンチ
　好奇心が旺盛でイタズラ好きな聖獣型デジモン。見た目とは裏腹に恐るべきパワーを持っている。神聖系デジモンの源となる貴重なデジモンで、神聖系デジモンの証である“ホーリーリング”をつけているが、外れてしまうと力が出なくなってしまう。必殺技の『ネコパンチ』は、手の長い爪で相手を攻撃する技だぞ。

カオスドラモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／マシーン型
必殺技／ハイパームゲンキャノン
数々のサイボーグ系デジモンのパーツを組み合わせて造られたムゲンドラモンは想像以上の能力を発揮し、その実験は成功したと言われている。そのムゲンドラモンを更に改良強化を加えたのが深紅の

メタルボディを持つカオスドラモンである。仮想超金属であるクロンデジゾイドを、再精製し硬度のみを上げた“レッドデジゾイド”を使ったボディは、あらゆる攻撃を跳ね返し、あらゆる物を破壊する。また、デジコアにセットされたプログラムのバージョンも、より破壊的に自立的に改良を施されている。カオスドラモンは主に、クラックチームのリーダーがエージェントとして使用するデジモンでもある。必殺技は2砲のキャノンから発射される超弩級のエネルギー波『ハイパームゲンキャノン』。

カオスピエモン
世代／究極体　属性／ウィルス種　種族／魔人型
必殺技／トランプソード
『デジモンワールド2』に登場。カオスロードの手下であることとカオス3将軍の1体であること以外は全くわからない。
必殺技は背中の4本の剣を瞬時にテレポートさせて攻撃する『トランプソード』だ。

インペリアルドラモン・ドラゴンモード
世代／究極体、属性／ワクチン種、データ種、フリー、種族／古代竜型
必殺技／メガデス、ポジトロンレーザー
パイルドラモンが究極進化した究極の古代竜型デジモン。他のデジモンとは存在感や能力で大きく上回っている。その強大な力ゆえにコントロールが難しく、善にも悪にもなってしまう。また、インペリアルドラモンにはドラゴンモードの他にファイターモードとパラディンモードが存在し、全部で三形態在ると言う珍しいデジモン。
必殺技は、背中にある砲身から超重量級の暗黒物質を発射し、半径数百メートルを、暗黒空間に飲み込む『メガデス』と、同じように背中の砲身からレーザーを撃ち出す『ポジトロンレーザー』だ。

アルマジモン
世代／成長期、属性／フリー、種族／哺乳類型
必殺技／スクラッチビート、ローリングストーン
硬い甲殻で体を覆われたアルマジロの様な哺乳類型デジモン。のん気で愛嬌のある性格だが、お調子者なところがたまに傷である。アルマジモンはブイモン等と同じように古代種族の末裔であるため、特殊なアーマー進化をすることができる。名古屋弁を話す。伊織のパートナーデジモン。必殺技は、体を丸めて、相手に向かって猛スピードで突進する『ローリングストーン』に、前足のツメで乱れひっかきする『スクラッチビート』だ。

アクィラモン
世代／成熟期、属性／ワクチン種、種族／巨鳥型
必殺技／ブラストレーザー、グライドホーン、マッハインパルス
別名“砂漠の巨鷲”ともいわれる巨鳥型デジモン。マッハのスピードで大空を翔る。遥か遠く離れた敵を見つけ出す眼力を持っている。必殺技は口からリング状の光線を放つ『ブラストレーザー』と、巨大なツノで上空から突進する『グライドホーン』に、音速のスピードで突進する『マッハインパルス』だ。

ペガスモン
世代／アーマー体、属性／ワクチン種、種族／聖獣型
必殺技／シルバーブレイズ、シューティングスター
古代種のパタモンが希望のデジメンタルで進化した聖獣型デジモン。希望のデジメンタルの力を１００％発揮しており、神聖な属性を持ち邪悪な敵に絶大に強さを発揮する。必殺技は、額から聖なる光線を放つ『シルバーブレイズ』と、翼の内側に宇宙空間を作り出し、そこから相手に向かって流星を降り注がせる『シューティングスター』だ。また、ネフェルティモンとの連携技―『サンクチュアリーバインド』と言う、それぞれの足からエネルギーを輪のように

出し、相手の動きを封じる技も持っている。

次回予告

オメガモンとカオスモンの最終決戦が始まった。
カオスモンを追い詰めるオメガモンだが、カオスモンの切り札の前に傷つき倒れる。
しかし、選ばれし子供たちの諦めない姿とオメガモンの存在の意味を知ったとき、オメガモンの反撃が始まる。

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～
混沌の章　混沌との決着　究極の混沌ＶＳ覚醒の聖騎士

最後まで諦めない者にしか奇跡は起こらない。

第１１話　混沌の章　混沌との決着　究極の混沌ＶＳ覚醒の聖騎士（前書き）

今回は少し長目に書きました。
最終回みたいなノリで書いてしまいました。

第１１話　混沌の章　混沌との決着　究極の混沌ＶＳ覚醒の聖騎士

―東京湾―

「ハァアアアアアアアアーーーーーーーーーーーーッ！！」

「ウオオォォォォォォォーーーーーーーーーッッッッ！！！！」

オメガモンとカオスモンはお互いに凄まじいスピードで突進しながら武器を振り抜き続け、凄まじい応酬を繰り広げている。
その際に発生する巨大な水しぶきが至るところで次々と上がっている。
別世界のデジタルワールドで既に出会ってから3度も繰り返されたやり取りである。だが、オメガモンとカオスモンはお互いにこの攻防で決着が付くと確信していた。その結末まではどうなるのか分からずとも、オメガモンとカオスモンは自身の信念の為に相手を打ち倒そうと凄まじい攻防を繰り広げる。

「ウオォォォォォォッ！！！グレイソードッ！！」

「くぅっ！！ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドッ！！」

オメガモンが振り下ろして来た左腕のグレイソードを、カオスモンは右腕のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで受け止めると、激しい火花が辺りに散り、甲高い金属音が辺りに響く。
オメガモンはカオスモンの姿を見て心から戦いを楽しみたいと内心では思っていた。
何故なら、カオスモンはオメガモンの亜種（？）であり、自身と戦い方が一緒で、自分を更なる高みへと上げることを戦いの中で感じ

取ったのだ。
だが、カオスモンはミレニアモンが作り出した敵であり、自分の影である。オメガモンは感情を押し殺しながら、カオスモンを抹殺することに専念する。

「（３回戦って全て、敗走されているからな……　今度こそ抹殺する！！　それが私の成すべきことだ！！）ウオオォォォォォォォォォッ！！」

「チィッ！！ハァァァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとカオスモンの戦いは更に激しさを増しながら、お互いにそれぞれの武器を相手に向かって振るい続けて、甲高い金属音が辺りに木霊し続ける。
しかし、徐々にでは在るがオメガモンのグレイソードを振り抜くスピードが増して行くと、カオスモンは防戦一歩に追い込まれ始めて行く。

「チィッ！！（どういうことだ？　何故奴の力が増大している？）」

「其処だ！！」

「ガフッ！！！」

カオスモンの隙を衝いたオメガモンの渾身の右足蹴りを鳩尾に食らったカオスモンは苦痛の声を上げながら後方へと吹き飛ぶが、空中で体勢を立て直しながら上手く着地すると、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをオメガモンに向かって突き出しながら突撃する。

「ハァァァァァァァァァァァァッ！！！」

自分に向けて突撃しながらカオスモンが突き出してきたＢＡＮ－ＴＹＯブレイドをオメガモンは横に避けると、カオスモンに向かってグレイソードを振り抜く。

「ウオォォォォォォォォッ！！！」

「クッ！！」

カオスモンはグレイソードをＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで何とか防御すると、右足蹴りをオメガモンの胸部に向かって繰り出す。カオスモンの右足蹴りはオメガモンの胸部に当たった。

「ハァッ！！」

「グッ！！」

カオスモンの右足蹴りを胸部に喰らったオメガモンは蹴りの衝撃に後退りをする。そのまま、カオスモンは今度は左足蹴りを再度オメガモンの胸部に向かって繰り出す。

「フン！！」

「ガァッ！！」

二度も胸部に蹴りを喰らったオメガモンは、後方に吹き飛ばされたが、何とか体勢を整えて海面に着面した。
一方のカオスモンは空に高く飛び立つと、オメガモンを見下ろす。
オメガモンは地上で構えを取りながら、カオスモンの攻撃に備える。
カオスモンは左手からギカスティックキャノンを展開すると、オメ

ガモンに向かって次々と砲撃を撃ち出す。

「ダークプロミネンス！！」

「ウオォォォォォォォォッ！！！」

次々と着弾する暗黒のエネルギー弾をオメガモンは冷静に躱していく。その度に巨大な水しぶきが上がるが、オメガモンには関係ない。

そして、オメガモンは合計１２発もの砲撃を一発も直撃なしでよけ切った。

「何？」

ダークプロミネンスが一発も当たらなかったことにカオスモンは驚愕しながらオメガモンを見る。

オメガモンは、その隙を逃さずに直ぐ様カオスモンに向かってガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「グアッ！！！」

ガルルキャノンが胸部に直撃したカオスモンは海面に向かってそのまま墜落していく。

海面に墜落したカオスモンは海中に一旦は沈んだものの、すぐに立ち上がる。

「ダークプロミネンス！！」

「ガルルキャノン！！」

カオスモンは自分に向かって突撃してくるオメガモンに向かってギガスティックキャノンから砲撃を撃ち出すが、オメガモンはガルルキャノンから砲撃を撃ち出すことで相殺する。

「ハァッ！！」

「クッ！！」

砲撃の激突で生じた煙の中から飛び出して来たオメガモンはカオスモンに向かって突撃した勢いを使って右ハイキックを繰り出すが、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドでこれを防いだ。

「喰らえ！！」

オメガモンはそれを狙っていたかのようにカオスモンとの距離が零距離であることを確認すると、上半身を反らすとその時のバネを利用したグレイソードの突きを繰り出す。

「ガアッ！！」

カオスモンは苦痛の声を上げながら後方に吹き飛ばされると、水しぶきを派手に上げて海中に沈んだ。
海中から起き上がったカオスモンは突きを喰らった箇所を左手で押さえる。
今の攻撃はなかなか強力だったみたいだ。その証拠に突きを喰らった箇所がひび割れている。

「ダークプロミネンス！！」

「オメガブラスター！！」

カオスモンはギガスティックキャノンから暗黒エネルギー弾をオメガモンに向かって撃ち出すと同時に、オメガモンはガルルキャノンから連続で圧縮エネルギー弾をカオスモンに向かって撃ち出す。オメガモンのオメガブラスターとカオスモンのダークプロミネンスは激突し合った。

しかし、カオスモンのダークプロミネンスはオメガモンが撃ち出したオメガブラスターを相殺したが、オメガモンは尚もガルルキャノンから連続で圧縮エネルギー弾をカオスモンに向かって撃ち出す。

「オメガブラスター！！」

「何！？　クソッ！！ダークプロミネンス！！！」

カオスモンは瞬時に二発目のガルルキャノンを発射して、オメガブラスターを再び相殺した。

しかし、オメガモンはその様子を見ても全く慌てずに今度は両腕の武器を戻すと、右手に凄まじい冷気を、左手に激しい炎を発生させると、海面に同時に打ち付けて、ダブルトレントを繰り出した。

「ダブルトレント！！」

「グォッ！！！」

冷気と炎の二連撃を喰らったカオスモンは苦痛の声を上げる。

オメガモンはカオスモンがダブルトレントを喰らった箇所にガルルキャノンの照準を合わせると、砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「ガアァァァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンの連続攻撃に対してカオスモンは何も行う事が出来ずに一際大きな苦痛の叫びを辺りに響かせた。

「この程度で！！　ダークプロミネンス！！」

「お返しします！！」

苛立ったような声を上げたカオスモンが暗黒エネルギー弾を撃ち出すと、オメガモンはグレイソードを装備している左腕を身体ごと大きく振りかぶり、ダークプロミネンスの着弾の瞬間に、グレイソードを思いきり薙ぎ払うことでダークプロミネンスをカオスモンへと跳ね返した。

剣や槍といった武器で相手の攻撃を止めることは簡単なので、誰にでも出来るだろう。しかし、相手の攻撃を自分の思い通りの場所へと跳ね返すには多少の技術が必要になって来るが、決して不可能なんかではない。

「グハッ！！」

まさか、自分の撃ち出した攻撃が跳ね返ってくるとは微塵も考えていなかったカオスモンは避けることが出来ずに、自分の撃ち出した暗黒エネルギー弾を喰らった。

「覇王両断剣！！」

「グレイソード！！」

オメガモンとカオスモンは同時に突撃すると、同時に大剣を相手に向かって振り下ろした。
お互いの斬撃はお互いの大剣によって塞がれた。

「グググ……」

「ムムム……」

オメガモンとカオスモンはそのまま鍔迫り合いを行う。オメガモンはこれでは埒があかないと判断すると、カオスモンの顔面に向かって右ハイキックを繰り出した。

「ハァッ！！」

「フン！！」

しかし、カオスモンはオメガモンのその行動を予測していたみたいで、左腕のギガスティックキャノンでオメガモンの右ハイキックを防いだ。

「残念だったな！！」

「グァッ！！」

カオスモンはオメガモンの顔面に向かって左ハイキックを繰り出すことで、オメガモンを飛ばすと、続けてギガスティックキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ダークプロミネンス！！」

「グァァァ！！」

カオスモンが撃ち出した砲撃を喰らったオメガモンは後方に吹き飛ばされて、一度海中に沈んだが、すぐに戻ってきた。

「覇王両断剣！！」

「グハッ！！」

カオスモンはオメガモンに向かってＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜くと、オメガモンは苦痛の声を上げながら後退りをするが、ガルルキャノンの照準をカオスモンの真上に向けると、通常の圧縮エネルギー弾よりも巨大な圧縮エネルギー弾を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「馬鹿め……　何処を狙っている？」

カオスモンはオメガモンの行動を嘲笑うが、次の瞬間には言葉を失っていた。
何故なら、自分に向かって圧縮エネルギー弾の流星群が降り注いでいるからだ。

「グワァァァァァァァァァァーーーー！！！」

カオスモンは、次々と圧縮エネルギー弾の流星群の直撃を喰らいながら苦痛の声を上げた。
爆発で発生した煙が晴れると、全身の至るところにダメージの痕が存在しているカオスモンが立っている。

「小賢しい真似を！！」

「貴様が言える物ではない！！　最初の戦いで私にしただろう！！」

忌々しげに言い放ったカオスモンの言葉にオメガモンは反論すると、冷気を纏わせた圧縮エネルギー弾をガルルキャノンから撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「何！？」

オメガモンの冷気を纏わせた圧縮エネルギー弾を胸部に喰らったカオスモンは驚愕の声を上げた。尽かさず、オメガモンはグレイソードに炎を纏わせながらカオスモンに向かって突撃すると、下方から上方に向かって振り抜くことで炎の剣圧を発生させてカオスモンに攻撃をした。

「オメガソード！！」

攻撃を行なったオメガモンはカオスモンの反応を期待したが、目の前にカオスモンの姿が無いことに戸惑い、辺りを見渡した。

「気をつけろ！！　カオスモンは君の後ろにいる！！」

「！！　あっ、ありがとう！！」

インペリアルドラモン・ファイターモードの声にカオスモンの位置に気がついたオメガモンは我に帰ると、すぐに背後を振り返る。

オメガモンの背後には、カオスモンがいて、物凄い量の殺気を放っていた。

「図に乗るな！！」

「グハァッ！！」

カオスモンはオメガモンに向かって接近すると、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜いて、オメガモンを飛ばしてからギガスティックキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ダークプロミネンス！！」

「グハッ！！」

カオスモンのダークプロミネンスを撃ち込まれたオメガモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。
その一連の動きにオメガモンは全身を襲う苦痛に耐えながら、海面に着地した。
カオスモンはギガスティックキャノンの砲口に暗黒のエネルギーを最大限に溜める。

「死ね！！　ダークプロミネンス！！」

「私はまだ死ねない！！　オメガシールド！！」

カオスモンはギガスティックキャノンから最大限に溜めた暗黒エネルギー弾を撃ち出したが、オメガモンは両腕に光エネルギーを集中させながら突き出すことでオメガシールドを形成してダークプロミネンスを防いだ。

砲撃を防いだオメガモンはカオスモンの真上に向かって跳躍すると、カオスモンに向かってグレイソードを振り下ろす。

「ハァァァッ！！」

「フッ！！」

カオスモンはそれを素早く躱したが、オメガモンはガルルキャノンから次々と砲撃を撃ち出す。カオスモンは海面を素早く駆けながらオメガモンの砲撃を避け続ける。

「覇王両断剣！！」

「グレイソード！！」

カオスモンはオメガモンに向かってＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを振り抜くが、オメガモンはグレイソードで防ぐ。

「ガルルキャノン！！」

「何！？」

オメガモンはカオスモンに向かってガルルキャノンから絶対零度の冷気弾を撃ち出して、カオスモンの体の一部を氷結させる。そのまま、オメガモンはグレイソードを戻した左拳からジェネレードナックルをカオスモンの氷結させた部分に向かって繰り出した。

「ジェネレードナックル！！」

「クゥッ！！」

ジェネレードナックルを喰らったカオスモンの氷結した部分の氷が砕け散ると共に、火花が散り、罅が入った。

「図に乗るな！！　ダークプロミネンス！！」

「ハァッ！！」

オメガモンは背中のマントをはためかせながら、ダークプロミネンスを回避すると、グレイソードに光エネルギーを纏わせながらカオスモンに向かって突撃した。

「オメガソード！！」

「ＢＡＮ－ＴＹＯブレイド！！」

オメガモンがグレイソードを振り下ろすと、カオスモンはＢＡＮ－ＴＹＯブレイドで防いだが、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドは真っ二つに折れてしまい、カオスモンの胸部をも切り裂いた。
その部分からはカオスモンの電脳核（デジコア）が露出している。

「クッ！！　まっ、まずい！！」

「貰った！！」

カオスモンが焦りの声を上げると、オメガモンは尽かさずその部分にグレイソードを突き刺した。次に、オメガモンはガルルキャノンをカオスモンの胴体に押し付けると、零距離砲撃をカオスモンに撃ち込む。

「ギャァァァァァァァーーー！！！」

零距離で砲撃を撃ち込まれて苦痛に苦しんでいるカオスモンに構わずに、オメガモンは右腕に乗ったままのカオスモンを力の限り投げつける。

「ウオォォォォォォォォーーーー！！！」

後方に飛ばされていくカオスモンを見たオメガモンはガルルキャノンに自身のエネルギーを集中させながら、極限にまで圧縮を終えたエネルギー弾をカオスモンに向かって撃ち出した。

「オメガブラスト！！」

「ガァァァァァァァァァァァーーーーーー！！！」

オメガブラストを喰らったカオスモンは苦痛の叫び声を上げながら、海中に沈んでいった。

『やったーーー！！』

オメガモンが宿敵であるカオスモンを倒したことを見た選ばれし子供たちは、オメガモンに笑顔を向ける。この世界のオメガモン達も嬉しそうな表情をオメガモンに向けたので、オメガモンも釣られて笑顔になった。

「……ハハハハハハハハハハハッ！！　馬鹿め！！　戦いとは最後の最後で奥の手を繰り出した者が勝つのだ！」

『なっ！？』

「どういうことだ？　まさか後一回進化を残しているという冗談はやめて欲しいのだが」

突然に海面の一部が盛り上がり、ボロボロになった状態になりながら立ち上がるカオスモンの姿をオメガモンと選ばれし子供たち、この世界のオメガモン達は目にする。
その満身創痍としか言えない姿になりながらも立ち上がったカオスモンの姿に、が目を見選ばれし子供たちとこの世界のオメガモン達は目を開くが、オメガモンは冷静になっている。

「フフフ……　その通りだ。オメガモン。私はお前を倒すために新しい進化を会得したのだ。それを今から見せてやろう。ウオォォォォーーーーー！！！　カオスモン！！　究極進化！！」

「なっ！？」

「究極進化！？」

カオスモンが上げた叫びの意味に気がついた太一と光子郎は信じられないと言う顔をしながら、デジコードに包まれたカオスモンを見つめていると、デジコードは消失して、デジコードが消えた後にそれは立っていた。
それは最早デジモンと呼べるような姿では無かった。

「アルティメットカオスモン！！」

「なっ……何だあれは……」

アルティメットカオスモンの姿を見たヤマトは呆然とした声を上

げると、オメガモンは説明する。

「恐らく、あの姿は究極体４体が融合したことによって、歪みが発生してあのような禍々しい姿になったのだろう。その証拠に、先程よりも大きくなっているし、エネルギーが全身から溢れ出ているんだ（それに、この威圧感……　先程とは段違いだ……　少しでも気を抜けば私は死ぬ……）」

「随分と冷静ですね、オメガモン」

「いや、私だって現実逃避がしたいよ。でも、当たる相手がいないだけだから。本当なら、呆然とするけどね」

光子郎の言葉にオメガモンはまさか、と吐き捨てた。穏やかな笑顔でこその言葉だから、光子郎の言葉に響いたのだろう。

「かかってこい。ひねり潰してやる……」

「それはこちらの台詞だ。例え、貴様が進化しようと私は負けない！！」

アルティメットカオスモンに向かってオメガモンは突撃すると、グレイソードを振り抜こうとするが、その直前でアルティメットカオスモンの巨大な手に捕まってしまった。

「グレイ……」

「無駄な足掻きを……」

「何！？」

「ハァッ！！」

アルティメットカオスモンは握っていたオメガモンを投げ飛ばしたが、オメガモンは空中で体勢を整えると、海面に着地した。

「（あの巨大な手に捕まるのは御免被りたいな……　それなら、遠距離から攻撃だ！！）　ガルルキャノン！！」

「ダークロアー！！」

オメガモンはアルティメットカオスモンに向かって次々とガルルキャノンの砲撃を撃ち出したが、アルティメットカオスモンはダークドラモンを模した腕から暗黒エネルギー弾を撃ち出すことでガルルキャノンを相殺した。

「ウオォォォォォォォーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「オーロラアンジュレーション！！！」

「グアァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！！」

自分に向かって突撃しながらガルルキャノンを連射するオメガモンに向かって、アルティメットカオスモンはヴァロドゥルモンを模した腕から光速の光を撃ち出した。
流石のオメガモンでも、光速の攻撃を避けることが出来ずに直撃を食らうと、苦痛に満ちた叫びを上げながら吹き飛ぶ。
アルティメットカオスモンは自身の巨大な手でオメガモンを捕まえると、空中に放り投げると、ダークドラモンを模した腕からダーク

ロアーをオメガモンに向かって連射する。

「ダークロアー！！」

「ガアァァァァァァァァァッ！！！！！」

ダークロアーをオメガモンは避ける事が出来ずに直撃を食らい、海面に向かって落下して行くが、空中で体勢を立て直すと海面に着地した。

「グッ……　どういうことだ？　今の技は融合元であるダークドラモンとヴァロドゥルモンの必殺技……　本来は使うことの出来ない技なのに……」

「フン。貴様、鈍いな。私とて人工でもエイリアスだ。本来は使うことの出来ない技でも使えるのは当たり前だ！！　ビフロスト！！」

苦しそうに呼吸をするオメガモンの疑問に答えたアルティメットカオスモンはスレイプモンを模した腕から灼熱の光矢を放った。

「ハッ！！グレイソード！！」

アルティメットカオスモンがビフロストを発射して来た事に気がついたオメガモンは素早くグレイソードをビフロストに向かって振り抜き、四散させた。

「オーロラアンジュレーション！！！」

「グッ！！」

アルティメットカオスモンがオーロラアンジュレーションを撃ち出したが、オメガモンは間一髪で避けると、姿を消した。

「何処だ？」

「グレイソーード！！」

アルティメットカオスモンが辺りを見渡していると、オメガモンがアルティメットカオスモンの背後に現れて、アルティメットカオスモンに向かって炎を纏わせたグレイソードを振り抜く。

「確かにいい戦術だが……　究極の混沌の名を持つ私の前では無力だ！！」

アルティメットカオスモンは融合元の一体であるスレイプモン譲りの瞬間高速移動で、オメガモンの背後に回り込むと、スレイプモンを模した腕をオメガモンに向かって構えて自身の周りの気候を操り超低温のブリザードを発生させて、両腕の武器を一旦戻したオメガモンを凍らせ始める。

「オーディンズブレス！！」

「グアァァァァァーーーーー！！！」

アルティメットカオスモンの放ったオーディンズブレスによってオメガモンの体は徐々に凍り付き始め、気がつくとオメガモンは巨大な氷柱に閉じ込められた。

「ビフロスト！！」

「ガアァァァァァーーーー！！！」

アルティメットカオスモンの放ったビフロストによって、オメガモンは巨大な氷柱から開放されたが、体の至る所にダメージの痕が残った。
アルティメットカオスモンは苦痛に苦しんでいる表情をしているオメガモンを巨大な手で捕まえて手元に引き寄せると、ダークドラモンを模した腕をギガスティックランスに変形させてオメガモンに振り抜いた。

「ギガスティックランス！！」

「ヌオォォォォォォーーーーー！！！！」

苦痛の叫び声を上げるオメガモンだったが、グレイソードでギガスティックランスを弾くと、直ぐ様空高く飛び上がり、空中から地上にいるアルティメットカオスモンに向けてブラストレイ・シュトロームを撃ち出す。

「ブラストレイ・シュトローム！！」

ブラストレイ・シュトロームは着弾して大きな水しぶきを上げたが、そこにはアルティメットカオスモンの姿が無かった。
何故なら、アルティメットカオスモンは瞬間高速移動でブラストレイ・シュトロームの直撃を喰らう前にその場から逃れていたからである。
更にアルティメットカオスモンは融合元の1体であるヴァロドゥルモンの持っている巨大な6枚の翼を巨大な体から出現させることで、空中にいるオメガモンに向かって急浮上した。

「何！？」

「バーンバンチョーパンチ！！」

アルティメットカオスモンの行動を見て驚愕したオメガモンは直ぐ様ガルルキャノンから砲撃を撃ち出そうとする。
しかし、その前にアルティメットカオスモンはバンチョーレオモンを模した拳に燃え上がるほど熱い魂を込めると、オメガモンに向かってバーンバンチョーパンチを繰り出した。

「ガアァァァァァァァッ！！！」

バーンバンチョーパンチを喰らったオメガモンは、海面に向かって落下して行く。
アルティメットカオスモンは追い打ちをかけるようにバンチョーレオモンを模した拳に気合を極限にまで研ぎ澄ませると、オメガモンに向かって繰り出す。

「フラッシュバンチョーパンチ！！」

「ウワァァァァァァァァァーーーーー！！！」

オメガモンはフラッシュバンチョーパンチを食らうと、苦痛の声を上げながら大きな水しぶきを上げて海中に沈んでいった。

『オメガモン！！』

苦痛の叫びを上げて海中に沈んだオメガモンの姿に、離れた所の丘の上で戦いを見ていた選ばれし子供たち、そして、戦いを見ていたこの世界のオメガモン達はオメガモンの名を叫んだ。

しかし、彼らの声は届かず、オメガモンは起き上がってこない。
「何て強さだ……　オメガモンが一方的にやられるなんて……」
「そうか……　そういうことか……」
アルティメットカオスモンの圧倒的な強さを目の当たりにして、呆然としている選ばれし子供たちだが、光子郎はノートパソコンでアルティメットカオスモンの圧倒的な強さの理由を理解した。
「どういうことだよ、光子郎？」
「奴は融合している４体のデジモンの必殺技と能力を使うことが出来るのです。バンチョーレオモンのパンチ、ダークドラモンの砲撃と槍、スレイプモンの高速移動と寒暖の攻撃、ヴァロドゥルモンの速い攻撃と翼による空中戦……　奴は近・中・遠距離全てにおいてその力を最大限に発揮できるデジモンなんですよ」
光子郎の言葉を聞いた太一達は言葉を失った。
死角が無ければ、何処をどのように攻撃すればいいのかがわからないからだ。
「ふん。流石のオメガモンでもここまでか」
アルティメットカオスモンはオメガモンを嘲笑うと、選ばれし子供たちの方を向いた。
この世界のオメガモン達は身構える。
「私は究極体の中でも強豪のデジモンが融合して誕生した存在。やがては、この世界、いや、全世界を統べる存在になる」

「相変わらず、冗談だけは私に勝っているようだな。ミレニアモンに造られた存在でありながら。最後は粛清される運命にあるのだろう？」

アルティメットカオスモンが尊大に宣言をすると、聞き捨てならないとばかりに力を振り絞ってオメガモンが立ち上がった。体のいたる所が、罅が入っていたり、砕けていたりと満身創痍だが闘志だけは失っていなく、アルティメットカオスモンを睨みつける。オメガモンが皮肉交じりに言い放つと、アルティメットカオスモンは高笑いを上げながらオメガモンに反論した。

「ミレニアモン？　あいつもやがてはズワルトに抹殺される。ズワルトは全てのデジタルワールドと現実世界（リアルワールド）を統合させて一つの世界にした後、支配しようと考えているからな。自分の人形だけが住む世界の守護者になるつもりだ。奴らは馬鹿だったのさ。自分がズワルトの意のままに踊っていることに気づかないまま、死んでいく。だが、私は奴の影響は受けない！！　私は世界を越えて、邪魔な奴らを排除して、全世界の支配者になる！！」

「随分と大きく出たな。だが、貴様のやろうとしていることはズワルトと何一つ変わりはしないことはわかっているのだろうな？」

アルティメットカオスモンの野望を聞いたオメガモンは、冷静にアルティメットカオスモンの言葉に反論する。

「確かにそうだ。だが、それは生命の本質だろう？　この世界にいるデジモン達もやがては人間といがみ合う日が来てもおかしくはない……」

「確かにな。人間はデジモンを支配するか、管理する可能性も高い。そうすれば、世界が何個滅びるのかわからない戦争に突入することになる」

「この地球もかつては、グレイモンやティラノモンに似た巨大生物が存在していた。災厄で彼らが滅び、地球は人間が支配者になったが、今度は私がなる。ただ、それだけだ」

「それはどうかな？　貴様はまだ影と呼んでいる私を倒せていない。それじゃ足元をすくわれるぞ？」

アルティメットカオスモンの言葉にオメガモンは笑みを浮かべながら答えたが、アルティメットカオスモンは動じない。

「ふん。オメガモンの力を借りているお前では私は倒せまい。もう戦えないはずだ」

「例え、そうだとしても私は貴様を倒せるはずだ！！　私にオメガモンの資格があるのなら！！」

自分を嘲笑うアルティメットカオスモンに、オメガモンは力強く言い放つが、アルティメットカオスモンは全身にエネルギーを溜め始める。

「ウルティマバースト！！」

「オメガシールド！！」

選ばれし子供たちに向かってアルティメットカオスモンは、ウルティマバーストを放つが、オメガモンはエネルギーを総動員して巨

大なオメガシールドを張ることで選ばれし子供たちを守る。
だが、オメガモンの表情は苦しそうでいつまで持つかがわからない。
「馬鹿め！！　そんな貧弱なバリアで防げると思うな！！　ダークロアー！！　ビフロスト！！　オーロラアンジュレーション！！！」
アルティメットカオスモンはオメガモンの行動を嘲笑いながら、ダークドラモン、スレイプモン、ヴァロドゥルモンを模した腕から次々と必殺技を放つ。
「グアァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！」
アルティメットカオスモンの攻撃を防ぎきれず、全ての必殺技を喰らったオメガモンは苦痛に満ちた叫びを上げながら吹き飛び、森が広がる陸地に激突してしまう。
「アッ……　アアッ……」
一度は立ち上がったオメガモンだが、瞳の光が消えると同時に前のめりに倒れ伏した。
「フフフ……　やっと倒れたか……　次はお前たちの番だ……」
「諦めるものか……　俺たちは絶対に諦めない！！」
『オメガモン！！』
『インペリアルドラモン！！』

『シルフィーモン！！』

『シャッコウモン！！』

アルティメットカオスモンの力を見ても、選ばれし子供たちは諦めない。

自分たちのパートナーデジモンの名前を叫ぶと、彼らも応じる。

「行くぞ！！　皆！！」

『おう！！』

「返り討ちにしてくれる！！」

『ウオオォォォォォォォーーーーー！！！』

アルティメットカオスモンに向かってオメガモン、インペルアルドラモン・ファイターモード、シルフィーモン、シャッコウモンは同時に動き出して、激しい戦いを始めた。

「秀人……秀人……　起きて……」

「うっ……う～ん……？」

顔のいたる所に痣があって腫れ上がり、服のいたる所もボロボロになって、傷つき、倒れている秀人の目の前にオーグとメルーガが姿を現した。

気がついた秀人が辺りを見渡すと、お台場海浜公園ではなく、秀人

がエイリアスとなった公園だった。
秀人は傷つき、ボロボロになった体を何とか立たせると、オーグとメルーガの方を向いた。
「秀人……　オメガモンになって世界を守れているかな？　僕達は……」
「僕は何一つ守れていない。最低だよ」
メルーガの問いに秀人は力無く首を横に振りながら答えた。
そして、両腕のデジヴァイス０１を見ながらこれまでの戦いを振り返った。
「僕は命を繋ぐためにエイリアスとなった。そして、オメガモンになり、世界を、誰かを救うために戦ってきた……　力を振るう事。それが僕が出来る精一杯のことだと信じて。ボロボロに傷つき、独り孤独に死んでいく定めでも構わなかった。でも、それももう少しで終わる……」
「秀人！！　選ばれし子供たちが戦っているのに秀人はこのまま終わるというのか！？」
「えっ！？」
オーグの言葉を聞いた秀人は目を見開きながらアルティメットカオスモンと戦っているオメガモン達の事を思い浮かべると、突如として秀人とオーグ、メルーガの前にアルティメットカオスモンと戦っているオメガモン達の映像が映し出される。

「ビフロスト！！」

アルティメットカオスモンが撃ち出したビフロストをオメガモン達は回避すると、シルフィーモンとシャッコウモンはアルティメットカオスモンに向かって必殺技を放つ。

「トップガン！！」

「アラミタマ！！」

「その程度の攻撃で！！」

自分に向かって迫り来る必殺技を見たアルティメットカオスモンは、自身の巨大な腕を振り抜くことでトップガンとアラミタマを霧散させる。

その隙にオメガモンとインペロアルドラモン・ファイターモードは必殺技を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「ポジトロンレーザー！！」

「ギガスティックランス！！」

アルティメットカオスモンはギガスティックランスを振り抜くことでガルルキャノンとポジトロンレーザーを撃ち返した。

オメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードは間一髪でそれを避ける。

「ダークロアー！！」

「ガルルキャノン！！　インペリアルドラモン！！」

「わかった！！　ギガデス！！」

アルティメットカオスモンが撃ち出したダークロアーをガルルキャノンで相殺したオメガモンが呼びかけると、インペリアルドラモン・ファイターモードは胸の砲塔部分からギガデスを放った。
ギガデスはアルティメットカオスモンに直撃すると、十数メートル以上の大爆発が起きた。

「フン。そんなものか。大したこと無いな」

アルティメットカオスモンは爆発によって発生している炎にさえも構わずにオメガモン達を嘲笑う。
それでも、オメガモン達は闘志を燃やしながらアルティメットカオスモンを睨みつける。

「皆、どうして諦めないんだ？　攻撃が全然効かないのに……」

外の世界の映像を見た秀人は呆然となるが、オーグとメルーガは秀人に話しかける。

「秀人。彼らは様々な困難や試練にぶつかりながらも懸命に戦い、打ち勝ってきた。時には失敗したり、負けたりしながらも一歩一歩前進してきた」

「彼らは心に希望の光を持っているんだ。そして、諦めない心と希望の光で様々な奇跡を起こしてきた。彼らは信じている。例え、どんな相手でも自分たちは勝てると。諦めない限り、可能性は存在しているから」

オーグとメルーガの言葉を聞いた秀人は思い出す。
選ばれし子供たちの戦いを。時には暗黒進化をしたり、対立したり、苦悩しながらも強大な敵に立ち向かい、勝利していった冒険のことを。

「そうだ……　諦めない限り可能性は存在する。その希望の光がオメガモンの胴体だったんだ。最初生まれた時は人々の、アーマゲモンの時もそうだ……　僕もその光を持っているのか……」

秀人がオメガモンの胴体の意味に気がついた時、両腕のデジヴァイス01はオレンジ色と青色に輝き始める。
ディアボロモンの二度の戦いのターニングポイントになったのは人々の希望の光だった。
一度はオメガモンを誕生させるために、二度目はオメガモンの胴体をオメガブレードにするために。

「そう。秀人はその光を持つ選ばれし者。秀人は選ばれたんだ。その光の継承者として」

「でも、僕にそんな資格があるのか？　何もない僕が……」

秀人が顔を歪めさせて呟くと、オーグとメルーガは笑顔を向けた。

「あるよ。僕達との絆が」

「絆？」

「ペンデュラムの中でしか生きられなかった僕達は世界を知らなかった。でも、秀人に会って、秀人と過ごして、初めて世界が見えた。秀人と僕達の絆が僕達の世界に光を与えてくれた」

「光……　僕とオーグとメルーガの絆……」

「秀人のデジモンで、秀人と一緒に戦えて本当に嬉しいよ。僕達で守ろう、世界を。人々を。僕達の絆の光と力で！！」

「僕は守ってみせる。この光で……　それが僕の使命だ！！　オメガモーーーーン！！！」

秀人の両腕のデジヴァイス０１が光り輝くと、秀人はオレンジ色と青色の光に包まれながら公園を飛び立った。

この世界のオメガモン達がアルティメットカオスモンと睨み合いを行なっている時、オメガモンの両拳が動き、選ばれし子供たちとお台場海浜公園に集結していた人々の目の前で、ゆっくりとではあるものの、立ち上がった。
しかし、目にはまだ光は完全に宿っていなかった。

「何？」

「オメガモンが……」

アルティメットカオスモンとオメガモン達は驚愕してオメガモン

の方を見る。
オメガモンは苦しそうに息をする。
「力とは、他人を支配し、圧して、己が生き延びる為にある！　それに気付けないお前が私に勝てるはずがない！！　ダークロアー！！！」
「ウワアァァァァァァァァーーーーー！！！」
アルティメットカオスモンがダークロアーを撃ち出すと、オメガモンは苦痛の叫び声を上げるが、それでも立ったままだ。
地面にグレイソードを突き刺しているからだ。
アルティメットカオスモンは圧倒的な力の差を見せつけても諦めないオメガモンの姿を見て、オメガモンに尋ねる。
「何故だ？　何故戦う？　オメガモンでも人間でも無いお前が何故ボロボロになってまで戦う！？」
「ハハハ……　君には一生理解出来ないよ。僕が戦っているのは世界を、人々を護るためだ。確かにインペリアルドラモン・パラディンモードから言われた通り、運命づけられた物もあるけど。でも、僕は自分で選んだ。そして、ここにいる。僕は一人じゃない。オーグとメルーガ、僕に諦めない心と希望を教えてくれた選ばれし子供たちとパートナーデジモン、オメガモンを生み出した全ての人たちとの絆の光が共にある！！！」
オメガモンが叫んだ瞬間、オメガモンの目と胴体が光り輝き、辺り全てを包むような眩い光を解き放たれて、オメガモンを中心に光の柱が出現した。
そこにいる全員が呆然と光の柱を見ると、光の柱が徐々に消滅して

いきながらオメガモンが両腕を交差させながら立っている。
オメガモンが力強く両腕を振り下ろすと、瞑らで力強い二つの空色の瞳が出現した。
それを見た選ばれし子供たちとこの世界のオメガモン達はホッと胸をなで下ろし、人々は喜ぶと共に希望の光の存在を知った。

「なっ！？　馬鹿な！！　お前はもう戦えないはずだ！！　ダークロアーー！！」

「この力は決して希望を捨てずに諦めずに戦う人々のためにある！！　それに気づけない貴様に私は負けはしない！！　クロスレイ・ジェネレード！！」

目の前の光景に同様を隠せないアルティメットカオスモンは、ダークロアーを撃ち出すが、オメガモンは暗黒エネルギー弾を全て左腕のウォーグレイモンを模した篭手で受け止めながら光に浄化すると、クロスレイ・ジェネレードとして撃ち返した。
クロスレイ・ジェネレードの直撃で発生した煙の中からアルティメットカオスモンはゆっくりと姿を現した。

「希望だと……？　笑わせるな！！　私は無敵だ！！　断じて負けはしない！」

「無敵だと……？　そちらこそ笑わせるな。人と人の絆を信じられない貴様に私は断じて負けはしない！」

オメガモンはそう言うと、アルティメットカオスモンに向かって神速で突撃を開始した。
アルティメットカオスモンはバンチョーレオモンを模した腕に気合を極限にまで研ぎ澄ませて、オメガモンは右拳に光エネルギーを集

中させると、同時に拳を繰り出した。

「フラッシュバンチョーパンチ！！」

「ジェネレードナックル！！」

二つの拳がぶつかり合った瞬間、物凄い衝撃が発生した。その衝撃でアルティメットカオスモンはバランスを崩した。

「グォッ！！」

競い負けたアルティメットカオスモンのバンチョーレオモンを模した腕に向かって、オメガモンは左腕からグレイソードを射出させながら一気に振り抜いた。

バンチョーレオモンを模した腕はグレイソードによって切り落とされた。

「グレイソード！！」

「ガァッ！！」

アルティメットカオスモンが苦痛の声を上げながらバンチョーレオモンを模した腕があった部分を巨大な手で押さえていると、オメガモン達はアルティメットカオスモンに向かって次々と必殺技を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「ポジトロンレーザー！！」

「トップガン！！」

「アラミタマ！！」

「グハッ！！」

アルティメットカオスモンが必殺技の直撃に苦痛に歪んだ声を上げると、同時にアルティメットカオスモンの頭上にオメガモンが現れて、ガルルキャノンから巨大な砲撃を撃ち出した。

「オメガキャノン！！」

「ガァァァァァァァッ！！」

オメガキャノンを食らったアルティメットカオスモンは、苦痛に満ちた咆哮を辺りに響かせた。
そして、素早くオメガモンがアルティメットカオスモンから離れると、この世界のオメガモンがグレイソードに炎を纏わせながら振り抜いて、炎の衝撃波を放った。
アルティメットカオスモンはスレイプモンを模した腕を炎の衝撃波に向けると、極寒のブリザードを放った。

「グレイソード！！」

「オーディンズブレスッ！！」

オーディンズブレスと炎の衝撃波は互いに鬩ぎあい、巨大な水蒸気を起こしながら爆発を起こした。
それによって発生した煙の中にこの世界のオメガモン、インペリアルドラモン・ファイターモード、シルフィーモン、シャッコウモン

は身を隠す。
しかし、そうはさせないと言うようにアルティメットカオスモンは巨大な腕を振るい、辺りを覆っていた煙を一気に吹き飛ばす。

「オオォォォォォーーーーーー！！！」

『クッ！！』

突如としてアルティメットカオスモンが発生させた突風に吹き飛ばされないようにこの世界のオメガモン、インペリアルドラモン・ファイターモード、シルフィーモン、シャッコウモンは立ち止まって身構えた。
アルティメットカオスモンはそれを逃さずにギガスティックランスから攻撃を加えようとするが、アルティメットカオスモンの真上に移動していたオメガモンはギガスティックランスに向けてガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「何ッ！？」

突然の奇襲をアルティメットカオスモンは避ける事が出来ず、ガルルキャノンの砲撃をその身に受けて動きが止まってしまう。
アルティメットカオスモンはその事実に怒りを覚えるが、オメガモンは構わずにアルティメットカオスモンのスレイプモンを模した腕に向かって連続でエネルギー弾を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「クッ！！　少し強くなっただけで調子に乗るな！！」

自身の巨大な腕に向かってガルルキャノンを撃ち込んで来るオメガモンに、アルティメットカオスモンはギガスティックランスを振り上げる。
しかし、その直前にアルティメットカオスモンの背後に回っていたインペリアルドラモン・ファイターモードが右腕の爪から光の剣を発生させると、ギガスティックランスに向かって振り抜き、ギガスティックランスを弾いた。

「スプレンダーブレード！！」

「クッ！！」

アルティメットカオスモンがギガスティックランスが弾かれたことに悔しそうな声を上げると、この世界のオメガモンとシルフィーモン、シャッコウモンはヴァロドウルモンを模した腕に向かって攻撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「トップガン！！」

「ニギミタマ！！」

「グッ！！　ウルティマバースト！！」

この世界のオメガモンとシルフィーモン、シャッコウモンが放った攻撃は、真っ直ぐにアルティメットカオスモンへと直進する。
その攻撃を見たアルティメットカオスモンは、即座にウルティマバーストを撃ち出す。

アルティメットカオスモンが撃ち出したウルティマバーストとこの世界のオメガモンとシルフィーモン、シャッコウモンの放った必殺技は激突し合い、大爆発を引き起こした。
そして徐々に爆発の影響で発生した煙が薄れていき、全身に傷を負ったオメガモンだけが立っていた。
パタモンとアルマジモン、ホークモンとテイルモンは海面に向かって落下していく。

「パタモン！！」

「アルマジモン！！」

「ホークモン！！」

「テイルモン！！」

タケルと伊織、京とヒカリは自分のパートナーデジモンの名前を叫ぶが、アルティメットカオスモンは彼らに向かってウルティマバーストを撃ち出した。

「ウルティマバースト！！」

「させるかーーーーー！！！！　」

この世界のオメガモンが両手でパタモンとアルマジモン、ホークモンとテイルモンを受け止めたが、ウルティマバーストはオメガモンに向かって迫る。
選ばれし子供達の心配そうな声が響く。

『オメガモン！！』

「オメガシールド！！」

しかし、この世界のオメガモンの危機を見たオメガモンは間一髪でこの世界のオメガモンの前に移動すると、オメガシールドを展開してウルティマバーストを防いだ。

アルティメットカオスモンの今の行動にオメガモンは不快の表情をアルティメットカオスモンに向けていると、この世界のオメガモンは済まなさそうな顔をしながらオメガモンに顔を向けた。

「済まない、オメガモン。君の戦いの邪魔をして……」

「そんなことはないさ。君達と共に戦えることを誇りに思うよ。ありがとう」

「先に助けたのは君だ。それよりも……」

「ああ。我々が手を組めば、誰にも負けはしない！！」

2体のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードは共にアルティメットカオスモンに構えを取る。

「行くぞ！！」

『応！！』

自分に向かって突撃して来る2体のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードに対してアルティメットカオスモンはスレイプモンとダークドラモン、ヴァロドゥルモンを模した腕から必殺技を放つ。

「ダークロアー！！　ビフロスト！！　オーロラアンジュレーション！！！！」

『フッ！！』

自分たちに向かって迫り来るダークロアーとビフロスト、オーロラアンジュレーションに対して、オメガモンは上空に、この世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードは同時に左右に避ける事で回避しながら、そのまま同時にアルティメットカオスモンを囲むように海面に着地すると、インペリアルドラモン・ファイターモードは右手の砲塔を、この世界のオメガモンは右手の大砲をアルティメットカオスモンに照準を合わせて、同時に必殺技を撃ち出す。

「ポジトロンレーザー！！」

「ガルルキャノン！！！！」

「フン！小賢しいわ！！」

インペリアルドラモン・ファイターモードが放ったポジトロンレーザーとこの世界のオメガモンが放ったガルルキャノンは高速でアルティメットカオスモンに迫るが、アルティメットカオスモンは自身の巨大な2本の腕を振るうことでポジトロンレーザーとガルルキャノンを打ち消した。

「私を忘れていないか？　アルティメットカオスモン！！　オメガソード！！」

その隙にオメガモンはアルティメットカオスモンのスレイプモンを模した腕に向かって、全力でグレイソードを横なぎに振るい、巨大な三日月状の衝撃波を放った。

「ツッ！！　しまった！！　ググアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

この世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードに気を取られていたあまり、宿敵であるオメガモンのことを忘れていたアルティメットカオスモンは自身の巨大な腕に走る鋭い痛みに苦痛の叫び声を上げた。

「行くぞ！！」

「来い！！」

オメガモンがガルルキャノンにエネルギーを集束し始めると、アルティメットカオスモンも全身にエネルギーを溜め始める。
それを見たこの世界のオメガモンはガルルキャノンに自身のエネルギーを集中させ、インペリアルドラモン・ファイターモードは右腕の砲塔を胸部の竜顔にはめ込むと同時に必殺技を放つ。

「ガルルキャノン！！」

「ギガデス！！」

「クッ！！　邪魔をするな！！　オーロラアンジュレーション！！！」

この世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモー

ドの必殺技の直撃を巨大な体に喰らったアルティメットカオスモンは苛立った声を上げた。
そして、アルティメットカオスモンはこの世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードに向かってオーロラアンジュレーションを放った。

『グアッ！！』

アルティメットカオスモンがヴァロドゥルモンを模した腕から放ったオーロラアンジュレーションを食らったこの世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードは鈍い苦痛の叫びを上げると、アグモンと毛皮を被った生物―ガブモン、頭にVの字が書かれた青い体のデジモン―ブイモンと緑色の虫の様なデジモン―ワームモンに退化すると、パートナーの元に吹き飛んでいった。

「オメガモン！！　インペリアルドラモン！！　貴様――――！！！　このツケは高くつくぞ！！！」

オメガモンの怒りの声を聞いたアルティメットカオスモンはウルティマバーストをオメガモンに向かって放った。
それと同時にオメガモンもガルルキャノンからブラストレイ・シュトロームを撃ち出す。

「ブラストレイ・シュトローム！！」

「ウルティマバースト！！」

両者の必殺技は空中で激突すると、辺りを物凄い衝撃波が襲う。
オメガモンのブラストレイ・シュトロームは少しずつではあるものの、アルティメットカオスモンのウルティマバーストに競り勝ち始

めていた。

「よし！　このまま押し切りさえすれば勝てるぞ！」

本宮大輔が嬉しそうに叫ぶが、アルティメットカオスモンはそんな状況にありながらも余裕の笑みを浮かべた。

「これがお前の本気か？　フン。やはり、脆弱だな。見せてやろう……これが私の力だ！！！」

その言葉と共にアルティメットカオスモンは更に力を込めると、ウルティマバーストは更に威力を増していき、一気にブラストレイ・シュトロームを押し返すとそのままオメガモンに命中した。

「ウワァァァァァァァァァーーーーー！！！」

『オメガモーーーン！！！』

『ああっ！！』

選ばれし子供たちと人々の叫び声が響く中、アルティメットカオスモンが勝利に高笑いする。

「終わりだ、オメガモン。最後に言っておこう。お前は自分の命を省みなかった。この世界で最も強いのは生き残ろうとする意志だ。お前にはそれが圧倒的に欠けている。そんな奴が戦いに勝って生き延びられるわけが無い！！」

ウルティマバーストを受けて苦痛の叫び声を上げながら落下していくオメガモンに向かってアルティメットカオスモンはそう吐き捨

てた。
力無く落下していくオメガモンの瞳の光も弱くなっていったが、オメガモンの中にある秀人の意識はまだ死んではいなかった。
「僕はまだ死ねない。死ぬ事は許されない！！　僕にはまだやれる事、いや、やらなければならない事があるんだ！！」
その時、秀人の脳裏に自分が小さいときに見たオメガモンの姿がよぎる。今も昔も憧れてきた『僕らのウォーゲーム！』のオメガモンだ。秀人はそのオメガモンのようになろうと戦い始めた時から誓っていたのだ。
「絶対に……諦めるか！！」
オメガモンが叫んだその時、オメガモンの目の光が再び強くなり、オメガモンの胸の勇気の紋章と友情の紋章が合わさった物から、辺り全てを包むような眩い光を解き放たれた。
そこから発せられる光はオメガモンの全身を包み込み、全身が光輝くオメガモンは落下を止めると、上空のアルティメットカオスモンと向かいあった。
「オメガモンが……」
「一体何が起きているんだ？」
「希望の光が……」
選ばれし子供たちと人々、この世界のオメガモンとインペリアルドラモン・ファイターモードが見守る中、光り輝くオメガモンは秀人の真のオメガモン、右肩の蒼いアーマーのとげのような物が蒼色

から金色に変色して、胸の勇気の紋章と友情の紋章が合わさった物から赤色の宝玉のような物に変わった『僕らのウォーゲーム！』仕様のオメガモンへとスタイルチェンジを果たした。

「たっ、たかだか姿が少し変わった程度で私を倒せると思うな！！ウルティマバースト！！」

アルティメットカオスモンは驚愕しながらも自分を見上げている『僕らのウォーゲーム！』仕様のオメガモンに向かってウルティマバーストを放った。

オメガモンは無言で左腕を振り上げると、ウォーグレイモンの頭部を模した篭手からグレイソードを射出させた。

そのグレイソードを装備した左腕を身体ごと大きく振りかぶると、ウルティマバーストの着弾の瞬間に全力で薙ぎ払った。

「グワァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

自分に向かって迫り来るウルティマバーストを回避することが出来なかったアルティメットカオスモンは苦痛の叫びを上げた。

次にオメガモンは右腕を軽く振るうと、ガルルキャノンを展開してアルティメットカオスモンの巨大な腕に向かって砲撃を撃ち出した。

砲撃はアルティメットカオスモンの巨大な腕に直撃すると、巨大な腕を千切落とした。

「ガァァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

苦しむアルティメットカオスモンの残っている腕に向かって、オメガモンは次々と砲撃を撃ち出した。

砲撃が直撃するたびに、アルティメットカオスモンは苦痛の叫び声を辺りに響かせる。

合計5発もの砲撃でアルティメットカオスモンの武器である腕は全て失われた。

「ギギャアアアアアアアアアアーーーー！！！負けん！！負けんぞ！！」

「（その状態で言われても説得力無いな……）フッ！！　ハァッ！！」

苦痛に満ちた叫びを上げながらも諦めないアルティメットカオスモンに向かって、オメガモンはオレンジ色と蒼色に輝いている両腕を交差させて、光エネルギーを溜める。

「ハァァァァ……　ハァッ！！」

そして、交差を解いて光エネルギーを凝縮させながら両腕を両肘が曲がっている状態にすると、両腕を一度上げてガルルキャノンの砲口をアルティメットカオスモンに向けるとシャイニングレイ・シュトロームを撃ち出した。

「シャイニングレイ・シュトローム！！」

「ギャアアアアアアアアアアーーーーーーー！！！！！！！！」

オメガモンのガルルキャノンから撃ち出された凄まじい光エネルギーの奔流は、アルティメットカオスモンに直撃した。アルティメットカオスモンは断末魔の叫び声を上げながら粒子に分解されると、そのまま消滅した。

シャイニングレイ・シュトロームとは、オメガモンの持っている冷気と炎気が最大限に生かされた攻撃である。

冷気で相手を凍らせるように動きを止めて相手の細胞組織を破壊し、膨大な熱量で相手を粒子に分解して完全に消滅させるからだ。

ようやく自身の宿敵を倒したオメガモンは、大きく安堵の深呼吸をすると、選ばれし子供たちの方を向いた。

「選ばれし子供たち、本当にありがとう。君たちの力が無ければ、私は戦えなかった。君たちと一緒に戦えて本当に嬉しかった」

「オメガモン……　貴方は一体？」

「君たちと同じ人間だ。でも、同時にオメガモンと言うデジモンでもある存在だ。隠していてすまなかった」

「そうだったのか……　もう、行くのか？」

光子郎の質問に寂しそうに答えたオメガモンを見て、全員は驚いたが、太一はオメガモンに質問した。

「ああ。私を必要としている世界はまだたくさんある。君たちと触れ合いたかったが、世界はそれを許してくれないみたいだ」

「それじゃ、暇な時はこの世界に立ち寄ってよ。今度は僕達とたくさん話そうよ」

アグモンの声を聞いたオメガモンは、嬉しそうな表情をアグモンに向けた。

「そうだな。いつ来れるかどうかわからないが絶対に来る。約束しよう」

そう言うと、オメガモンは背中を向けた。

「ありがとう、選ばれし子供たち。君たちと共に戦えたことは私の誇りだ。いつの日か、また会える日まで……さようなら」

オメガモンは夕日に向かって飛び立つと、その世界から消えた。

その姿をいつまでも選ばれし子供たちは見ていた。

第１１話　混沌の章　混沌との決着　究極の混沌ＶＳ覚醒の聖騎士（後書き）

登場デジモン紹介

インペリアルドラモン・ファイターモード
世代／究極体、属性／ワクチン種、フリー、種族／古代竜人型
必殺技／ギガデス、ポジトロンレーザー
ドラゴンモードのインペリアルドラモンが全ての力を開放した姿。ドラゴンモードからファイターモードへ変化したことにより、全ての力がコントロール出来るように成った。必殺技は、右腕に装備している『ポジトロンレーザー』を胸にはめ込み、強力なエネルギー波を発射する『ギガデス』に、ドラゴンモードの時同様に強力なレーザーを発射する『ポジトロンレーザー』だ。

シルフィーモン
世代／完全体、属性／ワクチン種、種族／獣人型
必殺技／トップガン、デュアルソニック
アクィラモンとテイルモンがジョグレス進化した事によって生まれた獣人型デジモン。空高く飛び上がり、両腕を広げて滑空することも出来き格闘戦が得意でも在る。両耳のレーダーで相手を捕らえ、頭の『ヘッドマウンドディスプレイ』で表示できる。必殺技は両腕を前に突き出し、エネルギー弾を打ち出す『トップガン』と、超スピードで相手に向かって飛び、その衝撃波で攻撃する『デュアルソニック』だ。

シャッコウモン
世代／完全体、属性／フリー、種族／突然変異型
必殺技／ニギミタマ、アラミタマ
アンキロモンとエンジェモンがジョグレス進化した土偶の様な姿

をした突然変異型デジモン。銀色に輝くボディに白い翼を持っており、一説には古代デジタルワールドに降臨した天使型デジモンではないかと言われている。首や胴が３６０。回転し、全方位に対して攻撃することができる。必殺技は、両目から最大１０万度の光線を放射する『アラミタマ』に、腰部から車輪のような物を発射する『ニギミタマ』だ。

アルティメットカオスモン
世代／究極体　属性／無し　種族／特異型
必殺技／ブロウクンデストロイ、ウルティマバースト
バンチョーレオモン、ダークドラモン、ヴァロドゥルモン、スレイプモンの４体が融合し誕生したデジモン。強大な力を一度に４つも融合した歪みで、身体のパワーバランスが取れず力のほとんどが両腕に集約したため巨大な大きさとなっている。またデジコアを身体の中に収めることができず、両肩に２つ剥き出しの状態で現れている。抑えこむことの出来ない力は全身から漏れるように流れ出ており、成長期デジモン以下はその力だけで近づくことさえ出来ないという。必殺技は大型なデジモンさえも軽く握り潰してしまう威力を誇る『ブロウクンデストロイ』と、デジコアからエネルギーを一気に解放し敵に放つ『ウルティマバースト』。更に、融合元のデジモンの能力と必殺技も使用可能である。（オリジナル）

ガブモン
世代／成長期、属性／データ種、分類／爬虫類型
必殺技／プチファイヤー
　毛皮を被っているが、れっきとした爬虫類型デジモン。とても臆病で恥ずかしがりやな性格でいつもガルルモンが残していったデータをかき集めて毛皮状にしてかぶっている。必殺技の『プチファイヤー』は小さな青色の火炎弾を放つ技だ。

パタモン
世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／哺乳類型
必殺技／エアショット
　大きな耳が特徴の哺乳類型デジモン。この耳を使って空を飛べるが、時速1キロのスピードしかでないため歩いた方が遥かに早い。本人は納得してないが、必死に飛ぼうとしている姿がとても可愛いため人気がある。素直な性格で言われた事をよく守っている。『ホーリーリング』を身につけておらず、聖獣型にも分類されないが、秘められた聖なる力が宿っている。『古代種』のデータを受け継ぐパタモンも存在するらしい。必殺技は空気を一気に吸い込み、空気弾を吐き出す『エアショット』だ。

ホークモン、世代／成長期、属性／フリー、種族／鳥型、必殺技／フェザースラッシュ
　礼儀正しく、冷静沈着なデジモン。古代に栄えた特殊な種族の末裔で、ブイモン、アルマジモン、ワームモンと同様に“デジメンタル”の力で“アーマー進化”ができるデジモン。必殺技は、頭部の羽飾りをブーメランのように敵に向けて投げる『フェザースラッシュ』だ。

ワームモン
世代／成長期、属性／フリー、種族／昆虫型
必殺技／ネバネバネット、シルクスレッド
　気弱で臆病な性格の幼虫型デジモン。ブイモン等と同じ古代種族の末裔で、特殊なアーマー進化をすることができるが、単体でのワームモンは非力で、大型のデジモンには到底かなわない。しかし、デジメンタルの力でアーマー進化することで、信じられないようなパワーを発揮することができる。必殺技は、口からネバネバの糸を吐き出し、敵の動きを封じる『ネバネバネット』に、絹糸のような細く、先が針のように硬い糸を吐き出す『シルクスレッド』だ。

ブイモン
世代／成長期、属性／ワクチン種、種族／小竜型
必殺技／ブイモンヘッド、ロングソード
　数少ない“古代種”デジモンの一匹。古代種の成長期の中でも高い戦闘力を持っている。『デジメンタル』を使って、『アーマー進化』と言う特殊な進化をすると爆発的な力を発揮する。必殺技は勢いをつけて頭から突っ込む強烈な頭突きを相手にぶつける『ブイモンヘッド』と、クロンデジゾイド製のソードで切り裂く『ロングソード』だ。

次回予告

次の世界に到着した秀人。
そこでは４年に一回、７人のエイリアスによるバトルロワイアルが行われていた。
そこに潜む邪悪な影と陰謀に立ち向かいながら、勝ち残る決意をする秀人。
その鍵は秀人が偶然拾ったペンダントに！？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

エイリアス戦争の章　集結！！　７人のエイリアス！！

戦わなければ生き残れない！！　それがこの戦争の掟。

第１２話　エイリアス戦争の章　集結！！　７人のエイリアス！！（前書き）

７人のエイリアスの紹介は出揃った後にしたいと思います。

第１２話　エイリアス戦争の章　集結！！　７人のエイリアス！！

―とある現実世界（リアルワールド）にある鳴海市の清潔感溢れてるホテルの一室―

「あ～　日本茶が上手い……　生きていて良かった……　前の世界ではボコボコにされた末の勝利だったからな……」

早朝の朝八時、それは多くの会社員や学生などが起きて、仕事場や学校に向かう時間帯である。その時間帯に鳴海市の地理を一望出来るホテルの一室にいる藤本秀人はホテルに備え付けの日本茶を飲みながら、自分の首から下げているある物を見ていた。

余談だが、秀人は紅茶も好きだが、日本茶が好きな一面がある。その反面、コーヒーが苦手なのだ。

―今から遡ること１時間前―

オメガモンは鳴海市の建物が立ち並ぶ路地裏に姿を現すと、直ぐ様、両腕を胸の前で交差させてオレンジ色と青色の光に包まれながら、秀人の姿に戻った。

オメガモンの巨大な２０ｍの姿では、目立ちすぎるからだ。

「着いた～　さて、今回の任務の内容は？」

秀人は右腕に付けているデジヴァイス０１の画面を見て、今回の任務の内容を確認する。

最早、ここまで来ると恒例行事と化しているみたいである。

『この鳴海市では、４年に1回、七人のエイリアスによるエイリアス戦争が行われている。相手は全員究極体の強豪だ。勝ち残った最後の一人には、一つだけ願いを叶う権利がある。しかし、過去４度のエイリアス戦争で願いを叶えた者は未だ存在していない。エイリアス戦争に勝ち残り、黒幕と思われるデジモンを倒せ。なお、与えられる願いはお前に一任する。好きな願いを叶えろ』

「バトルロワイアル？それがこの世界の僕の任務か……」

秀人は任務の内容を一読すると、首を一度傾げるものの、納得した。

秀人は今後のことを考えながらホテルに移動を開始する。

それから1時間後、ホテルの一室で秀人は、鳴海市の地図を見ながらエイリアス戦争について考える。地図はホテルに来る前のお店で既に入手していた。

「あちこちを歩き回って手に入れた情報だと、どうやらエイリアス戦争は今日から始まるみたいだ。しかも、過去の新聞を見ても記事がなかったことから目撃者もいない。恐らく、戦いの際に結界を張っているか別の空間に隔離しているようだな」

『流石に究極体の戦いは物凄いからね。所で、どう戦う？　秀人』

「決まっているさ。まずは6人のエイリアスがどのデジモンに進化するのかを調べないと。特殊能力が無いオメガモンだと、十中八九勝ち抜きにくいからね」

『僕もそう思う。まずは敵のことを調べなきゃいけないね』

秀人の言葉にメルーガは頷いた。

既に自分達の戦いは始まっていると秀人達は理解しているのだ。エイリアス戦争はその名の通り、一つの街を舞台にした、7人のエイリアスが繰り広げる戦争だ。戦争にルールなど無い事を理解している秀人達には、自分達がこの世界に現れた瞬間から他人は全て敵だと思って判断した方がいいと考えた。

ましてや戦争の勝利者に与えられるのは、どんな願いでも叶うと言われている。しかし、どういうわけだか願いを叶えた者は一人もいない。

秀人は願いには興味は余り無いが、願いを求めて参加して来る自身以外のエイリアスには興味が湧き上がっていた。自分以外のエイリアスと触れ合う機会が出来たからだ。

しかも、どのエイリアスも秀人の興味を引くには充分な実力を持った強豪の究極体である。一体誰なのかが気になるが、秀人は負けるつもりはない。自分と同じ仲間と戦える歓喜に秀人は自然と喜びに満ち溢れた笑みを口元に浮かべるが、すぐさま冷静に立ち返ると、考え始める。

（恐らく、僕以外のエイリアスはどんな手を使っても願いを叶えようとするだろう。負ける気は無いが、負けたら僕は其処までだ。それに自分で戦うよりも、他者を戦わせる方が効率が良いと考えるエイリアスが居てもいい筈だ……　先ずは情報を集めて、現実的な動きを行っているエイリアスを動けないようにする。その後にゆっくり僕が一対一で戦うのが良いだろう……）

秀人の目的はあくまで最後まで生き残って黒幕を倒すことである。そのエイリアス達の信念と自身の信念を賭けた戦い自体は、秀人は

嫌がってはいないが、戦わなければ生き残れないのだから致し方ない。自分の目的の邪魔をする者はいかなる方法を持っても、排除する。

「オーグ、メルーガ。絶対に勝ち残るぞ。誰が相手だろうと関係ない。この戦争の最後の勝利者は僕達、オメガモンだ」

『応！！』

秀人の言葉にオーグとメルーガが力強く答えると、秀人は戦場である鳴海市に向かい始めた。
全てはこのエイリアス戦争に潜む黒幕を倒すために。

その鳴海市にある屋敷の一室で、王族の末裔である金髪に、右目が紫色、左目が青色の虹彩異色の瞳を持つオリヴィエ・イングヴァルトは自分と融合しているデュークモンと話をしていた。

「つまり、ようやく七人のエイリアスが揃ったということですね、デュークモン？」

『そうなるな。このデュークモンが感じた所、ロイヤルナイツに匹敵、もしくはそれ以上の実力者が多い。しかも、運がいいのか悪いのか、ロイヤルナイツのデジモンが我々の他に2人いる』

「あちゃ～　アルファモンとオメガモン、アルフォースブイドラモンでないことを願いたいです。どちらにしても、この戦いは過酷になりますね……」

デュークモンの報告に、オリヴィエは落胆したような声を出した。過去のエイリアス戦争でも、ロイヤルナイツのデジモンは何度か参戦したが、同士討ちという結果で終わっていることをデュークモンから聞いたからだ。
オリヴィエは棚に飾っているある一人の男性が写っている写真立てを手に取り、その男性を見て涙を流した。

「クラウス……」

その写真に写っている男性、碧銀の髪に、右目が青色、左目がオレンジ色の虹彩異色の瞳を持つクラウス・アスティオンはオリヴィエの幼馴染で二人は結婚を誓い合っていた。
しかし、現実世界（リアルワールド）に迷い込んだデジモンの襲撃でクラウスは死亡してしまい、オリヴィエは瀕死の重傷を負った。
そこに、同じく現実世界（リアルワールド）に迷い込んだロイヤルナイツのデュークモンが現れて、デジモンを倒した。
自身と同じく大切な物を失った悲しみを見てデュークモンはオリヴィエのための騎士になることを決意して、オリヴィエはデュークモンと融合して、エイリアスになり、ロイヤルナイツとして様々なデジタルワールドを愛馬であるＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：グラニと共に守護しながら、オメガモンズワルト一派と戦ってきた。
そんな時にエイリアス戦争の存在を知ったオリヴィエはクラウスとの日々を取り戻すことを願い、参戦を決意したのだ。

「デュークモン、御免なさい。私の我儘に巻き込んでしまって……」

『オリヴィエ、気にするな。このデュークモンは其方のために力を振るう。オメガモンズワルトに倒された仲間のためにも我々は強くならなければ……』

「はい。私は強くなりたいです。誰かを守れるようにこの力で」

オリヴィエは写真を大切そうに戻しながら、決意の表情をしながら宣言する。

オリヴィエと融合しているデュークモンは、以前オメガモンズワルトと戦い、仲間の大半を倒された苦い過去を持っている。

「デュークモン、行きましょう」

『ああ。我が槍と盾、愛馬に誓って必ずや勝利を』

オリヴィエは部屋から出ると、鳴海市内へと向かい始めた。

全ては愛しき人との思い出を取り戻すために。

とある民家の中。

その場所を拠点にした黒髪に黒色の瞳をした男性—藤城拓海は、その拠点の一室で自分達が独自に調べ上げた情報を元に予測を立てていた。

全ては鳴海市を自分達の有利なフィールドに変える為だ。

『こうしてみると、結構戦える場所があると言えば、あるんだな』

「ああ。でも、周りのことを考えると、限られてしまうぞ」

『あらかじめ下見に行ってよかったな、拓海』

藤城拓海と融合しているドルゴラモンは、拓海のパートナーデジモンである。

以前、拓海はデジタルワールドを救ったことがあるのだ。その時に、ドルゴラモンを助けるためにエイリアスとなったのだ。

「ああ。でも、どうする？　俺たちの方から動くか？」

『いや、相手の出方を伺おう』

「（俺はこの世界で自分がどのような男なのかを確かめるために参戦したんだ。そう簡単には負けられないよ）さて、腹も空いたし、ちょっと買出しに行ってこようかな？　今日はお前の好きなカレーライスにしようか？」

『ああ。その途中でエイリアスに会わないように気をつけよう』

拓海は、ゆっくりと立ち上がり部屋を出て行くと、買出しに出かけた。

鳴海市街中。

その場所に存在する道路を、赤色のローブに身を包んだ男性―手塚博也は街中を歩いていた。

その最中で、博也は自分と融合しているメディーバルデュークモンと話し込んでいる。

「七人目が揃ったという連絡がついさっき統制者から届いた。もう少しで開戦、いや……もう既に始まっているのかもしれないな」

『その可能性もある。戦うことが好きなデジモン同士が出会って戦っているのかもしれないな』

統制者とは、このエイリアス戦争を管理する者のことを指す。
統制者の仕事は、戦闘によって引き起こされた事件の隠蔽といった形式上の監督役（兼監視役）である。

「俺はこの戦いの運命を変えることが出来るのだろうか……？」

博也は元々メディーバルデュークモンのエイリアスになるつもりは無かったのだが、七大魔王の一体で“強欲”を司るバルバモンの襲撃に在った時に友人を捨てて一人逃げてしまったがために、友人を結果的には殺してしまった苦い過去がある。
ちなみに、バルバモンは自分とメディーバルデュークモンで倒した。友人の運命を変えられなかったことの贖罪として、彼はメディーバルデュークモンのエイリアスになり、今まで戦い続けたのだ。
このエイリアス戦争に参加したのは、親友を救えなかった悔恨からであり、変えられなかった運命を変えるため、エイリアス同士の戦いを止めるためである。

『博也、運命は変わらないものではなく、むしろ変えるものだ』

「ああ、俺たちで運命を変えよう」

博也とメディーバルデュークモンが話している途中で、突如として港場の方から巨大なエネルギーが発生した。
そのエネルギーを感じたメディーバルデュークモンは険しく顔を歪め、博也はそのエネルギーが感じられた港場の方を睨む。

「戦いが始まったのか？」

『そのようだな。巨大なエネルギーが感じられる。恐らく、他のエ

イリアスを挑発しているだろう』

「運命を変えに行こう、メディーバル！！」

『ああ！！』

博也の言葉にメディーバルデュークモンが即座に答えると、博也は港場に走り出す。

その様子を伺っていた女性は笑みを浮かべていた。

「フフフ……　私の考えていた通りに動き始めたわ……」

『そのようだな。全員が港場に集結している。後はその中から花婿を探せばいいだけだ』

「そうね。行きましょう。さぁ、パーティーはまだこれからよ」

茶色の長髪を特異な髪型に結んだ女性―天野寧々も港場に向かい始めた。

そして、街中を歩いている秀人は、突然感じた巨大なエネルギーに僅かに喜びに満ちた笑みを浮かべる。

「やはり、僕が考えた通り、何者かが戦いを仕向けたようだな……ほう、これは面白いな。僕の他にもエイリアスが集まって来ている。そして、ロイヤルナイツも……　やはり、エイリアスは僕一人ではなかったか。今回は少し楽しませてもらうとしますか！！」

秀人は、自身も加えた六人のエイリアスが集まろうとしている地―港場に向かい始めた。

エイリアス戦争開始のその日から、早速激しい戦いの火蓋が切って下ろされた。
後に残された記録では、これが公式な戦いで１回目とされている。その戦いの場は、港場に存在する倉庫街の大型車両通行用の道路だった。

鳴海市の港場は公園の西側に隣接する形で存在していて、様々な物資が入っているプレハブ造りの倉庫が延々と広がっている倉庫街がある。港湾施設として重要な役割を持っているその倉庫街は夜になると、人通りも絶えて、まばらな街灯がアスファルトを照らしている。
人目を忍んで行わなければならないエイリアス同士の戦いには、もってこいの場所である。

大型車両の通行を考慮した上で建てられた四車線の道路を、博也が歩いていた。
博也の相手もまた、博也が来る前よりもずっと逃げも隠れもしないで姿を現している。その姿だけでなく、何よりもオーラによって、並々ならない相手であることを証明している。

二人のエイリアスは、およそ１０メートル程の間合いを隔てた地点に立ち止まると、対峙する。
博也にとって皮肉なのは、運命を止めるはずの自分が最初の戦いで、かつ運命を加速させる戦いに挑むことだった。
博也は、自分が全力を尽くして戦うことになる敵であるエイリアス

を観察する。

博也の相手のエイリアスは、オレンジ色の長髪を下ろした青色の瞳をした美女だった。
右腕に付けているデジヴァイス０１を見てみると、彼女の髪の色と同じオレンジ色だ。

「私の名前はアインハルト・ドレットノート。貴方の名前は？」

アインハルト・ドレットノートは、自己紹介をした後で、博也に名前を尋ねてきた。

「俺の名前は手塚博也だ。最初に言っておくが、俺は運命を変えるためにここにいる。その過程でお前と戦うだけだ。俺自身の願いのために戦っているわけではない」

そう言うと、博也は表情を硬く引き締める。

「そう……　分かったわ。お互いに自分の目的のために戦いましょう！！」

アインハルトがそう叫ぶと、二人の右腕に付けているデジヴァイス０１が光り輝き始める。
アインハルトのデジヴァイス０１はオレンジ色に、博也のデジヴァイス０１は紅色に光り輝き始める。

《《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》》

『マトリクスエヴォリューーション！！！』

右腕に付けているデジヴァイス０１から電子音声が流れると同時に、二人はデジヴァイス０１を胸に押し付け、自身の体をデータ化させながら究極進化を行う。
同時に、二人の体から光が大量に発生し、それは巨大な繭の形を形成していく。
そして、光の繭が消失した後には、六本の脚を持って体を赤い鎧で身を包み、左腕に聖弩『ムスペルヘイム』を握り締め、右腕に聖盾『ニフルヘイム』を装備した聖騎士型デジモン－スレイプモンと、全身を紅色で、紋章を付した煌びやかな装飾を施した鎧で覆い、背中に紅のマントを羽織り、右手に魔槍『デュナス』を持った戦士型デジモン－メディーバルデュークモンが立っていた。

「スレイプモン！！」

「メディーバルデュークモン！！」

両者は自身の武器を握りしめながら、目の前の相手とどのようにして戦うのかを考え始める。
メディーバルデュークモンは右手のデュナスの感触を確かめながら一歩を踏み出すと、身構えて構えるスレイプモンのムスペルヘイムの間合いへ向けて突撃を開始する。

強大な２つのエネルギーに導かれて、夜の倉庫街へとやってきた秀人を待っていたのは、人手の途絶えた静寂だった。
秀人の耳に聞こえるのは近くの海から吹き込む風の音だけだ。他には、死のような沈黙と停滞した空気が夜の空間を支配している。
「始まっているか……　少し来るのが遅かったみたいだ……」

辺り一帯に張り詰められたエネルギーを感じたことで、秀人はこの場所の状況を正しく理解するとため息をついた。
何者かが結界を張っているのだ。考えられるとしたら、エイリアス戦争の統制者しかいない。エイリアス戦争を鳴海市の住民から、この場所の状況を隠蔽するための手段である。

「さて、どうしたものか……」

秀人は暫し思案した。本来ならば、エイリアスが来る前よりもこの場所に来て、適当な場所に隠れながら相手のことを観察する予定だったからだ。強大な2つのエネルギーによって、スレイプモンとメディーバルデュークモンのいる位置は既に分かっている。問題は、どのようにしてその場所まで接近して、そして、何処から観察するのか、ということである。

（このエネルギーの大きさから判断してロイヤルナイツ級の究極体デジモンが2体と言うところだな……）

秀人は戦闘に参戦する気は毛頭ない。一騎打ちに横槍を入れることは自身の正義の反していることだと考えているからである。秀人の目的はあくまで、スレイプモンとメディーバルデュークモンから距離を隔てた位置から戦況を見ながら、相手を観察することだ。

「直接、自分の足で行くか。何処かから監視することは臆病者のすることだ。近くで見ることこそが私のやり方だ」

結論を出した秀人は、ゆっくりとスレイプモンとメディーバルデュークモンが戦っている場所に向かい出す。

「嘘だろう……　凄すぎでしょ……」

スレイプモンとメディーバルデュークモンが戦っている場所に到着した秀人は、今自分の目の前で繰り広げられているスレイプモンとメディーバルデュークモンの戦いの並外れた凄まじさを見て、ただただ驚愕に息を呑んでいた。

究極体同士の戦いを行なったことのある秀人は、究極体の凄まじさを見たことが今まで一度もない。自分が見ている戦いは、迸るエネルギーの量と激突する熱量の量が規格外なのだ。ただお互いの武器がぶつかり合うだけで、物凄い量の力の奔流が吹き荒れるのだ。

踏みしめる足が路面を穿ち、この世界の物理法則を無視した衝撃によって、風が唸る。

目の前のたった二体の究極体デジモンの戦いだけで、鳴海市はおろか、この現実世界（リアルワールド）を崩壊させることが出来るみたいだ。

「これがエイリアス戦争か……」

エイリアス戦争の脅威と驚愕を、この時、参加者である秀人は目の当たりにした。

規格外な存在である究極体デジモンがこの世界のこの都市で繰り広げる最強にして最高の戦いであることを。

秀人はその中で、自身がそのような規格外の存在であると共に、その究極体デジモンの中でも最強のデジモンの一体と呼ばれているデジモンであることに誇りと恐怖感の二つの相反する感情を抱いた。

「ハァアアアアアアアアッ！！」

「クッ！！」

メディーバルデュークモンが振り下ろしたデュナスを、スレイプモンはニフルヘイムで防ぐと、メディーバルデュークモンを弾き飛ばす。

「ハァッ！！」

「おっと！！　喰らえ！！」

弾き飛ばされたメディーバルデュークモンは、地面に着地するとデュナスの先端から圧縮魔力弾をスレイプモンに向かって撃ち出す。

スレイプモンは高速移動をすることで圧縮魔力弾を避けると、メディーバルデュークモンの背後に回り込んだ。

更に、スレイプモンは自分に気がつかないメディーバルデュークモンに向かってムスペルヘイムを構えて、ビフロストを撃ち出した。

「ビフロスト！！」

「チィッ！！」

自分に向かって迫る灼熱の光矢の存在に気がついたメディーバルデュークモンは、左手でデジモン文字を書き連ねることで防御用の魔法陣を形成してビフロストを防いだ。

そして、その間にエネルギーを溜めておいたデュナスをスレイプモンに向かって突き出すと、デュナスの先端から巨大なエネルギーを放たれて、エネルギーは巨大な飛竜の形に変わり、スレイプモンに向かって迫る。

「レイジ・オブ・ワイバーン！！！」

「ギシャァァァァァーーーー！！！」

「ビフロスト！！」

スレイプモンは、自分に向かって咆哮を上げながら迫り来るエネルギー状の巨大な飛竜に向かってムスペルヘイムを構えて、ビフロストを撃ち出す。

エネルギー状の巨大な飛竜と灼熱の光矢は、メディーバルデュークモンとスレイプモンの中間地点で激突すると、物凄い爆音と衝撃波が発生した。

それらが治まると、お互いに武器を構えながら睨み合っているメディーバルデュークモンとスレイプモンが現れた。

メディーバルデュークモンとスレイプモンの両者は、どちらも未だダメージを負わないまま対峙して、お互いに次の一撃を放とうと考えながら睨み合っている。両者共に疲労の色を微塵も見せてはいなかった。

「流石はロイヤルナイツに所属しているだけあって大した物だな」

「お前こそ”旋風将”の呼び名に恥じない実力の持ち主だ」

メディーバルデュークモンとスレイプモンは、口元に笑みを浮かべながらお互いに褒めあった。

（戦いを見て観察できたのは良かったが、相手はメディーバルデュークモンとスレイプモン。どちらも一筋縄では行かない強豪だ。私を楽しませてくれそうだが、参戦するわけには行かない。このまま観戦と行きますか。どうせなら、ポップコーンとドリンクを買って

くれば良かった……）

秀人は自身のこの場での用事の事を考えながら、再度戦いを始めようとしているメディーバルデュークモンとスレイプモンを眺め続ける。

「フフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！」

「……！？　何だ？」

その時、冷たく緊迫した空気が、不意に大きな笑い声によって破られた。

「何！？」

「別のエイリアスか？」

その場所にいる全員がゆっくりと空を見てみると、漆黒の鎧に全身を包み、背中には漆黒のマントを羽織り、左肩には巨大な刃を装備し、右手にツインスピアを装備した暗黒騎士型デジモンーダークナイトモンの姿を発見する。

メディーバルデュークモンも、スレイプモンも、共に緊迫した雰囲気で言葉もなくダークナイトモンを睨みつけた。

メディーバルデュークモンとスレイプモンの視線を名誉に受け取ったダークナイトモンは彼らの中間に着地した。

（あいつは確か……ダークナイトモン……　世代は無いが、確実に究極体レベル。しかも、実力はロイヤルナイツ級。目的によっては最初の標的だな）

ダークナイトモンの姿を目撃した秀人は不機嫌に顔を歪めながらも、物陰に隠れながらダークナイトモンを睨みつけながら分析する。
秀人にはどうしてだがわからないが、自分とダークナイトモンは反りが合わないことをこの時薄々ではあるものの、感じた。

（騎士でありながら戦いの邪魔をするとは余程の常識知らずか、それとも、相当の自信家か……　何れにしても、気に入らない相手なのは確かだ……）

メディーバルデュークモンとスレイプモンの戦いは正々堂々と戦っていた立派な戦いであり、聖騎士であるオメガモンとしては賞賛するべき一騎打ちである。
それをどんな形であっても邪魔をする行為は、秀人には絶対に赦しがたい行動である。しかも、名前が騎士であり、暗黒騎士型デジモンであるなら尚更だ。
それを行ったダークナイトモンに秀人は思わず怒りを抱いてしまいそうに成るが、辛うじてそれを抑えた。

「双方、武器を収めよ。私は戦いに来たのではない」

ダークナイトモンは威厳のある声を発した。その炯々たる眼光は、それだけで対峙する2体のデジモンの注意を引きつける物である。
無論、メディーバルデュークモンも、スレイプモンもそれぞれが有名なデジモンである。得体のしれないデジモンの話を素直に聞くような者ではない。しかし、ダークナイトモンの目的が襲撃ではなく、自分たちの戦いの邪魔をするためだけに横槍を入れに来たのではないかと疑うと、お互いに武器を構える。
それを見たダークナイトモンは、冷静に自己紹介を始めた。

「我が名はダークナイトモン。どうかお見知り願いたい。来るべき新時代の覇者であるこのダークナイトモンの名を」

（ハァッ！？　何が新時代の覇者？　笑わせるな。お前ごときの似非貴族が新時代どころか今の時代の覇者になどなれる訳がない）

秀人はダークナイトモンの言葉に今度こそ怒りを覚えた。

その一方で、メディーバルデュークモンとスレイプモンは呆気にとられていて、言葉を失っていた。

「君たちとは願いを賭けて戦う運命にあるのだが、戦う前に聞きたいことがある。君たちが何を願うのかは私は知らない。しかし、胸に手を当てて考えてくれないだろうか？　君たちの叶えたい願いが果たして本当に叶える価値があるかどうかを」

それを見たダークナイトモンは、自分の言葉に衝撃を受けているメディーバルデュークモンとスレイプモンを見渡しながら質問をする。

言いたいことがよくわかる質問だったので、スレイプモンはムスペルヘイムを握り締めながら答える。

「悪いが、私は叶えたい願いがあるからここにいる。隣にいる彼もそうだ。そういうお前の目的は何だ？」

「ふむ、分かりやすく言うと、私に願いを叶えさせてもらえないだろうか？　そうすれば、私は君たちを盟友としてもてなし、共に新時代の覇者にしようと思うのだが、如何だろうか？」

『……』

ダークナイトモンのあまりにも突拍子もない提案を聞いて、秀人とスレイプモンは怒りを通り越して呆れて、スレイプモンと向き合っているメディーバルデュークモンは話についていけず、呆れんばかりに大きく溜息を付いた。

「自分の名前を名乗ったことには感心しよう。だが、お前の提案は承諾できない」

メディーバルデュークモンは右手に持っているデュナスを握り締めながら、ダークナイトモンを睨みつけながら言葉を続ける。

「私は運命を変えるために戦っている。お前の言う新時代の覇者になどなるつもりはない。そもそも、お前はこのようなつまらないことのために戦いを妨害するつもりだったのか？」

メディーバルデュークモンの顔には、先程とは違って笑みが無く、侮蔑の色しかなかった。メディーバルデュークモンにとって、ダークナイトモンの提案そのものが不愉快だったのだ。

「ふざけるのは大概にしろ、ダークナイトモン。お前の目的は何だ？　隠すとためにならないぞ？」

メディーバルデュークモンとスレイプモンの双方から容赦ない敵意のある視線を向けられたダークナイトモンは困り果てたように頭を抱えた。

「……待遇は最高級だが？」

尚も勧誘するダークナイトモンについに限界を迎えたのか、メディーバルデュークモンとスレイプモンは武器を突きつけた。

「わっ、わかった……　交渉決裂か。勿体ない物だ。またとないチャンスだったのに……」

（メディーバルデュークモン、スレイプモン。グッジョブ！！）

ぼやきながら俯くダークナイトモンを見て、笑みを浮かべた秀人はメディーバルデュークモンとスレイプモンに向かってサムズアップをした。

「むむっ！？　どうやら、闇にまぎれて覗き見をしている連中がいるな」

『ッ！！』

ダークナイトモンの言葉を聞いたメディーバルデュークモンとスレイプモンは、同時に武器を構える。

（まずい！！　ばれたか！！　こうなったら、ダークナイトモンと刺し違える覚悟で行くしかない！！）

一方の秀人は、自分がいることがばれたと思い、表情を硬くする。

「ほぉ、エイリアスが3人とはな。楽しい戦いが出来そうだ」

すると、地上から10メートル程の高さの街灯のポールの上から別の声が聞こえてきた。

その場にいた全員が街灯の上に慌てて顔を向けると、そこには全身を機械的で角ばった装甲で武装して、金色の髪を靡かせた漆黒の竜機人―ブラックウォーグレイモンXの姿があった。

紅の瞳が三体のデジモンを焼き付けるように睨みつける。
「誰でもいい。俺と戦え。俺は戦いたくてうずうずしているんだ」
「別に戦うのは個人の自由だぞ。自分を中心に世界が廻っていると
いつまでも思うな、ブラックウォーグレイモンX」
『ッ！！！』
ブラックウォーグレイモンXを注意するような声がスレイプモン
達の背後の街灯から響く。
突如として響いた別の声にその場にいる全員が声が響いた街灯を
見てみると、白亜のロングコートを着た長身の男性—秀人が暗がり
からゆっくりと姿を現した。
その一目見て、エイリアスと分かる秀人の存在に、全員が目を見
開いた。此処まで近づかれていたのに誰一人として秀人の存在に気
がつかなかった。
言い換えれば、それだけ戦闘と会話に夢中になっていたという
ことである。
「クククククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハハハハッ
！！こいつは笑える！！此処まで俺を笑わせる奴は貴様が初めてだ
！」
「笑いたければ、勝手に笑っていろ。私は一向に構わないぞ」
秀人の言葉に吹き出したブラックウォーグレイモンXを無視する
と、秀人は気にせずにダークナイトモンに顔を向ける。
「おい、似非貴族。お前の言葉に応じて出て来てやったぞ。お前、

戦いの邪魔をするとは礼儀がなっていないな」

「ウッ……」

秀人の非難にダークナイトモンは言葉を失う。

何故なら、秀人が今までここに現れなかったのは、メディーバルデュークモンとスレイプモンの戦いを邪魔したくなかったからだと言う事になるからだ。確かにあの戦いを邪魔する方が失礼だろう。

その事実に気がついたダークナイトモンは困ったように顔を逸らすが、秀人は気にせずに今度はメディーバルデュークモンとスレイプモンに顔を向ける。

「メディーバルデュークモン、スレイプモン。素晴らしい戦いだった。見ていた私の心を揺さぶるほどだったぞ」

「確かに嬉しいが、盗み見をしていた事実はかき消されないぞ」

「そこにいるダークナイトモンよりもタチが悪いな」

メディーバルデュークモンとスレイプモンの言葉でダメージを受けたのか、秀人はバツが悪そうに顔を逸らしながら取り繕う。

「いっ、いや……　あれはだな……　その……君たちが来る前に来ようと思っていたが、来るのが遅くなってしまって気がついたら始まっていたという奴で……　悪気は無かったのだが……　その……本当に申し訳ございませんでした！！！　二度としません！！！」

結局、秀人は深々と頭を下げて謝罪した。

ちなみに、話している時の秀人の顔は恥ずかしさのあまり、トマトのように赤くなっていた。

（ふふ……　彼、可愛い……　彼の傍にいたいな……）

この時、スレイプモンと融合しているアインハルトは秀人の姿を見て歪んだ恋心を持ってしまった。

彼女の頭の中では、秀人を困らせてそのリアクションを見て楽しんでいる妄想があるのだろう。

「所で、どうする？　ここには、５人のエイリアスがいるのだが……」

謝罪している秀人を見て、一応許す気にはなったのか、メディーバルデュークモンがこの状況をどうするのか尋ねる。

「そこの人間と黒いデジモン、私に願いを叶えさせてもらえない……」

『だが、断る』

ダークナイトモンの勧誘に、秀人とブラックウォーグレイモンＸは同時に断った。

断られたダークナイトモンは地面に両手を付いて、ｏｒｚの体勢をしている。

「そこの人間。俺と戦え。貴様だけ人間の姿でいるのはいささか不公平じゃないのか？」

「確かに。だが、これだけの人目がある中で進化するのはな……」

ブラックウォーグレイモンＸが秀人と戦うと息巻いているのに対

して、秀人は3体のデジモンの目の前で進化するのは気が引けるのか、乗り気ではない。
それに、秀人は基本的に自分から戦いを仕掛けてこない性質なのだ。

「フン。俺の持つ力がそんなに怖いのか？」

秀人のことを嘲笑ったブラックウォーグレイモンXは右手のドラモンキラーの爪先に黒く輝くエネルギー球を作り上げると、秀人に向かって投げつける。

「失せろ！！」

『危ない！！』

スレイプモン達が叫んだ瞬間、秀人の両腕のデジヴァイス01が青色とオレンジ色に光り輝き、光の繭が形成されると、黒く輝くエネルギー球を霧散させた。
そして、中から、スレイプモンとデュークモンと同じくロイヤルナイツに所属している聖騎士型デジモンーオメガモンが姿を現した。

「ウオオォォォォォォォーーー！！！」

『なっ！？』

「ほぉっ、まさかオメガモンとはな……　ククククッ！　他の奴らよりも楽しい戦いが出来そうだ！ハハハハハハハハハハッ！！」

オメガモンの咆哮を聞いたスレイプモン達は驚愕し、ブラックウ

ォーグレイモンXは歓喜に満ち溢れた咆哮を響かせるが、オメガモンは苦笑しながらブラックウォーグレイモンXに話しかける。

「おい、ブラックウォーグレイモンX。勘違いをしないでもらいたい。貴様と戦うのは、貴様を倒すためではない。貴様はこのエイリアス戦争に勝ち残るための通過点だ。最初からクライマックスだと先が思いやられるからな」

「ククククッ……！！　貴様、聖騎士なのに本当に面白いな！！！　今まで、ロイヤルナイツとは何度も戦ってきたが心の底から面白いと思えた奴は貴様が初めてだ！！！　名前は？　俺は九能達也だ」

「藤本秀人だ。貴様のようなバーサーカーに面白いと言われるのは光栄だな」

「クククククッ、さぁ、オメガモン。俺を楽しませろ！！！」

「ハハハハハハッ！全力でかかって来い。お前の全てを打ち消してやる！！！」

ブラックウォーグレイモンXは、自身よりも格上のデジモンと戦える喜びに、オメガモンは、自信と同じエイリアスと戦える喜びに打ち震えながらお互いに対峙を始めた。

第12話　エイリアス戦争の章　集結！！　7人のエイリアス！！（後書き）

次回予告

オメガモンとブラックウォーグレイモンXの戦いは壮絶極まる物だった。
その戦いの後に訪れた喫茶店で手塚博也と秀人は運命的な出会いをする。
戦う目的の相似に心震える2人は、戦いを開始する！！

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーZERO　～オメガモンのテイマーの物語～

エイリアス戦争の章　運命を変える旋風将！！　メディーバルデュークモン！！

白銀の聖騎士は驚愕する。旋風将の恐るべき実力に。

第１３話　エイリアス戦争の章　運命を変える旋風将！！　メディーバルデュ

投稿が遅くなってすみませんでした。
これからも週一を目標に頑張りたいです。

第13話　エイリアス戦争の章　運命を変える旋風将！！　メディーバルデュー

―鳴海市にある港場―

そこでは、5人のエイリアスが集っていた。
その場所にいる3人のエイリアスが自分たちの目の前で対峙している2人のエイリアスーオメガモンとブラックウォーグレイモンXの姿を見つめていた。

「どうやら、あの二人の戦いには介入できないな……　介入すれば、そいつの命は無いと思おう」

ダークナイトモンの呟きに、メディーバルデュークモンは頷きながら言葉を発する一方で、スレイプモンは無言でオメガモンとブラックウォーグレイモンXを見ている。

「それもそうだが、これで迂闊には動けなくなった。ここは、のんびり観戦と行きますか」

「……」

バトルロワイアルの常道に基づいて考えれば、最も力の弱い者を総掛かりで潰すことが一番無難な戦術である。よって、もしここで不穏な動きをすれば、最悪の場合は四対一の絶望しか存在しない戦いを強いられる可能性が高い。そうすれば、ここにいる全員でも勝ち目がなく、その内の誰かは初日で脱落するしかない。
誰が誰に対してどのように仕掛けるのか、更にその隙を誰が衝くのか、この状況で生き残るためには、全ての敵の動向を正確に見極めなければならない。それは、どのエイリアスにも共通して言うこ

との出来ることである。
　メディーバルデュークモンとスレイプモンの場合は、それぞれがお互いに当面の敵である。一度戦った以上は、何があってもその決着を付けなければならない。しかし、その話は一対一の決闘を、何事も無く行える場合の話であり、ここまで邪魔が入ってしまえば、決着はまた後日に付かなければならない。
　ダークナイトモンにとっては、今のところは明確に誰かを先に倒すべきか見定めてはいない。現時点での目的は、このエイリアス戦争の自分以外の参加者の顔を覚えることだからだ。しかし、出てきたからには、戦う覚悟はあると見ていいだろう。

　ブラックウォーグレイモンXは猛獣のような深紅の瞳を、目の前に立っている白銀の鎧で全身を包んでいるオメガモンに向ける。彼の瞳には、ただ純粋に戦いを楽しむという感情しか存在していない。

「さて……俺から行くぞ！！」

　ブラックウォーグレイモンXが叫ぶと同時に背中の二つのバーニアが勢いよく噴きあがり、ブラックウォーグレイモンXは超高速で目の前のオメガモンに向かって右腕に装備しているドラモンキラーを振りかぶりながら突撃を開始した。

「ウオオォォォォォォォーーーーーーーーッッッッ！！！！」

「フン」

　ブラックウォーグレイモンXは右腕に装備しているドラモンキラーをオメガモンの胸部に向かって突き出したが、オメガモンは左腕のウォーグレイモンの頭部を模した篭手で受け止めた。
　そして、オメガモンはドラモンキラーを受け止めた左拳に力を込

めることでドラモンキラーを弾くと、空いている右腕のメタルガルルモンの頭部を模した篭手に光エネルギーを集中させながら右拳を突き出すことで、ジェネレードナックルをブラックウォーグレイモンXの胸部に向かって繰り出した。

「ジェネレードナックル！！」

「グッ！！」

ジェネレードナックルを胸部に喰らったブラックウォーグレイモンXは、後方に吹き飛ぶが、背中のバーニアを上手に使いながら体勢を立て直しながら着地した。

ジェネレードナックルを喰らったクロンデジゾイド製の鎧の一部から火花が散っているが、ブラックウォーグレイモンXはそれを見て、楽しそうな笑みをオメガモンに向けた。

オメガモンが笑みを返すのを見たブラックウォーグレイモンXは、再びオメガモンに向かって突撃を開始すると、左腕のドラモンキラーを振り抜く。

「ハァァァッ！！」

オメガモンは自身に向かって迫り来るブラックウォーグレイモンXに目を向けながら左腕を掲げ、グレイソードを射出する。

オメガモンは射出したグレイソードでドラモンキラーを弾くことでブラックウォーグレイモンXとの距離を空けてガルルキャノンから砲撃を撃ちだそうと考えた。

しかし、ブラックウォーグレイモンXは背中の二つのバーニアを噴かせる事でそのまま上空に飛び上がると同時に両手の間に巨大な黒いエネルギー球を作り上げると、自分を見上げているオメガモンに向かって投擲する。

「ハデスフォーース！！！」

オメガモンはブラックウォーグレイモンXが上空に飛び上がった時点で自分に向かってハデスフォースか暗黒のガイアフォースを投擲することを予測すると、右腕を軽く振るうことでガルルキャノンを展開して、巨大な黒いエネルギー球に照準を合わせて砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン！！」

オメガモンの撃ち出した砲撃とブラックウォーグレイモンXが投擲したハデスフォースが激突すると、辺りに物凄い轟音が鳴り、巨大な爆炎が発生した。

オメガモンは直ぐ様、上空に飛び上がるとグレイソードを構えながらブラックウォーグレイモンXに向かって突撃を開始した。

「ウオオォォォォォォーーー！！！！！」

「オォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

自分に向かって突撃するオメガモンを見たブラックウォーグレイモンXは、両腕のドラモンキラーを構えながらオメガモンに向かって突撃する。

そのまま両者は、辺りに甲高い金属音を鳴り響かせながら凄まじい衝撃波が発生する剣戟を開始した。

ダークナイトモン達は空中を縦横無尽に飛び回りながら、お互い

の思いを武器に込めながらぶつけ合う二体のデジモンを見つめていた。
その最中に、スレイプモンはメディーバルデュークモンに声を掛ける。
「メディーバルデュークモン。彼らを見てどう思う？」
「……まず、オメガモンは特殊能力こそ無いが、パワー、スピードといった総合力も高く、バランスも取れている。一方のブラックウォーグレイモンXは、総合力こそは劣るが……」
「……全くもって厄介なエイリアスがいるものだ。ブラックウォーグレイモンXがあのオメガモンを相手にしても互角に戦えている理由、それは経験だ。恐らく、ブラックウォーグレイモンXは自分よりも実力が上のデジモンと戦ってきたのだろう」
メディーバルデュークモンは一度言葉を切りながらブラックウォーグレイモンXの姿を見ながら分析をした。
その証拠に、ハデスフォースとガルルキャノンの激突で発生した衝撃波が平等に攻撃を撃ち出した本人たちに来た。
「……さて、ウォーミングアップもここまでとするか……　そろそろ俺も本気で行かせて貰うぞ！！　ウォーブラスター！！」
ブラックウォーグレイモンXは両手の間に黒いエネルギー球を作り出すと、オメガモンに向かって撃ち出す。
「フッ！！」
オメガモンはグレイソードを戻した左手で次々と撃ち出される黒

いエネルギー球を受け止める。
それを見ても、ブラックウォーグレイモンXは次々と黒いエネルギー球を撃ち出すが、オメガモンは左手で全ての攻撃を受け続けていく。

（変だ……　普通ならばガルルキャノンの砲撃かグレイソードで対処するのに、何故左手で受け止める？　ここは様子を見よう）

オメガモンの行動に疑問を抱いたブラックウォーグレイモンXはエネルギー球を撃ち出すことを止めて、両腕のドラモンキラーを構える。

「お返しだ！！　エボルレイ・ジェネレード！！」

オメガモンは、ウォーブラスターを受け止めながら光に転化した左手に右手を添えながらブラックウォーグレイモンXに向かって突き出しながらエボルレイ・ジェネレードを撃ち出した。

「グアッ！！」

オメガモンが左手から撃ち出した光のエネルギー弾を食らったブラックウォーグレイモンXは、鈍い苦痛の叫びを上げた。
そして、エボルレイ・ジェネレードの爆発の中からゆっくりと現れたブラックウォーグレイモンXの体には、至るところにダメージの痕があった。

「ほぉ……　俺の攻撃を受け止めていたのは撃ち返すためだったとはな……」

「その通りだ。君の攻撃を利用させてもらったよ」

「フフフ……　本当に面白いな。オメガモン、貴様は最強でかつ最高の相手だ。だが、この攻撃は利用できまい。ドラモンキラー射出！！」

そう言うと、ブラックウォーグレイモンXは左腕に装備しているドラモンキラーの刃をオメガモンが背中に羽織っているマントに向かって射出した。

ブラックウォーグレイモンXはX進化したことによって、両腕に装備しているドラモンキラーの爪の部分が射出出来るようになったのだ。

「邪魔だ！！」

オメガモンは左腕のグレイソードで自分に向かって迫り来るドラモンキラーを弾き飛ばした。

ところが、このドラモンキラーが突き刺さった場所が余りにも悪すぎた。ダークナイトモンの足元にドラモンキラーが突き刺さったのだ。

「ムッ！！　やれやれ……　どうやら、彼は私に喧嘩を売っているみたいだな……」

ダークナイトモンは右手に持っているツインスピアを構えながらオメガモンに向かって突撃を開始した。

「クッ！！（不味い！！　悪意は無いが、これでは！！）」

「下がっていろ！！　オメガモン！！　暗黒のガイアフォース！！！」

自分に向かって武器を構えながら迫り来るダークナイトモンを見て、グレイソードを構えるオメガモンだったが、ブラックウォーグレイモンXが自分に下がるように言ったので直ぐ様下がった。
ブラックウォーグレイモンXは、自身の背中のバーニアを噴射させながら一瞬にして、ダークナイトモンに向かって接近すると、両腕をダークナイトモンの胴体に付けて、漆黒に光るガイアフォースをゼロ距離で放った。

「ガアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！」

ダークナイトモンは苦痛の声を上げながら地上に落下した。地上に叩きつけられた衝撃によって、辺りに物凄い衝撃波が発生した。
しかし、暗黒のガイアフォースを放った本人であるブラックウォーグレイモンXは苦々しげにダークナイトモンを見下ろす。
何故なら、自身の戦いの邪魔をされたからだ。ブラックウォーグレイモンXは三度の飯よりも戦いが大好きである為に、戦いの邪魔をしたりすると物凄く怒る時があるのだ。

「オメガモン、この戦いの決着はまた後日にしよう。どうも、貴様の言う通り、周りの奴らが邪魔だったようだ。ここは場所を変えてやるべきだったな。そんな状況で戦っても、俺の本能は満たされない。この決着は必ず付けよう」

「ああ。分かった。また後日、決着をつけよう」

オメガモンと約束をしたブラックウォーグレイモンXは、そのまま自分の拠点である民家に向かって背中のバーニアを噴射させながら帰っていった。

「私も帰ろう」

地上に降りたオメガモンは両腕の武器を戻すと、港場から立ち去るべく踵を返した。

すると、突然、ダークナイトモンがオメガモンに向かって凄まじい勢いで、アスファルトの舗装を蹴散らしながらツインスピアを構えて突進する。ただ一人オメガモンだけを目指して。

「ハアァァァァァァァァ――――――！！！！！」

ダークナイトモンは気迫と共に、右手に持っているツインスピアをオメガモンに向かって振り下ろす。

「さっきの借りを返してもらおうか！！」

「クッ！！」

無論、オメガモンとて油断していたわけではない。即座にグレイソードを構え直して防御体勢に入る。

オメガモンは危なげなくグレイソードで受け止めると、右ハイキックをダークナイトモンの頭部に向かって繰り出す。

「ハァッ！！」

「ムオッ！！」

ダークナイトモンはツインスピアを2本の剣―ツインソードにすることでオメガモンの右ハイキックを防御する。

そのまま、オメガモンとダークナイトモンは激しい剣戟を開始した。二撃、三撃、豪快な剣さばきでダークナイトモンはオメガモン

を攻撃する。迎撃するオメガモンは防戦一方だった。ダークナイトモンは右手の槍でグレイソードを防御しながら、左手の槍でオメガモンを攻撃するからだ。幾らオメガモンでも、勢いに乗っているダークナイトモンの怒涛の攻撃の前では防戦一方に立たざるを得ない。反撃の隙を与えられないまま、次第にオメガモンは劣勢へと追い込まれていく。

「クソッ……！」

切迫した声と共に、オメガモンの表情はいつしか焦燥の汗が滲み始める。

（このままでは私が一番最初に脱落してしまう……）

この状況を分析して、オメガモンはより一層表情を厳しくする。この状況は、自分とダークナイトモンの一騎打ちで終わるとは思えない。何故なら、彼らの近くにはほとんどダメージの無いメディーバルデュークモンとスレイプモンが存在しているからだ。弱肉強食のバトルロワイアルでは、圧倒的な劣勢に立たされることは最悪の状況である。メディーバルデュークモンとスレイプモンはこの状況でダークナイトモンに加勢すれば、いともたやすくオメガモンを脱落させられる。更にその後でダークナイトモンを倒せば一石二鳥になる。彼らは最小限の力とダメージだけで二人のエイリアスを脱落させたことになる。

（だが、どうすれば……）

オメガモンは今自分がどれだけ危険な状況にいるのかを理解している。傍観している二人のエイリアスへの対策を含めながらダークナイトモンとの戦いをせめて互角の状態にまで持ち込まなければな

らない。
　ダークナイトモンは容赦ない攻撃でオメガモンに食らいつく。次々と繰り出されるツインソードは、まさに騎士と呼ぶべき冴えと正確さであり、まさに達人の領域に達している。
　オメガモンを圧倒しているのはその勢いだけではなく、最強のデジモンの一体であるオメガモンに反撃の隙を許さない猛攻である。

「ハァアアアアアアアッ！！」

　ダークナイトモンは裂帛の気合いと共にツインソードを振りかぶる。次の一撃は大振りでガードもろともオメガモンの胴体を叩き潰さんばかりの勢いで繰り出されるだろう。

「フッ……」

　しかし、オメガモンはニヤリと笑うと、ガルルキャノンを直ぐ様展開して近距離砲撃をダークナイトモンに向かって撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「なっ！？　ガアアァァァァァァァーー！！！」

　ガルルキャノンの近距離砲撃が直撃したダークナイトモンは、苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ばされて、地面に物凄い衝撃と共に叩きつけられた。
　オメガモンはガルルキャノンの照準をダークナイトモンに向けながら冷ややかに言い放った。

「悪ふざけはその程度にしてもらおうか。ダークナイトモン。これ以上私と戦うつもりなら、私とて貴様を葬りかねないぞ？」

「やれやれ……　大したものだ。流石に君と殺り合うのは少々荷が重いみたいだよ。どうかな？　私と共に手を組む気はないか？　君の望む願いのためなら、私は其処にいるエイリアスと刺し違える覚悟はあるのだが？」

「フン。下らないな。私は貴様のような外道と組むつもりは無い。それに、どうせいつかはお互いに殺りあう運命だ」

「その決断で後で後悔しないようにな」

何とか立ち上がったダークナイトモンはこれ以上の戦闘は禁物だと自覚して、そう捨て台詞を残すと、港場から去っていった。

オメガモンは忌々しげに睨んでいたが、表情を和らげる。

「と、このようにしてあの似非貴族には退場してもらったのだが……」

まるで何事も無かったかのように、オメガモンは両腕の武器を戻しながらメディーバルデュークモンとスレイプモンに呼びかける。

「メディーバルデュークモン、スレイプモン。今日はもう遅い。今日はここまでにしてまた明日何処かで戦おう。心配するな。私はいつでも相手になるから」

そこまで言うと、オメガモンは笑みを浮かべた表情をメディーバルデュークモンとスレイプモンに向けた。

破壊の嵐がつい先ほどまで吹き荒れていた戦場に静寂が訪れた。

それと共に、岸壁に打ち寄せる波の音と遠く離れている市街地の喧噪が聞こえてくる。統制者が付近一帯に張り巡らせていた結界を

解除したのだろう。

「そうだな。また明日にしよう。私はここで」

メディーバルデュークモンはオメガモンの提案に頷くと、自分の拠点に向かって帰っていった。一方のスレイプモンは、最後に残ったオメガモンに向けて複雑な思いが入り交じった視線を向けながら言葉をかける。

「……結局、お前の考えていた通りに事は運ばなかったな。オメガモン」

「そのようだな。それが人生だから別に驚きはしないさ」

スレイプモンの言葉を聞いてオメガモンが笑みを崩さず答えると、スレイプモンはオメガモンにある提案をする。

「お前の願いを聞きたい。同じ聖騎士同士、分かり合えるかもしれないからな」

「ふむ……よかろう。ただ、ここで話す気にはなれないから公園で話そう。確か自動販売機があったはずだ」

「分かった」

スレイプモンは先に鳴海市にある公園に向かって移動を開始した。

それを見たオメガモンはようやく張り詰めていた緊張を解放して深呼吸をした。あらためて辺りを見渡せば、辺り一帯の破壊のされ方は凄まじい限りである。当然と言えば当然である。五人のエイリアスが一堂に会し、全員が必殺技を繰り出したからである。

「序盤からいきなり派手になるとはな……　過去のエイリアス戦争はどうなのかよく知らないが、こんな感じの始まりだったのだろうか……？」

エイリアス戦争の破壊の痕跡は、参加者達が心配する必要はない。エイリアス戦争の隠蔽は統制者が責任を負うからだ。この大震災張りの有様もきっと、統制者の力で何事も無かったかのようにすることだろう。

オメガモンは無言でスレイプモンが飛び立った空の果てを見ると、自身も公園に向かい始めた。その流線形の兜から伺える表情には戦いの興奮や疲労の色は無い。

（何より、勝負はこれからだ。今夜の戦いは、これから始まる大戦の序章にしか過ぎないのだから……）

オメガモンの心中には、焦燥も無ければ畏怖も無い。戦乱の嵐を前に聖騎士の心は揺るがない。その心は、デジタルワールドの守護神たるロイヤルナイツその物のようであった。

「エイリアス戦争……　この私をより強くさせてもらうぞ」

夜空に輝く星たちを見ながら、オメガモンは静かに呟いた。

夜空の星たちだけがオメガモンを励ますように輝く。

「済まない。遅くなった」

「大丈夫。私も今来た所だから」

オメガモンが公園に着いた時には、スレイプモンは元の姿であるアインハルト・ドレットノートになっていて、公園にあるベンチに座っていた。

「コーヒーか紅茶かどっちがいい？」

「紅茶で。コーヒーは苦手なんでね」

秀人の姿に戻ったオメガモンに何を飲むのか聞いたアインハルトは、自動販売機で紅茶とコーヒーを買った。

紅茶とコーヒーを手にしたアインハルトは紅茶を秀人に渡すと自分はコーヒーを飲み始める。

「はい、以外ね。コーヒー苦手なんて」

「苦いのがどうも駄目なんだよ。カフェオレならまだ大丈夫なんだけどな……」

アインハルトの言葉に秀人は苦笑しながら紅茶を飲み始める。その姿を見ながらアイハルトもコーヒーを飲む。二人の間には、静寂が訪れた。

『あっ、あの……』

秀人とアインハルトは同時に名前を聞こうとするが、二人同時に同じことを聞こうとしたので、お互いにそっぽを向くと頬を赤らめる。

「ごっ、ごめん。君の名前は？　僕は藤本秀人」

「私はアインハルト・ドレットノート。よろしくね、秀人君」
二人はお互いに自己紹介をすると、握手をする。秀人はアインハルトの髪の匂いの良さに少しどきっとなった。
アインハルトは秀人の瞑らな空色の瞳をじっと見ながら秀人に話しかける。
「秀人君はこの戦いに参戦した理由は？　この戦いで何を叶えたいの？」
「僕が叶えたい願い……　それは……」
「それは？」
アインハルトの言葉に秀人は視線を落とし、迷いながらも呟く。
「この戦いを止めること。過去４度に渡って行われてきたこのエイリアス戦争で勝利者はいない。その裏には何者かの陰謀が必ずあるはずだ。僕はそれを打ち砕くために参戦した」
「流石は正義の聖騎士ね。それに比べて私は……」
顔から迷いが消えながら静かに決意を込めて答える秀人の表情を見て、アインハルトは自嘲気味に話した。
「私の願いは家族と一緒の時間を過ごすこと。母親は私を生んだ後に死亡。父親は私を施設に預けて他の女ととんずらしたの」
「……」

アインハルトの幼少期を知って秀人は悲しそうに俯いた。自分の両親は未だ健在で自分のことを忘れていないかを思い出したからだ。
忘れていたが、自分は世界の異端者である存在。そんな存在を受け入れてくれる世界など今のところ存在していない。秀人は、両親、大学の友達、教授、自分を知る全ての人がいる現実世界(リアルワールド)が急に恋しくなった。

「大学生になって時間が出来て、私は動物園に友達と一緒に行った。動物園には人が一杯いて楽しかったわ。家族連れも沢山いて本当に見ていて楽しかった」

笑顔で自分に話すアインハルトを見て、秀人はアインハルトの悲しみに気がついた。
その証拠にアインハルトは、笑顔から悲しそうな表情に変わりながら話を続ける。

「でも……やっぱり辛かった。家族を見て、私には無い物を見て、帰ってからずっと泣いていた」

「それで……家族と過ごしたいと?」

「うん。私がエイリアスになったのはね、私の世界にスレイプモンが監視に来ていたの。ある日、デジモンに襲われた私を庇ってスレイプモンの電脳核(デジコア)に致命傷が入っちゃったの。それで、助けたいと、一人は嫌だと思ってエイリアスになった」

秀人はそれを聞いて自分のことを考える。自分もこの世界に来るまでは孤独だった。選ばれし子供たちとは僅かながらも触れ合う機会はあったが、それでも自分と彼らは違う。

「でも、結局孤独だった。私は人間であり、スレイプモンである存在。そんな異端者である私と結婚しようという人はいない」

「そうだったな……　僕も異端者だ。ディアボロモンの襲撃を受けて、携帯育成ゲームで自分が育てていたウォーグレイモンとメタルガルルモンと融合した。だから、自分の両親や友達には一生会えない。僕は一生戦わなければいけない宿命がある。恋愛とかそういうのはとっくにグレイソードで斬り捨てたよ」

秀人の言葉を聞いたアインハルトは考える。もし、両親が生きているまま、エイリアスになったら自分はどうなっていたのか。秀人と同じになっていただろう。誰にも賞賛されず、誰にも理解されず、ボロボロになりながら孤独の戦いを続けるだけ。そんなことで果たしていいのか？そんなはずはない。空しいだけだ。

「あの……」

アインハルトが声をかけると、秀人はアインハルトを見つめる。他人に敵意を向けるような瞳で、目と目が合っているはずなのに、まるで自分を見ている気がしない瞳で。

「私と同盟を結んで欲しいの」

「はい！？　君は自分の言っていることが分かっているのか？僕は君の敵だ。それを仲間にするだと？　君は自分の敵を受け入れるというのか？」

「そうよ。私が貴方の仲間になる。私は貴方のためなら何だってするわ。エイリアスと戦えと言えば戦うし、働けと言えば死ぬ気で働

くわ」

「何かと思えば、そのような下らない事か。悪いがこの話は無しだ。僕は帰る」

アインハルトの言葉を聞いた秀人は不機嫌そうな表情のまま、アインハルトに背を向けたままホテルに帰り始める。

それをみて慌てたアインハルトは秀人の背中に抱きつくと、涙声で秀人に必死で話しかける。

「嫌だよ……私を一人にしないで。お願いだから私の傍にいて。何でも言うことを聞くから……いい子でいるから……」

「……分かったよ。自分と一緒にいたいと言う人に止める権利は僕には無い」

「……ありがとう……」

アインハルトは秀人の背中に顔を埋めながら泣き続けるので、秀人は何とか引き離した。

秀人は非常になれない自分自身に対して、この時激しい嫌悪感を抱いた。

「ほら。泣くなよ。自分で帰れる？　それとも一緒にいようか？」

「一緒に……」

こうして、秀人はアインハルトが拠点にしているマンションに向かった。ちなみに、秀人はアインハルトをおんぶしたまま向かったため、少し恥ずかしい思いをした。アインハルトの拠点であるマン

ションからホテルは目と鼻の先だったので、秀人は歩く距離が少なくすむことを知ると安心した。

「それじゃ、また明日……と言っても会えるかどうか分からないけど、その時はよろしくね」

「うん。お休みなさい」

「お休み」

秀人がホテルに向かって帰っていくのを確認すると、アインハルトは自分の番号の部屋に戻ると、シャワーを浴びてそのまま布団に飛び込んだ。

（寝れないや……　秀人君はたぶん疲労で寝ているだろうな……）

アインハルトは寝ようと思っても寝付けなかった。原因は秀人だった。初めて秀人を見た時からオメガモンに進化した時、ブラックウォーグレイモンXとダークナイトモンと戦っている時、自分と話した時がはっきりと頭に刻まれている。それぐらい、アインハルトは秀人のことが好きなのだ。異性を初めて好きになり、かつ自分の心をここまで引きつけた秀人のことをアインハルトは知りたくなった。

（まずは寝よう……　絶対生き残って秀人君と一緒に……）

アインハルトは自分の願いのことを考えながら深い眠りに落ちていった。

秀人とアインハルトが公園で話している時、エイリアス戦争の統制者は監督役としての職務を果たすべく仕事をしていた。

「大山二丁目の港場の倉庫街。損壊は広範囲かつ甚大。……ごまかす理由は火災で。後は現場判断でお願いします」

統制者の警察や自治体への根回しは万全である。恐らく明日の朝刊には、あの倉庫街の惨状がほぼ完璧に事実を歪曲された形で一面を飾ることになるだろう。

それから少しして仕事を終えた統制者は今夜の戦いで明らかになった参加者について頭の中で分析をする。

統制者は冷淡に分析を脳裏に張り巡らせたが、その胸の内には何も感じられない。

自分は常に傍観者でいなければならない。決して当事者になってはならない。それが自分の使命だからである。

「さてさて、誰が最後に勝ち残るのかな？」

統制者は誰もいない教会で笑みを浮かべていた。

戦闘の翌日、秀人はホテルを出ると街中を歩き始めた。

前日の疲労もとっくに取れていた。自分の体がオメガモンとして機能しているのだろう。

「デジヴァイスの反応は無し……か」

『流石にそう簡単には行かないようだね』

秀人はエイリアスを見つけるべく、街中を歩いているのだが、なかなか見つからないことに頭を抱えていた。

「随分と深刻な荷物を背負っているみたいだな」

「誰だ？」

その時、秀人に向かって黒髪に黒い瞳をした２４歳の青年が声をかけてきた。

その青年の見た目は好青年で、見るからには悪意は無さそうな、そんな印象を秀人に与えた。

「俺は手塚博也だ。よろしく」

「ああ、よろしく。占いは勘弁してもらおう。生憎、僕はそういうのは嫌いなんでね」

「運命、戦い、黒幕……　ほぉ、なかなか高潔な人物じゃないか」

手塚博也は秀人の言葉に構わず占いを続けていく。その的中率の高さに秀人は一瞬だけではあるが、驚愕する。

「俺の占いは当たる。だが、俺はそれで食っていくつもりはない。それに、お前は今日重要な人物に会う運命にある」

「右腕に付けているのはもしかして……」

秀人は博也が左腕に付けている紅のデジヴァイス０１を見て、驚

愕した。
一方の博也は秀人の両腕のデジヴァイス０１を見て昨日のオメガモンの事を思い出した。
「昨日のエイリアスは……」
「俺だ。どうやら、その重要な人物は」
秀人と博也はお互いにデジヴァイス０１を見せ合うと、近くの喫茶店に入っていった。

「誰にだって忘れてしまいたい思い出なんて一つや二つはある。俺の友人だった、沖田総一郎……　ギターが好きでロックバンドでメジャーデビューする夢があったんだ。あいつの音楽は本当に俺の心を揺さぶった。俺はよくライブハウスに行ってあいつの音楽で時には励まされ、時には盛り上がり、次の日、首の痛みに悩まされていた」
博也は頼んだコーヒーを時折飲みながら、自分自身と語り合うかのように少しずつ話を始めた。
秀人は博也のｉｐｏ●を借りて音楽を聞きながら博也の話を聞いている。博也の表情は自分でも知らず知らずのうちに穏やかなものになっていた。
「でも……　ある日、バルバモンとメディーバルデュークモンがこの世界に来て戦っていた。俺と総一郎はそれに巻き込まれて、俺は逃げて、総一郎は瀕死の重傷を負った。俺はあの時……　どうして総一郎を助けられなかったんだろう……」

しかし、次の瞬間には博也の表情が苦痛や激しい後悔の念に歪むと同時に、博也の脳裏に総一郎の最期が思い浮かぶ。
そんな博也を見て、秀人は少し考えてから話し始めた。

「僕も同じことを考えたことがあります」

「同じことを？」

少し驚いた表情をした博也に、秀人は自分の経験を話し始めた。

「はい。僕はここに来る前に選ばれし子供たちと一緒にカオスモンと戦いました。結果的には勝てましたが、僕が弱かったせいでオメガモンを助けることが出来ませんでした」

悔しそうに話す秀人だったが、少し明るい表情になると声の調子を変える。

「でも、僕はそのオメガモンとして戦っています。自分がオメガモンを助けられなかった過去は変えられません。でも、未来は変えることは出来ます。それでも、自分がオメガモンを助けられなかった過去は消えません。だからこそ、僕は戦っているのかな？と思うんです」

「成程な。もしかして、戦う目的は似ているというわけだな」

納得したように頷く博也に、秀人は提案をする。

「そうです。だから、手を取り合い、一緒に戦いましょう」

「ああ。だが、少し条件がある。手を取り合い、勝ち残るのはお前じゃない。俺の方だ」

博也は秀人の提案に条件を出すと、不気味な笑みを浮かべる。
その笑みの意味を探ろうと秀人は怪訝そうな表情になった。

「何……？」

「目出度い人だよ、お前は。戦争に綺麗事なんて要らないんだよ」

博也はそう言うと、立ち上がり財布を出しながら秀人に目を向けた。

「昨日の倉庫街に行け。俺と戦え。金は俺が払う」

「……」

秀人は訝しながらも博也が言った倉庫街へと向かっていった。

鳴海市に存在している港場の倉庫街。
秀人が着いた数分後、博也も到着した。

「どういうつもりですか！！　僕は貴方と戦うつもりは無い！！」

「お前には無くても俺にはある。この先、お前に戦いを挑む奴はたくさんいるだろう。中には、自分の望まない戦いも強いられる時もある。俺はそれがほとんどだったからな。だから、お前にもそれを乗り越える強さを持って欲しい」

博也がそう言い終えた瞬間に、右腕のデジヴァイス０１から電子音声が響く。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエボリューション」

手塚の体から紅の光が発生すると、繭を形成して、その繭の中からデュナスが出て繭を切り裂いた。その中からメディーバルデュークモンが姿を現した。

「メディーバルデュークモン」

それを見た秀人は決意を固めると同時に、両腕のデジヴァイス０１から電子音声が響く。

＞＞ＵＬＴＩＭＡＴＥ－ＪＯＧＲＥＳ－　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ＜＜

「アルティメットジョグレスエボリューション！！！　オメガモン！！！！」

秀人の体から青色とオレンジ色の光が包み込むと同時に繭を形成して、その中からオメガモンが姿を現した。

それを見たメディーバルデュークモンは右手に持っているデュナスを油断無く構え、オメガモンも左腕からグレイソードを射出して構える。

「オオォォォォォーーーーー！！！！！」

「フッ！！」

最初に仕掛けてきたのはメディーバルデュークモンだった。メディーバルデュークモンはオメガモンに向かって突撃しながら、デュナスの先端の双対の戦斧を振りぬく。

オメガモンが避けると、デュナスはそのまま地面に激突し、地面に大穴を開けた。

それを目撃したオメガモンはチャンスとばかりにグレイソードを振りぬいた。

「フン！」

「クゥッ！！」

メディーバルデュークモンがデュナスでグレイソードの斬撃を防御すると、オメガモンは右腕からガルルキャノンを展開すると同時に至近距離で砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「クッ！！」

メディーバルデュークモンは上空へ飛び立つことでオメガモンが撃ち出した砲撃を回避すると、デュナスの先端から砲撃を撃ち出した。

「喰らえ！！」

「なっ！？　デュナスからは砲撃も撃てるのか！？」

オメガモンが驚愕しながら慌てて砲撃をかわすと、メディーバルデュークモンは地上に降り立つとオメガモンにデュナスの先端を向けてレイジ・オブ・ワイバーンを放った。

「レイジ・オブ・ワイバーン！！」

「ギシャァァァァーーー！！！！」

「しまった！！　グアァァァァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

オメガモンは自身に向かって迫るレイジ・オブ・ワイバーンに耐え切れずに苦痛の叫び声を響かせながら吹き飛んで行った。

メディーバルデュークモンはその様子を確認すると、オメガモンに向かって移動するとデュナスを振り下ろした。

「ハァッ！！」

「チィッ！！」

メディーバルデュークモンが振り下ろしたデュナスは直前に体勢を整えたオメガモンのグレイソードに阻まれた。

オメガモンは力を込めてグレイソードでデュナスを弾くと右ハイキックをメディーバルデュークモンの顔に叩き込んだ。

「喰らえ！！」

「グォッ！！」

顔に受けた衝撃で後ずさるメディーバルデュークモンに向かって、

オメガモンはグレイソードを構えながら突撃すると、グレイソードを振り抜いてメディーバルデュークモンを上空に突き飛ばした。

「アルティメット！！」

「チィッ！！　レイジ・オブ・ワイバーン！！」

「ギシャァァァァーーー！！！」

上空で体勢を立て直したメディーバルデュークモンは、デュナスからレイジ・オブ・ワイバーンを放つ。

「アッパーカット！！」

オメガモンは跳躍しながらレイジ・オブ・ワイバーンを避けると同時にガルルキャノンから砲撃を連射する。

「ガッ！！グアァァァァァァァァァァァーーーー！！！！」

オメガモンのアルティメットアッパーカットをメディーバルデュークモンは避ける事も防御する事も出来ずに全弾をその身に食らい、メディーバルデュークモンは地上へと吹き飛んで行った。

地上に落下したメディーバルデュークモンは全身を襲う激痛に耐えながら、即座に立ち上がった。

「やるものだな。だが、私にはこれがある」

メディーバルデュークモンはオメガモンの右腕にデュナスを向けた。オメガモンは思わず身構えたが、何も起きない。

不審に思ったオメガモンがメディーバルデュークモンを見るとメ

ディーバルデュークモンの右腕がオメガモンの右腕になっていた。

「何だと！？　どういうことだ！！」

「このデュナスには相手の武器をコピーする便利な能力がある。お前の場合は腕その物が武器だから腕ごとコピーされたようだ」

メディーバルデュークモンは右腕を軽く振ってガルルキャノンを展開するとオメガモンに向かって砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「クッ！！　反則だろう！！」

オメガモンは悪態を付きながら砲撃を避けると、メディーバルデュークモンに向かって砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「フン！！」

メディーバルデュークモンは砲撃を横に避けながら右手に持っているデュナスにエネルギーを集中させながら突き出した。

すると、デュナスからエネルギー波―ブラストショットが放たれた。

「ブラストショット！！」

「グハッ！！」

デュナスの先端から飛び出したブラストショットを至近距離から撃ち込まれオメガモンは苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。
その一連の動きにオメガモンは全身を襲う苦痛に耐えながら、地面に着地しようとするが、その前にメディーバルデュークモンがオメガモンの前に現れ、デュナスを振り下ろす。

「ハァッ！！」

「クゥッ！！」

メディーバルデュークモンがデュナスを振り下ろす直前にオメガモンは背中のマントをはためかせながら攻撃をかわすと、そのまま上空に飛び上がって行く。
その動きにメディーバルデュークモンもすぐさま背中のマントをはためかせながらオメガモンの後を追って遥か上空に飛び上がると、上空で激しい剣戟を再開する。

「オオォォォォォォーーーーーー！！！！」

「ムン！！」

剣戟の途中で、メディーバルデュークモンの隙を見つけたオメガモンはグレイソードを薙ぎ払い、メディーバルデュークモンの煌びやかなクロンデジゾイド製の鎧に罅を入れる。

「ガハッ！！」

苦痛の声を上げたメディーバルデュークモンの胴体に目掛けて、オメガモンはグレイソードを戻した左拳に激しい烈火を纏わせると、ナックルレイ・グレネイドを叩き込んだ。

「ナックルレイ・グレネイド！！」

「グァッ！！」

ナックルレイ・グレネイドを喰らったメディーバルデュークモンは、地上に向かって落下をすると地面に叩きつけられる。

「そろそろ決着を付けよう」

「望むところだ」

オメガモンとメディーバルデュークモンはお互いに武器を構えると同時にエネルギーを充填し始める。

「ガルルキャノン！！」

「ファイナル・クレスト！！」

オメガモンはガルルキャノンから巨大な砲撃を、メディーバルデュークモンはデュナスから凄まじい光の波動を撃ち出すと両者の間でぶつかりあい、巨大な爆発が発生した。

「グァァァァァァァァァァァァーーーー！！！」

「ガァァァァァァァァァァァァァーーーーーーー！！！」

爆発の衝撃で、オメガモンとメディーバルデュークモンは苦痛の叫び声を上げながら二人仲良く吹き飛ばされると、海に飛び込んだ。

「プハァ！！　大丈夫か？」

「何とか……」

数分後、メディーバルデュークモンを背負ったオメガモンが海中から姿を現し、戦いで破壊され尽くされた港場に降り立った。

「どうやら、君の勝ちのようだ。俺は君の力を過小評価していたみたいだよ」

「いやいや……　危なかったですよ」

オメガモンとメディーバルデュークモンは夕日を見ながら、まるで友達のように語り明かした。

「帰ろう。疲れたよ」

「俺も帰ろう。また明日」

オメガモンとメディーバルデュークモンは秀人と博也の姿に戻ると、お互いの拠点に向かって帰っていった。

秀人がホテルに帰っている途中で、アインハルトに偶然ばったり会った。

「あれ、アインハルトさん。どうしたの？」

「秀人君こそ、そんな疲れたげな顔してどうしたの？」

アインハルトの服装は薄い青色のブラウスにスカートだった。その雰囲気だと何処かに夕食を食べに行くみたいだ。

「いやね、メディーバルデュークモンと同盟を結んだんだけど、力を見せてもらおうと言うわけで戦ってきたんだよ。昨日の港場でね。何とか勝てたけど……って、顔が近いんですけど！！！」

秀人が溜息を付きながら話していると、アインハルトは秀人の顔を覗きこむように顔を近づけてきた。その距離の近さに秀人は思わずアインハルトを強引に引き離した。

アインハルトは名残惜しげに秀人を見ると、秀人の顔が赤くなっていることに気がついた。

「どうしたの？　秀人君、顔が赤いよ？」

「うるさい！！　そういうアインハルトさんだって顔が赤いじゃないか！！」

「フフフ……　秀人君が照れている……　もう、可愛いんだから……」

アインハルトが自分をからかうことに秀人は少し怒りを混ぜた声で言うと、アインハルトは可笑しそうに笑った。

「私はこれから食事しに行くところ。今日ね、とっても美味しいレストランを見つけたの！！　秀人君もどう？」

「……そうだな……僕もお供させてください」

「わかったわ。一人じゃ入りづらいお店だったから誰かと行きたかったんだ」

楽しそうにそう言うと、アインハルトは秀人の右手を握りながら歩き始める。

秀人はアインハルトの行動に困惑して歩くのを止めると、アインハルトは首を傾げながら秀人に尋ねた。

「ちょっと待て。何で僕の手を握る必要がある？」

「嫌なの？」

「嫌じゃないけど、恥ずかしいよ」

「私は恥ずかしくないわ」

アインハルトの様子を見て秀人は諦めたように空を仰ぐと、アインハルトは秀人の手を握りながらレストランへと向かって行った。

それはまるで一組のカップルのようであった。

（可愛いな。恥ずかしそうに顔を赤くする秀人君はまた一段と好きになりそう）

アインハルトは秀人の横顔を見ながらレストランで何を食べようか考え始める。

レストランに入ってメニューを頼んだ後、秀人とアインハルトは会話をしていた。話題は秀人と戦った博也のことだった。

「……そうなんだ、メディーバルデュークモンにはそんな過去があったんだ……」

「うん。だから僕でも信じられたんだ。過去は変えられないけど、未来なら変えられると思って」

アインハルトは光が無い濁った瞳で秀人の瞳を見ながら話す。

「でも、迷惑な話よね。同盟を組む相手と戦うなんて。それで話がチャラになったらどうするつもりだったのかしら？」

「手塚さんだって僕のことを気づかったんだから、そう邪推に扱わなくてもいいだろう？」

「貴方を心配するのは私だけでいい。貴方は誰とも手を組む必要はない。私と手を組めばそれでいいの」

「アインハルトさん……　どうしたの？　何か変だよ、瞳が……」

秀人に心配をさせたことに気づいたアインハルトは慌てて取り繕った。

「大丈夫。ちょっと貴方のことを心配しすぎていたみたい」

明るく振舞うアインハルトの様子に違和感を感じた秀人だったが、すぐに切り替えた。

数分ほどお互いに黙っていると頼んだメニューが来たので、秀人とアインハルトは食べ始める。

「久しぶりだ……　誰かと一緒に食べるのは……」

「そうなんだ。僕も久しぶりだな。以前訪れたデジタルワールドではあるテイマーと一緒に食事する機会があったけど、ここ最近は一人だからね」

「良かった。久しぶりの相手が私で」

アインハルトは本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。その笑みを見た秀人は少し首を傾げたものの、再び食事を再開した。

「ありがとうね、付き合ってくれて。それとお金も払ってくれて」

「当然の事をしただけだよ。僕は」

レストランからの帰り道、アインハルトは秀人にお礼を言った。あの後、代金は全て秀人が払ったのだ。

「本当に私の所に来ない？　２人分のスペースは十分にあるから……」

「来るつもりはない」

「私がいるからなの？」

「違う。僕がいることで誰かに迷惑をかけたくないんだ。例え、それが敵であったとしても」

アインハルトが自分のマンションで一緒に暮らさないかどうかの提案を秀人は退ける。
ところが、アインハルトは予測していたのか動じていなかった。
「そう……でも、諦めないから」
「えっ！？」
「当然よ。いい？　秀人君。女の子はね、好きな人のためならどこまでだって強くなれるの。オメガモンなんて一撃で倒せる程にね。しかも、一度好きになると中々諦められないんだから。そのしぶとさは何度倒されても蘇るミレニアモンの如くね」
「……」
秀人はこの時点でアインハルトが自分のことを好きだと感じた。そうでないとここまで粘らないだろう。もしかして、秀人はアインハルトに好意を持たれた時点で打つ手など無かったのかもしれない。
「……考えておくよ」
「本当！！　やった！！」
降参したように秀人が項垂れながら言った言葉を聞いたアインハルトは嬉しそうな声を上げてガッツポーズを取った。
その様子を見た秀人は改めて女性との付き合い方を勉強するべきだと強く直感した。
「秀人君！！　また明日ね！！　お休み！！」

「また明日。お休みなさい」

両腕がちぎれんばかりに振りながらアインハルトは秀人と別れると楽しそうな感じでマンションに戻る。

秀人は苦笑しながらホテルに戻っていく。

（しかし、初めてだな。誰かに好意を持たれたのは。例え、それが歪んでいたとしても純愛でも）

秀人は夜にだけ存在している満月を見ながら明日の戦いに思いを馳せる。

その秀人の表情はにやけていたのをオーグとメルーガは見なかったことにした。

（アインハルト……　いいのか？　何れは殺し合う運命にあるのに……）

「そうね。その時は、正々堂々戦うわ。聖騎士スレイプモンとして、一人の人間、アインハルト・ドレットノートとして。私だってそう簡単には負けないわ」

スレイプモンの言う運命と向き合いながら懸命に生きようとするアインハルトを満月だけが見つめていた。

第13話　エイリアス戦争の章　運命を変える旋風将！！　メディーバルデュ

次回予告

オメガモン抹殺に動き始めるダークナイトモンこと天野寧々。
それによって、自分の拠点どころか命の危険に晒されるオメガモン。
果たして、オメガモンはその危機を乗り越えることが出来るのか？

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

暗黒騎士の陰謀、聖騎士危機一髪！？

聖騎士は怒り狂う。自らの命を狙うために大勢を危険に晒したことを。

第１４話　エイリアス戦争の章　暗黒騎士の陰謀、聖騎士危機一髪！？（前書き

今回はヤンデレの要素があります。
下手ですが、大目に見てください。
それに、タイトルの選択ミスがあったことをここに深くお詫びします。

第１４話　エイリアス戦争の章　暗黒騎士の陰謀、聖騎士危機一髪！？

鳴海市ビジネスホテルの客室の最上階の高みから見下ろす景色は、鳴海市内のどの建物と比較しても他に並び立つものが無いほど素晴らしい物だと鳴海市民のほとんどが口にして、テレビでも何回か登場する程である。

その高さにおいては、もう少しで完成が期待されている鳴海市センタービルにトップの座を明け渡すことになるだろう。しかし、その鳴海市センタービルは未だ開発途上の建物であり、鳴海市ビジネスホテルは鳴海市の歴史の中でも割と初期に完成した建築物である。

今後の鳴海市の発展により、新設の建物は続々と増えていくだろう。しかし、鳴海市でも一、二を争う程の最高級な設備とサービスを誇るこのホテルが寂れることはまず無いだろう。支配人と従業員の全員が揃って自負していて、ホテルの利用者達も揃って納得するだけの品質と格式を、鳴海市ビジネスホテルは備えている。

そんな鳴海市ビジネスホテルの三十二階の一室を借りている秀人は眠っていた。つい先程帰ってきた秀人は午後から夕方にかけてメディーバルデュークモンと戦い、夕食をアインハルト・ドレットノートと取った後、ホテルに帰ってきた時間は午後９時だった。その後、シャワーを浴びて、歯を磨いてさっさと寝たのだ。

その時、何の前触れも無く鳴り響いた防災ベルの騒音が秀人の安眠を妨げた。

「何だ？　人の安眠を妨害するとはいい度胸だな……」

秀人がすぐに起きると、部屋に備え付けの電話がベルを鳴らし始めた。ランプの点灯はフロントからの着信を表示していた。

落ち着いて秀人は受話器を取り上げて係員からの連絡に耳を傾け

る。話を聞き終える頃には、その眼差しはオメガモンとしての鋭さを取り戻していた。

「下の階で火事か。すぐに避難しなければ……」

受話器を戻すと同時に秀人は荷物を入れているリュックサックを背負いながら行動を開始する。

『小火程度だけど、火元は何箇所に分散しているみたいだね。放火だよ。薄汚い』

「ああ、全くもってその通りだ」

秀人はオーグの言葉を聞きながら忌々しそうに顔を歪める。

「恐らくこの放火は邪魔な市民を遠ざけるため。恐らく……ダークナイトモンの仕業だな」

秀人は直ぐ様、部屋から出ると野外駐車場へと向かい始める。

秀人と同じように就寝中を火災警報によって叩き起こされた後、野外駐車場にホテルの従業員によって誘導された宿泊客たちは、火事への恐怖と眠気と寒さによる不快感が混ざり合った表情で居並んでいた。そんな人々の間を、ホテルの従業員たちが慌ただしく動いている。

「……秀人様！　藤本秀人様はいらっしゃいませんか？」

宿泊者名簿にある名前の中で、まだ点呼の取れていない最後の人物を捜し求めて、宿直のフロント係が声を張り上げる。

「藤本秀人様！　いらっしゃいませんか！？」

「藤本秀人はここにいますよ！！」

背後から、声を張り上げた人物を確認するべくフロント係が後ろを振り向いた。そこには、藤本秀人本人が手を挙げていた。

「ああ、はい。確認しました」

フロント係は、左手に持っている名簿に“全員避難済み”と記すと、宿泊客全員の安否が確認されたことで安堵の溜息を付いた。

引き続き、他の避難客の対処に奔走するフロント係を見送ってから、秀人は人混みを離れた。

（何処だ……奴は何処にいる？）

秀人はホテルから一区画ほど離れた物陰に移動すると、誰の視線も無いことを確認してから左腕のデジヴァイス０１を使ってデジモンの反応を調べ始めた。

「……ダークナイトモン……貴様は何を企んでいるんだ？」

秀人はデジヴァイス０１を使って黒幕を突き止めると首を傾げた。

その黒幕は、ダークナイトモン―天野寧々だった。寧々は鳴海市ビジネスホテルの斜向かいである未だ建設中の高層ビルの上階にいた。

寧々は短く息を付くと右手の携帯電話にある番号を打ち込んだ。

呼び出されるのは自分が持っているもう一つの携帯電話である。ただし振動も呼び出し音も発しない。着信はそのまま高性能プラスチック爆弾に接続された起爆信管に送られる。
爆発その物は小規模な物で、無人のホテルの外には音さえも漏れることは無かったが、その代わりに夜空に響き渡ったのは鉄筋コンクリートが軋みを上げる不気味な音だった。

「ホテルが、ホテルが崩れる！」

その音に気がついた避難者たちが、頭上に聳える高層建築の建物を見て悲鳴を上げながらホテルを一斉に見上げる。
それを別の場所から見ていた秀人も驚愕で目を見開いた。

「そういうことか……」

全高１２０メートル程の高層ホテルは、直立の体勢を保ったまま、まるで大地に倒れ伏すようにして崩落した。外壁の全てが内側に倒壊したため、周囲には破片が一つも飛び散ることもなかったが、その代わりに崩落で押し出された大気が粉塵を巻き上げながら、巨大な煙幕となって周囲一帯の街路に舞い散った。

「周りに被害を出さずに破壊するとは……」

秀人は目の前で繰り広げられた破壊の芸術に驚愕を隠しきれなかった。
今のは、爆破解体（デモリッション）と呼ばれる主に大規模な高層建築物の解体に使われることの多い高等な発破技術である。強度で重要になる支柱をピンポイントで破壊することによって、ビルその物の重量だけで全体を内側から圧壊させる、最小限の爆薬だけで効率よく確実にビルを瓦礫の山へと変えるやり方である。

寧々は鳴海市の建物で、エイリアスが拠点に選びそうな建物を全て破壊対象と見なしている。鳴海市ビジネスホテルもその一つだった。予め建設図面も取り寄せてあり、爆破物設置のポイントも念入りに確認した。準備は万端だった。作業は一時間もかからなかった。

「いい気味だわ」

崩落の危険領域から離れた場所にいた避難者たちだったが、それでも粉塵を浴びた彼らはパニックに陥ると、我先にと逃げ出して往来に散っていく。それを後目に見遣りながら、寧々はようやく風圧が収まったところを見計らって、灰塵に帰した鳴海市ビジネスホテルの残骸を、冷ややかな満足感と共に一瞥しながらそう呟いた。

秀人のいた一室がある三十二階は、爆破解体の連鎖的破壊によって支えを失い、最終的には地上１２０メートルの高みから落下して叩きつけられたに等しい。進化しない限りは、そんな破滅的な状況から逃れられる術はない。

「……」

鳴海市ビジネスホテルだった瓦礫の山を秀人は呆然と見ていた。

しゃくり上げる幼い子供の鳴き声が、秀人の視線を瓦礫の山から向けられた。

怯えて泣きじゃぐる幼い子供を抱きかかえた母親が、一心不乱に秀人のすぐ隣を通り過ぎていく。母子の着の身着のままの寝間着姿は、全身に粉塵を浴びたことで真っ白に汚れていて、見るも無残な有様だった。

その後ろ姿を秀人は目を反らさずにじっと見入り、己の無力さに拳を強く握り締めながらダークナイトモンへの怒りを燃やし始めた。秀人の瞑らな空色の瞳には、怒りの炎がメラメラと燃えている。

怒りに燃えている瞳のまま、秀人は鳴海市ビジネスホテルの斜向

かいである未だ建設中の高層ビルに向かい始めた。目的はダークナイトモンの抹殺だ。

未だ名前が無い鉄骨の櫓。やがて完成の暁には、三十八階建ての鳴海市センタービルと呼ばれることになることであろう場所。
建設工事の工程は半分を過ぎていて、いよいよ外装に差し掛かる段階である。後に、鳴海市の複合高層ビジネスビルも、まだ今では鉄筋コンクリートの地肌を剥き出しにしたまま、夜空に吹き抜ける強風に晒されている。
地上の街の灯からも、天上の星明かりからも、等しく遠い夜空。その夜空を寧々は見ていたが、異常に気がつくと背後を振り返った。

「貴様が仕組んだのか……」

「ウフフフフ……　来ると思った……　オメガモン」

寧々の背中に、秀人の低く冷ややかな声が投げかけられた。
秀人は怒りに燃えながら平静を保ち、かつ鋭い刃のように神経を尖らせて周囲を探る。

「初めまして。私は天野寧々。私、貴方のファンなの。自分の掲げる正義のために戦う聖騎士……誰だって憧れる英雄だもの」

「貴様の目的はどうでもいい。貴様の名前もどうでもいい。貴様の力もどうでもいい。貴様は私の敵だ。私は！！　断じて！！　貴様の存在を！！　認めない！！　ウオオオオオオオオオオオォォォォォーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

寧々の言葉を完全に無視して、秀人はホテルにいた人々のことを思いながら全身から青色とオレンジ色の光と共に大量の闇を発生させて、身長が三メートル程のオメガモンへと進化した。

「くっ！！　最初から私を殺すつもりで来た訳ね！！　上等じゃない！！　相手になるわ！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューーション！！！」

寧々の左腕に付けている漆黒のデジヴァイス０１が輝き始めると同時に電子音声が流れて、寧々はデジヴァイス０１を胸に押し付け、自身の体をデータ化させながら究極進化を行う。
寧々の体から光が大量に発生し、それは巨大な繭の形を形成していく。そして、光の繭が消失した後には、ダークナイトモンが立っていた。

「ダークナイトモン！！」

進化を終えた両者は申し合わせたように鳴海市ビジネスホテルがあった場所から少し離れた空き地へと移動した。
ダークナイトモンは右手に持っているツインスピアを握りしめながらオメガモンを睨みつける。
それを見たオメガモンは身長を元の二十メートル程に戻すと、ダークナイトモンに目を向けながら左腕を掲げながら、グレイソードを射出するとダークナイトモンに向かって構えを取る。

「ハアァァァァァァァッ！！」

「ウオオォォォォォォォォォォーーーー！！」

オメガモンとダークナイトモンはお互いに飛び掛かり、オメガモンは左腕に装備しているグレイソードを、ダークナイトモンは右手の双刃の槍―ツインスピアをぶつけ合いながら、辺りに甲高い金属音を鳴り響かせる。

「オオォォォォォーーーーー！！！！グレイソード！！！！」

「クッ！！」

オメガモンが振り抜いて来た左腕のグレイソードを、ダークナイトモンは背中のマントをはためかせながら避けたが、グレイソードはそのまま地面に激突して、地面に大穴を開けた。

「クッ！！　やるものだな！！」

「フン！！　私を褒める暇があれば自分の心配をするんだな！！」

「クゥッ！！」

オメガモンが連続で振り抜いてくる左腕のグレイソードを、ダークナイトモンはツインスピアをツインソードにして巧みに使いながら攻撃を逸らし続ける。

自身の武器がツインスピアでこれほど良かったと思った事は、ダークナイトモンは工藤タイキ達のジェネラルとの戦いでもなかった。もし、普通の槍だけでオメガモンと相対していれば、とうの昔に自身はオメガモンのグレイソードに貫かれていただろうとダークナイトモンは判断する。

「ウオオォォォォォォーーーーー！！！！

ダークナイトモンは何とか反撃の隙を探そうとするが、オメガモンは反撃の隙など与えないと言う様に次々と攻撃を繰り出し続ける。

しかし、徐々にでは在るが、ダークナイトモンはオメガモンの攻撃速度に慣れて来たのか、ツインソードを使わずにオメガモンの攻撃を避け始める。

（ほぅ、流石は合体究極体だな。デジクロスとは言っても、ジョグレスと原理は一緒だからな）

オメガモンはダークナイトモンが徐々にでは在るが、自身の攻撃を避けて来ている事に気がついていた。

（この場合はこのような行動が最適だな……）

ダークナイトモンは、自身の融合元であるスカルナイトモンの知略を支える鋭い洞察力を使いながら、オメガモンの攻撃を見切り始めたのだ。

ダークナイトモンはオメガモンの攻撃を避ける時にだけ、一瞬スピードを上げるという策を使用している。

長時間、同じスピードを維持し続けるのは幾らダークナイトモンでも辛い。だからこそ、避ける時にだけ最大の速さを発揮し、攻撃や移動の時には僅かにスピードを抑えて動く。

これによって、相手からすれば、ダークナイトモンの動きは変則的になったように思い、判断能力が僅かに狂わされてしまう。その隙を逃さずに攻撃を行えば、幾ら相手の実力が上でも隙を衝く事が出来る。

それを表すようにオメガモンもダークナイトモンの動きに自身の動きを合わせ始めるが、ダークナイトモンは瞬時に好機が舞い降り

たと判断すると、即座に右手に握っているツインソードを渾身の力を込めて、大振りになったオメガモンの攻撃を避けながら突き出す。

「ツインソード！！！」

「フッ！！悪くない策だが私には効かないぞ！！」

「何だと！？」

ダークナイトモンが渾身の力を込めて突き出して来たツインソードを、オメガモンは瞬時に右足蹴りを叩き込む事で迎撃した。

その事実にダークナイトモンは目を見開くが、瞬時に右手から離れたツインソードを諦め、そのまま今度は左手に握っていたツインソードを体勢が不十分になっているオメガモンに向かって突き出す。

「ツインソード！！！」

「悪いがそれも受ける気は無い！！！」

オメガモンはグレイソードで弾くと同時に、右腕を軽く振るうと、ガルルキャノンを展開して、ダークナイトモンに照準を合わせながら砲撃を撃ち込む。

「ガルルキャノン！！」

「グアァァァァァァッ！！！」

オメガモンのガルルキャノンを喰らったダークナイトモンは苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ぶが、空中で体勢を整えると着地した。

漆黒の鎧の胸部に罅が入っているが、ダークナイトモンは気にし

ないまま、自分の近くの地面に突き刺さっているツインソードに右手を伸ばすと、独りでにツインソードは右手に収まった。

『ウオオォォォォォーーーーー！！！！！』

オメガモンとダークナイトモンは再び相手に向かって飛び掛かり、凄まじい剣戟を再開する。

その途中で、オメガモンが上空に高く飛び上がると、ダークナイトモンは両手に持っているツインソードの矛先から飛び出した暗黒のエネルギー波―ダークショットを放った。

「ダークショット！！」

「グレイソード！！」

オメガモンはグレイソードを全力で横薙ぎに振るい、青白い三日月状の衝撃波を放ち、ダークショットを相殺する。

その際に生じた爆炎がオメガモンとダークナイトモンの両者の視界を防ぐ。爆炎が止むとオメガモンは再びグレイソードを横薙ぎに振るい、無数の剣状の攻撃―ソードレイ・フェザーを撃ち出す。

「ソードレイ・フェザー！！」

「グッ！！」

ダークナイトモンはツインソードをツインスピアに戻すと、自分に向かって迫り来るソードレイ・フェザーを薙ぎ払う。

それでも、オメガモンは次々とソードレイ・フェザーを撃ち出す。

「無駄な攻撃だ！！」

ダークナイトモンはソードレイ・フェザーを薙ぎ払うが、オメガモンがガルルキャノンから砲撃を撃ち出すと直撃を喰らい、吹き飛ばされる。

「ガルルキャノン！！」

「グハァッ！！」

オメガモンは地面に着地すると、油断なく構えをダークナイトモンに向かって取るが、ダークナイトモンはいつまで経っても姿を現さなかった。

「逃げられたか……」

かつて、カオスモンに三回も逃げられたことがあるオメガモンには、いつの間にか相手に逃げられることに対しては、耐性が出来ていた。

「こんな所でまさかオメガモンに会うとはな……」

「貴様は……ドルゴラモン」

其処に全身を白銀の鎧に身を包み、背中には巨大な漆黒な翼を生やした獣竜型デジモンードルゴラモンが姿を現した。

ドルゴラモンの姿を見たオメガモンは表情を険しくすると共にドルゴラモンを睨みつける。何故なら、オメガモンはドルゴラモンの圧倒的な強さを知っているからだ。オメガモンはグレイソードも折られ、マントもボロボロにされた状態の絶体絶命の危機に追い込まれて、X進化を遂げてオメガモンXになることでようやくドルゴラ

モンを倒せたのだ。

「お相手願おうか、オメガモン。俺は自分がこの世界で何処まで行けるのかを確かめたくて参戦したんだ。全力で来い」

「相分かった。途中で勝負から逃げたダークナイトモンとは違い、貴様は戦い甲斐がある」

ドルゴラモンは両拳を握り締めながら構えを取ると、オメガモンは右腕のガルルキャノンを左腕のグレイソードで支えながら砲口をドルゴラモンに向けた。

「ハアァァァァァァァッ！！」

ドルゴラモンは両拳に炎を纏わせながらオメガモンに向かって突撃を開始した。その衝撃から衝撃波が発生していることから音速を確実に超えていることが伺える。

「ガルルキャノン！！」

オメガモンは自分に向かって突撃してくるドルゴラモンに向かってガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「グワァッ！！」

ガルルキャノンの直撃を喰らったドルゴラモンは苦痛の声を上げながら爆炎の中に消えるが、両腕を振り払うことで姿を現した。

「ウオオォォォォォーーーーー！！！！！　ドルインフェルノ！！」

ドルゴラモンは尚も突撃を続けて、オメガモンに向かって炎を纏った両拳を突き出したが、オメガモンは後ろに飛びながらガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「グゥッ！！」

ガルルキャノンはドルゴラモンの胸部に直撃して、ドルゴラモンは苦痛の声を上げながら炎が消えた右手で砲撃を喰らった箇所を抑える。

「くそ……何て威力だ……　だが、俺は負けない！！」

そう言ってドルゴラモンはオメガモンに向かって右拳を突き出すが、オメガモンはドルゴラモンの拳よりも小さいグレイソードで受け止める。刃が交じり合うような凄まじい音と共に、ドルゴラモンの巨体の動きが静止した。

「私にも負けられない理由がある！！」

オメガモンはそう言うと同時にグレイソードをドルゴラモンの右肩に突き刺すと、左腕一本だけを使ってドルゴラモンの巨体を軽々と持ち上げて、遠くへ投げ飛ばした。投げ飛ばされたドルゴラモンは大きな音を上げながら大地へと叩きつけられた。

「ウッ……ウウッ……　グオオオオオオオ！！！」

「何！？」

ドルゴラモンが全身に走る痛みに耐えながら起き上がるのを見たオメガモンは、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出そうとするが、ドルゴラモンは突風のようなスピードで、オメガモンの顔を右手で鷲掴みにすると地面に思い切り叩き付ける。
その時の衝撃で、地面には図太い亀裂が入った。

「ウオオォォォォォ……」

「随分と酷いまねをするものだな。それでも私を捕らえたつもりか？」

低い唸り声を上げながらドルゴラモンはオメガモンを叩き潰すべく、掌に一層力を込めるが、ドルゴラモンの渾身の力と全体重が込められた巨大な掌を、オメガモンは左腕一本だけでジワジワと押し上げていく。
それと共に、オメガモンは右腕のガルルキャノンをドルゴラモンの顔面に向ける。

「ガルルキャノン！！」

「ガアァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！」

顔面に直撃した砲撃で視界を塞がれたドルゴラモンは苦痛の叫び声を上げながら、オメガモンから離れる。
起き上がったオメガモンは、ドルゴラモンを睨みつけながら構えを取る。

「テラバースト！！」

ガルルキャノンのダメージから立ち直ったドルゴラモンは口から

光に包まれた鉄球をオメガモンに向かって撃ち出した。

「フッ！！」

オメガモンはグレイソードを振るい、光に包まれた鉄球をまっぷたつに切り裂いた。

ドルゴラモンに攻撃をしようとするオメガモンだったが、ドルゴラモンが居た場所にはドルゴラモンの姿は無かった。

（何処だ？　ドルゴラモンは何処にいる？）

オメガモンは辺りに気を放ちながらドルゴラモンを探すが、ドルゴラモンはオメガモンの背後に移動していて、物凄い勢いで突撃してくる。

「何！？」

「ハアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

「グハッ！！」

背後を振り返ったオメガモンは驚愕の声を上げたが既に遅く、苦痛の声を上げながら吹き飛ばされた。

オメガモンは空中で何とか体勢を整えると、後退しながらも地面に着地した。

「ドルブラスター！！」

「ガルルキャノン！！」

ドルゴラモンは両腕に炎を纏わせると、オメガモンに向かって突き出して火球を撃ち出した。
オメガモンはそれを迎撃するべくガルルキャノンから砲撃を撃ち出すが、火球を相殺することが出来なかった。

「何！？」

「ドルインフェルノ！！」

驚愕するオメガモンに向かってドルゴラモンは両腕の炎を纏わせながら突撃すると、右ストレートを繰り出した。

「グハァッ！！」

全身に走る衝撃と胸部に喰らった物凄い痛みにオメガモンは耐え切れず、苦痛の声を響かせる。
オメガモンとの距離を空けたドルゴラモンは地響きのような咆哮を上げると、着火したようにその体を灼熱の炎が包み込んだ。

「ウオオォォォォォォォォーーーー！！！」

「ブレイブメタル！！！」

次の瞬間、その状態のままドルゴラモンは物凄い勢いでオメガモンに向かって突進を始めた。
炎に包まれた全身全霊のドルゴラモンの突撃がオメガモンに向かって迫る。

「クッ！！」

オメガモンは、両腕で炎に包まれた全身全霊のドルゴラモンの突撃を正面から受け止めるが、ドルゴラモンの突撃は止まらない。

「ウオオォォォォォォォォーーーー！！！グレイソード！！！」

オメガモンは、グレイソードを金色に輝くと共にドルゴラモンに向かって振り抜いた。

振りぬかれたグレイソードを、猛進するドルゴラモンの腹部に深深と突き刺すが、ドルゴラモンの突進は止まらなかった。

「グアアアアアアアア！！！」

「グゥッ……　ハアアアアアアアアーーーーー！！！！！」

苦痛による悲鳴にも、突進による雄たけびにも聞こえるドルゴラモンの叫びと、オメガモンの叫びが辺りに響き渡ると同時に、凄まじい爆発とともに炎と爆風が辺りに吹き荒れる。

「……何て奴だ……　まだ立ち上がれるなんて……」

未だ神々しい輝きを放つ鎧を身に包んでいるオメガモンが立ち上がった。

その前方で、ボロボロになりながらも、狂気にも近い目を輝かせるドルゴラモンが続けるように立ち上がった。

「ウオオォォォォォォォォーーーー！！！」

ドルゴラモンは闘志そのもののような巨大な炎を体に身に纏う。

遥かに大きく、轟轟と燃え盛る炎のような炎を。

対するオメガモンはガルルキャノンの砲口にエネルギーを集束し

始める。

「ブレイブメタル！！！」

「オメガレイ・シュトローム！！！」

オメガモンが撃ち出した巨大な砲撃を喰らってもドルゴラモンの突撃は止まらない。それどころか、突進の勢いは増し、纏う炎も一層燃え盛る。

「ウオオォォォォォォォォーーーー！！！」

「グッ！！　グレイソード！！」

炎の塊と化したドルゴラモンの突撃が眼前まで迫っていたとき、オメガモンはグレイソードを金色に輝かせると再び振り上げた。

ドルゴラモンの突撃を止めようと振り下ろしたグレイソードは鈍い音と共に根元から無残に折れてしまった。

「何！？　グレイソードが折れた！？」

オメガモンの驚愕を余所に、ドルゴラモンはオメガモンの白銀に輝く鎧に激突した。

「グアァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！」

オメガモンは苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ばされた。

地面に物凄い衝撃と共に叩きつけられたオメガモンは、背中のマントは至るところが破れて、全身の白銀の鎧はボロボロになりなが

らも何とか立ち上がろうとする。

「私は……負けるわけには……」

「残念だが、お前の負けだ。オメガモン。おとなしく寝ていろ。ブレス・オブ・ドラゴン！！」

ドルゴラモンは自身の体から巨大なエネルギーを発生させると、エネルギーは巨大な竜の形に変わり、オメガモンに向かって放たれる。

「ウワァァァァァーーーー！！！！！」

ドルゴラモンの放ったブレス・オブ・ドラゴンを喰らったオメガモンは苦痛の叫びを上げながら遠くへと吹き飛ばされ、地面にぶつかった瞬間にオメガモンは気絶すると同時に青色とオレンジ色に包まれると秀人の姿に戻った。

「ハァ〜　次の日、筋肉痛確定だわ……」

ドルゴラモンは疲れたげに呟くと、その場を立ち去った。

その数分後、背中に漆黒のマントを棚引かせて、鈍い輝きを放つ鎧で全身を覆い包んだ暗黒騎士―カオスデュークモンが現れて、気絶している秀人を見下ろして呟く。

「ドルゴラモンに負けるとは情けない奴だ。ズワルトなら一分もあれば倒せるのに」

カオスデュークモンは秀人を大切そうに右手に持つと、鳴海市内にある教会へと飛び立った。

秀人はとある部屋に運び込まれていた。

意識を取り戻した秀人は自分を見下ろすカオスデュークモンとベッドに拘束されている自分の姿を知った。

「僕の力の秘密を……調べるつもりか……？」

「その通りだ。統制者がお前の秘密を知りたがっている。殺しはしないから安心しろ」

秀人の問いにカオスデュークモンは答えると、検査を開始した。

カオスデュークモンは秀人の身体検査の結果を持って来て、統制者に身体検査の結果を渡した。

その結果を読み終えた統制者は驚愕して思わず声を荒げた。

「この検査結果に間違いは無いのだな？」

しかし、カオスデュークモンが冷静に答えるのを見ると統制者も冷静さを取り戻す。

「ああ。間違いない」

「そんな……　そんなことがあってたまるか……」

統制者は自分の盟友のことを思い浮かべて、拳を握りしめる。

「信じられないのも無理はないな。だが、オメガモン、藤本秀人の適合因子、および免疫判定は常人の平均よりも遥かに高い。適合因子と免疫は高ければ高いほど力を発揮出来る。それでも、彼はあのゼロマルと八神太一に匹敵する程の高い数値だった」

統制者は、モニターに映し出されている秀人に向かって叫んだ。

「藤本秀人！　お前は、お前は！！　オメガモンなんだぞ！　それがこんな高い数値だなんて……私は認めない！！お前の盟友、彩羽ネオ、オメガモンズワルトは低い数値だったんだぞ！！　それなのにお前は……！　……お前は特別な人間だったと言うのか……？そこら辺にいる多くの人間と変わらないはずが……特別な力を持った……ただの……ただの……人間……」

そのまま、統制者は力無く崩れていったが、しばらく経って不気味な笑みを浮かべながら立ち上がった。

「それなら地獄の苦しみを与えてやろう。自分がどんな人間だったのか、家族も友達も、人間としての全てを奪ってやろう。デジモンの贋物……本当のエイリアスとしての地獄の苦しみを与えよう……」

統制者にカオスデュークモンが怪訝そうな表情をしながら尋ねた。

「だが、問題があるぞ。奴は我々に反抗するだろう。その強大な力はズワルトですら、恐れている程だ」

「そのためのブラックデジトロンだ。奴を洗脳して、我々の操り人形にするのだよ」

「成程。だから、我々にとって彼自身がどのような人物なのかはどうでも良い事だ。我々が知りたいのは彼の力の秘密。彼がどのようにあの力を振るったのかを知れれば……」

カオスデュークモンの言葉に統制者が一つ提案する。

「電気刺激による脳のスキャニングを行なってみよう。それなら安全かつ確実に出来る」

統制者の提案にカオスデュークモンは頷くと、すぐさま秀人の頭部にスキャニング装置が取り付けられていった。

自分の頭部に付けられたヘッドギアから電気が流されることで脳に刺激を与えられた秀人は過去の様々な出来事を思い出していった。

『やれやれ……　大したものだ。流石に君と殺り合うのは少々荷が重いみたいだよ。どうかな？　私と共に手を組む気はないか？　君の望む願いのためなら、私は其処にいるエイリアスと刺し違える覚悟はあるのだが？』

『力とは、他人を支配し、圧して、己が生き延びる為にある！　それに気付けないお前が私に勝てるはずがない！！』

『フン。大口を叩いても無駄だ。何故なら、私は、お前の影なのだから……　光と影……お前が光ならば、私は影だ……』

秀人の脳裏に蘇っていく様々な出来事を統制者とカオスデューク

モンは装着したゴーグルでその映像を見ていた。
「脳への電気刺激によって過去の記憶がフラッシュバックしているのだな」
カオスデュークモンの説明に統制者はそっけなく答える。
「重要なのは彼が力を得た時の記憶だけなのだが……」
統制者はオメガモンの記憶の中にある、光に覆われた世界、そこに向かい合っている一人の人間と純白の翼を背中から生やし、白を基調として所々に金色の装飾が成された鎧を身に着けた聖騎士ーインペリアルドラモン・パラディンモードを見付けた。
「成程。オメガブレード繋がりか。面白い組み合わせだな」
統制者は面白いように笑みを浮かべた。
秀人の記憶を見終えた統制者とカオスデュークモンはゴーグルを外すと、伸びをして一息付いた。
「脳のスキャニングで分かるのはこのくらいだな」
「仕方が無い……　では、次はブラックデジトロン混入テストを行おう」
統制者の言葉にカオスデュークモンが驚き、必死で諌める。
「ブラックデジトロンを？　確かにそれは有効的な手段ではあるが、一歩間違うと死に誘う諸刃の剣だぞ！？」

「例え、彼が特別な人間だったとしても、彼がその体内にオメガモンの力を秘めている事は事実だ。ブラックデジトロンを与えれば、それに呼応してオメガモンの力が増強されるかもしれない。そして、彼が仲間に入れば、ズワルトの戦力補強が出来る……　聞いた話だとズワルトはゼロマルと戦い、全治二ヶ月の大怪我を負ったそうだからな」

「だが、もし、オメガモンを失う結果になればどうするのか？」

「その時はその時できちんとした考えがある」

「……分かった。そこまで言われれば致し方あるまい」

統制者に押し切られる形になったことに不満を持ちながらも、カオスデュークモンはテストの準備に取り掛かった。

「ブラックデジトロン混入準備が出来たぞ」

「分かった。ありがとう」

カオスデュークモンの言葉を聞いた統制者は秀人の前に取り付けられた装置、分泌物ブラックデジトロンが入ったカプセルが直結した装置を見て呟いた。

「黒くなるが、許してもらおう。黒もなかなか悪くはないはずだ」

そして、統制者はカオスデュークモンに向かって指示を送る。

「始めてくれ」

「了解した」

統制者の指示で装置から秀人に向けて分泌物ブラックデジトロンが混入させ始めた。

カプセルの中に入っているブラックデジトロンが減っていくに連れて、秀人は苦しみ始めた。

「もう少し増やせるな」

統制者の指示でブラックデジトロンの量は更に増やされていった。

それによって、さらに苦しむ秀人を見ているカオスデュークモンの表情は晴れない。

「危険だ！　これ以上は！」

「いや、まだだ！！　まだいける！！」

カオスデュークモンの注意を押し切り、更に統制者はブラックデジトロンの量を増やす。

「まだだ！　まだなのか！　オメガモン！！」

更に増やされていくブラックデジトロンによって、秀人は苦しみ、秀人の体が激しく痙攣を起こす。

突如、秀人の全身から力が消えて、ブラックデジトロンを混入されていながら指一本動かなくなった。

直ぐ様、ブラックデジトロン混入は中止されて、カオスデュークモンが秀人に電気ショックが行なうが、秀人の体には何の反応も無

かった。

「くそ！！　だからやめるように言ったのに！！」

カオスデュークモンは電気ショックの装置を秀人の体に押し付けて、電気ショックを行うが、秀人は目を覚まさない。

「目を覚ませ！！　オメガモン！！！」

しかし、秀人は目を覚まさない。辺りに絶望感が漂うが、統制者が声を掛ける。

「もう一度、ブラックデジトロンを混入するんだ」

その言葉に驚くカオスデュークモンだったが、他に方法は無く、再び秀人にブラックデジトロンを混入される事になった。

しかし、秀人には何の変化も現れなかった。

「量を変えよう！」

統制者の指示でブラックデジトロンの量が色々と変えられて、やがて、秀人の体から青色とオレンジ色の怒りが滲み出て、その明滅に呼応するかのように秀人の体にブラックデジトロンが全て吸収された。

「良かった……」

安堵の笑みを浮かべるカオスデュークモンだったが、秀人の体に動きが見られたので、急いで拘束を外した。

「ハァッ……　ハァッ……」

秀人は息も絶え絶えで苦しそうな状態で教会から出た。

「アインハルトのマンションの方角はどっちだったっけな……」

「ここから歩いて次の信号を右に曲がって真っ直ぐ歩けば直ぐに着く」

自分の背後から声がしたので、秀人が後ろを振り向くと、そこには博也の姿があった。

「忠告しようと思ってね。君の体に邪悪な物が混入されている。次に進化したら君は自分を見失うかもしれない……」

「そうか。それなら足掻くまでだ」

「そう……だったらもう何も言わない」

そう言うと、博也は少し不機嫌な感じで立ち去った。

それを見た秀人は苦しみの表情を浮かべたままアインハルトのマンションへと向かい始めた。

「秀人君、大丈夫かしら……」

その頃、アインハルトはマンションのベランダから鳴海市ビジネ

スホテルがあった方角を見ながら、秀人のことを心配していた。
その時、ドスンと何かが崩れ落ちるような音がした。
「なっ、何！？」
驚いたアインハルトは急いでマンションのドアまで向かってドアを開くと、そこには気を失った秀人が倒れていた。
「秀人君！？　どうしてボロボロなの！？」
アインハルトは急いで秀人の元に駆け寄って抱きかかえて、ベッドに運んだ。
秀人は朝になるまで目を覚まさなかった。

「うっ……ううっ……」

次の日の朝、秀人は目を覚ましたが、自分のいる場所がマンションに一室だということが分かり安心したが、自分が風邪を引いていることに気がつくと自嘲気味に笑った。
頭が痛い上に、熱で頭がくらくらする。その上、身体の節々が痛い。挙句の果てには、起き上る気力も無いという、何処からどう見ても風邪の諸症状だ。
更に自分がベッドの上で横になっていることに気がつくと、アインハルトに心の中でお礼を言った。
「入るよ？」
秀人が昨日のドルゴラモンの戦いを思い出して、悔しい涙を流し

ているとドアをノックする音と共に声が掛けられた。
秀人は慌てて顔を拭いて涙をごまかしていると控えめの声と共に静かにドアが開けられると、アインハルトが入ってきた。

「おはよう。起きていたんだ」

「ああ」

秀人が気だるい気分の中でそちらへと視線を向けて見れば、秀人が起きたことに喜びを感じているアインハルトの姿があった。

「本当に大丈夫なの？」

「全然。ホテル爆破の犯人のダークナイトモンには逃げられ、ドルゴラモンには敗れ、その上何か変な物まで混入していると手塚さんには言われた。不幸だーーーーーーー！！！」

アインハルトの心配そうな声に秀人は途中から自棄になりながら答える。

「あらら……　災難だったわね」

秀人がそっぽを向いていると、アインハルトは苦笑しながら秀人の寝ているベッドの傍らまでくると、近くにあった椅子に座って秀人の顔を見る。

「はぁ……　頭が痛いし、くらくらするし、力出ないし、体痛いし、いいことないよ」

「それならまだ大丈夫よ」

アインハルトが笑顔と共に答えたので、秀人は溜息を付いた。
秀人にとって、今のアインハルトの笑顔には、手のかかる子供に対するような笑顔に見えたのか、秀人は無性に悲しくなった。
アインハルトはそんな秀人を見ながら椅子から立ち上がると、顔を近付けるとお互いの額を当てた。
顔が赤くなっている秀人の反応を見たアインハルトは、からかうように言う。

「うん、下がったみたいね。……って、どうしたの？　顔がさっきよりも赤いけど」

「なっ……何をやっているんだ一体！？」

いきなりのアインハルトの行動に秀人が照れながら困惑した声を上げると、アインハルトは楽しそうな笑みを浮かべながら首を傾げる。

「嫌だった？　御免ね。でも、一度はやりたかったの」

「フン。下らない」

拗ねたように再びそっぽを向く秀人の頭を優しく撫でると、アインハルトは立ち上がった。

「お腹すいたでしょ？　お粥作って来るから待っててね」

「ありがとう」

それだけ言うと、アインハルトは部屋から出ていくと台所へと向

かっていった。
秀人は風邪が治ったらお世話になることをきちんと言わなければならないと思った。

「早く作らないと怒られるわ」

アインハルトは台所でお粥を作り始めた。
早速、材料を切っていたら自分の不注意で軽く自分の指を切ってしまった。

「痛っ……」

アインハルトは少しドジをする傾向があるため、ズボンのポケットに絆創膏を入れているのだ。
ズボンのポケットから絆創膏を出して指に貼ろうとしたが、自分の傷を見て軽く舐める。

「私の血……舐めてくれるかな……」

アインハルトは呟くと、冷蔵庫から他の材料を出すと切り始める。少し味付けが濃いお粥にすれば、血が入っているのは誤魔化すことが出来ると考えたからだ。
本当は、直接舐めて欲しいけれど、それで嫌われるのがアインハルトには恐怖に感じられた。

「舐めてくれるよね……　秀人君優しいから……」

そう言いながら、アインハルトはお粥に自分の血を何滴か入れる。

その後に、切った材料を入れたりして誤魔化した。

「お待たせ。御免ね。待たせて」

「いや、大丈夫」

アインハルトは蓋をしてある小さめの鍋をテーブルに置くと、鍋の蓋を開ける。

更に、左手に持っているスプーンでお粥をすくうと、秀人の口の近くにまで持ってきた。

「口を開けて。そうしないと食べられないわよ？」

「一人で食べられるから大丈夫です」

「病人はおとなしくしていなさい」

「……はい。すみませんでした」

アインハルトの行動に抗議の声を上げた秀人だったが、アインハルトの鋭い視線の前には敵わなかったようだ。

秀人は観念したように頷くと口を大きく開けたが、歯の白さにアインハルトが少しだけ嫉妬を覚えたのは秘密だ。

「はい、どうぞ」

「頂きます」

アインハルトは心から嬉しそうな表情をしながら秀人にお粥を食べさせる。アインハルトが次の分を差し出すと、秀人は何回もお粥を食べる。
楽しそうに笑いながらスプーンを差し出すアインハルトを見て、秀人は確信犯だと一瞬感じたが、心の中に閉まった。

「美味しい？」

「ああ。こういうのもたまにはいいね」

アインハルトが笑みを浮かべたまま、秀人に尋ねたので、秀人も思わず笑顔で答える。

「愛情たっぷりだからね。それに大好きな物も入っているから尚更よ」

アインハルトの言葉で気になった所があったが、それを考えるよりも前に、秀人は自分の目の前にスプーンが来たのでそれを口の中に入れてお粥の味を味わう。

このようなやり取りの間に、お粥の量も残り少なくなった。
アインハルトはスプーンを秀人の口へと運ぶが、何を思ったのか、動きを止めるとゆっくりとスプーンを自分の口に運んだ。

「えっ……？」

秀人が呆然と口を開けたまま止まっているのを確認すると、アインハルトは秀人の両頬を両手で優しく包み込む。

「んっ……」

アインハルトは秀人に顔を近づけると、秀人とキスをして、秀人の口の中になま暖かいものが押し込まれていく。

「！？」

驚いている秀人に、アインハルトは口移しでお粥を食べさせたのだ。

一体何があったのか分からない秀人を見て、アインハルトは心から笑顔になりながらゆっくりと離れる。

本当はもう少しだけキスしていたいアインハルトだったが、秀人のことを考えて程々にした。

「おっ……美味しかった？」

「なっ……何の真似だよ？」

顔が赤くなっているアインハルトが同じく顔が赤くなっている秀人の目を見ながら尋ねると、秀人は呆然としながらも聞き返した。

「嫌だった？　そんな訳ないよね。嫌なはずが無いわ。私がやったんだから、嫌なはずが無いよね」

「口移しするならちゃんと言ってよ……　びっくりしたじゃないか……」

秀人はジト目でアインハルトを見たので、アインハルトは気まず

そうに目をそらしながら持っていたスプーンを空っぽの鍋の中に入れると、テーブルに置いた。
アインハルトは秀人の入っているベッドに入ると、秀人のことを抱き枕にするように強く抱きしめる。
秀人はその時に感じたアインハルトの温かさと柔らかさに思考が一瞬だけだが飛んだ。

「急にしたくなったの。こんなことするのは相手が貴方だからよ。貴方は特別な人だから……　私は貴方のことが好き……」

アインハルトは光のない虚ろな瞳で秀人を見つめて秀人の耳元で囁くように言うと、秀人は一瞬驚いたが、アインハルトの方に体を向けた。

「そうか。それは嬉しいな。でも……僕は……」

「無理しなくていいわよ。でも、貴方のことを好きな人がいるってことを忘れないでね」

アインハルトは左手の人差し指の絆創膏を外して、傷口を秀人に見せる。

「ほら、見て……お粥の材料を切ってるときに怪我しちゃったの……少し深く切っちゃってね……」

秀人は大丈夫か？と言わんばかりの視線をアインハルトに向けたが、アインハルトは大丈夫と言うように微笑んだ。

「私のことを愛しているのなら、私の指を舐めて欲しいの。貴方に舐めてもらえたら、怪我の治りも早いと思うから……」

「……」

アインハルトは秀人の目の前に右手の人差し指を持ってくると、秀人はアインハルトの指をじっと見る。

アインハルトの血が数滴零れては、秀人の顔に当たるが、秀人は気にせずアインハルトの傷口を舐め始めた。

「フフフ……舐めてくれるよね……だって、貴方は私のこと大好きだから……私も大好きだよ……誰よりも、何よりも……貴方のことを愛してるから……好きにしていいんだよ」

アインハルトは指を退かすと、ゆっくりと顔を近付けて、秀人とディープキスをする。

「私の血は美味しかった？」

アインハルトが聞くと、秀人は困った顔をしながら答えた。

そんなアインハルトは自分の血が零れた秀人の顔をキスすることで血を拭き取ったので、トマトのように赤くなっていた。無論、秀人もだった。

「……僕は、血の味とかわからないけど、アインハルトのだったら何でも美味しい気がするよ」

「私も貴方のだったら何でも美味しい気がするわ」

秀人はアインハルトから顔を逸らしながら言った。

「今日からよろしくお願いします」

「はい。こちらこそ」

こうして、アインハルトと秀人の同居生活が始まることになった。

第１４話　エイリアス戦争の章　暗黒騎士の陰謀、聖騎士危機一髪！？（後書き

ヤンデレが全然書けてない。
穴に入りたいです。

次回予告

ダークナイトモンとの決着に燃えるオメガモン。
だが、その鎧は漆黒に染まり、オメガモンに悲劇が襲う。
更に明かされるエイリアス戦争の本当の目的。
立ち向かうオメガモンは超究極体デジモンと対峙する。

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

エイリアス戦争の章　オメガモンの鎧が黒く染まる頃に

聖騎士の鎧が黒く染まる時、絶望の時が始まる。

第１５話　エイリアス戦争の章　オメガモンの鎧が黒く染まる頃に（前書き）

何だが、キャラ紹介のタイミングを逃してしまいそうなので、紹介してくれ～な方は遠慮なく言ってください。

第15話　エイリアス戦争の章　オメガモンの鎧が黒く染まる頃に

深夜零時になるほんの数分前。
オメガモンはただ一人鳴海市に存在する鳴海市民会館と言う建物の前に立っていた。
鳴海市民会館は巨大な建造物である。どちらかと言えば市民会館と言うよりも、美術館といった方がしっくり来るようなデザインである。
その場所をオメガモンが戦いの場に選んだ理由は、その場所が他の建物の敷地よりも広いからだった。他のビル群のような場所では、自身の視界が塞がってしまう。それは戦いに於いてはマイナスにしかならない要素だ。
だからこそ、オメガモンは自身が全力を発揮出来る場所と人目を気にせず戦える時間を選んだ。

「……来たか」

オメガモンが呟くと同時に、ダークナイトモンがオメガモンから少し離れた場所に降り立った。

「貴様のその醜い顔もいい加減見飽きた。そろそろ決着を付けよう」

「奇遇だな。私も君を見ると、シャウトモンを想像してしまうからいい加減仕留めておかないとまずいと思っていたんだ」

ダークナイトモンがそう言うと、オメガモンはグレイソードを射出させて、ガルルキャノンを展開した。
オメガモンとダークナイトモンはお互いに武器を構えながら睨み合う。

「消え去れ！！」

ダークナイトモンは左手をオメガモンに向かって突き出すと、左掌から漆黒の魔力弾を撃ち出した。

ダークナイトモンが放った魔力弾は全てオメガモンに直撃すると、そのまま背後に存在していた冬木市民会館さえも崩壊させた。

（流石にこの威力ならダメージは……）

「喰らえ！！　ガルルキャノン！！」

寧々が自身の攻撃の手応えを感じていると、突然、空の上から無傷のオメガモンが右腕のガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「クッ！！」

オメガモンがガルルキャノンから砲撃を撃ち出して来るのを目撃したダークナイトモンは慌てて地面を駆け抜けることで、エネルギー弾から逃れようとする。

その行動によってガルルキャノンの直撃を避ける事は成功したが、オメガモンはダークナイトモンの目の前に現れると、ダークナイトモンの胸部に向かってグレイソードを振り抜いた。

「グレイソード！！」

「ガハッ！！」

オメガモンのグレイソードの斬撃を胸部に受けたダークナイトモンは苦痛の叫びを上げながら吹き飛んだ。

ダークナイトモンが立ち上がるのを確認したオメガモンは、ダークナイトモンに向かって前進する。
そんなオメガモンの赤色の宝玉のような物から少しづつではあるものの、不気味な黒い光が溢れ出し始めた。

「ウオオオオオオオオオーーー！！」

「グゥッ！！」

自分に向かって振りおろされたオメガモンのグレイソードを、ダークナイトモンは左肩に装備している巨大な刃物で防御すると、右手に持っているツインスピアに暗黒エネルギーを纏わせてオメガモンに向かって振り抜いた。

「トリーズン・ヴォーテクス！！」

「クッ！！　そんな技があったとは！！」

オメガモンは背中に羽織っているマントを使うことでトリーズン・ヴォーテクスを防ぎながらガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「マントを使えるのは君だけではないのだよ」

ダークナイトモンも背中に羽織っているマントを使うことでガルルキャノンを防いだ。
自身のマントを背中に戻したダークナイトモンは左手をオメガモンに向かって突き出すと、ダークナイトモンの周りに十つの小さな砲塔が出現した。

ダークナイトモンがオメガモンに向かって魔力弾を撃ち出すと同時に、十つの小さな砲塔から次々と砲撃が撃ち出される。

「喰らえ！！」

「んな！？　魔術か！！」

「その通りだよ。オメガモン。私は君たちみたいな脳筋のように、自分の武器だけを頼りに戦っている訳ではないんでね」

今起こった出来事に驚愕しているオメガモンに向かってダークナイトモンは余裕そうに話した。

しかし、その言葉の内容に怒りを覚えたオメガモンは両腕の武器を一旦戻すと、両腕を前に突き出してオメガシールドを展開して砲撃を全て受け止めた。

そのまま、オメガモンは砲撃を全て受け止めたオメガシールドをガルルキャノンから砲撃として撃ち出した。

「今の言葉、そっくりそのままお返しするぞ！！　ジェネレードキャノン！！」

「なっ！！　グァッ！！」

ジェネレードキャノンを喰らったダークナイトモンは吹き飛ばされて、地面に叩きつけられると共に衝撃に顔を歪める。

オメガモンはダークナイトモンを凶暴さを垣間見せる表情と共に見下しながら、ダークナイトモンを嘲笑う。

「どうした？　私と同じ合体究極体であるはずなのにこの程度か？　情けない物だな！！」

「グッ！！」

「それも当然か。一度目は私に不意打ちをしたのに敗走し、二度目は関係の無い人々まで巻き込んだのにも関わらず、途中で逃げ出したからな。どうやら、貴様よりもドルゴラモンの方と先に戦うべきだったようだな」

「貴様――――！！！　この私を愚弄するか！！！」

ダークナイトモンは全身に力を込めて立ち上がると、オメガモンは凶悪な笑みを浮かべた。

「……フフフフッ、ハハハハハハハハハッ！！！　当然だ！！！　最後まで戦うとしない臆病者を愚弄して何が悪い！！！」

「おのれ！！！　その減らず口を閉じさせてくれる！！　ダークバインド！！！」

ダークナイトモンが叫ぶと同時に空から鎖が出現して、オメガモンを拘束した。

ダークバインドは、魔術によって力が強化されていて究極体デジモンでも簡単には抜け出すことのできない頑丈さが特徴である。

しかし、オメガモンからすれば、ただ自身の体に巻きついている鉄の鎖程度にしか認識出来ず、自身の体に力を込めてその力を一気に放出する。

「邪魔な鎖だな。それなら、貴様ごと消し飛ばしてやるぞ！！　オメガバースト！！！」

「なっ！？ガアァァァァァァーーーー！！！」

オメガモンが叫ぶと共に自分を中心に発生させた凄まじいほどの熱量を伴った光を、ダークナイトモンは避ける事も出来ずにその身に食らい、凄まじい衝撃波に吹き飛ばされながら吹き飛ばされる。

それによって、数キロ先までの辺りが壊滅したが、オメガモンは顔色を一つも変えずに、瞑らで血走ったような紅の瞳でダークナイトモンを見据える。

「ガッ！！……グゥッ……」

「本気で貴様は弱いな。もしかして、今まで自分よりも弱い者ばかりと戦ってきたのか？」

「ふん。そういう君はどうなんだ？」

「私が以前四度も戦ったカオスモンを１０とすれば、貴様は４……いや、せいぜいが５だ」

「グッ！！」

オメガモンの嘲りと侮蔑に満ちた言葉を聞いたダークナイトモンは思わず言葉を失った。

オメガモンはダークナイトモンが鳴海市に来る前に何度も戦ったシャウトモンに面影があるせいか、見ているだけでも忌々しく思える敵なのだ。だが、ダークナイトモンは体中を走り続ける激痛のためか、立ち上がる事も思うように行かずに地面に倒れ伏し続けている。

何が何でもオメガモンだけには負けられないダークナイトモンは自身の不甲斐なさが赦せず苦虫を噛み潰したような顔をするが、オ

メガモンは構わずに歪んだ笑みを浮かべながらダークナイトモンに声を掛ける。
この時、オメガモンの背中に羽織っているマントの外側の色が漆黒に染まり始めると同時に、オメガモンの体全体が漆黒に染まり始めた。

「貴様はその程度の存在か。それでも、新時代の覇者か？　たかだかロイヤルナイツ一体も倒せない新時代の覇者だなんて聞いて呆れるぞ！！！」

「クッ！！……グゥゥゥゥッ！！」

オメガモンの言葉にダークナイトモンは完全に怒りの限界を突破するのを感じると、全身を襲う激痛を越えて立ち上がった。
その目に宿るのは絶対にオメガモンを抹殺すると言う意思だけだった。このまま敗北すれば、自身の願いを叶えるどころか最悪な形で終わることになる。
何が何でも認められない。絶対に認める訳にはいかない。故にダークナイトモンは立ち上がり、全身から漆黒のエネルギーを放出させた。

「貴様だけには絶対負けられない！！！　私はこの戦いに勝ち残り、兄であるバクラモンを倒し、デジタルワールドの覇者になるのだ！！！」

「ほぉ、なかなか凄いじゃないか。だが、貴様は格好ばかりで理想と信念が無い。私が戦ってきたデジモンには、信念を持ちながら戦ってきた。だが、貴様にはそれが無い。それじゃ、何度戦っても私を倒すことは愚か、新時代の覇者になることなど出来るはずがない！！！」

オメガモンが言葉を言い終えると、オメガモンを中心とした地点から物凄い量のエネルギーが放出された。
それと同時に、オメガモンの白銀に神々しく輝いている鎧が完全に漆黒に染まり、左肩に装備しているブレイブシールドΩも勇気の紋章が刻まれたブラックシールドΩに変貌すると共にオメガモンの両腕も漆黒に染まった。
左腕のデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードも英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれたグレイソードに変貌して、オメガモンはオメガモンズワルトへと暗黒進化を遂げた。
奇しくも、カオスモンが言っていた『お前は黒いオメガモン、オメガモンズワルトのようになる』の通りになったのだ。

「それなら貴様を倒して、この戦いの勝利者になる！！！」

「上等だ！！！　全力で来い！！！」

ダークナイトモンはエイリアス戦争に訪れてから初めて覚悟を決めた顔をしながらオメガモンズワルトに向かって右手のツインスピアを握り締めて走り出すと、オメガモンズワルトは歓喜に満ち溢れた顔をしながらグレイソードを構える。
オメガモンズワルトとダークナイトモンは武器を同時に振るい、辺りに甲高い音を鳴り響かせる。
剣戟の途中で、ダークナイトモンは至近距離で左手をオメガモンズワルトに向かって魔力弾を撃ち出した。

「フン！！」

撃ち出された魔力弾に対して、オメガモンズワルトはガルルキャ

ノンを戻した右手でオメガシールドを展開することで防ぎながら左腕のグレイソードでツインスピアの攻撃に対応する。
しかし、ダークナイトモンはツインスピアをツインソードにすることでオメガモンズワルトが処理できない攻撃を繰り出すとする。
それに気がついたオメガモンズワルトは両足に力を込めて後ろに跳びながらガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「チィッ！！　二度も同じ攻撃は受けない訳か！！」

ダークナイトモンはツインソードをツインスピアに戻して右手に持つと、左手を前に突き出して魔力盾でガルルキャノンの連続砲撃を防いだ。
ダークナイトモンは魔力盾を解除すると、再びツインスピアをツインソードにしてオメガモンズワルトに向かって突撃を開始する。
そのまま、オメガモンズワルトとダークナイトモンはお互いの武器で激しい剣戟を繰り広げる。
その戦いは凄まじく裂帛の気合を持って相手を斬り殺さんとばかりに剣戟は続けられる。
しかし、お互いの命が何時奪われても可笑しくない戦いが繰り広げられる最中でも、オメガモンズワルトは歓喜に満ち溢れていた表情でグレイソードを振るい続ける。

「やれば出来るじゃないか！！　最初からそれで来ればまだ良かったものを！！　さぁ、もっと私を楽しませろ！！　ダークナイトモンよ！！」

「笑わせるな！！　貴様のような願いも何も無い奴と違って私は勝たなければならないのだ！！」

「クッ！！　これでは！！」

ダークナイトモンは叫ぶと同時に握っていたツインソードを勢いよく振り下ろすと、グレイソードを下に追いやった。

それを確認すると、二本の槍を地面に深く交差させながら突き刺して、グレイソードの動きを封じた。

そして、背後に飛び去ってオメガモンズワルトから距離を取ると、左手を突き出して十つの砲塔を出現させてオメガモンズワルトに向かって一斉砲撃を撃ち出した。

「消え去れ！！」

「悪いがまだ決着を付けていない相手が大勢いる！！　こんな所で私は死ねない！！」

自身に向かって迫り来る砲撃を見ても、オメガモンズワルトは諦めることなくガルルキャノンの砲口を地面に向けて砲撃を撃ち出すことで空中に飛び上がると、そのまま砲撃の影響が及ばなかった地点に着地してグレイソードを構える。

「いい加減これで終わりにするか？」

「奇遇だな。私もそう思っていた。これ以上貴様の顔を見ているのは不愉快以外の何ものでもないからな」

オメガモンズワルトの言葉にダークナイトモンは同意を示すように頷くと、両手でデジモン文字を書き連ねた。

すると、魔法陣はダークナイトモンの真上に移動して、その魔法陣から巨大な砲塔が出現した。

それに対して挑むとなれば、こちらも最大の力で応えなければいけないと思いながら、オメガモンズワルトはグレイソードに己のエネルギーを注入させる。
この世から細胞の一つたりとも残さずに消滅させなければ安心する事も出来ないと思いながら、ダークナイトモンは巨大な砲塔にエネルギーを込め、オメガモンズワルトもグレイソードにエネルギーを送り続ける。
そして、お互いにエネルギーが最大限に高まった瞬間、ダークナイトモンは右手をオメガモンズワルトに向けて突き出すと、超巨大な闇の奔流が巨大な砲塔から撃ち出された。

「塵も遺さずに跡形も無く消え去れ！！」

超巨大な闇の奔流がオメガモンズワルトに向かって直進するのを見たダークナイトモンは防ぐ手段は無いと確信しながら、超巨大な闇の奔流に飲み込まれようとしているオメガモンズワルトに向かって必勝の笑みを向け続ける。
自身の最強の必殺技に絶対の自信を持っているからこその確信だった。

「よし！！」

しかし、次の瞬間、オメガモンズワルトは大きく息を吸い、息を吐くと一言気合を込めた。
それと同時に迷う事無く超巨大な闇の奔流に向かって飛び出し、自身が左腕に装備しているグレイソードの剣先を突き出しながら、グレイソードの真の力を解放する。

「ターミネーション！！」

「ば、馬鹿な！？」

ダークナイトモンは自身の目の前の光景に悲鳴のような叫びを上げた。

超巨大な闇の奔流をグレイソードで突き破りながら真っ直ぐ進み続けるオメガモンズワルトのグレイソードに触れている箇所から闇はまるで最初から無かったかのように終結させられていく。

ダークナイトモンは超巨大な闇の奔流を終結させていくオメガモンズワルトの姿に恐怖を覚えるが、オメガモンズワルトは構わずに進み続けながら、遂にダークナイトモンの目の前に現れる。

「これで終わりだ！！！　ソード・オブ・ルイン！！！」

オメガモンズワルトはダークナイトモンの目の前に現れると同時に、暗黒の炎を纏わせたグレイソードを何度も何度も振り下ろし、ソード・オブ・ルインを繰り出す。

「グアァァァァァァァァァァーーーー！！！」

それと共にダークナイトモンは苦痛の叫び声を辺りに響かせると、地面に倒れ伏せて、体全体から漆黒の光を発生させると、天野寧々の姿に戻った。

「ウウッ……」

「立て。貴様を殺す」

顔を上げた寧々の目の前にオメガモンズワルトはグレイソードの剣先を突きつける。

「なっ、何で……？　もう、戦いは終わったのよ？」

「ああ。確かに戦いは終わった。私が勝ち、お前は負けた。だが、昨日、お前のしたことの清算をしてもらわなければならない」

「まさか……」

オメガモンズワルトの言葉に寧々はその真意に気がつくと、大粒の涙を流しながらオメガモンズワルトに懇願したが、オメガモンズワルトは取りつく島もないと言わんばかりに冷酷に切り捨てる。

「いや、いやぁ……イヤァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！　お願い！！！　命だけは！！！　何でもしますから！！！」

「お前ほどの美女の願いなら普段の私なら快く聞いていただろう。だが、お前は大勢の関係の無い人々を私を殺すためだけに巻き込んだ。それにもし、お前の願いを聞いても、お前は同じ過ちを繰り返し、今度こそ私は死ぬだろう。よって、その罪は自分の死で償ってもらおう」

「アァ……アァ……アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

自分が確実に死ぬことを理解した寧々はリリスモン張りに半狂乱になりながら叫ぶ。

それに不快感を示したオメガモンズワルトはガルルキャノンを戻していた右手で寧々の髪を掴むと思いっきり地面に叩きつける。

「黙れ。あばずれ女が」

「ガッ！！」

受けた凄まじい衝撃に寧々は息を吐き出すが、オメガモンズワルトは構う事無く髪を掴み上げて正面から怒りに満ちた瞳で寧々を見つめる。

「私は不意打ちとか闇討ちは仕方ないと思っている。それも戦略の一部だと言われればおしまいなのだから。だが、お前は関係の無い人々を巻き込み、それに対して何の感情も抱かない。それは私の中で最も許せないことの一つだ。それを行なったお前に生きる権利は無い。言葉に表すことの出来ないぐらいの地獄という名の絶望を味わった後、死ね」

オメガモンズワルトは言い終わると、ニヤリと口元を残忍さに満ち溢れた笑みを浮かべながら次々と寧々の体にグレイソードを突き刺していく。

無論、急所は外した状態で。

「キャァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

「クククククククッ！！ハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

次々と体に走る激痛に寧々は耐え切れずに、苦痛の叫び声を辺りに響かせる寧々の体の至るところから血がとめどなく流れて、地面を赤く染めていく。

更に、オメガモンズワルトは狂気の笑顔を浮かべたままグレイソードで寧々の四枝を切り落とした。

「もう……殺して……いっそ、殺して……」

寧々は四肢を失った苦痛と恐怖に苦しみ、大粒の涙を流しながらオメガモンズワルトに懇願した。

「そろそろ私の我慢も限界だ。お前を殺す」

オメガモンズワルトはそう言うと、グレイソードを寧々の腹部に突き刺し、左腕を高く上げて寧々を力の限り上空に向かって投げた。

その数秒後に、オメガモンズワルトは右腕のガルルキャノンから極限にまでエネルギーを圧縮されたエネルギー弾を迷う事無く上空でもはや動くことも出来ない寧々に向かって撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

（琴音……　御免ね……　私……貴方を助けられなかった……）

寧々は自分に向かって迫り来る紅のエネルギー弾を見て自身の妹で意識不明に陥っている天野琴音のことを思いながら爆発に飲み込まれた。

奇しくもその瞬間、意識不明に陥っていた天野琴音が目を覚ましたのだが、本人がそれを知ることは無かった。

「クククククッ！ハハハハハハハハハハハッ！！　これで邪魔者は消えた！！　統制者め！！　待っていろ！！　今すぐその首を取りに行くぞ！！」

オメガモンズワルトは障害を一つ片付けたことに満足しながら、教会へと飛び立った。

鳴海市の郊外に存在する小高い丘の上に位置する鳴海教会とは、エイリアス戦争を監視する為の拠点であり、本来ならば、エイリアス戦争に於いて中立を維持しながらも、戦いに敗れたエイリアスの保護やエイリアス戦争で発生した被害を隠匿する為の指示を出す場所である。

その場所は完全にエイリアス戦争中は中立地帯とされていて、不干渉の条約が結ばれてのだが、一人の聖騎士―オメガモンズワルトによって破られることとなった。

「昨日は散々なことをしてくれたようだな。統制者よ」

「あれは私の差し金では無かったぞ」

オメガモンズワルトは自分の目の前にいる黒いローブに身を包んだ統制者を睨みつけながら険しい声を出すが、統制者は否定した。

「お前は分かっているのか？　この教会は中立地帯。お前は、ただでさえ数少ないエイリアス戦争のルールを破ったのだ。これは赦されざる事だ」

「ああ。それは重々承知している。その危険を犯して私はここまで来たのだ」

「そうか。それなら、私はエイリアス戦争の監督役としての権限を発動して、エイリアス戦争の一時停止と暫定ルールの設定を宣言する」

そのように統制者は告げると共に右袖の僧衣を捲くり上げ、右手の肘から手首にかけてをビッシリと覆っている文様を良く見えるように掲げるが、次の瞬間にはそれが吹き飛んでいた。
オメガモンズワルトが右腕のガルルキャノンを展開して、砲撃を撃ち出したからだ。

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！　私の腕がーーーーーー！！」

「茶番は其処までにしておけ。統制者……ミレニアモン」

オメガモンズワルトが統制者の真名を明かした瞬間、統制者の姿は背中に2門の巨大なキャノン砲を装備して、同じく背中に亡霊のような物がいて、腕を4本生やした合成型デジモンーミレニアモンへと変貌した。

「何故私だとわかった？」

「昨日の実験の直前にカオスデュークモンを見たからだ。最初は、オメガモンズワルトが仕組んだものだと考えていたが、考え直してみると狡猾な知恵者である貴様にこそぴったりな仕事だと思ってな」

「……クククククッ！！！ハハハハハハハハハハハハハハハッ！！　その通りだ。だが、オメガモン。自分の体を見てみろ」

「何？……なっ、黒くなっている！！」

ミレニアモンの言葉通りに自分の両手を見たオメガモンズワルトは驚愕した。

今まで自分の体が黒く染まっていることに気がついていなかったからだ。

「そうだ。お前の体にある物質を注入させていたからな。しかも、今のお前の姿はズワルトその物であり、さっきまでの戦いもそうだったぞ」

「何が言いたい？」

「お前はダークナイトモン、天野寧々を虐殺した。証拠も十分すぎるほどに揃っている。お前はオメガモン云々以前に人としてやってはいけないことをした。私は聖騎士としてあるまじき行いをしたお前の存在を断じて認めない！！」

「私が……やったのか……？　嘘だ……嘘だ。嘘だ！　嘘だぁーー！！」

オメガモンズワルトは自分がしでかした事に恐怖を感じながら、ただ呆然とミレニアモンの言葉を聞き続ける。

オメガモンはダークナイトモンへの憎しみのあまり、大事な事を忘れていた。自分が何かを倒す為ではなく、何かを守る為に戦わなければならない事を。

「そうだ。所詮、貴様はオメガモンの成り代わり。貴様が力を振るうだけでオメガモンの存在が穢させていく！！」

「確かに私はオメガモンの成り代わり。でも、それでも出来る事があると信じて戦ってきた！！　貴様に私の存在を否定される覚えなど無い！！私のことを何も知らない貴様に私を否定する権利などない！！」

ミレニアモンの告げる否定の言葉を否定するように、オメガモンズワルトは声を荒げた。
自身の心に深い軋みが入る音を聞きながらミレニアモンの言葉を否定するように声を荒げている上に、僅かに後方へと下がり始めている。
それでも、ミレニアモンをいつでも攻撃できるようにガルルキャノンにエネルギーを集約し始めるが、その前に遂にミレニアモンがオメガモンズワルトに取っての、死刑判決と同様の意味を持つ言葉を叫ぶ。

「お前には人間の心と魂がある。私のような普通のデジモンには無い人間の心と魂がな。よって、幾ら心を持とうとお前は！！！」

「止めろ！！！　それ以上は絶対に言うなァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

ミレニアモンの言おうとしていることに気がついたオメガモンズワルトは、ミレニアモンの言葉を止める為に声を張り上げて言葉を無理やり止めさせようとするが、その努力は虚しくミレニアモンは冷酷に言葉を続ける。

「お前は！！“世界から排除されるべき存在”だッ！！！」

「……」

ミレニアモンが言葉を言い終えた瞬間に、オメガモンズワルトは自身の心が砕け散るのを感じ取り、顔を俯けながら涙を流し始める。
たった一度だが、余りにも大きすぎる失敗で、自分の理想、正義、存在といった自分自身を失ったみたいだと錯覚しながら。

「私はズワルトの造る理想郷の最大の障害として、エイリアス戦争のルールを破った違反者として、世界の安定のためにもお前を抹殺する！！！　来い！！　アルカディモン！！！」

ミレニアモンの言葉を聞いて教会の右側の扉から、灰色の肌を持ち、背中に翼を生やした妖獣型デジモンーアルカディモン究極体がオメガモンズワルトの目の前に現した。

オメガモンズワルトは本能で相手がかなり危険だと察知するが、エイリアス戦争の真実を掴んだオメガモンズワルトはニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「そういうことか。過去４度に渡るエイリアス戦争はアルカディモンを育成させるために行わせていたのか。人の心を操り、弄ぶ、卑劣で薄汚い貴様のやり口だな。それ程、私とやり合うのが怖いのか？」

「減らず口を。まずはアルカディモンを倒してからにしろ！！」

オメガモンズワルトはアルカディモン究極体の姿を見た瞬間、４度に渡るエイリアス戦争で何故勝利者が出なかったのかを悟った。勝利者は出たとしても、アルカディモンに吸収されてしまっているのだ。とあるデジタルワールドでアルカディモンのデジタマを確保したミレニアモンは、その進化のためにエイリアス戦争を開いたのだ。最初で成長期、２度目で成熟期、３度目は完全体、４度目は究極体へと進化させたのだ。そして、今回で最終形態である超究極体へと進化させるつもりなのだ。

「上等だ。超究極体に進化しない内に潰す！！」

「やってみせろ！！」

ミレニアモンの言葉をきっかけに、オメガモンズワルトとアルカディモン究極体の戦いが始まった。

両者は教会の天井を突き破って上空に移動すると、同時に突撃を開始した

オメガモンズワルトは両拳を連続でアルカディモン究極体に撃ち込む。

「ウオオォォォォォォォォォーーーー！！」

「ギギギッ！！」

オメガモンズワルトの怒涛のラッシュの前に、流石のアルカディモン究極体もダメージを食らってしまう。

オメガモンズワルトは右拳に凄まじい冷気を纏わせながらアルカディモン究極体に向かって振り抜いた。

「フン！！」

「ギギィ！！」

アルカディモン究極体は苦痛の声を上げながら吹き飛ばされるが、体勢を立て直すと右腕を槍にして、オメガモンズワルトに向かって突撃を開始した。

「ギギギッ！！」

「フン！！」

オメガモンズワルトは自分に向かって突撃してくるアルカディモン究極体の背後に回り込むと、右腕のガルルキャノンからエネルギーを集約した砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「ゲバッ！！」

ガルルキャノンを喰らったアルカディモン究極体は、地面に向かって真っ逆さまに墜落して、地面に叩きつけられた。

「フン。ちょうどいい実戦経験になりそうだな。反撃開始だ、アルカディモン」

「クッ！！　ドットマトリクスか！！」

ミレニアモンが冷静でいるのを見たオメガモンズワルトはダメージが全くないアルカディモン究極体を見て、悪態を付いた。

今、アルカディモン究極体は必殺技であるドットマトリクスを使うことでガルルキャノンを無効化したのだ。

ドットマトリクスとは、アルカディモン完全体、究極体が使用する必殺技であり、アルカディモンの代名詞とも言える恐ろしい必殺技である。

何故恐ろしいかと言うと、ドットマトリクスを簡単に言えば、狙った対象と同じエネルギーを消費して対象を一瞬で0と1に分解し、それを吸収することでプラスマイナス0にしてしまう技なのだ。攻撃や防御等関係なく、分解吸収するという効果だけでも恐ろしいが、この技の本当に恐ろしい所は完全に不可視という点である。発射に動作がなく、発射してから対象を分解吸収するまで、技の全過程が

全く目に見えないため、狙われた対象は何が起きているのか分からず消えてしまう。

「ギィィィーー！！」

「フン！！　行くぞ！！」

上空に浮かび上がったアルカディモン究極体に向かってオメガモンズワルトは突撃を開始する。

「ギィッ！！」

「グゥッ！！」

アルカディモン究極体はオメガモンズワルトに向かって左腕を振り抜くことで、オメガモンズワルトを吹き飛ばすと同時に突撃を開始する。

その直前で体勢を立て直したオメガモンズワルトは左腕のグレイソードから斬撃をアルカディモン究極体に向かって繰り出す。

「ハアァァァァァァッ！！」

「ギギギギッ！！」

斬撃を何度も喰らうアルカディモン究極体だったが、反撃とばかりに右ストレートをオメガモンズワルトの腹部に食らわした。

「グゥ……」

「ギィッ！！」

全身に走る鋭い痛みにオメガモンズワルトは一旦動きを止めてしまった。
その隙を逃さないアルカディモン究極体は、直ぐ様左ストレートをオメガモンズワルトに向かって繰り出して、オメガモンズワルトを吹き飛ばす。

「グゥ……　其処だ！！」

苦痛に耐えながら体勢を整えたオメガモンズワルトは、アルカディモン究極体の左腕に向かってピンポイントでガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ギゲッ！？」

アルカディモン究極体は自身の左腕が無くなっていることに疑問を覚えた。
先程、オメガモンズワルトが撃ち出した砲撃によって、アルカディモン究極体の左腕は吹き飛ばされていたのだ。

「ウオオオオオオオオーーー！！」

「ギギィ！！」

オメガモンズワルトは左腕の無い隻腕のアルカディモン究極体に向かって突撃すると、次々とグレイソードの斬撃を繰り出す。
アルカディモン究極体は苦痛の声を上げながら斬撃をその身に喰らい続ける。

「フッ！！」

「ギッ？」

突然、マントを翻したオメガモンズワルトは次の瞬間には、アルカディモン究極体の視界から姿を消した。

オメガモンズワルトを探そうと、アルカディモン究極体は辺りを見渡す。

「ハアッ！！」

「ギギッ！？」

オメガモンズワルトは辺りを見渡しているアルカディモン究極体に向かって、渾身の力を込めた左ハイキックを繰り出して、アルカディモン究極体を吹き飛ばす。

「ギィィィィーーーー！！！」

「これで終わりにする！！　ガルルキャノン！！」

怒りに満ちた声を上げながら突撃してくるアルカディモン究極体に向かって、オメガモンズワルトはガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

アルカディモン究極体はドットマトリクスを使ってガルルキャノンを無効化するが、再び自分の視界からオメガモンズワルトが消失したことに疑問を覚え、辺りを見渡す。

一方のオメガモンズワルトはというと、アルカディモン究極体の左腕があった場所の近くにグレイソードを構えている。

今のガルルキャノンは囮で、アルカディモン究極体の腕のない死角に入るための一撃だったのだ。

「ターミネーション！！」

オメガモンズワルトはグレイソードにエネルギーを溜めて、アルカディモン究極体に向かって振り下ろした。

しかし、次の瞬間にはドットマトリクスによってグレイソードはまっぷたつに折れた。

「なっ！？　ターミネーションでも駄目なのか！？」

自身の最強の必殺技が通用しなかったことと自身の最強の武器であるグレイソードが短期間で二度も折れたことにオメガモンズワルトは驚愕すると共に絶望する。

その間にも、アルカディモン究極体の左腕は再生して伸縮自在の槍になると、アルカディモン究極体は迷わずオメガモンズワルトの胸部に向かって突き刺した。

「イグザイルスピア！！」

「ガアアアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！！」

苦痛の叫び声を上げるオメガモンズワルトに突き刺さっているイグザイルスピアを抜いたアルカディモン究極体は、今度は胸部の違う箇所にイグザイルスピアを突き刺した。

「ガアアアアアアーーーーーーー！！！！！」

オメガモンズワルトはイグザイルスピアが刺さったまま力尽きたかのように地面に向かって落下した。

「フン。お前は何のために戦っている？　誰もお前の声を聞きはしない。お前らは全員こいつの餌になるのだ」

「ギギギ……」

ミレニアモンの言葉にアルカディモン究極体は不気味な声を上げることで応じた。

「……私は……自分のせいで全てを失った……　信じるべき正義も……貫くべき理想も……自分の存在理由も……何もかも失った……だが……最後に残った一つだけは死んでも失いたくない……諦めない限り存在する可能性……希望、未来それだけは絶対に失いたくない！！！　ウオオオオオオオオーーー！！！！！」

オメガモンズワルトは力を振り絞って立ち上がると、イグザイルスピアをへし折った。

「狂っている……　何故そこまでして戦える？」

「さぁな。今回は負けたが、ミレニアモン。アルカディモン究極体。次こそはお前たちを抹殺する」

オメガモンズワルトはミレニアモンとアルカディモン究極体に捨て台詞を残すと、その場を離脱した。

「追うな。アルカディモン。漢気を見せられたんじゃ、こうも追う気にはなれない」

そう言うと、ミレニアモンとアルカディモン究極体は天井が壊れている教会へと戻っていった。

鳴海市郊外に広がる草原で、秀人は苦しそうに息を乱しながら、自分のデジヴァイス０１だった物を見つめていた。

「デジヴァイスが……ウワァァァァァァァァァーーーーーーー！！！！！！！」

進化を解いた時、両腕のデジヴァイス０１は秀人の心を表すように粉々に砕け散った。

これで、秀人は進化不能に陥り、戦うことが出来なくなったのだ。

突如として怒りと悲しみに満ちた咆哮を上げた秀人は、地面に向かって両拳を振り下ろす。

「何故だ！？」

「何故正しいことをしたはずなのにこうも苦しまなければならない！？」

「奴は大勢の人々を苦しめた！！　僕は大勢の人々のために奴を倒したはずなのに！！！」

「返せ！！！　返せ！！！　デジヴァイスを！！！　進化するための道具を！！！　戦うための力を返せェェェェェェェェェェーーーーーーーー！！！！！！！」

「……返してくれ……頼む……返してくれ……」

秀人は悲しみに満ちた咆哮を上げると共に両目から大粒の涙を流

しながら地面に膝をついた。
秀人は憎しみの激しさから寧々を虐殺してしまった。秀人の憎しみはまた誰かを傷付けていってしまう。そして、自分の心までも。
秀人の脳裏に、自分が倒したデジモンーディアボロモン、オニスモン、カオスシードラモン、カオスグレイモン、カオスロード、カオスモン、ダークナイトモンが思い浮かぶ。
秀人は橋から下に流れる川を見て、そこに行って身を乗り出す事は出来ずに、力尽き、その場に座り込む。
結局、自分は憎しみでは何も変えられなかった。自分は正義のヒーローのように憎しみで動く事は出来なかった。自分はどうすればいいのか……自分はもう……何をすべきか分からない……と考えながら秀人は眠りについた。
そんな秀人を屋敷にいる一人の女性が悲しそうに見ていた。

第１５話　エイリアス戦争の章　オメガモンの鎧が黒く染まる頃に（後書き）

アルカディモンのちゃんとした説明が無かったので今回は省きます。
どうしても知りたい人は私に連絡するか、自分で調べてください。

次回予告

自分の行いのせいで、一夜にして地獄に叩き落とされた秀人。
そんな秀人を、デュークモンことオリヴィエは慰める。
オリヴィエの性格、個性的なデュークモンによって元気を取り戻す
秀人を死んだはずのカオスモンが狙う。
果たして秀人は再びオメガモンとして立ち上がれるのか？

次回、デジモンアドベンチャー　Ωテイマー ＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

傷つき、倒れ、それでも立ち上がる聖騎士に与えられたのは白き長大な聖剣の力。

第１６話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

長くなりそうなので前後編に分けて投稿します。

第１６話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

鳴海市から西に向かって三十キロメートル余りの人里離れた山中に東西に展開している国道沿いに、次々と押し寄せる宅地開発の波からはすっかり忘れ去られたかのような、鬱蒼と生い茂っている森林がある。

その森林は国有地だと鳴海市民の誰もが思うが、登録上の名義は実体があるのかどうかすらも怪しいような外資系企業の私有地になっていたりと、謎が多過ぎる場所である。

其処には、深い森林の奥底に『御伽の国のお城』があるという噂がある。

それは当然、たわいもない怪談話である。いかに未開発とはいえ、都市部から車で一時間足らずの近隣の土地にそのような奇抜な建物があるとすれば、評判にならない訳が無い。

しかし、事実、過去にも鳴海市の測量のための空撮が何度も行われてきたが、深い森の中にこのような人工の建築物が写っていた先例が今まで一度もないのだ。

それでも、四年に一度の間隔と共に、その噂話は誰かが思い出したように囁かれる。

それは、夏休みに森に足を踏み入れた子供たちや、道に迷った車の目の前に、霧の中からふいに現れると言われている石造りの壮麗な古い城。廃墟のように完全に無人ではあるものの、誰かが住んでいるとしか考えられない程に完璧とは言い難いものの、手入れが行き届いた摩訶不思議な城であると言われている。

もちろん、全員が全員、真に受けたりはしない。真に受けるとしても、せいぜい、書くことがない週刊誌が夏場に組む怪談話特集の一ページで取り上げられる程度の戯言である。

そんな城の一室で、ベッドで寝ていた秀人が起きた時間は午前９

時だった。
僅か一夜にして、勝利と敗北を味わい、オメガモンへの進化が不可能になった日の次の日の朝だった。
「あれ……？ここは何処だ？」
目覚めた秀人は初めて見た景色を不思議に思い、辺りをキョロキョロと見渡す。
昨日、最後に見た景色は草原だったはずなのにどういうわけか部屋の中に変わっているからだ。
「お早うございます。よく眠れましたか？」
ベッドの隣にある椅子に座っている金髪に、右目が紫色、左目が青色の虹彩異色の瞳をした女性―オリヴィエ・イングヴァルトが微笑んだ。
初めて見た女性を見て、秀人は首をかしげながら尋ねる。
「どちら様です？」
「オリヴィエ・イングヴァルトです。貴方は？」
「藤本秀人です」
お互いに自己紹介をすると、オリヴィエは相変わらず秀人に微笑みを見せた。
秀人はオリヴィエが自分に向けている微笑みの意味が分からず、首をかしげるのが精一杯であった。
「お腹が空いたでしょうから、サンドイッチと紅茶を持ってきます

ね」

オリヴィエは何故か楽しそうに言うと、部屋から出てキッチンへと向かっていった。

「誰なんだろう？　この城の所有者？いや、まさか……」

秀人はオリヴィエが一体何者なのかを考えている時に、窓から日が差し込んでいることに気がついた。

もう戦いたくない。何もしたくない。いっそ、全て忘れて逃げ出したい。でも、自分は逃げる事からも逃げ出してしまっている……完全に自分を不要な存在だと考えている今の秀人には、目の前に広がる青空を見ても、何一つ感じる事は出来なかった。

無理もないだろう。昨日は散々な一夜を味わったのだから。

ダークナイトモンに勝ったのはいいが、暗黒進化して、しまいには虐殺をした。統制者に戦いを挑むも、アルカディモン究極体に自分の攻撃が一切通じないという地獄の戦いを強いられ、敗北。その上、デジヴァイス０１も粉々に砕け散るというおまけ付きだ。

その後、秀人はオリヴィエが作ったサンドイッチを全て食べ終えて、オリヴィエと会話をしている。

「どうして、昨日はあんなところにいたんですか？」

「生きることに疲れたんです」

オリヴィエの質問に秀人は俯いて答えると、オリヴィエは驚きつつも秀人に質問をする。

「如何してそんなに生きる事に悲観的なんですか！？」

「僕はオメガモンに進化出来るエイリアスでした。でも、僕は昨日、ダークナイトモン、天野寧々さんを虐殺しました。しかも、その時の自分が黒いオメガモンに暗黒進化していました。進化を解いた後、デジヴァイスは粉々に砕け散ってしまい、もう自分は進化できなくなってしまいました。そんな自分はもう誰にも必要とされない……」

秀人が告げた事実にオリヴィエは目を見開き、秀人を見つめる。

秀人はポケットからデジヴァイス01だった破片を全て集めて入れた袋を見せると、オリヴィエは顔を反らした。

「だから、放っておいて欲しかったんです。あのまま誰にも気づかれず、誰にも分からないまま一人でいた方があんな苦しみ、忘れてしまった方が僕はずっと楽だったのに……」

「私も昔、貴方と同じことを考えていた時がありました」

「同じことを？」

それを聞いたオリヴィエは顔を俯け、自分の過去を話し始めた。

「私は王族の末裔で、愛し合っていた人がいました。それはもう、お互いに愛し合ってましたよ。周りの皆が口から砂糖を大量に吐くほどに。でも、ある日、私の住んでいた世界にデジモンが現れて私の大切な人を殺してしまいました……」

「ッ！！！！」

オリヴィエの告げた言葉に秀人は驚愕の表情を浮かべるが、オリヴィエは寂しそうに笑いながら顔を俯けたまま話を続ける。

「そのデジモンは後で分かったんですけど、ディノビーモンでした。私もディノビーモンにやられて重傷を負ってもう駄目だと諦めた時、頭の中で声が聞こえてきたんです。『諦めるな』と。それがデュークモンとの出会いでした」

「貴方は……デュークモンのエイリアス……」

何時の間にか、自分でも知らない内に秀人はオリヴィエの話から耳を離せなくなっていた。

オリヴィエの話は、形は違えど、秀人がオメガモンになった時の状況によく似た話なのだから、興味覚えざるを得ないだろう。

「でも、私は怖かったんです。自分が力を手に入れたことに。それで誰かを傷つけてしまうことが怖かったんです。でも、デュークモンが励ましてくれました」

そう言うと、オリヴィエは紅茶を飲んで、言葉を繋げる。

「戦わないで黙ってやられるだけでは相手には何も伝わらない。気持ちを伝えることも戦いの一つだ。勇気を出して『私は私だ』と大声で叫んだりして相手に伝えるんだ。時には苦しんだり、悩んだり、険悪な関係になることもあるが、全力で自分の気持ちでぶつかり合えば、意外と上手くいく時もある……と」

「そんな物でしょうか……？」

「私も最初は信じられませんでした。でも、戦いとは言葉や歌と同じように相手に気持ちを伝える手段の一つかもしれません。秀人さん、貴方がもう一度戦えるようになるには、自分の力を何も考えず

に使っていては駄目です。自分の弱さや未熟さも全て受け入れて間違いがあれば、それを正して前に進んで下さい。時には泣いても転んでもいいです。もう一度立ち上がり、笑えるようになればいいだけですから。それが出来なきゃ、いつまで経っても戦えないで、惨めな思いのままですよ。でも、それが出来るようになればもう一度オメガモンとして戦えるようになれると信じたいです」

「……でも、今更立ち上がれるのか……？」

不安そうな表情を浮かべる秀人の手を握りながらオリヴィエが励ますように言葉を告げる。

「私は大切な人を救えませんでした。確かに、大切な人を救えなかったと言う過去は変えられませんが、未来は変える事が出来るかもしれません」

オリヴィエの左腕に付いている金色の縁どりのデジヴァイス０１を見た秀人はより一層、惨めな気持ちに陥りながら、吐き捨てるようにオリヴィエの言葉に反論する。

「無意味です。たとえ未来を変えたとしても、僕が虐殺をしたという過去は変えられない……そんなの無意味です」

「確かに無意味かもしれませんね。でも、過去と向き合って生きるのが人間の生き方じゃないでしょうか？　デジモンとなってしまった私は人間としても生き続けたいんです」

オリヴィエは秀人の手を握る力を少し強めながら秀人の反論に答えた。

「強いですね、オリヴィエさんは」

「そうですか？　私よりも強い女性なんか大勢いますよ。そんな私の強さを貴方に少しでも分けられれば……」

秀人はオリヴィエの強さを分けてもらった気がしたのか、少し顔色が良くなってきた。

それを見たオリヴィエは嬉しそうな声を上げると、左手で秀人の手を掴んで、右手であらかじめ作っておいたサンドイッチとパンとジュースの入ったトートバッグを持つと部屋から出る。

「さて！！　今日は天気もいいですし！！　二人でピクニックへ行きましょう！！」

「えっ！？　ちょっ、待って……」

秀人はオリヴィエにズルズルと引きずられる形になりながら声を上げるが、オリヴィエは止まらず、城の外に向かっていく。

「今日は本当にいい天気ですね！！」

「はい。全くですよ」

楽しそうに歩くオリヴィエの後ろをトートバッグを持った秀人が付いていく。

今日の天気は雲一つ無い快晴。まるで出かけようと言わんばかりに雲一つ無い空で日差しが良く当たるのか、オリヴィエはつばの広い帽子をかぶっている。

それはまるで、深窓の令嬢と言うべき美しさと気品を兼ねそろえているみたいである。
ピクニックと言っても近くの山の頂上まで行く散歩か遠足みたいなような物なのだが、エイリアス戦争が始まってからずっと一人ぼっちだったオリヴィエにはそんな細かいことは関係無かった。
山中の広場はまだ距離があるため、オリヴィエは秀人の手を握ると恋人みたいに寄り添い合う。
アインハルトという彼女（？）がいる秀人は少し困惑気味な表情になるが、助けてもらったのだから我儘は言えないと考え方を改めて、オリヴィエの手を握る。

「着きましたっ！！」

「いい空気だな〜　やっほーーーーーーーーーーー！！！」

「……見ていて寂しいです」

「……うん。僕もそう思いました」

お世辞にもそれ程高い山ではないが、木々に囲まれた小山の空気は鳴海市よりも澄んでいて、秀人には新鮮に感じられた。
何処かひんやりとする空気も、日光が当たれば丁度よく感じる程の気温だ。
時間も丁度お昼だったので、秀人はレジャーシートを広げて昼ご飯の用意をする事にした。
オリヴィエがレジャーシートに座ると、秀人は適当にジュースを紙コップに入れて配った。

「大したことはありませんが……どうぞ」

「おお！！　これは美味しそうだ！！」

トートバッグの蓋を開けた秀人は歓喜の声を上げた。
サンドイッチに、何も挟んでいないパンに、オレンジとアップルジュースだったのだ。

「……あれ？　パン？」

「はい。デュークモンが食べたいとうるさいんですよ」

「アハハハハハハハハハハッ！！　成程！！　『このデュークモン、現実世界（リアルワールド）のパンが大好きなのだ』みたいな感じですか！！」

「クスクス。そうなんです。一度訪れた現実世界（リアルワールド）で食べたパンが美味しかったそうで……」

秀人が気づいた何も挟んでいないパンから、デュークモンの意外な一面が明らかにされた。
秀人は自分が小学生だった時に見た『デジモンテイマーズ』に登場したデュークモンことギルモンを思わせるデュークモンを羨ましく思った。

『いただきます』

秀人はサンドイッチを、オリヴィエはパンを一斉に手に取り、かぶり付く。丁度一口目を咀嚼し、口の中で味わってる最中だ。食事を邪魔しないように人気のない山に静寂が訪れた。

「そう言えば、デュークモンにはこんなエピソードがあったんですよ」

「どんなエピソードが？」

食事も一段落して、秀人はオリヴィエの話に食いつく。

「とある現実世界（リアルワールド）に監視任務にスレイプモンが行ったんですけど、最初はデュークモンが行く予定だったみたいなんです。でも、途中でスレイプモンに変更したんです」

「何でですか？」

「後で聞いたら、一度、長期監視任務に行ったときにその現実世界（リアルワールド）での食事代が天文学的数字になったらしいです。そのため、弾かれたみたいなんですよ」

「どれだけ食べたんですか！！！　食べすぎにも程があるでしょうが！！！」

デュークモンの恐ろしいエピソードに、秀人はさっきまでの悲しみすら忘れて突っ込みを入れる。

「フフフ。でも、好きですよ。デュークモンは。そう言えば、秀人さんはどうしてオメガモンが好きなんですか？」

オリヴィエの質問に、秀人は少し考えてから自分の言葉ではっきりと答え始めた。

「それは多分……オメガモンが自分の中の英雄（ヒーロー）だからだと思います。昔も今も」

「英雄（ヒーロー）？　オメガモンに会ったことがあって助けられたのですか？」
驚いて振り向くオリヴィエの顔を見ながら、秀人は淡々と話し続けた。
「いいえ。僕が住んでいた世界では、デジモンがアニメとして放映されている世界なんです。ある映画で、ウォーグレイモンとメタルガルルモンがディアボロモンと戦いましたが、ディアボロモンの無限増殖能力の前にボロボロになり、倒れました。そんな時に、彼らのパートナーと世界中の人々の思いで、彼らは合体してオメガモンになりました。その時の強さはもう凄かったですよ。グレイソードのひと振りで何百体ものディアボロモンを薙ぎ払い、ガルルキャノンの砲撃で残りのディアボロモンを掃討したんですよ」
「へぇ〜　そういう世界もあるんですか。世界は広いですね！！」
その後、オリヴィエと秀人はお互いのデジモンの話に夢中になり、いつしか秀人の心の傷は癒されていった。
秀人とオリヴィエは手をつないだまま立ち上がり、レジャーシートを片付けて、帰りの準備に入った。
秀人とオリヴィエが帰り道の山中を歩いている最中、突然、目の前に光弾を撃ち込まれた。
『！？』
突然の攻撃に戸惑う秀人とオリヴィエだったが、次々と撃ち込まれる光弾をかわしていく。
攻撃が止んだのを確認したオリヴィエは秀人をかばうようにして立ちながら見えない敵に向かって声を上げる。

「誰ですか！！」

「（この感じは……）まさか……あいつか？」

秀人は以前、自分が感じた気配と同じ物を感じて、表情を引き締める。

「フフフ……」

何者かの高笑いが響くと同時に、その声の主は姿を現したが、その姿に秀人は驚愕せざるを得なかった。

そのデジモンは、一つ目で、右手がバンチョーレオモンを模していて、左手がヴァロドゥルモンを模している篭手を装備した、細身の騎士のような姿をした特異型デジモンーカオスモン：ヴァロドゥルアームだった。

体の一部が違えど、その姿はかつてオメガモンこと秀人を４度に渡り苦しめた強敵―カオスモンだった。

「カオスモン！？　だが、その腕は！！」

「覚えてくれたのか。嬉しい限りだ。だが、私はカオスモン：ヴァロドゥルアーム。お前が以前戦ったカオスモンのデータと人格を引き継いた転生体とも言うべき存在。目的はお前の抹殺だ」

「秀人さん！！　この人とお知り合いなのですか！？」

「ああ。忌々しいことに。何度も戦い、ようやく倒せた強敵だ」

秀人はオリヴィエの質問に、表情を苦く歪めながら答える。

秀人の脳裏には、４度に渡るカオスモンとの死闘が蘇っている。

「フン。ミレニアモンの情報だと、今のお前は戦うことよりも進化することでさえも不可能なごみくずと成り果てたようだな。おとなしくここで死んだほうが楽になると思うが？」

「確かにここで死ねば楽になれるかもしれない。だが……僕は自分のことを必要としている人々のために死ぬことは許されない！！」

「秀人さん。ここは私に任せて下さい」

オリヴィエは秀人をかばうように前に立つと、秀人に逃げるように促した。

「でも！！」

「本来ならば、ここは秀人さんが戦うべき相手。でも、今の秀人さんは戦えません。そんな秀人さんを守るのが私の仕事です」

オリヴィエがそう言うと、紅色に光り輝いているデジヴァイス01を胸に押し付け、自身の体をデータ化させながら究極進化を行う。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエボリューション！！」

オリヴィエの体から光が大量に発生し、それは巨大な繭の形を形成していく。

そして、光の繭が消失した後には、背中に赤いマントを棚引かせた白き鎧に全身を覆い包み、右手に巨大な槍－聖槍『グラム』を、左手に聖盾『イージス』を装備した聖騎士型デジモンーデュークモ

ンが姿を現した。

「かっこいい……」

デュークモンの姿を見た秀人は不覚にも感嘆の声を漏らしてしまった。

自分の好きなデジモントップ3に君臨していることから好きなデジモンなのだが、近くで見るとどうしてかっこいいのかと考えるが、いまはそう悠長にしていられない。

「お願いします！！　デュークモン……オリヴィエさん！！」

お互いに睨み合っているデュークモンとカオスモン：ヴァロドゥルアームを見て、秀人は急いでその場から走り去った。

「これで心置きなく戦えるだろう……　行くぞ」

デュークモンとカオスモン：ヴァロドゥルアームは同時に上空に浮かび上がると、カオスモン：ヴァロドゥルアームは右腕を掲げて、ＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを射出する。

カオスモン：ヴァロドゥルアームは右腕のＢＡＮ－ＴＹＯブレイドを構えて、デュークモンもグラムの矛先をカオスモン：ヴァロドゥルアームに向けて、互いに息が詰まるほどの睨み合いを行い、同時に相手に向かって突撃する。

「ウオオォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！！」

「ハアァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！」

カオスモン：ヴァロドゥルアームの右腕のＢＡＮ－ＴＹＯブレイ

ドの剣先と、デュークモンのグラムの矛先が激突しあった瞬間に、地面が爆裂するほどの衝撃波が辺りに巻き起こった。

「ミレニアモンめ……　何で力を失った僕を狙うんだ？　実験台にでも使うつもりか？」

秀人は、カオスモン：ヴァロドゥルアームをデュークモンが防いでいる間に、城に向かって全力で走っている。

力を失い、役たたずになっても尚、自分を狙うミレニアモンの狙いが分からない秀人は苛立ったような声を出す。

「また会ったな。オメガモン……藤本秀人」

「そこをどいてもらおう。もう、僕はただの人間だ！！」

秀人の目の前に黒いローブに全身を包んだ男―統制者が現れた。

秀人はどくように声を上げるが、統制者は秀人の言うことに素直に従うほど甘くはなかった。

「可哀相に。よほど酷い目に遭ったんだな」

まるで他人事のように言い放つ統制者を、秀人は憎しみを含んだ目で睨みつける。

その視線に統制者は圧倒されたのか一歩後退した。

「全部……お前の陰謀じゃないか……」

「私の？」

秀人の言葉に統制者は頷きながら両手を広げて冗談っぽく答える。
秀人はその統制者の態度に嫌悪感を覚えた。
「お前が僕を暗黒進化させるように仕組んだ。そして、エイリアス戦争をアルカディモンの飼育に使っている。だから僕は防ぎに来たんだ！！」
「やはりそうか。だいたいそうだとは思ってはいたが……　それなら会わせてやろう」
「何？」
「お前の好きなオメガモンに会わせてやろう、と私は言ったのだ」
耳元で囁く統制者の言葉に秀人は驚きを隠せずに、思わず統制者の顔をまじまじと見た。
秀人の行動に答えるようにニヤリと笑った統制者が姿を消すと、そこにはオメガモンが立っていた。
「オメガモン……」
嬉しそうに呼びかける秀人を見たオメガモンは、無言でその場からゆっくりと飛び立っていった。
「オメガモン！」
それを見た秀人も駆け出してオメガモンの後を追った。

（何？　あのオメガモンは？　まるで何者かが秀人さんを罠にかけているような……）

戦いの最中、何処かに向かって飛んでいるオメガモンを見て、デュークモンは疑問に感じたが、すぐに戦いに立ち返った。

「オーロラブラスター！！」

「ムゥッ！！」

カオスモン：ヴァロドゥルアームは左腕のヴァロドゥルアームから浄化の光弾―オーロラブラスターを撃ち出すが、デュークモンは左手に持っているイージスで防いだ。

デュークモンはイージスを前に突き出して、カオスモン：ヴァロドゥルアームに向かって突撃を開始した。

それと共にグラムに聖なるエネルギーを集中させながら、カオスモン：ヴァロドゥルアームに向かって突き出した。

「ロイヤルセーバー！！」

「グハッ！！」

カオスモン：ヴァロドゥルアームは苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ばされる。

戦いはデュークモンの優勢であったが、これは当然と言えば当然のことである。

オメガモンとは違い、デュークモンはロイヤルナイツの一員として、様々な戦いをくぐり抜けてきたからだ。

デュークモンは次々と攻撃を繰り出して、オメガモンが苦戦した

カオスモン：ヴァロドゥルアームを圧倒していった。

一方、オメガモンを追いかけていた秀人の前に扉が現れて、扉を開けると向こう側に秀人の部屋があり、オメガモンが待っていた。

「ここは僕の部屋じゃないか……　随分とよく出来ているな……」

「そうだ。君の部屋だ。君は戦いから開放されたんだ。いつもの日常に戻るべきだ。朝起きて食事をして、大学へ行って勉強して、友人と語り合い、家に帰り、家族と笑い合い、そして、一日を終える。素晴らしい日常だよ。私は君が羨ましい」

「……そうだ。僕には戦いは似合わなかったんだ。ただ普通の日常を生きるだけで幸せだったんだ……」

少し考えた末、秀人は笑顔で答えると、ゆっくりと扉に向かって歩み出す。

「秀人君！　駄目だ！！　闇に囚われちゃ駄目だ！！　君はこの戦いの運命を変えるんじゃなかったのか！？」

そこに、秀人のことを心配して来たメディーバルデュークモンこと博也が現れるが、そこに統制者が現れる。

「メディーバルデュークモン、邪魔をしない方がいいぞ。全くお前は野暮な奴だな。他人の幸せを奪う権利などいつの世も何処の世界にも存在しないのに……」

「貴様……　秀人君に何故こうまでもこだわる？」

メディーバルデュークモンの質問に答えるように統制者は高くジャンプして、メディーバルデュークモンの背後に回りこんで殴りかかってきたが、メディーバルデュークモンはそれに反応して右手で攻撃を受け止めると、右ハイキックで統制者を蹴り飛ばす。

「グゥ！！　なかなかやるな……　旋風将よ」

蹴り飛ばされながらも余裕の表情の統制者を見たメディーバルデュークモンは統制者を気にしつつも、秀人の方に目を向ける。

扉の前までやって来たところで歩みを止めていた秀人に向かってメディーバルデュークモンが叫ぶ。

「駄目だ秀人君！！　其処に入れば二度と君は戻れない！！」

統制者はそんなメディーバルデュークモンの言葉を遮ると、メディーバルデュークモンに声を掛ける。

「もう奴を楽にしてやれ」

「何だと？」

メディーバルデュークモンの問いに統制者はメディーバルデュークモンに向かって両手を突き出して、闇の光弾を撃ち出した。

闇の光弾を背中に羽織っているマントで防御するメディーバルデュークモンに向かって統制者が語りかける。

「お前は秀人の中に自分の姿を重ねていただけではないのか？　秀

人にはこの戦いは苦痛その物でしかないのだ。闇に染まり、相手を痛めつけることに快感を感じて、絶望する。だったら、　過去の世界で昔の日常を生きる方が秀人にとって幸せではないのか？」

メディーバルデュークモンは背中にマントを戻すと、統制者の言葉に反論する。

「私も何度も普通の生活に戻りたいと思った！！　でも、自分の運命に打ち勝つこともまた生きることでは無いのか？　逃げてばかりの人生など生きている意味が無い！！」

「心配するな。後に残った抜け殻は私が面倒を見る。忠実な操り人形、道具として」

「貴様！！　貴様の思い通りには絶対させない！！」

右手にデュナスを握り締めているメディーバルデュークモンとそれを迎撃する統制者の戦いが始まった。

一方、秀人はいよいよ扉を越えて自分の部屋の中に入ろうとするが、その時、足下から音がした。

疑問に思った秀人が足をどけると、そこには２つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズがあった。

デジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズを拾う秀人は、自分とオメガモンが歩んだ日々を思い出す。

『僕らのウォーゲーム！』で圧倒的な力で何万ものディアボロモンを薙ぎ払うオメガモンを見て、憧れて英雄視するようになった小学生時代の自分。

誕生日プレゼントとして買ってもらったデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズを握り締めて最強で、かつ最高のオメガモンを育てることを決意した自分。
寿命でオメガモンが死んで、まるで自分の大切な人が亡くなったように悲しんだ自分。

「どうした？　秀人」

２つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズをじっと見つめる秀人をオメガモンは不思議そうに見つめる。
秀人は尚もデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズを見て、自分がディアボロモンに襲われて、オメガモンとして生まれ変わり、様々な世界を渡った日々を振り返っている。

『確かに僕達の心にも影が存在している。だが……それは決して君を造った奴らなんかじゃない！！！』

『この力は決して希望を捨てずに諦めずに戦う人々のためにある！！　それに気づけない貴様に私は負けはしない！！』

『でも、僕はそのオメガモンとして戦っています。自分がオメガモンを助けられなかった過去は変えられません。でも、未来は変えることは出来ます。それでも、自分がオメガモンを助けられなかった過去は消えません。だからこそ、僕は戦っているのかな？と思うんです』

「何を迷っている？　ここで暮らせば、誰も君を傷つけないぞ」

脳裏に蘇る戦いの記憶を思い返している秀人に、オメガモンが呼びかける。

秀人はゆっくりと顔を上げて、オメガモンを見ると脳裏に博也とオリヴィエの言葉が蘇る。

『お前には無くても俺にはある。この先、お前に戦いを挑む奴はたくさんいるだろう。中には、自分の望まない戦いも強いられる時もある。俺はそれがほとんどだったからな。だから、お前にもそれを乗り越える強さを持って欲しい』

『私は大切な人を救えませんでした。確かに、大切な人を救えなかったと言う過去は変えられませんが、未来は変える事が出来るかもしれません』

「お前はオメガモンじゃない……」

秀人がオメガモンに向かって声を上げた瞬間、秀人の掌にある２つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ ウィルスバスターズの液晶画面に小さな光が灯る。

「お前はオメガモンの姿をまねした只の人形…… 僕が憧れて、育てて、共に戦ったオメガモンとの思い出を何一つ持っていない！！！」

その光は徐々に光を増していき、メディーバルデュークモンと統制者にも見える程に大きくなっていく。

突然の事態に戸惑う二人は驚愕の声を上げるのが精一杯だった。

「何！？」

「この光は！？」

眩い光に戸惑うオメガモンに対して、２つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズを右手に握った秀人は立ち上がり、心の底から思いを叫んだ。

「僕はただオメガモンの名前や力だけで戦っていたわけじゃない！！　オメガモンの全てと共に戦ってきたんだ！！　そして、これからも戦い続ける！！！」

その瞬間、眩い光がオメガモンと秀人の部屋を包み込みと同時にかき消して、秀人はメディーバルデュークモンと統制者が戦っている現実の森の中に帰ってきた。

秀人の姿を見たメディーバルデュークモンは、笑みを浮かべて頷いて、統制者はすぐにその場から退散した。

秀人はメディーバルデュークモンを見ると、笑顔になった。

メディーバルデュークモンからデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズへと視線を移すと、オリヴィエが言った言葉を噛み締める。

『過去は変えられませんが、未来は変える事が出来るかもしれません。この命が続く限り、私にはまだやれる事があることを感じました』

「ガアァァァァァァァァァーーーーーーーーー！！！！！」

『ッ！！』

その時、森の向こう側からデュークモンの苦痛の叫び声が響いてきた。

それを聞いたメディーバルデュークモンは元の身長まで巨大化す

ると、秀人を乗せて向かい始める。

「ダークロアー！！」

「ムッ！！　セーバーショット！！」

一方、デュークモンとカオスモン：ヴァロドゥルアームが究極進化したアルティメットカオスモンの戦いは、先ほどとは一転してデュークモンは劣勢に立たされていた。

アルティメットカオスモンがダークドラモンを模した腕から撃ち出したダークロアーを左手のイージスで防いだデュークモンは、聖なるエネルギーが集まったグラムを突き出す。

「フン！！　貧弱だな！！」

しかし、アルティメットカオスモンは巨大な腕を振り抜くことでセーバーショットをかき消した。

（駄目ですね……　攻撃が一切通じない……）

デュークモンことオリヴィエはアルティメットカオスモンの強さに驚愕を覚える。

自身の攻撃が効かない防御力、巨体に似合わないスピード、多様な攻撃と七大魔王ですら逃げ出す程のスペックを持っていると感じたからだ。

「レイジ・オブ・ワイバーン！！」

「ギシャァァァーーーーー！！！」

そこにメディーバルデュークモンが到着して、アルティメットカオスモンに向かってレイジ・オブ・ワイバーンを放った。

「グゥッ！！」

僅かにダメージを受けたアルティメットカオスモンは苦痛の声を上げ、デュークモンはメディーバルデュークモンを見つめる。

「援護する」

「かたじけない」

デュークモンとメディーバルデュークモンはお互いにアルティメットカオスモンを見ると同時に突撃を開始する。

『ウオオォォォォォォォォーーーーー！！！』

「フン！！　たかだか一体増えた程度で勝てると思うな！！」

アルティメットカオスモンは巨大な腕でメディーバルデュークモンを捕まえて握りつぶそうとする。

「ブロウクンデストロイ！！」

「させるか！！　ロイヤルセーバー！！」

アルティメットカオスモンがメディーバルデュークモンを巨大な腕で捕まえる直前に、デュークモンがグラムから強烈な一撃―ロイ

ヤルセーバーを放ち、アルティメットカオスモンの巨大な腕にダメージを与える。

「クッ！邪魔をするな！！」

アルティメットカオスモンは巨大な腕に走る痛みに耐えながら腕を振り抜き、デュークモンを追い払った。

その隙にメディーバルデュークモンはアルティメットカオスモンを左右から囲むように移動して、エネルギーを溜めたデュナスから光の波動を撃ち出す。

「ファイナル・クレスト！！」

「そんなモノが効くと思うな！！」

自分に迫るファイナル・クレストに対して、アルティメットカオスモンは今度はバンチョーレオモンを模した腕を振り抜き、先ほどのロイヤルセーバーと同様に攻撃を相殺する。

その隙にアルティメットカオスモンの顔の前にデュークモンは移動して、再度ロイヤルセーバーを放とうとする。

「ロイヤル！！」

「させるか！！ビブロストッ！！」

デュークモンがロイヤルセーバーを繰り出す直前に、アルティメットカオスモンはスレイプモンを模した腕からビブロストを撃ち出した。

「クッ！！」

デュークモンはイージスでビブロストを防ぐと、アルティメットカオスモンと睨み合いを始める。
メディーバルデュークモンはデュークモンの隣に付くと、アルティメットカオスモンを睨む。
その場にいる全員の闘志で凄まじい熱気を誰もが感じるが、誰も逃げる事は無く、全員が睨み合いを始めた。

「デュークモン……メディーバルデュークモン……」

秀人は自分の目の前で、本来ならば自分が倒すべき相手と戦っているデュークモンとメディーバルデュークモンを複雑そうに見つめながら右手に握っているデジモンペンデュラムを見つめる。

「僕がもっと強かったらなぁ……　こんなことにはならずにすんだのに……」

秀人は自分の弱さと愚かさに悔しがりながら戦いを見つめている。
実際の戦況はデュークモンとメディーバルデュークモンが劣勢に立たされている。
やはり、強豪の究極体デジモン４体分の戦闘力は計り知れないということである。

「デジヴァイス無しで戦おうというのか？　秀人」

「統制者……ミレニアモン」

その時、秀人の背後から声が聞こえて、秀人が振り返るとそこに

は統制者が立っていた。
秀人が忌々しそうに声を出すと、統制者は笑みを浮かべながら語りかける。
「あのカオスモンは人間なのかもしれないぞ？　もし、お前が参戦して戦えば、カオスモンの命の保証は無い。それでもいいのか？」
統制者の挑発を聞いて秀人は戸惑い、一度右手を降ろしてしまう。
それを見て統制者は再び笑みを浮かべるが、秀人は再び右手を上げた。
「何？　お前、戦う気か？」
予想していない秀人の行動に驚く統制者に関係なく、秀人はデジモンペンデュラムを握る力を強めながら答える。
「ここで僕が迷って何もしなかったら……状況は何も変わらない！！」
「カオスモンの進化が解けるように工夫して攻撃をする！！　そして、人間の姿に戻ったカオスモンを安全な所に運ぶ！！」
決意の揺るがない秀人を見つめる統制者は舌打ちをすると、次の策を考える。
古のデジタルワールドを暴虐と共に支配しながらも、狡猾な知恵者と言われている統制者の由縁であろう。
「考えるようになったな……　しかも、教科書に載るべき模範的な解答……なら、ハッタリは止めるか……」

そう言って、今度は自分の目の前にやって来た統制者を見て、秀人が問いかける。

「ミレニアモン！！　今度は何をするつもりだ！」

「随分と威勢が良くなったな、秀人。だが、これでもお前は進化して戦うと言うのか？」

統制者が横にどくと、自分が討ったはずの天野寧々が立っていた。

「なっ！？　そんな馬鹿な！！」

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「フフフ……マトリクスエヴォリューション」

秀人の驚愕を余所に、寧々の左腕に付けている漆黒のデジヴァイス０１が輝き始めると同時に電子音声が流れて、寧々はデジヴァイス０１を胸に押し付けて、自身の体をデータ化させながら究極進化を行う。

寧々の体から光が大量に発生し、それは巨大な繭の形を形成していく。そして、光の繭が消失した後には、秀人と同じ身長のダークナイトモンが姿を現した。

「ダークナイトモン」

ダークナイトモンは、そのまま全身に力を込めて巨大化すると、秀人とアルティメットカオスモンの間に立ち塞がった。

「うっ……これでは……」

秀人は戸惑いの表情を浮かべてダークナイトモンを見上げると、それを見て統制者が笑う。

「どうした、秀人。早く進化して戦わないのか？　お前の討った憎いダークナイトモンと」

「グゥ……」

自分をじっと見つめるダークナイトモンに秀人は恐怖を感じて、涙を流す。

ダークナイトモンはゆっくりと屈んで両手を差し伸ばしてきた。

「私と共に新時代の覇者になろう……」

そのように優しく語り掛けるダークナイトモンの姿は、いつの間にか寧々の姿に変わっていた。

微笑みかける巨大な寧々は、冷たい表情になると突き放すように異様に低い声で秀人に話しかける。

「貴方のせいで私は死んだのよ。私には、意識不明の妹、琴音を助ける願いがあったのに……　貴方が居なければ私はまだどうにでもなれたのに……」

「ウウッ……　ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……ウワァァァァァァ……」

自分が行なった虐殺への罪悪感、苦しみ、悲しみの余り、秀人は崩れ落ちて、ただ同じ言葉を繰り返し言いながら大粒の涙を零す。

それを見た統制者は上手くいったと確信するが、秀人は自分の右

手に握られているデジモンペンデュラムから光がこぼれているのに気付く。

「オメガモン……　僕は……一人じゃない……！！」

秀人はオーグとメルーガのメッセージに気がつくと、涙を拭いて立ち上がった。

一度目を閉じて、決意と共に目を開いた秀人には迷いはない。

「秀人君？」

秀人の様子を見た巨大な寧々は驚いた。

「秀人、お前、まさか……」

自分の想定外の事態ばかり続くことに戸惑いを隠せない統制者を尻目に、秀人は決意を固めて、口を開いた。

「僕は……寧々さんを……虐殺した」

「そうだ。その彼女と戦うと言うのか？」

統制者の問いに、秀人は言葉を続けることで答える。

「僕は寧々さんを虐殺した！！彼女が抱いている願いも！！　悲しみも！！　全て知ろうとしないで！！」

「だから、私を殺さないで。秀人君……」

甘えた声を出す巨大な寧々の言葉を秀人は遮る。

秀人は罠だと知っていても、自分が殺した相手に悲しみを覚えると同時にこのような手口ばかりを使うミレニアモンを必ず倒すことを心中で誓った。

「でも、寧々さんは死んだんだ！　……今のお前は寧々さんの姿を真似ただけ……彼女の心をお前は持っていない！　死者は、僕たちに何もしてくれない。ただ、僕たちの心の中で生き続けている限り、死んだとは言い切れない！！！」

秀人が言葉を言い終えてデジモンペンデュラムを再び強く握り締めると、デジモンペンデュラムから溢れる光もどんどん強くなっていった。

「止めて！　秀人君！」

秀人の言葉を聞いて身の危険を感じたのか、巨大な寧々は秀人に懇願する。

「秀人！　お前はこれからもさらに憎しみと悲しみを背負う事に耐えられるのか！？　そして、これからも起こる激しい戦いに耐えられると言うのか！？」

自分の計画を絶対に成功させたい統制者は日頃の冷静さをかなぐり捨てたかのように叫ぶが、それが皮肉にも秀人の決意を固めてしまった。

「僕は逃げずに戦う。悲しみも、憎しみも、全て背負いながら。これ以上、誰かの涙を見ないためにも！！」

秀人の決意と共にデジモンペンデュラムから溢れる光は更に強く

なっていき、遂に秀人の全身を包み込んでいく。

「ウオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーー！！！！！！」

秀人は心の底から咆哮を上げると同時に、究極進化を遂げた。

巨大な寧々の前に、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンーオメガモンズワルトが姿を現した。

しかし、その瞑らな瞳はオメガモンと同じく空色の瞳で、秀人が理性を取り戻したことを知らせているようであった。

「何！？　デジヴァイス無しで進化しただと！？　そんなことがあるのか！？」

統制者は目の前の光景に腰を抜かしてしまった。

初めて見た光景には、流石の統制者も呆然とするしか無かった。

「ターミネーション！！！」

オメガモンズワルトは左手のブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手から、英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれたグレイソードを射出させると同時に寧々に向かって振り下ろした。

「秀人くん……　ありがとう……　負けないでね……」

グレイソードの斬撃を喰らった巨大な寧々は哀しく崩れ去り、オメガモンズワルトに激励の言葉を残すと、光の粒となって消えていった。

「寧々さん……　ありがとう……」

光の粒となって消えた寧々に向かって哀しげにお礼を言うオメガモンズワルトは、すぐに表情を切り替えると、アルティメットカオスモンに向かって飛び立って行った。

統制者は忌々しそうに表情を歪めると、その場から退散した。

第１６話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

後編はオメガモンズワルトＶＳアルティメットカオスモンとの戦い、オメガモンの復活、アルティメットカオスモンとの戦いの決着を予定しています。

第17話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

初の前後編です。
思いっきりネタに走っていますが、その辺よろしくお願いします。

第17話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

「喰らえッ！ブロウクン……」

「レイジ・オブ・ワイバーン！！！」

「ギシャァァァァァーーーー！！！」

アルティメットカオスモンがデュークモンを自身の巨大な腕で捕まえようとする直前に、後方に控えていたメディーバルデュークモンが右手に持っているデュナスをアルティメットカオスモンに向けて、デュナスの先端からエネルギー状の飛竜を放った。

「ヌッ！　邪魔をするな！！」

自身に向かって咆哮を上げながら迫り来るレイジ・オブ・ワイバーンに気がついたアルティメットカオスモンは巨大な腕を振り抜くことで、衝撃波を巻き起こしてレイジ・オブ・ワイバーンを相殺した。

その隙にデュークモンはアルティメットカオスモンの背後に移動して、聖なるエネルギーを集中させたグラムを前に突き出しながらセーバーショットを放つ。

「セーバーショット！！」

「その程度の攻撃で私を倒せるとでも思ったら大間違いだ！！」

アルティメットカオスモンは再び巨大な腕を振り抜くことで、先ほどのレイジ・オブ・ワイバーンの時と同様に、セーバーショット

を相殺する。
　その隙に、アルティメットカオスモンの顔の前にメディーバルデュークモンは移動して、全力で聖なるエネルギーを纏ったデュナスを振り抜こうとする。

「ロイヤル！！」

「させるか！！ギガスティックランス！！」

　メディーバルデュークモンがデュナスを振り抜く直前に、アルティメットカオスモンはダークドラモンを模した腕をギガスティックランスに変形して、メディーバルデュークモンに向かって振り抜いた。

「グハッ！！」

　メディーバルデュークモンは苦痛に歪んだ声を上げると、同時にアルティメットカオスモンは巨大な両腕を合わせてメディーバルデュークモンの頭上から攻撃を叩き込む。

「グフッ！！」

　メディーバルデュークモンは苦痛に満ちた咆哮を辺りに響かせながら、地上に落下すると、進化が解けて元の姿である博也に戻った。
　それを目撃したデュークモンはイージスにエネルギーを集めて強く光り輝かさせると、ファイナル・エリシオンを放った。

「メディーバルデュークモン！！　ファイナル・エリシオン！！」

　デュークモンが放ったファイナル・エリシオンは、真っ直ぐにア

ルティメットカオスモンに向かって直進する。
それに対して、アルティメットカオスモンは、即座に全身にエネルギーを溜めて、ウルティマバーストを放った。
「ウルティマバースト！！」
アルティメットカオスモンが放ったウルティマバーストとデュークモンの放ったファイナル・エリシオンは激突し合い、空中で大爆発を引き起こした。
そして、徐々に爆発の影響で発生した煙が薄れていくと、肩で息をしていて、全身の鎧に傷を負ったデュークモンと無傷のアルティメットカオスモンが現れる。
「フン。ロイヤルナイツ所属しているとはいえ、大したこと無いな」
「グゥッ！！」
「さて、これで終わりにしよう……」
アルティメットカオスモンがもう一度全身にエネルギーを溜め込んでウルティマバーストをデュークモンに向かって放とうとする。
デュークモンは自分の持てる全てのエネルギーをイージスに集中させて少しでもダメージを軽減させようとする。
「タァッ！！」
「グァッ！？」
何者かの声が響いた瞬間、アルティメットカオスモンは後頭部に鋭い衝撃を感じて、苦痛の声を上げた。

自分の目の前に姿を現したデジモンを見て、アルティメットカオスモンとデュークモンは驚愕の声を上げる。
そのデジモンは、空色の瞳に、流麗な漆黒の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が黒色のマントを羽織って、右肩には黒色のアーマーをつけ、右手が漆黒の機械狼―ブラックメタルガルルモンの頭部を模した篭手をしていて、左肩には黒色の盾―ブラックシールドΩをつけ、左手が漆黒の竜人―ブラックウォーグレイモンの頭部を模した篭手をした聖騎士型デジモンーオメガモンズワルトだった。
つい先ほど戦場に到着したオメガモンズワルトはアルティメットカオスモンの後頭部に向かって飛び蹴りを繰り出して、ウルティマバーストの妨害をしたのだ。

「なっ、何!?」

「オメガモン!?　まさか……デジヴァイス無しで進化したのか!?」

アルティメットカオスモンとデュークモンの驚愕を余所に、オメガモンズワルトはアルティメットカオスモンを牽制しながらデュークモンに声を掛ける。

「デュークモン。ここはこのオメガモンに任せてもらおう。このアルティメットカオスモンは私が倒すべき相手だ!!!」

「馬鹿を言うな!!　其方一人では勝てる相手ではない!!　このデュークモンには……」

そう言って、デュークモンがアルティメットカオスモンに向かって構えを取ろうとすると、オメガモンズワルトは右腕を軽く振ってガルルキャノンを展開した。

それと共に、ガルルキャノンの照準をデュークモンに向けてデュークモンの言葉を遮った。

「下がれ！！　このままでは貴様が足でまといになる。もう、自分のせいで誰かが傷つくのは見たくない……」

オメガモンズワルトの言葉を聞いたデュークモンは頷くと、地上に降り立った。

これで自分の望んでいた一対一の戦いが出来る。そう感じたオメガモンズワルトはアルティメットカオスモンに向かって力強く構えを取った。

「馬鹿な！？　デジヴァイスの無いエイリアスは進化不可能であるはずだ！！　お前はもう……進化どころか戦うことさえできないはずだ！！！」

「かつての私、そして、今の貴様の力は漆黒の闇より生まれる力だ。それに気付かない限り、貴様に未来は無い！！！」

アルティメットカオスモンの言葉にオメガモンズワルトは既視感を感じながら反論した。

「私の力は混沌だ！！　お前のその減らず口を叩き斬ってやる！！」

オメガモンズワルトがアルティメットカオスモンに向かって突撃を開始すると、アルティメットカオスモンはバンチョーレオモンを模した腕に気合を極限にまで研ぎ澄ませて、オメガモンズワルトに向かって振り抜く。

「フラッシュバンチョーパンチ！！」

「フッ！！」

オメガモンズワルトはフラッシュバンチョーパンチを回避すると、左腕を揚げながら英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれたグレイソードを射出すると、アルティメットカオスモンに向かって振り下ろす。

アルティメットカオスモンはダークドラモンを模した腕をギガスティックランスに変形させて、それを迎撃する。

「ハァアアアアアアアアーーーーーーーーーーーッ！！」

「ウオオォォォォォォォーーーーーーーーーッッッッ！！！！」

オメガモンズワルトはグレイソードを、アルティメットカオスモンはギガスティックランスをお互いに振り抜き合い、激しい剣戟を開始する。

十合ほど撃ちあった時に、アルティメットカオスモンはオメガモンズワルトが予測していたのとは反対の方向からギガスティックランスを振り抜いた。

「ギガスティックランス！！」

「ガハッ！！」

オメガモンズワルトは胸部にダメージを喰らい、苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ばされたが、空中で体勢を立て直すとガルルキャノンから砲撃を撃ち出した。

「ガルルキャノン！！」

「グォッ！？」

アルティメットカオスモンが苦痛の叫び声を上げたのを見たオメガモンズワルトは、直ぐ様突撃して、グレイソードに炎を纏わせながら三回ほどアルティメットカオスモンをグレイソードで斬り付ける。

「グレイソード！！」

「ガァッ！！」

苦痛の叫び声を上げたアルティメットカオスモンに、オメガモンズワルトは更にグレイソードを振り抜く。

「オオォォォォォォォーーーーーーーー！！！」

「グゥ！！　おのれ！！」

アルティメットカオスモンはオメガモンズワルトの攻撃に怒りを覚えて、自身の巨大な腕をオメガモンズワルトに向かって振り抜いた。

「ガァ！！」

オメガモンズワルトが攻撃を喰らって吹き飛ぶと、アルティメットカオスモンはバンチョーレオモンを模した腕を短刀に変えると、オメガモンズワルトに振り下ろす。

「獅子羅王漸！！」

「グレイソード！！」

オメガモンズワルトはグレイソードで男魂を受け止めるが、アルティメットカオスモンはギガスティックランスを振り抜くことで、オメガモンズワルトとの距離を空ける。

「ガァッ！！」

更に、アルティメットカオスモンはバンチョーレオモンを模した拳に燃え上がるほど熱い魂を込めると、バーンバンチョーパンチを繰り出した。

「クッ！！」

オメガモンズワルトは間一髪で両腕に力を込めてバーンバンチョーパンチを受け止めた。

バンチョーレオモンを模した腕を右腕で押さえながら、左腕に装備しているグレイソードで斬り落とそうとグレイソードを掲げる。

「グレイソ……」

「ビブロスト！！」

「グォッ！！」

しかし、それは不味いと考えたアルティメットカオスモンは、スレイプモンを模した腕から灼熱の光矢―ビブロストを撃ち出して、直撃を喰らったオメガモンズワルトを吹き飛ばした。

「グレイソード！！」

体勢を立て直したオメガモンズワルトは、グレイソードを薙ぎ払い、青白い衝撃波を放った。

「グハァ！！」

アルティメットカオスモンがダメージを喰らったのを確認すると、オメガモンズワルトは全身に力を込めて、自分の広範囲に炎の竜巻を発生させてアルティメットカオスモンに向かって放つ。

「オメガストームトルネード！！」

「グガァァァァァァァァーーーー！！！」

自身の巨大な体の至るところに炎の竜巻が衝突したアルティメットカオスモンは、苦痛の叫び声を辺りに響かせる。

「ガルルキャノン！！！」

「ガァァァァァァァァッ！！」

更に、オメガモンズワルトはガルルキャノンから砲撃を連続で撃ち出して、アルティメットカオスモンに確実にダメージを蓄積させていく。

「ハァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーー！！」

「ウオオォォォォォォォーーーーーーーーーー！！！！」

オメガモンズワルトとアルティメットカオスモンは同時に突撃を開始すると、再びお互いの武器を鋭く振り抜き合う剣戟を開始する。

「ガルルキャノン！！」

「ガァッ！！　ひっ、卑怯だぞ！！」

その途中で、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出したオメガモンズワルトをアルティメットカオスモンは非難するが、オメガモンズワルトは気にせずグレイソードを振り抜く。

「小癪な！！　オーロラアンジュレーション！！！」

「ガッ！！ガァァァァァァァァーーーー！！」

オメガモンズワルトの姑息な行為に怒りを覚えたアルティメットカオスモンはヴァロドゥルモンを模した腕から光速の光―オーロラアンジュレーションを撃ち出して、オメガモンズワルトを吹き飛ばす。

「ダークロアー！！」

「グッ！！」

今度はダークドラモンを模した腕からダークロアーを撃ち出して、オメガモンズワルトにダメージを与えると、ギガスティックランスを振り抜き、オメガモンズワルトの胸部に傷を作る。

「グハァ！！」

「ハァアアアアアアアーーーーーーーーーーーー！！！！」
「グワァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」
更に、アルティメットカオスモンは連続でギガスティックランスを振り抜いて、オメガモンズワルトのダメージを蓄積させていく。
「負けるかァァァァァーーーーー！！！！」
オメガモンズワルトはグレイソードを使って、ギガスティックランスの攻撃を防ぎ始める。
辺りにグレイソードとギガスティックランスがぶつかり合う甲高い金属音が響く。
「ブロウクンデストロイ！！」
アルティメットカオスモンは巨大な腕でオメガモンズワルトを捕まえると、オメガモンズワルトを握りつぶそうとする。
「グアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーー！！！！！！」
オメガモンズワルトが苦痛の叫び声を上げると、アルティメットカオスモンはオメガモンズワルトを遠くへ放り投げて、ダークドラモンを模した腕からダークロアーを撃ち出す。
「ダークロアー！！」

「フッ！！　エボルレイ・ジェネレード！！」

オメガモンズワルトは、両手に装備しているブラックメタルガルルモンとブラックウォーグレイモンを模した篭手を使ってダークロアーを全て受け止めて、光に転化させるとアルティメットカオスモンに光エネルギー弾としてエボルレイ・ジェネレード撃ち返す。

「フン！！　男気！！」

アルティメットカオスモンは、自身の巨大な拳とバンチョーレオモンを模した拳をぶつけ合うと、衝撃波を発生させてエボルレイ・ジェネレードを相殺した。

「グレイソード！！」

「グォッ！！」

オメガモンズワルトはアルティメットカオスモンに向かってグレイソードを振るい、青白い衝撃波を放つ。

アルティメットカオスモンが苦痛の声を上げると、オメガモンズワルトはグレイソードを横薙ぎに振るい、ソードレイ・フェザーを撃ち出す。

「ソードレイ・フェザー！！」

「グアッ！！」

更に、グレイソードにエネルギーを溜めてアルティメットカオスモンに向かって突き出して、聖なるエネルギーの衝撃波―オメガショットを放った。

「オメガショット！！」

「ガフッ！！」

苦痛の声を上げたアルティメットカオスモンに向かって、オメガモンズワルトはグレイソードを振り抜く。

「グレイソード！！」

「グヌヌ……　小癪な！！」

アルティメットカオスモンはダメージを受けると、バンチョーレオモンを模した腕に気合を極限にまで研ぎ澄ませて、フラッシュバンチョーパンチを放つ。

「フラッシュバンチョーパンチ！！」

「グワァ！！」

オメガモンズワルトは顔面にフラッシュバンチョーパンチを喰らい、苦痛の叫び声を上げながら吹き飛ばされる。

「何て強さなんでしょう……　秀人さん、一度勝利したと言っていたのに……」

「恐らく、接戦で勝利したんだろう……　ギリギリで……」

オメガモンズワルトの苦戦を見て、心配するオリヴィエと博也は戦おうにも体の状態が未だ万全ではなかった。

「信じよう。オメガモンの勝利を。見ていることしか出来ない俺たちにも何か出来ることがあるはずだ」

「そうですね……」

オリヴィエと博也はオメガモンズワルトの戦いを最後まで見届けようと決意を固める。

（やっぱり強いなぁ……　強豪究極体デジモン４体分のパワーは半端ないよ……）

体勢を立て直したオメガモンズワルトは、肩で息をしながらも闘志を失わず、アルティメットカオスモンに向かって構えを取る。

「ダークロアー！！　ビブロスト！！　オーロラアンジュレーション！！！」

「ウワアァァァァァァァァーーーーー！！！」

アルティメットカオスモンは自身の３本の巨大で、融合しているデジモンを模した腕から次々と攻撃を放つ。

オメガモンズワルトは回避することが出来ずに、苦痛の叫び声を上げながら全ての攻撃の直撃を喰らい、空中に力なく漂う。

「ブロウクンデストロイ！！」

アルティメットカオスモンは巨大な腕で動かないオメガモンズワルトを捕まえると、オメガモンズワルトを握りつぶそうとする。

「グアァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！」

苦痛の叫び声を上げるオメガモンズワルトを、アルティメットカオスモンは力の限り遠くへ放り投げる。

「ダークロアー！！」

「フッ！！」

次々とダークドラモンを模した腕から撃ち出されるダークロアーを、空中で体勢を立て直してから避けたオメガモンズワルトは、ダークドラモンを模した腕に向かってガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「グゥゥゥッ！！」

ガルルキャノンの直撃を喰らったダークドラモンを模した腕を庇うアルティメットカオスモンに向かって、オメガモンズワルトは突撃すると同時にグレイソードを振り抜く。

「グレイソード！！」

「ギガスティックランス！！」

アルティメットカオスモンはギガスティックランスでグレイソードを迎撃して、再び甲高い音が鳴り響く剣戟が始まった。

「グゥッ！！　オーロラアンジュレーション！！！」

「ガハッ！！」

剣戟の途中で、グレイソードの斬撃を喰らったアルティメットカオスモンは、至近距離でオメガモンズワルトに向かってオーロラアンジュレーションを撃ち出して、オメガモンズワルトを吹き飛ばす。

「ギガスティックランス！！」

「グレイソード！！」

オメガモンズワルトに向かって突撃したアルティメットカオスモンは、ギガスティックランスを振り下ろすが、オメガモンズワルトはグレイソードで防御しながらガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「ガハッ！！」

ガルルキャノンが直撃して、苦痛の声を上げたアルティメットカオスモンはギガスティックランスを振り抜いてオメガモンズワルトの胸部を傷つける。

「ギガスティックランス！！」

「ガァッ！！」

「オーディンズブレス！！」

アルティメットカオスモンはスレイプモンを模した腕をオメガモンズワルトに向けて構えて、極寒のブリザードをオメガモンズワルトに放つ。

「グレイソード！！」

オメガモンズワルトはグレイソードに炎を纏わせたまま振り抜き、炎の衝撃波を放つことでオーディンズブレスを相殺する。

オーディンズブレスと炎の衝撃波は互いに激突しあい、巨大な水蒸気と爆発を起こした。

それによって発生した煙の中にオメガモンズワルトは身を隠しながら、ガルルキャノンから砲撃を撃ち出そうとする。

しかし、そうはさせないと言うようにアルティメットカオスモンは自身の巨大な腕を振り抜いて、辺りを覆っていた煙を一気に吹き飛ばす。

「ウオオォォォォォォーーーーーー！！！」

「クソッ！！」

突如として、アルティメットカオスモンが発生させた突風に吹き飛ばされないようにオメガモンズワルトは立ち止まって身構えた。

その隙を逃さないアルティメットカオスモンはオメガモンズワルトに向かって、ギガスティックランスを振り抜く。

「ギガスティックランス！！」

「グゥッ！！」

オメガモンズワルトはギガスティックランスの攻撃に耐え切れず、苦痛の叫び声を上げながら動きを止めてしまった。

「フン。高潔な聖騎士から無様な暗黒騎士に身を堕とした愚か者だな……お前は。いや、デジモン版ルシフェルと言うべきかな。その光……私が全て貰い受ける！！　より、私が強くなるために！！！」

アルティメットカオスモンはオメガモンズワルトの胸部にギガスティックランスを突き刺すと、オメガモンズワルトのエネルギーを吸収し始める。

「グアァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！　ヤメロォォォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

聞くだけでも心が苦しくなりそうな声を上げるオメガモンズワルトに対して、アルティメットカオスモンは高笑いを浮かべた。

ギガスティックランスからオメガモンズワルトのエネルギーが吸収されていく。

「フフフフフッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！　凄い力だ！！　体全体に漲ってくるぞ！！！！」

やがて、オメガモンズワルトのエネルギーを吸収し終えたアルティメットカオスモンはゆっくりとオメガモンズワルトの胸部からギガスティックランスを引き抜くと、オメガモンズワルトを殴り飛ばした。

「フン！！」

力無く吹き飛ばされるオメガモンズワルトに向かって、アルティメットカオスモンは次々と攻撃を撃ち出す。

「ダークロアー！！　ビブロスト！！　オーロラアンジェルーション！！」

アルティメットカオスモンの怒涛の攻撃にオメガシールドを張るだけの力も残されていないオメガモンズワルトは、地上に向かって真っ逆さまに墜落して地面に叩きつけられた。

その強大な衝撃と戦いのダメージにも関わらず、オメガモンズワルトは全身に力を込めて立ち上がろうとしたが、突然、オメガモンズワルトは青色とオレンジ色の光に包まれると、青色とオレンジ色の光が消失するとボロボロに成った秀人が現れて、ゆっくりと地面に倒れ付した。

「ウッ……ァァァ……」

「秀人君！！」

「秀人さん！！」

博也とオリヴィエが秀人の姿を見て、駆け寄って声をかけながら揺り動かすが、秀人は目覚めるそぶりすら見せない。

「フン。そいつはもう目を覚まさない。進化出来ないはずの抜け殻が偶然にも進化出来ただけだ」

アルティメットカオスモンは冷淡に言うと、止めを刺すべく全身に力を溜め始める。
オリヴィエと博也は進化するべく、秀人をかばうように立ちながらデジヴァイスを構える。

（オメガモン……今までずっと憧れてきた……僕には荷が重いのか？　……違う！！）

意識を失っていたはずの秀人は先ほどの決意を思い出して、右掌の中にある二つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズを握りしめる。

（僕は決めたんだ！！　もう逃げない！　全てを背負いながら戦うことを！！　これ以上……誰かの涙を見ないためにも！！）

アルティメットカオスモン、オリヴィエ、博也の見ている中で、秀人はゆっくりと力強く立ち上がっていく。

「進化とは……未来を手に入れるために、今よりも強い自分に変わろうとする人間の想いによって引き起こされるデジモンへの変化……」

秀人は、繋がれていく言葉と共に全身に力と気合が蘇るのを感じる。

「僕は変わる！！」

「僕が僕であり続けるために！！　今も！！　……そして、これか

らも！！　僕は変わり続ける！！」

秀人が言葉を言い終えた瞬間、秀人の右掌の中にある二つのデジモンペンデュラムｖｅｒ．ＺＥＲＯ　ウィルスバスターズの液晶画面に光が灯り、それを見た秀人が見ると、デジモンペンデュラムは僅かに宙に浮かび上がる。

『そうだ、秀人！！　君は最後まで諦めちゃいけない！！』

『負けるな秀人！！僕達の心を秀人……　君に託す！！』

オーグとメルーガが言葉を言い終えた瞬間、二つのデジモンペンデュラムは光り輝き、そのまま、白亜のリングーホーリーリングへと形を変えた。

それと共に、自分のポケットが光り輝いていることに気がついた秀人が中身を見ると、砕け散ったデジヴァイス０１も光り輝き、元の形へと再構築されて、宙に浮かんでホーリーリングと融合した。

ホーリーリングは白い刀身の部分にデジモン文字で『ｉｎｉｔｉａｌｉｚｅ（初期化）』と書かれた長剣―オメガブレードに姿を変えると、秀人の胸の前にまで降りてきて、再び光に包まれて姿を変える。

そして、秀人の右掌には、金色の縁どりに、ボディが白銀の秀人専用の新デジヴァイスであるディーアークがゆっくりと舞い降りた。

「これが……僕の新しい力……？」

『秀人……私も君の御陰でオメガモンに進化することが出来た……共に戦おう！！』

「ああ！！　オメガモン……　行くぞ！！！」

『応！！』

オーグとメルーガのジョグレス進化したオメガモンと思いを一つにした秀人のディーアークが光り輝き、秀人はディーアークを胸に当てながら自身の体から白銀の光を発生させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューション！！」

ディーアークから電子音声が響き、秀人は叫びながら白銀の光に包まれて、光が収まると、其処にはオメガモンズワルトが立っている。

「新しいデジヴァイス……ってディーアークか……　確かにあれは便利だよな……」

「何だか……彼らを見ていると、お互いを信じ合っているように思えますね」

オメガモンズワルトの姿を見たオリヴィエと博也は心から安堵の表情を浮かべて、オメガモンズワルトの姿を見続けるが、アルティメットカオスモンは、嘲りの笑みをオメガモンズワルトに向ける。

「フン！新たなデジヴァイスで進化出来たようだが、所詮、お前は脆弱な暗黒騎士に過ぎない。すぐに楽にしてやる！！　ウルティマバースト！！」

アルティメットカオスモンはそんなオメガモンズワルトに向けて、

ウルティマバーストを放ち、直撃を喰らい、爆発に包まれるオメガモンズワルトを見て笑い声を上げた。

「他愛も無い……」

そう呟いたアルティメットカオスモンだが、オメガモンズワルトを覆っていた爆発が急速に収束していくのを見て、表情を変えた。

「何！？」

オメガモンズワルトは左手の英デジモン文字で『ＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ』と刻まれたグレイソードの剣先をアルティメットカオスモンに向けて言い放つ。

今、オメガモンズワルトはターミネーションを発動させることでウルティマバーストを終結させたのだ。

「悪いな、これは運命だ。私が本当の私に戻るための。今の一撃で、私は忌まわしき姿を終結することが出来るようになった。オメガモンズワルト！！　シャイニングエボリューション！！」

オメガモンズワルトがそう叫ぶと胸の紅い宝玉のような物が光り輝き、オメガモンズワルトは眩い光に包まれた。

眩い光が消えた後には、流麗な白銀の鎧に身を包み、背中に内側が赤色で外側が白色のマントを羽織って、右肩には蒼色と金色のアーマーをつけ、右手が蒼色の機械狼―メタルガルルモンの頭部を模した篭手を装備していて、左肩には内側が黄金で外側が赤色の盾―ブレイブシールドΩを装備し、左手が黄金の竜人―ウォーグレイモンの頭部を模した篭手を装備した聖騎士型デジモンが立っている。

その聖騎士型デジモンの名前は、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが人々の平和を願う思いによって融合した究極体を越えた合

体究極体であり、最強の称号であるロイヤルナイツに名を連ねていて、最強のデジモンの一角として誉れ高い聖騎士型デジモンーオメガモンだった。
　オメガモンは一時的な姿であったオメガモンズワルトから、真の姿であるオメガモンへと究極進化を遂げたのだ。

「オメガモン！！」

　オメガモンは自身の名前を叫ぶと、力強くアルティメットカオスモンに向かって構えを取る。
　オメガモンの姿を見たオリヴィエと博也は、喜びながらホッと胸をなで下ろした。

「おのれ……　私の技を自分のために使うとは……　何処までも脆弱な奴だな！！　お前は！！」

「フン。つい先ほどまで私を散々痛めつけていた分、ここでしっかり払ってもらおう」

　怒りの声を上げるアルティメットカオスモンとは対照的に、オメガモンは腕組みをしながら冷静に答える。
　しかし、オメガモンの瞑らな瞳には燃えるような闘志が確かに存在している。

「貴様をもう二度と戦えないようにしてやる！！」

「悪いが、私は一度勝利した相手に負けるつもりは毛頭ない！！」

　アルティメットカオスモンは怒りの声を上げながら、オメガモンに向かってダークドラモンを模した巨大な腕を向けた。

それと同時に、オメガモンも右腕を軽く振るうと、メタルガルルモンを模した篭手の口部分からガルルキャノンを展開して、アルティメットカオスモンに構えた。
そして、二体のデジモンは同時に相手に向かって必殺技を撃ち込む。

「ダークロアー！！！」

「ガルルキャノン！！！」

二体のデジモンが同時に放った必殺技は、二体の中心でぶつかり合うと、大爆発を起こした。
しかし、爆発の衝撃は全てアルティメットカオスモンの方へと流れて来て、アルティメットカオスモンは慌てて爆発の衝撃に耐えるが、その間にオメガモンは縮地法を使うことで、一瞬でアルティメットカオスモンとの間合いを詰めた。

「グレイソード！！」

オメガモンはアルティメットカオスモンに向かって突撃しながら左腕を軽く振って、左手のウォーグレイモンを模した篭手の口部分からデジモン文字で『オールデリート』と刻まれたグレイソードを射出した。
それと共に、駆け抜けざまにグレイソードを振り抜いて、アルティメットカオスモンのバンチョーレオモンを模した腕を斬り落とした。

「ガァァァァァァァァッ！！」

自身の巨大な腕の一本を斬り落とされた痛みからアルティメット

カオスモンは、苦痛に満ちた咆哮を辺りに響かせた。
痛みから立ち直ったアルティメットカオスモンは、ヴァロドゥルモンを模した腕からオーロラアンジュレーションを撃ち出す。
「オーロラアンジュレーション！！」
オーロラアンジュレーションがオメガモンのいる地点に直撃すると、地面は爆裂したように吹き飛び、巨大な穴が空いた。
「やはり脆弱だな……」
アルティメットカオスモンがオメガモンを嘲笑ったその時、アルティメットカオスモンの背後に回り込んでいたオメガモンの声が辺りに響く。
「脆弱、脆弱とうるさいぞ、アルティメットカオスモン」
「何？」
アルティメットカオスモンが背後を振り返ると、其処には金色に輝いているグレイソードを振り上げているオメガモンの姿があった。
オメガモンのまるで瞬間移動したかのようなスピードにオリヴィエと博也は驚愕する。
「今の……見えましたか？」
「いや……　速すぎて全然追えなかった……　まるで、光の速さで移動したみたいだ……」
「喰らえ！！　オメガソード！！」

オメガモンが金色に輝いているグレイソードをアルティメットカオスモンに向けて振り抜くと、グレイソードから金色の光の奔流が放たれた。

「ガッ！！ガアァァァァァァァーーーー！！」

金色の光の奔流はアルティメットカオスモンのヴァロドゥルモンを模した腕を吹き飛ばすどころか、アルティメットカオスモンに直撃してダメージを負わせた。

「グゥッ！！　この私の腕を吹き飛ばしたことを褒めてやろう！！だが、それまでだ！！　オーディンズ……」

「グレイソード！！」

アルティメットカオスモンがスレイプモンを模した腕からオーディンズブレスを放とうとする直前に、オメガモンは跳躍してグレイソードでスレイプモンを模した腕を斬り落とした。

「グガアァァァァァァァーーーーー！！！！！」

スレイプモンを模した腕を斬り落とされて、苦しみの声を上げるアルティメットカオスモンに向かって、オメガモンはガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「クッ！！」

自身に向かって迫り来るガルルキャノンに対して、アルティメットカオスモンは巨大な腕を振り抜く事で発生した衝撃波で相殺した。

「貫った！！　グレイソード！！」

衝撃波が止むと同時に、オメガモンはグレイソードでダークドラモンを模した腕を斬り落とした。

「ガアァァァァァァァァーーーーー！！！！！！」

自分の腕が残り二本になった事に焦りを覚えながらも、アルティメットカオスモンは腕を斬り落とされた苦痛に苦しむが、構えを取っているオメガモンを見ると、全身に力を溜め始める。

体から満ち溢れている抑え込む事の出来ず、成長期デジモン以下が近づくことのできないエネルギーがアルティメットカオスモンの全身に集束されていくのが、オメガモンだけでなく見ているオリヴィエと博也にも伝わる。

それに挑むとなると、自分最大の力で応えなければいけないと思いながら、オメガモンは左腕のグレイソードに力を込めていく。

怒りに燃えているアルティメットカオスモンは更に全身に力を溜めて、オメガモンはグレイソードにエネルギーを送り続ける。

グレイソードに刻まれている『オールデリート』のデジモン文字が下から順番に光り輝いていく。

そして、お互いにエネルギーのチャージが完了した瞬間、アルティメットカオスモンは全身に力を溜めて、必勝の笑みを浮かべながら力を開放する。

「これで最後だ！！　ウルティマバースト！！！」

アルティメットカオスモンが力を開放した瞬間、物凄いエネルギ

ーの奔流がオメガモンに向かって直進する。
それに対して、オメガモンはグレイソードの剣先を前に突き出しながら物凄いエネルギーの奔流に向かって突撃を開始すると、グレイソードの、いや、自分の胴体であるオメガブレードの力を開放する。

「オメガブレードッ！！」

その瞬間、オメガモンのグレイソードはオメガブレードとは少し違う『オールデリート』と刻まれている白い大剣に変化した。

「そっ、そんな馬鹿なことがあってたまるか！！！」

「えっ！？　はっ、反則ですよ……　クオ・ヴァディスとどちらが凄いのでしょう……」

「ハハハ……　本当に凄い物を見ると、笑いしかないのは本当だな……」

アルティメットカオスモンは自身の目の前の光景に悲鳴のような叫びを上げ、オリヴィエは呆然となり、博也は笑うだけで精一杯である。
物凄いエネルギーの奔流をグレイソードで切り裂きながら真っ直ぐに進み続けるオメガモンのオメガブレードに触れている箇所から、物凄いエネルギーの奔流は発動される時の溜めておいたエネルギーへと初期化されていく。
アルティメットカオスモンはオメガモンの姿に恐怖を覚えるが、時すでに遅し。
オメガモンはアルティメットカオスモンの様子に構わず進み続けて、遂にアルティメットカオスモンの目の前に現れる。

「これで終結させる！！！」

オメガモンはアルティメットカオスモンの前に現れると同時に、オメガブレードを振り下ろして、アルティメットカオスモンに致命傷を負わせる。

「グアァァァァァァァァァァーーーーー！！！ば、馬鹿な！！」

苦痛に満ちた叫びを響かせたアルティメットカオスモンに追い打ちとばかりに、オメガモンは両腕を下方で組んで、胸の前で開き、エネルギーを溜めると、それを天高く広げ、ガルルキャノンの砲口をアルティメットカオスモンに向けた。

その瞬間、ガルルキャノンからシャイニングレイ・シュトロームが撃ち出された。

「シャイニングレイ・シュトローム！！」

「ギギャァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

オメガモンのガルルキャノンから撃ち出されたシャイニングレイ・シュトロームは、アルティメットカオスモンに直撃した。アルティメットカオスモンは断末魔の叫び声を上げながら光の粒子に分解されると、そのまま消滅した。

オメガモンはオリヴィエと博也を見下ろし、それに気付いたオリヴィエと博也もオメガモンを見上げた。

二人と一体はしばらく黙って見つめ合っていたが、やがてオメガモンが屈んで右手を差し出すと、オリヴィエと博也はオメガモンの両肩に乗った。

オメガモンは普段出すスピードよりも遅いスピードで、星が輝く

夜空を駆けていった。

アインハルトと話した公園のベンチに座っている秀人は、右手に持っているディーアークを手に、ダークナイトモンを虐殺してからアルティメットカオスモンを倒した時までのことを振り返っていた。

（僕はオメガモンになってからいつの間にか生きることの苦しみを忘れていた……　この苦しみはきっと……生きている証なんだ……もう僕は迷わないで歩いていける……）

「秀人君！！」

そこにアインハルトが来て、ベンチに座っている秀人に声をかける。

「良かった～　無事で。なかなか帰って来ないから心配していたのよ……」

「ごめんね。少し辛いことがあって……」

そう言うと、秀人は自嘲気味に笑った。アインハルトは秀人を抱きしめて、頭を撫でる。

「そう……　一人脱落したからこれであと6人だって」

「そうか。ねぇ、アインハルト」

「何？」

首をかしげるアインハルトに、秀人は間を置いて声を出した。
「生きることは辛いことも悲しいこともたくさんあるけど、その分楽しいこともある。だから、どんなに無様でも自分らしく生きれるようになりたいね」
「そうね。ねぇ、秀人君。私、また美味しいレストラン見つけたけど、どう？」
「おお、楽しみだ！！」
そう言うと、アインハルトと秀人は手をつないでそのレストランへと向かい始めた。
広い夜空の星を見ながら、秀人はポケットの中に入っているディーアークに触れながら考える。
（過去を変える事は出来ないけれど……未来は変える事が出来るかもしれないから、これから訪れる世界を僕が守る。僕は迷いを捨て、この戦いを続ける事を選んだのだから。様々なデジモンと戦う事を。それが僕がオメガモンとして出来る精一杯の使命なのだから）
そう心の中で呟く秀人の顔には、晴れ晴れとしながらも、確かな覚悟と決意があった。
その顔を見て、アインハルトは内心で自分の抱いている感情と秀人の感情にずれが生じているのを感じたが、割り切った。
だが、この時別の場所で繰り広げられているブラックウォーグレイモンXとドルゴラモンの戦いでは、ある一つの波乱が起きていることを、まだ誰も知る者はいなかった。

取り分け、そのブラックウォーグレイモンXと深い関わりのある秀人ことオメガモンには重要な事であるにも関わらず……

第17話　エイリアス戦争の章　新たなる光！！　全てを初期化する大剣！！

秀人のディーアーク設定

秀人が持つディーアークは他のディーアークと違って、秀人をオメガモンに進化させる事が出来る。
デジモンの全てのデータが登録されているので、戦闘の時に敵対したデジモンの情報を知る事が出来る。
また、通信も出来る上に、デジモンを探すレーダー、自分のいる位置や建物を探せるＧＰＳの機能もついている優れ物。

次回予告

統制者の指示で集まった5人のエイリアスに、ある事実が告げられる。
その後で行われた交流会で、オメガモン達は己の願いについて語り合う。
そこで明かされるブラックウォーグレイモンＸの正体と戦いにこだわる理由。
それを知ったオメガモンは？
次回、デジモンアドベンチャー　Ωテイマー ＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～
驚愕の事実！！　ブラックウォーグレイモンＸの正体！！
聖騎士は知る。漆黒の竜機人の正体と真の実力を。

第１８話　驚愕の事実！！　ブラックウォーグレイモンＸの正体！！（前書き）

私生活と構想がまとまらず更新が遅れてすみませんでした。
これからも週一投稿を目指すのでよろしくお願いします。

第１８話　驚愕の事実！！　ブラックウォーグレイモンＸの正体！！

鳴海市の隣にある石山町から更に東へと抜けて、市街の光を受けながら延々と存在している国道線の行く手に待っているのは、未だ開発の及ばない深い山林である。

道幅は二車線あるものの、街灯が疎らな路上に行き交う車の姿は無い。午後十時の国道は、静寂の中に包まれている。

そんな国道で向かい合っている人影が存在している。

一人は、黒いライダースジャケットに身を包み、ウォレットチェーンの付いたジーパンを履いている１８歳の青年―藤城拓海ことドルゴラモンであった。

もう一人は、漆黒のロングコートに身を包んだ２０歳の青年―九能達也ことブラックウォーグレイモンＸだった。

「やれやれ。ラーメンを食べた帰りに戦うことになるとは……　楽しそうだからいいんだけど」

「フン。食後の軽い運動だと思えばどうとでもなる」

鳴海市から隣の石山町へとバスを乗り継いで、人気のラーメン店である『ラーメン吉田』で一番人気のチャーシューメンを餃子と一緒に頼んで食べた帰りに、達也に会ってここまで来た拓海は自分の不運を呪った。

一方の達也は、鳴海市随一の中華料理店『王龍』で食事をした帰りだった。

「まぁ、いい。ダークナイトモンをオメガモンが倒したから、残りあと６人。次に脱落するのは俺か？　それともお前か？」

「ああ。あのオメガモンは俺の獲物だ。誰にも渡すつもりは無い」
「そうか。だが、俺はそのオメガモンを倒した。お互いにあいつとは決着を付けるのが筋だが、どうもそうはいかないみたいだ」
「悪いが、俺はオメガモンと戦うまでは誰にも負けない」
そう言うと、達也と拓海のデジヴァイス０１から電子音声が響き、二人はデジヴァイス０１を胸に押し付け、自身の体をデータ化させながら究極進化を行う。
《《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》》
『マトリクスエヴォリューション』
発生した光の繭が消失した後には、ドルゴラモンとブラックウォーグレイモンＸが姿を現した。
ドルゴラモンは両拳を握りながら構えを取り、ブラックウォーグレイモンＸは両腕のドラモンキラーを握りながら同じく構えを取る。
「ハアァァァァァァァッ！！」
「オオオオオオオオオオオオッ！！」
ドルゴラモンは両拳に炎を纏わせながら突撃を開始し、ブラックウォーグレイモンＸは背中のバーニアを噴かせながら突撃を開始する。
「ドルインフェルノ！！」

「フン！！」

ドルゴラモンは炎を纏わせている両腕を振り抜くが、ブラックウォーグレイモンXはその軌道を読んで攻撃を避けると、両腕のドラモンキラーを使って攻撃を開始する。

「ドラモンキラーーー！！！」

「クッ！！」

ブラックウォーグレイモンXのドラモンキラーの猛攻撃にドルゴラモンは防戦一方に陥った。

ブラックウォーグレイモンXのドラモンキラーはドラモン族、正確に言えば、竜族に対して絶大な威力を持つ武器なのだ。

ドルゴラモンは獣竜型デジモンであって、元々デジコア内に伝説の生き物“ドラゴン”の強い生命力のデータを持っていたデジモンであるため、ドラモンキラーは天敵なのだ。

ブラックウォーグレイモンXは其処まで考えてドルゴラモンに戦いを挑んだのだ。

最も、それだけで戦うつもりは本人には無いなのだが。

「ハァッ！！」

「セイヤッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが突き出した右腕に装備されているドラモンキラーを右手で受け止めたドルゴラモンは、攻撃を受け流すと左手を添えてブラックウォーグレイモンXを投げ飛ばす。

ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを使い、空中で姿勢を整えて着地する。

「今のは合気道か？」
「ああ。体も小さく、力もなかった俺は合気道を習うことで強さをカバーしていた。これによく救われたことか……」
ドルゴラモンは構えを取りながらブラックウォーグレイモンXを睨む。
ブラックウォーグレイモンXはドルゴラモンが合気道を使えることに驚いたが、その理由を知ると納得したように頷いた。
「面白い」
ニヤリと笑ったブラックウォーグレイモンXは、暗黒の力を両手の間に集中させて、黒いエネルギー球を生み出し、全力でドルゴラモンに向かって投げ付ける。
「ハデスフォース！！！」
「ドルディーン！！」
ブラックウォーグレイモンXが放ったハデスフォースに対して、ドルゴラモンは全身に力を込めて、開放することで破壊の衝撃波―ドルディーンを放った。
ハデスフォースとドルディーンはお互いにぶつかり合い、凄まじい爆発音が響くと共に辺りに煙が渦巻く。
それを確認したブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを噴かせながら、ドルゴラモンに向かって右腕を突き出しながら突進する。

「ドラモンキラーーー！！！」

「ドルイン……」

自身に向かって来るブラックウォーグレイモンXの姿を見たドルゴラモンは右腕に炎を纏わせながらブラックウォーグレイモンXに向かってドルインフェルノを繰り出そうとする。

しかし、その直前に、ブラックウォーグレイモンXの右腕に装備したドラモンキラーの刃がドルゴラモンに向かって射出された。

「（しまった！！　X進化したウォーグレイモンのドラモンキラーは射出可能だった！！）グハァッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの射出したドラモンキラーの刃を胸に受けたドルゴラモンは苦痛に呻き、ブラックウォーグレイモンXはドルゴラモンの目の前に現れると、更にドラモンキラーを射出しようとする。

その直前に苦痛から立ち直ったドルゴラモンはブラックウォーグレイモンXに向かって右ストレートを繰り出す。

「ハァ！！」

「クッ！！」

ドルゴラモンの攻撃を見たブラックウォーグレイモンXは左腕のドラモンキラーで防御すると、使える右手に暗黒のエネルギー球を作り出してドルゴラモンにぶつけた。

「喰らえ！！」

「ガハッッ！！！」

苦痛の叫び声を上げながら後退するドルゴラモンに向かって、ブラックウォーグレイモンXは瞬時に両腕を上げて巨大なエネルギー球を作り上げると、零距離で必殺技を叩き込む。

「暗黒のガイアフォーース！！！」

「ガアァァァァァァァァーーーーーーーー！！！！」

暗黒のガイアフォースを喰らったドルゴラモンは吹き飛ばされて、地面に叩きつけられた。

その時に、物凄い衝撃波が発生した。

「クッ！！　やるものだな」

ダメージを喰らっても尚も、闘志を見せるドルゴラモンにブラックウォーグレイモンXは笑みを浮かべる。

「ドルブラスター！！」

「フン！！」

ドルゴラモンは両掌から火球―ドルブラスターを撃ち出し、ブラックウォーグレイモンXは両手の間にバスケットボール程の大きさの漆黒のエネルギー球を作り出すと、ドルブラスターに向かって投擲して相殺した。

辺りには先ほどと同じように爆音と衝撃波、爆炎が発生するが、それらを気にせず、ドルゴラモンは口から光に包まれた鉄球をブラックウォーグレイモンXに向かって撃ち出した。

「テラバースト！！」

「フッ！！」

ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを噴射しながらテラバーストを避けた。

ドルゴラモンは周りに気を放ち、ブラックウォーグレイモンXを探すが、自分の背中に物凄い衝撃が走るのを感じると、驚愕と苦痛の入り混ざった声を出しながら背後を振り返る。

「ハデスフォース！！」

「ガハッ！？　どっ、何処だ！？」

ドルゴラモンは背後を振り返ったが、其処にブラックウォーグレイモンXがいないことに苛立ちを感じる。

（スピードが上がっているにしても、オメガモンよりは遅いはず。でも、変だ。こんなに普通は上がるものなのか？　いや、まさか……）

苛立ちをかき消して冷静に思考を張り巡らせるドルゴラモンに向かって、無数の漆黒のエネルギー弾が迫り来る。

「この数は……　ドルディーン！！」

ドルゴラモンが全身に力を込めてドルディーンを放つことで無数の漆黒のエネルギー弾を相殺する。

ブラックウォーグレイモンXはその間に作り上げていたハデスフォ

ースをドルゴラモンに向かって投擲する。

「グアッ！！」

ハデスフォースの直撃を喰らったドルゴラモンは、その衝撃に思わず動きを止めてしまい呻くが、ブラックウォーグレイモンXは漆黒の長大な刀身に英デジモン文字で『オールデリート』と刻まれた聖剣―ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを召喚すると、右手に握り締めた。

更に追い討ちを掛けるように、ブラックウォーグレイモンXは聖剣をドルゴラモンに向かって振り下ろす。

「ハァッ！！」

「ガハッ！！」

聖剣の斬撃に苦痛の声を上げたドルゴラモンは後退してブラックウォーグレイモンXとの距離を空けると、炎を纏わせた両拳を地面に叩きつけた。

凄まじい炎は地面を這うようにブラックウォーグレイモンXに迫り来る。

「ドルトレント！！」

「フン！！」

ブラックウォーグレイモンXは聖剣をひと振りさせて発生させた衝撃波でドルトレントを相殺した。

「何！？」

「ウオオオォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを噴射させながら聖剣を両手で握り締めて、ドルゴラモンの横を駆け抜け様に聖剣を一気に振り抜いた。

「ガァッ！！」

それは一瞬の決着だった。
ドルゴラモンは体を横一直線に切り裂かれて、苦しそうに呼吸をする。

「その剣……　オメガブレードか？　何故お前が持っている？」

「……」

「答えないとは随分と嫌な奴だな。まぁ、いい。俺を倒したことを誇って前に進めよ」

ドルゴラモンは最後に笑うと、光の粒子になって消滅した。
ブラックウォーグレイモンXはその様子を最後まで眺め続けると、踵を返して自分の拠点に向かって帰っていった。

「オメガモンの件はどうする？」

「うむ。警告や罰則で済まされる問題ではないな。排除……いやい

や、我々が返り討ちにされそうだな」

同じ頃、鳴海市の郊外に存在する小高い丘の上に位置する鳴海教会の一室にいる統制者とカオスデュークモンはオメガモンについて話し合っていた。

「問題は其処だな。我々が出向くと、オメガモンとメディーバルデュークモンの思う壺。現時点でオメガモンに対抗できるのはブラックウォーグレイモンXのみ」

統制者の考えは最もであった。自分たちが動けば、エイリアス戦争は崩壊するどころか、自分たちの命すら危うい状況に陥ることが目に見えている。

カオスデュークモンは少し考えてから、統制者に向けて一つの提案を切り出した。

「八人目の参加を説明するときに、交流会ならぬ酒宴を開くのはどうだろうか？　お互いの思いをぶつけあって、相容れればそれで良し、相容れなければ戦えばどうにでもなる。お互いにその方が理想的ではないのか？」

「成程。そうすれば、鳴海市ビジネスホテルのコック達に頼んで料理を作ってもらうよう、私が頼もう」

「私は教会に集まるように全員に声をかけてくる」

そう言うと、統制者とカオスデュークモンは同時に動き始めた。

翌日の昼の半ば頃。
教会は招集の狼煙を上げて、オメガモン達に緊急の招集を行った。
教会の内部には、本来ならば、神の愛に満ち溢れているべき場所には思えないほどの重い空気が充満していた。
そして、その教会の主である統制者は、全員の顔を見渡して、全員が招集に来たことを確認した。

（思っていたよりも集まりがいいな……）

招集の信号を出して一時間足らずで集合したエイリアスが全員揃った事に統制者は満足したように頷いた。
しかし、すぐに信者席の一番後ろで規則正しく座っているオメガモンと、そのオメガモンから僅かに離れた場所に同じく規則正しく座っているメディーバルデュークモンの姿に苦々しく表情を歪めた。
統制者が厳かに信者席にいる全員に聞こえるように語り出す。

「単刀直入に話をしよう」

全員の注意が自分に向いたことを確認した統制者は言葉を繋ぐ。

「皆さんに伝えければならない事が在る。先ほど、八人目のエイリアスが参戦するとの情報が入った。だが残念なことに誰なのかが我々にも分からない。もし、彼に会ったらよろしく伝えておいてくれ」

「それだけか？　俺たちをわざわざ呼んでおいてそれは無いだろう？」

ブラックウォーグレイモンXの問いに、統制者は本題とばかりに顔を引き締める。

「ああ、済まない。本題に入ろう。実は、皆さんが悲願を叶える為に行われているエイリアス戦争が今、重大な危機に直面している。一昨日の夜、一人のエイリアスが中立を保っている教会を襲撃した。しかも、そのエイリアスはオメガモンだった」

「何！？」

「ほう」

統制者の言葉を耳にしたスレイプモンは思わず驚愕の声を上げ、ブラックウォーグレイモンXは僅かに感心したような声を上げて統制者を見つめる。

その姿に統制者は内心で笑みを浮かべながら、更に用件を伝え始める。

「オメガモンは数少ない聖杯戦争のルールを破ったのだ。これは赦されざる事であり、皆さん一人一人の敵であるばかりでなく、エイリアス戦争の今後を大きく脅かす危険分子である。よって、私は統制者として非常時に置ける監督権限をここに発動して、エイリアス戦争の暫定的ルールの一時変更を設定する」

「……フフフフフッ！！！　アハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

「……どうした？　オメガモン。何がそんなにおかしい？」

いきなり笑い出したオメガモンの姿を目撃したブラックウォーグレイモンXは疑問の声をオメガモンに投げ掛けるが、オメガモンは答える事無く立ち上がり、統制者を睨みつけながら呟く。

「統制者よ。貴様が私を抹殺する理由は教会を襲撃したという理由だったよな？」

「その通りだ。お前はエイリアス戦争に於いて数少ないルールを破ったのだ。赦しておける事ではない」

「ほう、ルール違反者には罰則か……　なら、貴様も裁かれるべきだろう。こんなルール違反を行っていたんだからな」

オメガモンはそう呟くと共に右手に握っているテープレコーダーを取り出して、統制者と残りのエイリアスの前でスイッチを入れる。

『それなら地獄の苦しみを与えてやろう。自分がどんな人間だったのか、家族も友達も、人間としての全てを奪ってやろう。デジモンの贋物……本当のエイリアスとしての地獄の苦しみを与えよう……』

『だが問題があるぞ。奴は必ずや我々に反抗するだろう。その強大な力はズワルトですら恐れている程だ』

『そのためのブラックデジトロンだ。奴を洗脳して、我々の操り人形にするのだよ』

「んなっ！？」

テープレコーダーから流れた自身の同志であるカオスデュークモンと自分の会話に統制者は目を見開きながら驚愕の声を上げた。

何故、あの会話の内容が記録されたテープレコーダーなどに記録されているのかと統制者は、驚愕と困惑に満ち溢れながらオメガモンを見つめるが、オメガモンは構う事無く統制者に近づき、その首を掴み上げる。

「ガァッ！！」

「あの時貴様らは中立であるはずが、私を実験に使ったな。御陰で死にかけたんだぞ。貴様の言葉通り、貴様ともう一人には罰則が必要らしいな」

「冤罪だ！！　そのような声などの証拠など幾らでも加工して作り上げられる！！」

「なるほど、確かにその通りだ。では、これは如何だ？」

統制者の言葉にオメガモンは納得したように頷きながら左手に持っている小型のビデオカメラの液晶部分を開いて統制者とカオスデュークモンが自分に実験をしている映像を流しだす。

「なっ！？ば、馬鹿な！？」

「あの時、僅かに意識が残っていたからデジヴァイス０１を大いに使わせてもらった。だが、今ではディーアークになったがな」

「アッ……」

もはや、統制者は言葉も出す事が出来なくなってしまった。

全てがオメガモンの策略だと気がついたのだ。でなければ此処まで用意周到に準備をしている筈は無い。更にオメガモンは持っていたビデオカメラをブラックウォーグレイモンＸに渡し、ビデオカメラの映像を見たブラックウォーグレイモンＸも確かに教会の中立などではない一方的なオメガモンへの攻撃に納得したように頷き、険しい視線を統制者に向ける。

「これは完全にルール違反だな。教会の中立とはこのような一人のエイリアスに攻撃を行う事を言うのか？」

そうブラックウォーグレイモンXが問うと、メディーバルデュークモンも同意したように頷く。

「それだけではないぞ。ブラックウォーグレイモンX。其処の統制者は進化出来ないオメガモンを完全な操り人形にするために刺客まで放っていた上に自ら出向いて策を施した。人の心に恐怖を植えつけ弄ぶ、卑劣で薄汚いやり口でな」

「フン。最悪だな。俺たちはこんな奴に従っていたとは……」

「まっ、待て。私が消えたら誰がこのエイリアス戦争を監督するのだ！？」

「私がやろう」

何処かから現れたカオスデュークモンは、その場にいるエイリアスに追い詰められている統制者にゆっくりと残忍さに満ちた視線を向ける。

「待て！！待ってくれ！！」

「待つか。デモンズディザスターーー！！」

「ギャアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！」

カオスデュークモンの右腕に装備されたバルムンクの連打を食ら

った統制者は苦痛に満ちた叫びを上げるが、ギリギリの所でデモンズディザスターから逃れて、そのまま後方に吹き飛び、地面に膝を着いた。
統制者はいつの間にか本来の姿であるミレニアモンに戻っていた。

「ミレニアモン！？」

「オメガモン。貴様は知っていたのか？」

「ああ。だが、話すべきか悩んでいた」

ミレニアモンの姿を見たオメガモン以外の面々は驚愕した。
その様子を目にしたカオスデュークモンは即座にバルムンクを再びミレニアモンに構えながら突進しようとするが、何を想ったか止めてオメガモンに声をかける。

「オメガモン。止めは貴様が」

「わかった」

オメガモンは直ぐ様シャイニングレイ・シュトロームの構えを取ると、ミレニアモンに言い放ってからシャイニングレイ・シュトロームを撃ち出した。

「私の願いはこの戦いが永遠に行われないこと。そのために、ミレニアモン……　お前を倒す！！　シャイニングレイ・シュトローム！！」

「グギャアアアアアアアアアアアアアーーーーーーー！！！」

オメガモンが撃ち出したシャイニングレイ・シュトロームは寸分違わずにミレニアモンに直撃して、統制者は苦痛と恐怖に満ちた叫びを上げながら光の粒子となり、消滅した。

「我が名はカオスデュークモン。たった今から私が統制者だ」

ミレニアモンに代わり、統制者となったカオスデュークモンはオメガモンに向かって深々と頭を下げて謝罪をした。

「すまなかった。オメガモン。このようなことをしてしまって。完全に我々の失態だ」

「過ぎたことなど今更いい。ミレニアモンは自分でルール違反者は罰則すべきだと言っていたな。よって、その罰則は他のエイリアスも納得出来るモノが良いだろう。そうだな、教会のルール違反に対して、今後は完全に我々の戦闘で発生した被害の事後処理だけを行うのはどうだろうか？」

「その話には納得できる。下手な横槍が入らない方がこのデュークモンも戦いやすい」

オメガモンの言葉に同意するようにデュークモンも頷いた。

何しろ今後一切教会から余計な横槍が無くなる上に、被害を気にせず思う存分戦うことが出来るのだ。

「相分かった。今後は今回のようなことが無いように細心の注意を払う。お詫びといっては何だが、この教会の近くにある柳生寺で交流会という名のパーティーを企画している。ビジネスホテルのコック達が腕を振るって作った料理にシャンパン、ワインもある。今日は敵も味方も忘れてゆるりと語り合うのは如何かな？」

「なかなか気が利くではないか。これだけの豪華なデジモンに会えるのは生涯でも一度でもあるかないか。果たしてこの中で誰が願いを叶えるにふさわしいかどうか皆で見定めようではないか」

カオスデュークモンの提案にオメガモンはニヤリと不敵に笑いながら頷いた。

「俺も参加しよう。折角の機会だからな」

「私もだ。運命を変えるヒントになるのかもしれない」

「このデュークモンもだ」

「オメガモンが参加するのなら私も」

後の面々もオメガモンと同様に頷いた。

「決まりだ。行くぞ」

「ああ。楽しみだ」

全員は不敵な笑みを浮かべながら柳生寺へと移動を開始した。

鳴海市に存在する柳生寺と言う名の寺は鎌倉時代から存在する由緒正しき寺である。

本来ならば住職などが暮らし、仏教を学ぶ場所である。辺りがもう夕暮れを越えて夜に差し掛かる時間帯になっても本来は仏道を学

ぶ者が居る筈なのだが、今のその場所はもぬけの殻へと変わり果て、仏教とは全く関係ないモノが多数並べられていた。
一目見て超高級品だと分かるワインやシャンパンや酒の数々に、一流のシェフが作ったと思われる古今東西の料理が所狭しと用意されたテーブルの上に乗せられていたのだ。
その様子をオメガモン達は満足そうに見つめ、カオスデュークモンは満足そうな顔をしながら用意されていた椅子に深く腰掛けていた。

「よし、始めよう」

オメガモンはそう言いながら手に持ったシャンパンの入ったグラスを掲げ、カオスデュークモン、スレイプモン、メディーバルデュークモン、デュークモン、ブラックウォーグレイモンXもオメガモンと同様にグラスを掲げて同時に飲む。

「さて、本題に入るとしよう……私は、願いとは相応しき者の手に渡る定めがあると考える」

カオスデュークモンが厳かな口調でそう告げると、場の空気が重くなった。
オメガモン、スレイプモン、メディーバルデュークモン、デュークモン、ブラックウォーグレイモンXもカオスデュークモンに険しい瞳を向けて、雰囲気が変わったカオスデュークモンを見つめる。
カオスデュークモンの雰囲気に、この場にいる全員が本題に入ったと理解したのだ。そしてそれが正しいと言うようにカオスデュークモンは燃え立つような瞳が細まり、この場にカオスデュークモンを集めた理由を語り出す。

「それを見定めるための答えが、この鳴海市で行われているエイリ

アス戦争だと私は思うのだが……何も見極めるだけならば、剣を交える必要はないはずだろう？デジモン同士、お互いの信念に納得がいったのならば、それで自然と答えが出るはずだ」

「それでこの場に我らを集めたと言う訳か？カオスデュークモン」

「その通りだ。私がその中で一番知りたいことはだな……」

カオスデュークモンはメディーバルデュークモンの質問に答えながら、自分から見て左側の席に座っているデュークモンに瞳を向け、デュークモンもカオスデュークモンの瞳を見つめ返して言葉を繋ぐ。

「誰がどのような願いを持っているかということだ」

「成程な。それなら、このデュークモンは自分の目でここにいる全員の信念を聞くとしよう」

「さて、まずはそれぞれのこの戦いに賭ける願いから聞くとしよう」

「それならば貴様から答えろ、デュークモン」

ブラックウォーグレイモンXの言葉にデュークモンは頷きながら答えると、真剣な表情をしながら自身の願いを告げる。

「このデュークモンの願いは特にこれと言って大したことはない。エイリアスになるまでこのデュークモンはイグドラシルの命令を聞いて動くだけの日々を送っていた。だが、今では自由に動いている。このデュークモンはそれによってたくさんのことを学んだ。今後もまだ見ぬ世界を見続けるつもりだ」

「成程な。自由に動けず不満だったというわけか」

「そういうわけではないが……まぁ、今の生活も悪くはないがやはりロイヤルナイツとしてデジタルワールドの守護も捨てたわけではない。両立出来ればこれにこしたことはないが……」

交流会に参加した誰もが言葉も出す事が出来ずにデュークモンを見つめる。

ロイヤルナイツに所属している高潔な聖騎士であるデュークモンの願いが、自らの“自由”と言う小さな願いだったからだ。

その願いを叶える為にデュークモンはエイリアス戦争に参加しているのだ。

「そうなると、私の願いが一番しょうもないな。私は理由あってオメガモンと同居しているが、オメガモンのことが好きだ。オメガモンと永遠に寄り添うことが私の願いだ」

スレイプモンは顔を赤らめながら自身の願いを言うと、オメガモンは驚愕の表情をした。

「なっ！？　スレイプモン！？　貴様、それが願いだったのか！？」

「そうだ。我が主はお前を愛するがあまり病んでいるからな」

スレイプモンの言葉を聞いたオメガモン以外の面々は呆然となったが、すぐに再起動するとオメガモンを祝うように声をかける。

「流石はオメガモンだ。俺達に出来ないことを平然とやってのけているな。そこに痺れる憧れる！！」

「良かったな、オメガモン。彼女が出来て」

「お祝いに何を贈ろうか？」

「結婚式はいつかな？」

「貴様ら！！！　まだ叶ってもいない願いなのにうるさいぞ！！！」

オメガモンの落とした雷がとても強烈だったのか、その場を静寂が包み込んだ。

「……次は私の番だな」

気まずい空気の中、メディーバルデュークモンは言葉と共に座っていた椅子から立ち上がり、目の前に座っているオメガモンに僅かに視線を向けながら自身の願いを迷う事無く宣言する。

「私は願いに興味は無い。この戦いの運命を変えることにしか興味がないからな」

メディーバルデュークモンはそう自身の願いを迷う事無く、この場に集まった全員に宣言した。

その瞳には迷いは無い。メディーバルデュークモンは宣言通りにこのエイリアス戦争の運命を変える考えなのだ。

「私は運命を変えることができるデジモンの為に戦う。例えその結末で私が死ぬことになろうとも、私は最後まで運命に抗う気だ」

メディーバルデュークモンはそう告げると再び椅子に座ると、ワインを飲み始めた。

その真摯なメディーバルデュークモンの想いに対する反応は様々だった。
オメガモンとスレイプモンはメディーバルデュークモンの決意と信念に笑みを浮かべ、デュークモンは流石は旋風将だと感心するように何度も頷き、ブラックウォーグレイモンXは面白そうに目を細め、カオスデュークモンはワインを飲みながらもメディーバルデュークモンの言葉を聞いて何かを考えていた。
その場にいる誰もがメディーバルデュークモンの願いを侮辱する気はない。

「さて、次はオメガモンの願いを聞くとしよう」

「分かった。あまり大したことは無いが」

オメガモンはそうカオスデュークモンの言葉に答えながら椅子から立ち上がり、この場にいる全員の顔を見渡す。
それぞれの願いを聞きながらも、オメガモンの願いには何の迷いも生まれなかった。

「諸君らに問いたい。このエイリアス戦争は過去に4回行われていることを知っている者は正直に手を挙げよ」

『……』

オメガモンの問いに誰も挙手をしなかった。
オメガモンはカオスデュークモンが知らないことを不思議に思ったが、直ぐ様話を再開した。

「誰もいないのか……　まぁ、いい。私は事前に調べていたから知っていた。さて、本題に入ろう。過去に四度行われたエイリアス戦

争では一人も願いを叶えられない事が伝承として知れ渡っている。何故か？　例え、勝ち残ってもアルカディモンに食べられてしまうのだから」

オメガモンがエイリアス戦争の事実を告げた瞬間、全員が驚愕に満ちた表情をした。

「……オメガモン、もしかして、私の聞き間違いかも知れないが、教会にアルカディモンがいるということでよろしいのか？」

「ああ。知らなかったのか？　一緒に行動していたから知っていると思っていたが」

「いや。別行動をしていたから初めて知った」

カオスデュークモンの反応に納得したオメガモンは、自分の話を続ける。

「過去四度、エイリアスを捕食したアルカディモンは今では究極体だ。私は挑んだがすべての必殺技が通じず、敗北した。私はこのように人の心につけ込んでアルカディモンの飼育に使われているエイリアス戦争の終結のために剣を振るう。そして、今度こそアルカディモンを打ち破って見せる！！」

オメガモンは言い終えると周りの無反応を気にせず着席した。

ブラックウォーグレイモンXは椅子から立ち上がり、この場にいる全員の顔を見渡すと、不屈の闘志を宿しながら自身の願いをこの場に居る全員に聞こえるように宣言する。

「俺の願いは俺の出身のデジタルワールドを救済することだ。願い

で、デジタルワールドの運命を変える」

ブラックウォーグレイモンXが自身の願いを毅然として告げた瞬間、その場は静まり返った。

「……ブラックウォーグレイモンX。このデュークモンの耳が古いせいだと信じたいが……」

ようやく声を上げたデュークモンは明らかに困惑した顔でブラックウォーグレイモンXに質問する。

「其方は今、“運命を変える”と言ったのだな？　それは過去を無かったことにするということでいいのだな？」

「その通りだ。どのような叶わないことでも、このエイリアス戦争に勝ち残れば……」

ブラックウォーグレイモンXが断言しようとすると、デュークモンがそれを遮った。

「……あの……ブラックウォーグレイモンX。其方はオメガモンだったのだな？　『プロジェクト・アーク』で大勢のデジモンを抹殺して、ドルゴラモンとの戦いでX進化して、デクスモンと戦い、アルファモンに負けた……ことでいいのか？」

「そうだ。だから俺は許せないのだ」

デュークモンの反応に苛立ちを覚えて、思わずブラックウォーグレイモンXの声の雰囲気が変わった。

オメガモン達はブラックウォーグレイモンXの正体に驚愕の表情

を作るのがやっとだ。

「だからこそ俺は悔やむ。あの運命を変えたい」

「ブラックウォーグレイモンX。君は正気か？　君は自分の歩んだ人生を否定すると言うのか？」

ブラックウォーグレイモンXの言葉を耳にしたオメガモンはブラックウォーグレイモンXに向かって問う。

「そうだ、俺はあの結末が納得いかない！！」

オメガモンたちの反応に苛立ちを覚えたブラックウォーグレイモンXは、思わず語気を荒らげた。

「俺は自分の使命を果たせなかった。だから、もう一度やり直したいのだ！」

「ちょっと待て。ブラックウォーグレイモンX。お前は自分の信念を否定するのか？」

同じロイヤルナイツに所属しているスレイプモンはブラックウォーグレイモンXの顔を見ながら質問する。

「そうだ。何故尋ねる必要がある？　自分の使命を果たせず、デジタルワールドを救えなかったのだ。それを変えるのはどうして可笑しいことなのだ？」

ブラックウォーグレイモンXの問いに答えたのは、またしてもオメガモンの言葉であった。

「ブラックウォーグレイモンX。君の願いは間違った願いだからだ。死者は蘇らないし、過去は何があっても変えられない。例え、どの様な理由があろうと……それは絶対に許されないことなのだ」

「違う。世界はそのような物を望まない。ロイヤルナイツはデジタルワールドの秩序を守る存在。秩序こそ世界が望んでいるのだ」

「君が過去のやり直しを求めて誰が喜ぶのか？」

怪訝そうな表情をしながら、オメガモンはブラックウォーグレイモンXに尋ねる。

「無論、イグドラシルだ。デジタルワールドにはイグドラシルの秩序が必要なのだ」

「本当にそう思うのか？　それが本当に正しいと君は考えるのか？」

「それこそがロイヤルナイツの役目だ！！」

ブラックウォーグレイモンXが力を込めて言い放つと、慌てた表情になったデュークモンとスレイプモンはお互いに顔を見合わせた。

カオスデュークモンとメディーバルデュークモンはオメガモンとブラックウォーグレイモンXの論争を見ながらワインを飲み、オメガモンとブラックウォーグレイモンXの分の料理を楽しんでいる。

「正しい秩序を全てのデジモンが待ち望んでいる」

「つまり、ロイヤルナイツはその秩序を守るためにあるのか？」

「そうだ。それでこそデジタルワールドの守護を果たしていることになる。デジモン達は我らを通して、法と秩序を知る」

「違うな。ロイヤルナイツの役目はデジタルワールドの守護と共にデジモン達を守ることだ。決してイグドラシルの命令通りに動き、デジモン達を抹殺することではない」

オメガモンは断固として、岩のように堅い声でブラックウォーグレイモンXの言葉を否定する。

「……」

はっきりと断言したオメガモンをブラックウォーグレイモンXは怒りを通り越して鼻白む。

ロイヤルナイツの存在の在り方において、オメガモンとブラックウォーグレイモンXの間にはあまりにも深すぎる溝があった。

片方はイグドラシルのために。もう片方は自分と同じデジモン達のために。

それはお互いに相容れない信念と認識の相違であった。

オメガモンはついに諦めたかのように言葉を続けた。

「ブラックウォーグレイモンX。確かに君の正義と理想は素晴らしい物である。それはイグドラシルもきっと喜んでいただろう。だが、君がイグドラシルの命令で殺したデジモン達は何を思い、死んでいったのか、それを知らないとは言わないよな？」

「何を言って……」

オメガモンだった頃にいたNEWデジタルワールドの丘から見た景色。

その景色が、再びブラックウォーグレイモンXの脳裏に蘇る。

「君はただ独りイグドラシルの法と秩序を守り、守るべきデジモン達を排除したのだ。貴様はロイヤルナイツはデジタルワールドの秩序を守ると言ったな？　デジタルワールドの秩序が通じなかったNEWデジタルワールドでイグドラシルの秩序にこだわって何がある？」

「だからこそ、ロイヤルナイツが必要なのだ。NEWデジタルワールドの秩序のために」

「確かにロイヤルナイツの存在は必要不可欠であることは頭の悪い私でも十分過ぎるほどに分かる。だが、君がいなくなったデジタルワールドで誰が君の存在を求めている？」

「それは……」

オメガモンに言い返せる言葉はブラックウォーグレイモンXにはいくらでもあるはずだった。しかし、それを言おうとすると、かつてNEWデジタルワールドの丘から見た景色が、瞼の裏に蘇る。

累々と果てしなく続くデジモン達の死体。そこで亡くなった全ての命は自分が異分子と見なしたデジモンであり、ほんの少しの違いがあれど、自分と同じデジモンであった。

「ブラックウォーグレイモンX。君が力と盟友を失った理由はただ一つ。貴様は他人を圧倒的な力で捩じ伏せた。しかも、貴様達は悪で自分が正義と言い切り、他人の言い分も、想いも背負おうとすらしない。貴様のしたことはただの虐殺だ」

「黙れ」

オメガモンの言葉にブラックウォーグレイモンXは血走った瞳と共に発した異様に低い声で答えた。
ブラックウォーグレイモンXの周りからどす黒いオーラが立ち始め、オメガモンは不穏な空気を感じた。

「そう言う貴様はどうなんだ？　貴様はさしずめホメオスタシスに言われてこの戦いに参戦したのだろう！？　最初からこの戦いを止めるためだけに！！」

そう言うと、ブラックウォーグレイモンXは右手にＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを召喚すると、剣先をオメガモンに突きつける。
カオスデュークモン達の驚愕を余所にオメガモンはＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガの剣先を見つめながらブラックウォーグレイモンXの問いに答える。

「ああ。否定はしない。確かに、私はホメオスタシスの使命でこの戦いに参戦した。最初はただ使命の通りに戦えばいいと思っていた。だが、ダークナイトモン、天野寧々殿を虐殺し、アルカディモンに敗北し、ミレニアモンの試練を乗り越えた時に私は自分が間違えていたことに気がついた。私は使命で戦っているのではなく、全ての人を、デジモンを守りたいがために戦っていることに」

オメガモンの言葉を聞いたブラックウォーグレイモンXは鼻で笑いながらオメガモンの思いを否定する。

「フン。俺と違い、貴様は贋物のオメガモン。そんな貴様の言うことなど誰が聞くのか？」

ブラックウォーグレイモンXの言葉にオメガモンは反論する。

「そうだな。私はオメガモンではない。所詮は贋物。でも、贋物だからこそ本物になりたい。そう願っている！！　だが、貴様は自分一人では何もしない、何も出来ないくせに上から見下して好き勝手やっている只の子供だ！！　そんな貴様に断じて私は負けはしない！！」

「貴様――――――――！！！」

オメガモンの言葉で頭に血が昇ったブラックウォーグレイモンXは右手に持っているＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガをオメガモンに向かって振り下ろした。

オメガモンは右腕のメタルガルルモンの頭部を模した篭手で受け止め、その際に辺りに火花が散る。

「（言いすぎた……）フン！！」

「クッ！！」

オメガモンは自分の発言に反省しながら右腕に力を込めて振り抜くことでＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを跳ね除けた。

ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを使いながらオメガモンから距離を取って着地する。

「貴様の考えは十分過ぎるほどに分かった。どうやら、我らは相容れないようだな」

「フン。今更気づいたか。ここで決着をつけるか？」

「ああ。アルカディモンを倒す前の準備体操にさせてもらおう」

「フン。面白い。来い。貴様の全てを否定してやる」

ブラックウォーグレイモンXは両手でＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを握り締めながらオメガモンに向かって構えを取る。

「オメガモンだったその実力……見せてもらおう」

オメガモンは左腕を振るうと同時に、ウォーグレイモンの頭部を模した篭手からグレイソードを射出して、ブラックウォーグレイモンXに向かって構える。

「うぉおおおおおっ！！！！」

「ハアァァァァァァァッ！！！！！」

オメガモンとブラックウォーグレイモンXはお互いに視認する事が出来ないスピードで相手に向かって突進して、グレイソードとＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガをぶつけ合い、凄まじい火花を散らしながら剣戟を開始した。

第１８話　驚愕の事実！！　ブラックウォーグレイモンＸの正体！！（後書き）

次回予告

オメガモンとブラックウォーグレイモンＸの戦いが終わり、それぞれが次の行動を考え始める。
アルカディモンに勝つための方法を考えるオメガモンだが、なかなかいい考えが思いつかない。
そんな時、八人目のエイリアスがオメガモンに戦いを挑む！！

次回、デジモンアドベンチャー　ΩテイマーＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

八人目は伝説のエイリアス！？　神速の青竜騎士登場！！

聖騎士と青竜騎士は同盟を結ぶ。超究極体を倒し、戦いに決着をつけるために。

第１９話　八人目は伝説のエイリアス！？　神速の青竜騎士登場！！（前書き）

今回も（？）オメガモンフルボッコ劇場と化していますが、ご了承ください。

某金ぴか王「敗北せずして何が主人公か！？」

第１９話　八人目は伝説のエイリアス！？　神速の青竜騎士登場！！

「ハァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオォォォォォォーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

オメガモンとブラックウォーグレイモンＸはお互いに全力で剣を振るい続け、辺りに甲高い金属音と衝撃波をまき散らしていく。

彼らの内心にある感情はただ一つだけである。

（貴様だけには……負けたくない！！）

次第に徐々にではあるものの、お互いの鎧に傷が入り始めてきた。

ブラックウォーグレイモンＸのオメガモンの力を取り戻す過程で様々な困難や苦難に当たり、それらを打ち破って得た力は決して伊達ではない。

一方のオメガモンもここまで来るのに様々な出来事を経験してきたのもあって一歩も引かない。

「フン！！」

剣戟の途中で、背中のバーニアを噴かしてブラックウォーグレイモンＸはオメガモンから距離を取ると、右手に握っているＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを自身の頭上に放り投げて、素早く両手の間に巨大な黒いエネルギー球を作り上げて、全力でオメガモンに向かって投げつける。

「ハデスフォーーース！！！！」

「オメガシールド！！」

オメガモンはグレイソードを戻した左手でオメガシールドを展開してハデスフォースを防ぎながら、オメガシールドの内部からガルルキャノンをブラックウォーグレイモンXに撃ち出そうとする。

その間にブラックウォーグレイモンXは自身の頭上から落ちて来たZERO－ARMS：オメガを掴み取り、オメガモンに向かって構えを取る。

「ガルルキャ……」

「ドラモンキラー射出！！」

オメガモンの攻撃に気がついたブラックウォーグレイモンXは左腕に装備しているドラモンキラーの爪先の照準をオメガモンに向かって構えて、そのまま爪を射出する。

「そう来ると思っていたぞ！！」

しかし、それを予測していたオメガモンは自分に向かって迫るドラモンキラーの爪に向かってオメガシールドを投げつけて相殺した。

「面白い！！　本来ならば防御の技を攻撃に使うとはな！！」

「咄嗟の判断という奴だ！！」

オメガモンとブラックウォーグレイモンXは同時に突撃すると、剣戟を開始する。

十五合程撃ちあった剣戟の途中で、ブラックウォーグレイモンX

はＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを振り抜き、オメガモンを弾き飛ばそうとするが、オメガモンは両足に力を加えてそれを防いだ。
　そのまま反撃に出たオメガモンは次々とグレイソードを振り抜き、ブラックウォーグレイモンＸを防戦一方に追い込む。

「おのれ！！」

「クッ！！」

　オメガモンの斬撃を弾くと同時に、ブラックウォーグレイモンＸは素早くオメガモンの胴体に向かって蹴りを叩き込むが、オメガモンは両腕を交差させることでブラックウォーグレイモンＸの蹴りを防いだ。

「ダァッ！！」

「グァッ！！」

　オメガモンはガルルキャノンを戻した右拳からブーメランフックをブラックウォーグレイモンＸに向かって繰り出し、ブラックウォーグレイモンＸを吹き飛ばす。

「チィッ！！」

　ブラックウォーグレイモンＸは顎に走る痛みに耐えながらオメガモンに向かってＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガで全力で斬りかかった。

「ハァァァァァァァァァァァーーーーー！！！！」

「グゥッ！！」

ブラックウォーグレイモンXの怒りを込めているかのような一撃をオメガモンはグレイソードで辛うじて防いだが、流石に威力を相殺し切る事が出来ずに背後に押しやられてしまう。

「ウオオォォォォォォォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

「ハァァァァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

オメガモンはグレイソードを装備している左腕に力を込めてブラックウォーグレイモンXを突き飛ばすと、両者は再び激しい剣戟を開始する。

「フン！！」

「クッ！！」

五合程撃ちあって、ブラックウォーグレイモンXはZERO－ARMS：オメガを振り抜くが、オメガモンは間一髪で避けた。

それを見たブラックウォーグレイモンXが更にZERO－ARMS：オメガを振り抜くが、オメガモンはグレイソードで防御する。

『ハァァァァァァァァァァァーーーーーー！！！！！』

その状態のまま両者は鍔迫り合いを開始すると、勝利したのはオメガモンだった。

オメガモンはグレイソードを振り抜き、ブラックウォーグレイモンXを突き飛ばすとガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「フッ！！」

ブラックウォーグレイモンXは素早くZERO－ARMS：オメガをガルルキャノンに向かって振り抜き、ガルルキャノンを四散させた。

「ウオオォォォォォォォォォォーーーーー！！！！」

「フッ！！　タァッ！！」

背中のバーニアを噴射させながら勢いを付けたZERO－ARMS：オメガの斬撃をグレイソードで受け止めたオメガモンは右ミドルキックでブラックウォーグレイモンXを突き飛ばすと、つかさずガルルキャノンから砲撃を撃ち出し、ブラックウォーグレイモンXにダメージを与える。

「グッ！！」

「ガルルキャノン！！」

「ガハッ！！」

ブラックウォーグレイモンXが着地すると、オメガモンはグレイソードをブラックウォーグレイモンXに向かって構えた。

「ウオォォォォォォォーーーーーーー！！！！！」

「ハァアアアアアアアアアアッ！！！！！」

お互いに叫び合うと共に相手に向かって突進して、グレイソードとＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを使って衝撃波を撒き散らしながら凄まじい剣戟を繰り広げる。
しかし、その剣戟の中で繰り広げられるのはブラックウォーグレイモンＸが振り抜くＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガをオメガモンがグレイソードを使って防御すると言う一方的な展開だった。その上、徐々にオメガモンのグレイソードの刃は欠け始めて、刃毀れだらけの状態に変わって行く。それと共に、オメガモンの方がブラックウォーグレイモンＸの攻撃を防御する回数が増えて来ていた。

「ムン！！」

「クッ！！」

ブラックウォーグレイモンＸが高速で振り抜くＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを、オメガモンは自身のエネルギーを注入させて金色に輝いている聖剣と化したグレイソードーオメガソードを使いながら防御していく。
オメガモンは刃が欠けて刃こぼれが酷いグレイソードをオメガソードにすることで、何とかブラックウォーグレイモンＸの猛攻を防いでいく。

「ほぅっ、なかなか綺麗な剣だな。正直、汚すのが勿体ないぐらいだ」

「それはどうも。君のその剣も白く染めればさぞや綺麗な聖剣になるだろうな！！」

そう言うと、オメガモンはブラックウォーグレイモンＸの視界から消えた。

（オメガモンは何処だ？）

ブラックウォーグレイモンXが辺りを見渡していると、ブラックウォーグレイモンXから離れた所に光速移動して、オメガソードを掲げているオメガモンがオメガソードを振り下ろし、金色の光の奔流を撃ち出した。

「オメガソード！！」

「オールデリート！！」

ブラックウォーグレイモンXはZERO－ARMS：オメガに極限までエネルギーを集中させて、目の前に迫って来ている金色の光の奔流に向かって、素早くZERO－ARMS：オメガを振り抜く。

その瞬間、ZERO－ARMS：オメガから凄まじい白光が迸り、清浄なる光の波動が金色の光の奔流を侵食し、無に帰した。

金色の光の奔流はその凄まじい威力を発揮する事無く、まるで最初から存在していなかったかのように消滅した。

オールデリート……それは、無機、有機物を問わず、触れた対象を完全な無に帰す『終焉』の無限光である。

それはオメガモンのグレイソードに刻まれているデジモン文字と共通の意味を持っている能力でもある。

しかし、ZERO－ARMS：オメガの凄まじい能力をその目で見ても、オメガモンは慌てるどころか心から感嘆するように声を上げた。

「凄い……　これがオールデリート……　X進化すれば私も使えるのか……」

「フン。その通りだが、貴様にその機会は一生無いぞ。何故なら貴様は今日、ここで俺に消されるからな」

「それはどうかな？　やってみなければわかるまいよ！！」

オメガモンは闘志を燃やしながらブラックウォーグレイモンXに向かって突撃し、グレイソードを振り下ろすと、ブラックウォーグレイモンXはZERO－ARMS：オメガで受け止め、激しい火花が辺りに散る。

「其処だ！！」

「グッ！！」

隙を突いたブラックウォーグレイモンXの渾身の蹴りを鳩尾に食らったオメガモンは苦痛の声を上げながら、後方へと吹き飛ぶが、空中で体勢を整えて着地するとガルルキャノンから砲撃を撃ち出す。

「ガルルキャノン！！」

「ハァッ！！」

ブラックウォーグレイモンXはオメガモンに向かって突撃しながら右手のドラモンキラーの爪先に漆黒に輝くエネルギー球を作り上げて、ガルルキャノンに向かって投げつけてガルルキャノンを相殺する。

「ハァアアアアアアアッ！！」

「ウオオォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

オメガモンとブラックウォーグレイモンXはオメガソードとZERO－ARMS：オメガを振るい、二十合程撃ち合った。

「フン！！」

「グワァッ！！」

剣戟の途中でブラックウォーグレイモンXは左ミドルキックでオメガモンを突き飛ばすと、両手の間に巨大な漆黒のエネルギー球を作り上げてオメガモンに向かって投擲する。

「ハデスフォース！！」

「チィッ！！　ターミネーション！！」

ハデスフォースを回避できないことを悟ったオメガモンはオメガソードに極限までエネルギーを集中させて、目の前に迫って来ているハデスフォースに向かって素早くオメガソードを振り抜く。

その瞬間、グレイソードから凄まじい青光が迸り、オールデリートとは違った清浄なる光の波動がハデスフォースを侵食して、ハデスフォースを終結させた。

「ほぅ、オールデリートと酷似している技を貴様が使えるとはな。中々の能力だが、当たらなければどうということはない技だ。それも使い方も下手くそだ！！」

「ガハッ！！」

ブラックウォーグレイモンXはZERO－ARMS：オメガを振

り抜き、オメガモンの胸部にダメージを与えてＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを近くの地面に突き刺した。
それと同時に、ブラックウォーグレイモンＸは両手の間に漆黒に輝くエネルギー球を作り上げて零距離でガイアフォースをオメガモンに向かって放つ。

「喰らえ！！　暗黒のガイアフォーース！！！」

「ガアァァァァァァァァァァァーーーーー！！！」

零距離でガイアフォースを食らったオメガモンは苦痛の叫びを上げながら吹き飛び、地面に強烈な衝撃と共に叩きつけられた。

「ガハッ！！」

オメガモンは体全体を襲う鋭い激痛に耐えながら何とか起き上がろうとするが、なかなか体に力が入らない。

「……」

そんなオメガモンに向かってブラックウォーグレイモンＸは近くの地面に突き刺していたＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを引き抜き、ゆっくりと歩く。

「フンッ！！」

「グゥッ！！」

オメガモンとの距離がある一定になると、ブラックウォーグレイモンＸはＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを何とか立ち上がったオメガ

モンに向かって振り抜き、オメガモンを地に伏せさせる。
「どうした……？　貴様の実力はその程度なのか……！」
「ガハッ！！」
悪人そのものの笑みを浮かべながらブラックウォーグレイモンXはＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを倒れているオメガモンに向かって何度も何度も振り抜き、オメガモンの胸部を傷つける。
「聖騎士なのだろう？　貴様は……」
「グァァァ……」
オメガモンの胸部に右足を押し付けながらブラックウォーグレイモンXはオメガモンのことを嘲笑う。
オメガモンはブラックウォーグレイモンXを跳ね除けようと全身に力を込めようとするが、全身に力が入らない。
「貴様如きがこの俺を倒せると思うな！！」
「ガハッ！！」
ブラックウォーグレイモンXがオメガモンを右足で蹴り飛ばすと、オメガモンは地面をゴロゴロと転がる。
「グッ……ウウッ……」
（体では敵わないと分かっているはずなのに、どうしてこうも立ち向かって来られる……？　なぜだ……？　今のオメガモンを見てい

ると、昔、俺が抹殺したレジスタンスのデジモン達を見ているみたいだ……）

尚も立ち上がろうとするオメガモンの姿を見たブラックウォーグレイモンXはかつて自分がロイヤルナイツのオメガモンだった頃に抹殺したレジスタンス組織に所属していたデジモン達のことを思い出した。

「忌々しい過去の亡霊め！！　今すぐ俺の前から消えろ！！」

「ガアァァァァァァァッ！！！」

ブラックウォーグレイモンXは忌々しそうに言葉を吐くと同時にＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガをオメガモンに向かって振り抜き、オメガモンを吹き飛ばす。

「ガアアァァァァァァーーーーーー！！！」

「ハァッ！！」

「グワァッ！！」

ブラックウォーグレイモンXは咆哮するとオメガモンに接近して尚もＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：オメガを振り抜こうとするが、その直前に何者かの武器によって吹き飛ばされた。

「グゥ……　何の真似だ？　これは俺とオメガモンの戦いだぞ？」

「戦い？　冗談は程々にしろ。戦えなくなった相手を一方的に苦しめるのの何処が戦いなのか我々に説明してもらおう」

ブラックウォーグレイモンXを吹き飛ばしたのはメディーバルデュークモンだった。
メディーバルデュークモンはブラックウォーグレイモンXのオメガモンに対する行動を非難して、その行動を行なった理由の説明を求める。

「貴様に話す義務はない」

「答えろ。自分の考えを否定する者は圧倒的な力で、他者をねじ伏せて蹂躙して圧する。その何処が戦いなのだ！？　貴様の行いは虐殺だ！！　結局、貴様は今も昔も変わっていない。大きくなっただけのただの子供だ！！」

「貴様！！」

素っ気なく答えるブラックウォーグレイモンXはメディーバルデュークモンの言葉に逆切れを起こして怒りに満ちた声を上げながら渾身の力を込めた左足を振り抜く。
しかし、その一撃はメディーバルデュークモンの右手によって受け止められると、メディーバルデュークモンは左ストレートでブラックウォーグレイモンXを殴り飛ばした。

「グハッ！！」

「私が運命を変えると見込んだオメガモンをこれ以上貴様の下らなく子供じみた考えで傷つけてみろ？　その時はいつでも相手になってやる」

「フン。そこのオメガモンに伝えておけ。“次に戦うときはもっと

強くなっておけ。デジタルワールドには俺よりも強い奴は数え切れないほどいるからな”と」

ブラックウォーグレイモンXは背中のバーニアを噴かしてその場から飛び去り、自分の拠点へと帰っていった。

メディーバルデュークモンはその様子を不快そうに見つめ、ブラックウォーグレイモンXが完全に去った事を確認して、デュークモンとオメガモンを背中に運んだスレイプモンに声を掛ける。

「帰ろうか。綺麗な夕日を見ながら」

「そうだな」

「……ああ」

（アルティメットカオスモンを倒したオメガモンをこうもあっさりと倒すとは何て強さだ……　本当に色んな意味でとんでもないデジモンだ……　いつの時代、何処の世界にも化け物はいるものだな……）

ボロボロになって眠っているオメガモンを悲しそうに見たメディーバルデュークモンは　先ほどのブラックウォーグレイモンXの力は、メディーバルデュークモンにも圧倒的としか思えないほどだった。はっきり言って今のブラックウォーグレイモンXの力は七大魔王以上と見なしてもおかしくはない。

何よりも、あの力からは恐怖しか感じる事が出来ないのだ。それをどうにかしない限り、ブラックウォーグレイモンXと勝利するどころか戦うことすら出来ないだろう。

（絶対にあいつを勝利者にさせるわけには行かない……）

メディーバルデュークモンはそう考えるとその場から飛び立ち、自身の拠点へと帰っていく。
そして、スレイプモンもボロボロになって眠っているオメガモンを背中に抱えながら、自身の横でオメガモンを心配そうに見つめているデュークモンに声を掛けていた。

「デュークモン。オメガモンは私が治療する。今日は面白い考えを聞かせてもらってありがとう」

「こちらこそ。恐らく奴は次にこのデュークモンを狙ってくる。もし、このデュークモンに何かあったらよろしく頼む」

「分かった。私に何かあったらオメガモンをよろしく頼む」

デュークモンとスレイプモンはお互いに何かあった時のために保険をかけていた。
確認しあった両者は頷くと自分たちの拠点へと帰っていった。
統制者であるカオスデュークモンは残った料理を一つにまとめてから片付けを開始した。
そんな彼らを夕日は暖かく見ながら地平線の彼方に沈んでいった。

夜になってマンションの一室に戻ってベッドに秀人を寝かせたアインハルトは秀人の体の様子を一通り調べるとその結果に驚愕せざるを得なかった。
無論、アインハルトと融合しているスレイプモンも同じロイヤルナイツに所属しているオメガモンに興味があるのかその結果を見てアインハルトと同様に驚愕を隠せないでいた。

「嘘……　あれだけボロボロにやられていたはずだったのにもう傷が完治している……」

『どうやら彼の適合因子は異常すぎるほどに高いみたいだ……　その証拠にオメガモンとの適応不可が起きていない……　だから戦闘後の疲労が起きなくなっているのか……』

「そうなんだ……　ところで、適合因子って何？　美味しいの？」

適合因子のことを全くと言っていいほど知らないアインハルトにスレイプモンは適合因子について説明を始めた。

『適合因子とは、人間のデジモンと融合する時に誕生する因子のことだ。またの名を適合抗体、適合係数とも呼ばれている』

「そうなんだ。ところで、私はどうなの？」

『普通だ。良くも悪くも』

スレイプモンの説明に納得したアインハルトは、自分の適合因子の高さについて尋ねるとスレイプモンは素っ気なく答えた。

その結果とスレイプモンの態度にアインハルトは不満を口にする。

「何よそれ……？　確かに私は頭も運動神経も無い凡人だけど……」

『ああ。実は一時期、ロイヤルナイツの間で融合進化の条件に適合因子の高さが関わっているのではないかと考えられていたのだが……』

「違っていたという訳ね。私という先例があるから」

不満そうに顔を膨らませながら言うアインハルトを宥めるようにスレイプモンは説明をする。

『でも、それは決して間違いというわけではないのだ』

「そうなの？」

アインハルトの疑問の声にスレイプモンは頷きながら言葉を繋げる。

『我が盟友にして、ロイヤルナイツの諸葛亮公明であるドゥフトモンが調べた限りでは、適合因子はそのデジモンとの相性が関係していることが明らかになった。あの者は恐らくオメガモンの因子を体内に元から体内に宿しているのだろう』

「オメガモンの因子を？　それは凄いわ……」

驚くアインハルトにスレイプモンは淡々と説明を続ける。

『ああ。ごくまれにいるのだ。ある一定のデジモンの因子を持って生まれる者が。遺伝も何も関係ない。それを知るのはホメオスタシスのみというところか……』

「何か物凄い世界に私たちはいるのね。そして、その中で生きているというか……」

ハァ～と溜め息をつくアインハルトを見たスレイプモンは、一瞬胸がときめいたがそれを抑えて少し笑いながら話を続ける。

『でも、彼の場合は少し特別なのだ。最初はそんなに適合因子は高くなかった。正直、君よりも遥かに低かった。だが、何らかのきっかけで個人でも数値が変動することは良くも悪くも有り得る話なのだ。その証拠に私が知っているオメガモンとは少し違った姿をしている』

「そうなんだ……」

スレイプモンの話にアインハルトは何とか追いついてう～んと腕を組んで考える。

その日の深夜、秀人はダメージの回復が完了したのか、目を覚ました。

秀人の瞳はオメガモンと同じ空色で、髪の色も白銀に染まっている。

「あれ……？　アインハルトが運んでくれたのか……？」

秀人は自分の置かれている状況を確認すると、隣のベッドで寝ているアインハルトにお礼を言った。

「ありがとう」

そう言うと、秀人はブラックウォーグレイモンXの戦いを振り返った。

（あれは完敗だった……　私とブラックウォーグレイモンXとの実

力差がはっきりと出ていた戦いだった……　よく考えれば、彼は自分以上の強い者との戦いの日常の中で生きていたんだ……　それなのに私は……）

惨めな気持ちに陥った秀人は溜息を付くと一度俯いた。
その時秀人の脳裏に、自分を見ている蒼い翼を生やした蒼い竜のような騎士が浮かんだ。

「誰だ？　私を呼んでいるのは……？」

しばらく俯いた後、秀人は何かを感じ取ったように顔を上げて、静かに目を閉じた。
そして再び目を開けた時、秀人はベッドから起き上がり、ディーアークｖｅｒ．オメガをポケットに入れて、物音を立てないように静かに出ていった。
隣で寝ていたアインハルトも目を覚まし、秀人の後を追っていったことを秀人は知る由も無かった。

秀人はマンションから歩いて１０分程の場所にある公園に足を踏み入れていた。

（何だこの気配は……　オメガモンと同じような……　まるで友達に会うような……）

秀人は自分が感じる気配に困惑していると、何者かが声をかけてきた。

「初めまして藤本秀人君！」

「貴方は……アルフォースブイドラモン……」

自分を見下ろす者の顔を見た時、秀人は自分を呼んだデジモンの正体を理解した。

そのデジモンは、全身を蒼色の鎧で身を包み、胸にVの字のような形をしたアーマーを装備し、背中に巨大な蒼い翼を生やして、両手首に腕時計のような武器―Vブレスレットを装備した聖騎士型デジモンーアルフォースブイドラモンだった。

「せっかく来てくれたのにこんな夜遅い時間で悪いね！　でも、ついさっき来たばかりなんだ！」

「……いえ、そのようなことは……」

自分の姿に圧倒されている秀人にアルフォースブイドラモンは優しく声をかける。

「あ……もしかしてボ……私が大きいだけか？　偉そうに体ばかり大きくしていても全然いいことなんて無いよね！」

（ゼロ！　もっと威厳を見せろ！！）

（仕方ないだろ！　昔も今も聖騎士や英雄と呼ばれることに全然慣れていないんだから！）

融合しているアルフォースブイドラモンのテイマーが威厳が無いことを非難すると、アルフォースブイドラモンは面倒臭そうに抗議する。

「（今、ボクっていいかけたよな……）貴方が……　貴方が私をここに呼んだのですか？」

「かしこまる必要はないよ。我々は仲間なのだから。その通り、私が君を呼んだ」

アルフォースブイドラモンの顔を見ながら秀人が尋ねると、アルフォースブイドラモンは頷きながら答える。

「ホメオスタシスから聞いたよ。君が選ばれし者だって。いや～太一と同じ人がいて良かったよ～」

「私の全て知っていて呼んだ訳か……　上等だ……！」

ニヤリと笑いながら秀人は言うと、自分がこの世界に来て体験した出来事を全て話した。

「アルカディモンがこの世界にいるのかい？　奴は全く恐ろしいデジモンだった……　正直、私が戦ったデジモンの中でも一二を争う強さだった……」

「アルカディモンと戦ったことがある……！？」

秀人の問いにアルフォースブイドラモンは頷くと過去を思い出しながら話し始める。

「如何にも！　私は完全体のエアロブイドラモンだった時に人生で初めての敗北を味わった。しかも体が粒子分解されかけるというおまけ付きで。だが、今まで出会ったデジモン達に助けられ復活してアルカディモンにリベンジを果たすべく再戦を行い、スピードとコ

ンビネーションでアルカディモンをあと一歩の所まで追い詰めたんだけど……」

（化け物だ……　私が全力を出してもダメージをそんなに与えられなかったアルカディモンを完全体のエアロブイドラモンで圧倒するなんて……）

アルフォースブイドラモンの話の途中までで秀人はアルフォースブイドラモンを尊敬と羨望の眼差しで見ている。

「でも、超究極体に進化したら全然歯が立たなくて……ドラゴンインパルスを連続で使ったら砕け散ったんだ……」

「ドラゴンインパルスは強力ですがその分寿命を縮めるというデメリットがあるからな……」

「でも、太一の思いと私のデータが一つになった時に私と太一が融合してこの姿になったんだ。そして、アルカディモン超究極体を倒した。これでもデジタルワールドを結構救ったこともあるんだよ」

「（さっきからどうも引っかかる言葉があるんだけど……まぁ、あとで聞けばいいか）良かった……！　それなら、私と協力して……」

過去話を聴き終えてアルカディモンを倒すことができることを認識した秀人はアルフォースブイドラモンに同盟を提案するが、アルフォースブイドラモンは首を振った。

「いや。私はまだ君の信念と強さを見ていない。それに今、私は君を殺すことが出来るんだよ……！」

そう言うと、アルフォースブイドラモンは右拳を秀人に向かって振り下ろした。

「クッ！！」

秀人は間一髪でその場から飛び去ることでアルフォースブイドラモンの右拳を避けた。

着地した秀人はアルフォースブイドラモンに向かって叫ぶ。

「待ってください！！　私は貴方と戦いたくない！！」

「戦え。君も私も本来なら存在が有り得なかったデジモン同士。自分の運命を受け入れろ。そして戦え！！」

アルフォースブイドラモンの言葉を聞いて戦うことは避けられないことを悟った秀人は博也が言っていた言葉を思い出して決意を固める。

『この先、お前に戦いを挑む奴はたくさんいるだろう。中には、自分の望まない戦いも強いられる時もある。俺はそれがほとんどだったからな。だから、お前にもそれを乗り越える強さを持って欲しい』

秀人はポケットからディーアークｖｅｒ．オメガを取り出して見つめながら言う。

「確かに……私は自分の意思で戦うことを決めた……！」

決意を固めた秀人はディーアークを胸に当てながら自身の体から白銀の光を発生させながら叫ぶ。

《ＭＡＴＲＩＸ－ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ》

「マトリクスエヴォリューション！！」

ディーアークから電子音声が響き、秀人は叫びながら白銀の光に包まれて、光が収まると、其処にはオメガモンが立っている。

「それでいい。本気で来い。オメガモンの力を全て……　私にぶつけろ！！」

アルフォースブイドラモンは右腕に装備しているＶブレスレットから蒼色のビーム状の聖剣―アルフォースセイバーを展開するとオメガモンに向かって突撃を開始した。

「！？　何処だ？」

突然、消えたアルフォースブイドラモンの姿を追おうとオメガモンは辺りに気を放つが、アルフォースブイドラモンのことを補足することが出来ない。

オメガモンは周囲を警戒しながら左腕のウォーグレイモンを模した篭手からグレイソードを射出して構える。

「ハアァァァァァァァァーーーーー！！！！！」

「ガルルキャノン！！」

自分の真正面からアルフォースセイバーを構えながら突撃してくるアルフォースブイドラモンのスピードに驚愕しながらも、オメガモンは右腕を振るいガルルキャノンを展開した。

オメガモンは続けてガルルキャノンの照準をアルフォースブイド

ラモンの定めると砲撃を撃ち出す。

「フッ！！」

アルフォースブイドラモンは事前に予測していたのか跳躍すると、左拳に聖なるエネルギーを集中させながらオメガモンに向かって突き出した。

「マグナムクラッシュ！！」

「ガァァァッ！！」

マグナムクラッシュを顔面に喰らったオメガモンは後ろに倒れた。余談だが、マグナムクラッシュとはエアロブイドラモンの得意技の一つで、エネルギーを集中させた拳から繰り出される強烈なパンチである。

「ハァ！！」

一方のアルフォースブイドラモンは地面に着地したが、勢いを止めずにそのまま進んでいる程度オメガモンとの距離が確保出来たことを確認すると、ようやく後ろを振り返り構えを取る。

「クッ……」

衝撃を受けた頭部がようやく安定を取り戻したことを確認したオメガモンは気合を入れて構えを取る。

両者は構えを崩さずに無言で睨み合いを行う。

「オオォォォォォォォォーーーーーー！！！！！」

アルフォースブイドラモンが突撃すると、オメガモンはそれを向かい打つようにグレイソードを構える。
両者はアルフォースセイバーとグレイソードの剣戟を開始した。
『ウオオォォォォォォォォーーーーーーーーー！！！！！』
十合程撃ち合った時、アルフォースブイドラモンの隙を見つけたオメガモンはグレイソードをアルフォースブイドラモンに向かって振り抜いた。
「ハァッ！！」
「かかったな！！」
しかし、アルフォースブイドラモンは跳躍してグレイソードの刀身に右足を乗せて後方宙返りをする際に左足を鋭くオメガモンの顎に向かって振り抜き、オメガモンにダメージを与える。
「グゥッ！！」
オメガモンは顎に走る鋭い痛みに耐えながら、上空に飛翔して突撃を開始するアルフォースブイドラモンを睨みつける。
「喰らえ！！　ブイブレスアロー！！」
アルフォースブイドラモンは両手を獣の口のように合わせながらオメガモンに向かって突き出して、両手からVの字を描いた熱線―ブイブレスアローをオメガモンに向かって撃ち出す。

「クッ！！（何なんだこのアルフォースブイドラモンは！？　マグナムクラッシュと言い、ブイブレスアローと言い、本来のアルフォースブイドラモンが使えない技がどうして使えるのだ！？）」

オメガモンは内心でアルフォースブイドラモンの使用できる技に疑問を持ちながらも、両腕を交差してブイブレスアローを受け止める。

「もらった！！　マグナムクラッシュ！！」

アルフォースブイドラモンはアルフォースセイバーを一度戻した右拳に聖なるエネルギーを纏わせてマグナムクラッシュをオメガモンの顔面に向かって放つ。

「ガハッ！！」

マグナムクラッシュが顔面に直撃したオメガモンは苦痛の声を上げながら後方に吹き飛び、地面に倒れてしまう。

（速い……　速すぎる……　それに攻撃の威力も十分ずぎるほど高い……　これが……ロイヤルナイツの実力なのか……）

起き上がって構えを取るオメガモンはアルフォースブイドラモンのことを心の底から強いと感じた。

「流石はオメガモン。タフだな。だが……　君には、情熱、思想、理想、思考、気品、優雅さ、勤勉さ！　そして、何より……速さが足りない！！！」

「何処の兄貴ですか！？」

アルフォースブイドラモンの言葉にオメガモンは思わず突っ込みを入れた。

「……と冗談は程々にして」

アルフォースブイドラモンは表情を変えて再び右腕のVブレスレットからアルフォースセイバーを展開するとオメガモンに向かって構えを取る。

オメガモンもグレイソードを構えると、両者は睨み合いを開始した。

「あれは……アルフォースブイドラモン!?」

秀人の後を追って公園まで来たアインハルトは目の前で繰り広げられているオメガモンとアルフォースブイドラモンの戦いを見て、オメガモンの相手であるアルフォースブイドラモンの姿を見て驚愕した。

「どうやら……　運命はまた新しい風を呼んだな」

「手塚君……」

其処にメディーバルデュークモンこと手塚博也が来て、アインハルトと共にオメガモンとアルフォースブイドラモンの戦いを観戦する。

「速い……」

「やるな……」

そして、目の前で繰り広げられている戦いを見たアインハルトはアルフォースブイドラモンの速さに驚き、博也はアルフォースブイドラモンの実力に正直に感想を呟く。

「オオオオォォォォォォォーーーーーーーー！！！！！」

アルフォースブイドラモンは神速の速さで突撃を開始して、オメガモンに迫り来る。

流石はオメガモンが所属している『ロイヤルナイツ』の中でも神速のスピードを持ち、その動きを追える存在は皆無と言われている程である。

「クッ！！」

アルフォースブイドラモンが振り下ろしたアルフォースセイバーを、オメガモンは間一髪グレイソードで受け止めた。

両者はそのまま、甲高い金属音と激しい衝撃波が巻き起こる剣戟を開始した。

「フッ！！」

「フン！！」

二十合程撃ち合った時、オメガモンはガルルキャノンを戻した右拳に凄まじい冷気を纏わせてアルフォースブイドラモンに向かって

突き出す。
アルフォースブイドラモンは悠々と後方宙返りをすることでそれを回避する。
「ガルルキャノン！！」
「テンセグレートシールド！！」
オメガモンは横に移動しながらガルルキャノンから砲撃を連射するが、アルフォースブイドラモンは左腕のVブレスレットから聖なるオーバーライトのドーム状のバリアーテンセグレートシールドを展開してガルルキャノンを防ぐ。
流石にオメガモンのガルルキャノンの威力は並大抵の究極体でも一発で倒される程というのもあって、ガルルキャノンが直撃する度にテンセグレートシールドの一部が破壊されていく。しかし、オメガモンの攻撃が届く前にバリアは一瞬で自動的に再構築されてしまう。
「クッ！！　厄介だな！！　それならこれでどうだ！！」
オメガモンは直ぐ様空中に飛び上がり、テンセグレートシールドの中にいるアルフォースブイドラモンを見下ろす。
「ッ！！　考えたな！！」
「ガルルキャノン！！」
オメガモンのガルルキャノンから絶対零度の冷気弾を撃ち出して、テンセグレートシールドを凍らせる。

「オメガ……」

「残念！！　シャイニングＶフォース！！」

「何！？　ウワアァァァァァァァァァーーーーー！！！！」

オメガモンは直ぐ様ガルルキャノンからオメガブラストを撃ち出してアルフォースブイドラモンを攻撃しようとするが、その直前にアルフォースブイドラモンは胸のＶ字型アーマーから聖なる光線―シャイニングＶフォースを放った。

シャイニングＶフォースをオメガモンは避ける事が出来ずに直撃を食らい、地面に向かって落下して行き、地面に強烈な衝撃と共に叩きつけられて地面に倒れ伏せた。

「何よあれ……　全然勝負になっていないじゃない……」

「相性が悪すぎるのか……　それとも……　ただ単純にアルフォースブイドラモンが強くてオメガモンが弱いだけなのか……」

その戦いを見ていたアインハルトと博也が勝負になっていない事に気がついていた。オメガモンの放つ攻撃はアルフォースブイドラモンに全然ダメージを与えることが出来ず、逆にアルフォースブイドラモンの攻撃はオメガモンに確実にダメージを与えていく。

「もう限界か……？　私が知っているオメガモンと君は最後の最後まで諦めなかったぞ……？」

「グゥ……」

圧倒的としか言えない戦いをアインハルトと博也が見つめる中、

アルフォースブイドラモンは倒れているオメガモンに向かって静かに歩み寄る。
アルフォースブイドラモンは、立ち上がれないオメガモンの首元にアルフォースセイバーを突きつける。
「君は私と違ってその力を発揮できない……　恐れ……不安……恐怖……　それらを抱えているようでは私には勝てまいよ……」
「戦え……戦え……！」
まるで自分に言い聞かせるように言うアルフォースブイドラモンの言葉に、オメガモンは悩んでしまう。
「でも……　私は……」
「私は！！」
オメガモンは勇気を出して立ち上がると、アルフォースブイドラモンに向かって思いを叫ぶ。
「私は貴方に勝ちたい！！　私にはまだ思いを届けていないデジモンがいる！！　そのデジモンに勝つ日まで私は死ねない！！」
オメガモンの真剣な瞳を見たアルフォースブイドラモンは、面白そうに目を細める。
「ほぅ……　まだこれだけの力が残されていたとは……」
「行くぞ……」

オメガモンとアルフォースブイドラモンは同時に突撃を開始すると、再び剣戟を開始する。
しかし、先ほどとは違ってオメガモンはアルフォースブイドラモンの神速についていけるようになってきて、むしろアルフォースブイドラモンを押し始めた。
それどころか、オメガモンのスピードも速くなっていく。

「ハァッ！！」

「クッ！！」

剣戟の途中で、オメガモンはグレイソードでアルフォースブイドラモンを突き飛ばして、距離を空けてガルルキャノンから砲撃を撃ち出そうとする。

「ブイブレスアロー！！」

アルフォースブイドラモンは再び両手を獣の口のように合わせながらオメガモンに向かって突き出して、両手からブイブレスアローをオメガモンに向かって撃ち出す。

「その程度で！！」

オメガモンはグレイソードでブイブレスアローを薙ぎ払うと、アルフォースブイドラモンに向かって突撃してグレイソードを振り下ろす。

「クッ！！」

何とかアルフォースセイバーでグレイソードを受け止めたアルフ

ォースブイドラモンは、オメガモンの頭を踏み台にして跳躍すると、オメガモンの背後に着地する。

「わっ、私を踏み台にした！？」

「何処の三連星のパイロットなのかな君は！！」

驚愕するオメガモンに向かって、アルフォースブイドラモンは右ミドルキックを繰り出してオメガモンを後退させる。

「チィッ！！　ガルルキャノン！！」

「フッ！！」

オメガモンはガルルキャノンから砲撃を連射するが、アルフォースブイドラモンは神速のスピードでそれらを回避すると、オメガモンに向かって突撃を開始した。

「ガルルキャノン！！」

「クッ！！」

自分に向かって突撃してくるアルフォースブイドラモンに向かって、オメガモンはガルルキャノンから砲撃を連射する。

その怒涛の攻撃にテンセグレートシールドを展開することが難しいことを悟ったアルフォースブイドラモンはアルフォースセイバーでガルルキャノンを薙ぎ払うが、流石に全弾を薙ぎ払うまでには行かず、一発のガルルキャノンの直撃を喰らい、吹き飛ばされた。

「ガハァッ！！」

（これでやっとまともなダメージを与えられた……）

やっとアルフォースブイドラモンに一矢報いることが出来たことを悟ったオメガモンだが、ここまで来るのに喰らったダメージのことを考えて顔を歪ませた。

「大したものだよ。でも……私にはアルフォースによる治癒能力があるから、どんなダメージも一瞬で治ってしまうのだよ……」

「それならアルフォースの回復が追いつかない程のダメージを与えるだけだ！！」

オメガモンのガルルキャノンを喰らった箇所を一瞬で治したアルフォースブイドラモンの言葉に驚愕しながらも、それを押し隠したオメガモンは強気な姿勢を崩さない。

それを見たアルフォースブイドラモンは面白そうに目を細める。

「フッ！！　面白い！！　それなら私も全力の必殺技で応えるとしよう！！」

「望むところだ！！」

アルフォースブイドラモンは胸のV字型アーマーにエネルギーを溜めて、オメガモンはガルルキャノンにエネルギーを集束させていく。

エネルギーの充填が終えたことを確認した二体の聖騎士は同時に必殺技を撃ち出す。

「シャイニングVフォース！！」

「ガルルキャノン！！」

シャイニングVフォースとガルルキャノンは真正面から激突し合い、お互いを撃ち破ろうと鬩ぎ合うが、決着は付かずに同時に大爆発を起こして、アルフォースブイドラモンとオメガモンに同等に衝撃波が襲ってくる。

しかし、二体の聖騎士は向かって来る衝撃波などには一切構わずに飛び出し、爆煙を吹き散らしながら、アルフォースブイドラモンは右腕を、オメガモンは左腕を突き出し合う。

「アルフォースセイバー！！」

「グレイソード！！」

アルフォースブイドラモンとオメガモンは同時に聖剣を突き出し合いながら体を交差させ、お互いが必殺技を撃ち出した場所で立ち止まり、お互いに背を向け合うと、突如としてアルフォースブイドラモンが地面に膝をつく。

「ガァッ！！」

「嘘！？」

「勝った……のか？」

アインハルトは驚愕して、博也はオメガモンの逆転勝利を考える。

「私の……勝ち……だ……」

オメガモンはそう言うと、満足気な表情を浮かべながら地面に倒れ付した。

「あちゃ～」

「現実は甘くなかったか……」

それを見たアインハルトは肩を落とし、博也も残念そうに呟いた。

「オメガモン……　君は良く頑張った……　強かったよ……」

「でも……負けは負けだ……」

アルフォースブイドラモンが差し伸べた手を、オメガモンは一旦は拒否する。

気がつくと、オメガモンの瞳には涙があった。

「それでも君は生きている。生きている限りはまだ負けていない。君は絶対に強くなれる！！」

アルフォースブイドラモンの言葉を聞いたオメガモンの頬を自然と涙が伝う。火傷しそうな程に熱い涙が。アルカディモン究極体に敗北して、デジヴァイスが破壊された日に流した涙よりも、今日流している涙の方がずっと熱い。

オメガモンがふと横を見ると、アインハルトと博也と目が合った。アインハルトと博也は優しい視線でオメガモンを見つめている。

「私は……強く……なれる……？」

「ああ。私は君を信じる。この戦い……必ずや勝利をこの手に！！」

「……ああ」

オメガモンは微かな声で頷くとアルフォースブイドラモンの手を借りて立ち上がった。

それ以上の言葉はオメガモンには浮かばなかった。

二体の聖騎士を、綺麗な朝日が見つめていた。

これが、後のデジタルワールドを担うことになるロイヤルナイツの主軸である二体の聖騎士、オメガモンこと藤本秀人とアルフォースブイドラモン・ゼロこと八神太一の出会いだった。

第１９話　八人目は伝説のエイリアス！？　神速の青竜騎士登場！！（後書き）

アルフォースブイドラモンと八神太一の紹介は後日行おうと思います。
この小説の重要人物になる可能性が高いので。
分かっている人も思いますが、このアルフォースブイドラモンはゼロマルをイメージしてキャラ設定をしました。

次回予告

八神太一の口から語られる事実に驚愕する秀人とアインハルト。
秀人と太一は強くなるために模擬戦を行うことに。
一方、ブラックウォーグレイモンＸはデュークモンに戦いを挑む。
デュークモンに助けられた恩を返すべく、オメガモンは戦いに介入する！！

次回、デジモンアドベンチャー　Ωテイマー ＺＥＲＯ　～オメガモンのテイマーの物語～

エイリアス戦争の章　それぞれの戦い、それぞれの想い

オメガモンは受け入れる。自分の因子を。それがもたらすのは新たなる決意。

登場人物紹介　ｖｏｌ．１（前書き）

本編よりも先に、主要人物をまとめたこちらを投稿することにしました。
エイリアス戦争に参加しているデジモン達の紹介は今の章が終わってから、オメガモンズワルトとカオスデュークモンの紹介は次の章が終わってからを予定しています。

登場人物紹介　ｖｏｌ．１

名前／八神太一

読み／やがみたいち

性別／男性

年齢／１９歳

性格／一人称は『俺』。熱血でありながら冷静さを併せ持ち、状況を見て的確な判断を下せる。面倒見がよく、同じロイヤルナイツのデジモンであり、かつ同じ選ばれし者である秀人の兄貴分兼師匠となっている面がある。

詳細／秀人と同じくデジモンとサッカーが好きな青年。秀人よりも前にデジモンワールドを救うためにホメオスタシスによって現実世界（リアルワールド）から召喚された。その際にブイドラモン・ゼロに会い、ブイドラモン・ゼロのテイマーとなった。アルカディモン超究極体との戦闘で砕け散ったエアロブイドラモン・ゼロを救うためにエアロブイドラモン・ゼロのデータと融合して、アルフォースブイドラモン・ゼロとなった。その後、アルカディモン超究極体を倒して、デジタルワールドに平和をもたらした。その後は、様々なデジタルワールドと現実世界（リアルワールド）を越えて戦ってきた。その活躍は様々なデジタルワールドで神話や伝説として語られている。

名前／アルフォースブイドラモン・ゼロ

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ワクチン種

世代／究極体

種族／聖騎士型

必殺技／シャイニングＶフォース

性格／本来の一人称は『ボク』だが、聖騎士の威厳を保つため『私』を使っている。子供っぽく優しい性格だが、怒った時などは凄まじいパワーを発揮する。大人し目の口調なため、すぐに他人と打ち解けられるため、行く先々で友達が出来る性質である。未だに聖騎士や英雄と呼ばれることに慣れていないようだが、実際はそのような肩書きを好き好んでいない。

説明／古代デジタルワールドから伝わる、ある“予言”の中だけに登場する伝説上の聖騎士デジモン。その“予言”にはネットワークの守護神“ロイヤルナイツ”の出現が書かれており、“ロイヤルナイツ”と呼ばれるデジモン達は、デジタルワールド最大の危機の時に“予言”の元に集うと言われている。アルフォースブイドラモンは“ロイヤルナイツ”の中でも神速のスピードを持ち、その動きを追える存在は皆無である。またクロンデジゾイドの中でも希少な存在で最軽量のレアメタル“ブルーデジゾイド”製の聖鎧に身を包み、空を裂き、大地を割る。両腕に装備した“Ｖブレスレット”から武器やシールドが展開する。必殺技は胸のＶ字型アーマーから掃射される光線『シャイニングＶフォース』だ。

詳細／アルカディモン超究極体との戦いで、『みんなを守りたい』

の思いでドラゴンインパルスを連続使用して砕け散ったエアロブイドラモン・ゼロのデータと太一が融合進化して誕生した聖騎士型デジモン。名前のゼロはゼロマルとデジタルワールドで始めて確認されたアルフォースブイドラモンの二つの意味を兼ねそろえている。神速のスピードを生かして俊敏な動きで相手を翻弄する戦い方が特徴で、その実力はオメガモンでさえも凌ぐ。また、アルフォースによる治癒能力を持っていて、ダメージを癒すことが出来る。次元を越える能力を持ち、様々な世界を行き来することが出来る。他のアルフォースブイドラモンとは違って、エアロブイドラモンの技や独自の技を使用可能である。

名前／ミレニアモン

性別／デジモンに性別の概念は存在しないが、あえて言うならば男性

属性／ウィルス種

世代／究極体

種族／合成型

必殺技／タイムアンリミテッド

性格／一人称は『私』。狡猾な知恵者で、頭が回る。研究好きな研究者であると共に、デジモンを造る程の技術者である。自分を作り出した人間を憎んでいるが、オメガモンズワルトだけは別のようである。

説明／圧倒的なパワーをもつムゲンドラモンと、様々な強力なデジモンのデータをもつキメラモンが融合した究極の合成型デジモン。倒すことは不可能であると言われているが、未だ解明されていない融合の原因をつきとめることが、その攻略の糸口になるのではないだろうか。必殺技は、時を圧縮して異次元を作り出し相手を永遠に亜空間に閉じ込めてしまう『タイムアンリミテッド』。

詳細／人間たちの手によって誕生したキメラモンとムゲンドラモンが生き残るために融合して誕生した合成型デジモン。人間の度重なる実験と戦闘に耐えられなくなり、疲弊した彼らは融合して、ミレニアモンになり、人間たちを抹殺しただけでなくその世界を滅ぼした。その後、デジタルワールドに渡ったミレニアモンは古のデジタルワールドを暴虐の元に支配したが、ホメオスタシスによってデジタル空間に封印された。しかし、オメガモンズワルトによって封印が解かれて、彼の仲間になりその頭脳を振るっている。オメガモンを脅威と見なし、様々な手で抹殺を企んでいる。

登場人物紹介　ｖｏｌ．１（後書き）

本編はただ今執筆中なのでもう少しお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7304w/

デジモンアドベンチャー　Ωテイマー ZERO　～オメガモンとなった青年の物語

2011年12月20日21時54分発行